

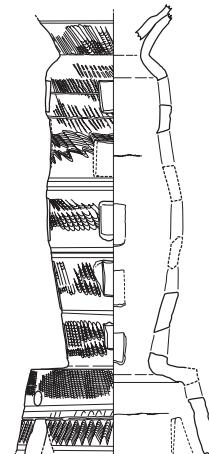
秋
月
遺
跡
(県第9次調査)

秋月遺跡(県第9次調査)

—県立向陽中・高等学校体育館建替事業に伴う発掘調査報告書—

建県立
替事業に
向陽中・高
等学校体
育館

一一〇一
年三月



財団法人 和歌山県文化財センター

2011年3月

財団法人
和歌山県文化財センター



卷頭 1-1：調査地と日前宮、岩橋山塊



卷頭 1-2：第9次調査出土玉類



卷頭2-1：秋月9～12号墳（西から）



卷頭2-2：秋月9号墳周溝北西部の一括出土土器（南から）

序 文

秋月遺跡の所在する和歌山市は、和歌山県の北西部に位置し古くから紀伊国の中心として栄えてきました。紀の川が紀伊水道へと流れ込む河口部にあたり、豊かな穀倉地帯が広がっています。

秋月遺跡は古墳時代から古代・中世にかけて、政治・経済及び信仰のうえで紀伊国の中核をなした遺跡です。紀伊国造家が奉祀する日前宮・国懸宮と2つの寺院跡を含む遺跡ですが、昭和60年度の発掘調査では県内最古の前方後円墳が確認され注目を集めました。

本書の掲載対象となる和歌山県第9次調査では、県立向陽中学校・高等学校の体育館建て替え工事に先立ち、今までの調査地より日前宮に近い地点を調査しました。古墳時代前期から後期までの古墳群が広がっている様子が確認できたほか、文献で知られる貞福寺跡に関連する平安時代末から室町時代末までの瓦が多数出土し、秋月遺跡の重要性を改めて認識させられることとなりました。本書が秋月遺跡、ひいては和歌山県全域の歴史を知る上で重要な資料となることを期待しています。

最後に、発掘調査及び本書の作成に際して、ご指導・ご協力いただいた方々に感謝の意を表します。

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 鈴木 嘉吉

例　　言

1. 本書は和歌山市太田に所在する秋月遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、和歌山県教育委員会による向陽中・高等学校体育館建替事業に伴うもので、平成 21 年度に発掘調査業務、平成 22 年度に出土遺物整理業務を実施した。
3. 業務は和歌山県教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。調査組織は以下のとおりである。

事務局 理事長 小関洋治（平成 21 年度）
鈴木嘉吉（平成 22 年度）
専務理事 白藤正和（平成 22 年度）
事務局長 田中洋次
管理課長 富加見泰彦
主　　査 松尾克人
埋蔵文化財課 課　　長 村田　弘
主　　任 内田好昭（平成 21 年度・発掘調査担当）
副主　　査 丹野　拓（平成 22 年度・出土遺物整理担当）
技　　師 富永里菜（平成 21 年度・発掘調査担当）

4. 発掘調査に際しては、以下の調査委員の指導を受けた。

井藤　徹 前日本民家集落博物館館長
工渠善通 大阪府立狭山池博物館館長
坪之内徹 奈良女子大学特任教授
森　郁夫 帝塚山大学教授
和田晴吾 立命館大学教授

5. 本書は第 1 章第 1 節 1・2 及び第 2 章を富永、その他を丹野が執筆した。付章の玉類の原材産地分析については、有限会社遺物材料研究所の藁科哲之氏が執筆したものを掲載した。編集は丹野が行った。

6. 発掘調査及び整理作業には、以下のものが従事した。

調査補助員：鳴神史乃、森川真喜子／整理補助員・整理作業員：稻田紗千、田村収子、津村かおり、今津陽子、加藤恵子、川端亮弘、楠本小代子、谷口悠紀代、西裏眞由美、吉原増雄

7. 遺物整理において、玉類の原産地分析は有限会社遺物材料研究所（藁科氏）に委託した。また、動物骨の同定は、丸山真史氏（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）・大藪由美子氏（奈良県立橿原考古学研究所）、植物種子の同定は丹野研一氏（山口大学農学部）に依頼した。

8. 発掘調査及び遺物整理において、当センター・県教育委員会文化遺産課職員のほか、下記の方々のご教示・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。（敬称略）

板橋孝志・堀内孝貢・出口孝志（向陽高校）、佐藤正知（文化庁）、大木要（和歌山市教委）、北野隆亮・井馬好英・藤藪勝則（和歌山市都市整備公社）、前田敬彦（和歌山市立博物館）、藤井保夫（紀の川市教委）、河内一浩（羽曳野市教委）、海津一朗（和歌山大学）

9. 当事業で作成した図面・写真・台帳類は当センターが保管している。出土遺物は和歌山県教育委員会が所蔵している。

凡　　例

1. 発掘調査及び出土遺物整理は、『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
2. 実測図及び地区割の基準線は、平面直角座標系第VI系（世界測地系）を基準とし、数値はm単位で表示している。また、図示した北は座標北を指す。
3. 発掘調査で使用した標高は、東京湾標準潮位（T.P.）を基準とした。
4. 土色は小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）『新版標準土色帖』2003年度版を基準とした。
5. 発掘調査で使用したコードは以下のとおりである。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用いて管理している。

09-01・331 (2009年度和歌山市秋月遺跡発掘調査(秋月遺跡県第9次調査))

6. 遺構番号は調査順に通し番号で付けた。三桁の数字に続けて遺構の性格を表す語句を入れ、033溝・209土坑などとした。なお、大型の穴を土坑、小型の穴をピットとし、これらのうち建物を構成するか、断面で柱痕が確認できるものを柱穴と表現した。いくつかの個別遺構を統合した遺構については、遺構の性格を表す語句の後ろに通し番号を付け、掘立柱建物跡1などとした。
7. 本書では県の埋蔵文化財包蔵地所在地図に記載された正式な遺跡名である「秋月遺跡」とは別に、便宜的に秋月遺跡の西側に広がる古墳群を秋月古墳群、古代末から中世末頃までの瓦の散布する対象地を貞福寺跡と呼称している。また、一般の方々にも分かりやすい古墳名として、秋月遺跡西部で確認された古墳について、以下の通りの通し番号を付けた。

新規古墳名	調査年次	旧古墳名	古墳の内容
秋月 1号墳	県第2次調査	SX01	前期の前方後円墳
秋月 2号墳	県第2次調査	SX02	前期頃の方墳
秋月 3号墳	県第2次調査	SX03	前期の方墳
秋月 4号墳	県第2次調査	SX04	前期～中期の方墳
秋月 5号墳	県第2次調査	SX05	中期の方墳
秋月 6号墳	県第2次調査	SX06	中期の方墳
秋月 7号墳	県第5次調査	方墳1	中期の方墳
秋月 8号墳	県第5次調査	方墳2	中期の方墳
秋月 9号墳	県第9次調査	古墳1	後期の円墳
秋月 10号墳	県第9次調査	古墳2	中期末の円墳
秋月 11号墳	県第9次調査	古墳3	中期後半頃の円墳
秋月 12号墳	県第9次調査	古墳4	前期の方墳

7. 報告書掲載遺物には709までの通し番号を付けた。玉類については同時に34までの委託分析用の管理番号を振った。なお、遺物番号と写真番号は一致する。
8. 遺構図の縮尺は基本的に、調査区土層断面図を1/100、個別の遺構図を1/20～1/60とした。遺物実測図の縮尺は基本的に1/4であるが、丸瓦・平瓦・竈・土管は1/6、錢貨は1/2、玉類は1/1とした。

目 次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 周辺の環境	3
第3節 既往の調査	7
第2章 遺構	9
第1節 調査の概要	9
第2節 基本層序	17
第3節 遺構	18
第3章 出土遺物	46
第1節 土器	46
第2節 瓦	81
第3節 その他の土製品	93
第4節 石器・石製品	96
第5節 玉類	98
第6節 金属製品と鍛冶関連資料	100
第7節 木製品	102
第8節 植物種子	103
第9節 動物骨	103
第4章 まとめ	104
付章 秋月遺跡出土玉類の原材产地分析	107
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

図1 秋月遺跡の位置	3	図37 遺物包含層出土土器実測図	46
図2 秋月遺跡の周辺	6	図38 弥生時代の土器実測図	47
図3 既往の調査地点	8	図39 古墳時代前期の土器実測図	47
図4 調査区地区割り図	10	図40 秋月12号墳周溝出土土器実測図	48
図5 秋月遺跡調査区平面図（古墳時代・古代）	11	図41 秋月11号墳周溝出土土器実測図	49
図6 秋月遺跡調査区平面図（中世以降）	13	図42 秋月10号墳周溝出土土器実測図① (底の一括資料)	49
図7 調査区土層断面図	15	図43 秋月10号墳周溝出土土器実測図② (上層出土土器)	50
図8 古墳時代前期の遺構 断面図	18	図44 秋月9号墳周溝出土土器実測図① (須恵器坏蓋)	52
図9 秋月9号墳 平面図・断面図	19	図45 秋月9号墳周溝出土土器実測図② (須恵器坏身)	54
図10 秋月9号墳1区 遺物出土状況図	20	図46 秋月9号墳周溝出土土器実測図③ (須恵器器台ほか)	55
図11 秋月9号墳2・3区 遺物出土状況図	21	図47 秋月9号墳周溝出土土器実測図④ (須恵器壺・甕)	56
図12 秋月9号墳4区 遺物出土状況図	22	図48 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑤ (土師器坏・高坏)	57
図13 秋月9号墳5区 遺物出土状況図	23	図49 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑥ (土師器鉢・甌・甕)	59
図14 秋月9号墳7区 遺物出土状況図	24	図50 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑦ (土師器長胴甕①)	60
図15 秋月9号墳8区 遺物出土状況図	25	図51 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑧ (土師器長胴甕②)	61
図16 秋月10号墳 平面図・断面図	26	図52 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑨ (土師器長胴甕③)	62
図17 秋月10号墳2区 遺物出土状況図	26	図53 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑩ (製塩土器)	63
図18 秋月10号墳3・4区 遺物出土状況図	27	図54 その他の遺構・包含層出土土器実測図 (古墳時代)	63
図19 秋月11墳 平面図・断面図	28	図55 掘立柱建物柱穴出土土器実測図	64
図20 秋月12号墳 平面図・断面図	29	図56 209土坑出土土器実測図	66
図21 秋月12号墳 遺物出土状況図	29	図57 033溝出土土器実測図	67
図22 古墳時代中期～後期の遺構 平面図・断面図	31	図58 100土坑出土土器実測図	68
図23 掘立柱建物1 平面図・断面図	32	図59 194土坑出土土器実測図	69
図24 掘立柱建物2 平面図・断面図	33	図60 その他の遺構・包含層出土土器実測図	
図25 掘立柱建物3 平面図・断面図	33		
図26 古代の遺構（北半）遺構図	34		
図27 古代の遺構（北半）平面図・断面図	35		
図28 古代の遺構 遺物出土状況図	36		
図29 085井戸 平面図・断面図	37		
図30 090土坑 平面図・断面図	38		
図31 075井戸 平面図・断面図	39		
図32 中世の遺構（北半）遺構図	40		
図33 中世の遺構（北半）平面図・断面図	41		
図34 中世の遺構（南半）平面図・断面図	43		
図35 中世の遺構（南半）平面図・断面図	44		
図36 近代・現代の建物跡	45		

(古代)	71	図74 丸瓦実測図	90
図61 085井戸出土土器実測図	72	図75 平瓦実測図	91
図62 090土坑出土土器実測図	73	図76 道具瓦実測図	92
図63 001大土坑出土土器実測図① (土師器・瓦器)	75	図77 増輪実測図	93
図64 001大土坑出土土器実測図② (陶磁器)	76	図78 竈・土管実測図	94
図65 002大溝出土土器実測図	76	図79 その他の土製品実測図	95
図66 003大溝出土土器実測図	77	図80 石器・石製品実測図	97
図67 その他の遺構出土土器実測図 (中世)	79	図81 玉類実測図	99
図68 近世・近現代の土器実測図	80	図82 錢貨 (拓本)	100
図69 過去の調査で出土した貞福寺跡の軒瓦	81	図83 金属製品・鍛冶関連資料実測図	101
図70 軒丸瓦実測図①	84	図84 木製品実測図	102
図71 軒丸瓦実測図②	85	図85 秋月古墳群の古墳分布状況	105
図72 軒平瓦実測図①	88	図86 貞福寺関連の軒瓦出土状況	105
図73 軒平瓦実測図②	89		

表 目 次

表1 全体工程表	1	表3 玉類一覧	99
表2 既往の調査一覧	8		

写 真 (本文中) 目 次

写真1 現地説明会の様子	2	写真4 金属滓	101
写真2 公開シンポジウムの様子	2	写真5 植物種子	103
写真3 炉壁・壁土	101	写真6 動物骨	103

写 真 図 版 目 次

卷頭カラー1	図版7 第1面全景①
調査地と日前宮、岩橋山塊／第9次調査出土玉類	図版8 第1面全景②
卷頭カラー2	図版9 中世の遺構①
秋月9～12号墳／秋月9号墳周溝北西部の一括出土土器	図版10 中世の遺構②
図版1 調査区土色	図版11 中世の遺構③
図版2 古墳周溝土色	図版12 中世の遺構④
図版3 遺構土色	図版13 中世の遺構⑤
図版4 出土遺物色調	図版14 古代の遺構①
図版5 調査地周辺	図版15 古代の遺構②
図版6 調査風景	図版16 古代の遺構③

- 図版17 第2面全景
- 図版18 古墳群全景①
- 図版19 古墳群全景②
- 図版20 秋月9号墳①
- 図版21 秋月9号墳②
- 図版22 秋月10号墳
- 図版23 秋月11号墳
- 図版24 秋月12号墳
- 図版25 古墳時代の遺構
- 図版26 土器（秋月12・10号墳ほか）
- 図版27 土器（秋月12・9号墳①）
- 図版28 土器（秋月9号墳②）
- 図版29 土器（秋月9号墳③）
- 図版30 土器（秋月9号墳④）
- 図版31 土器（秋月9号墳⑤）
- 図版32 土器（秋月9号墳⑥）
- 図版33 土器（秋月9号墳⑦）
- 図版34 土器（秋月9号墳⑧）
- 図版35 土器（秋月9号墳⑨）
- 図版36 土器（古墳時代・古代①）
- 図版37 土器（古代②）
- 図版38 土器（古代③）
- 図版39 土器（中世①）
- 図版40 土器（中世②）
- 図版41 土器（中世③・近世以降）
- 図版42 軒丸瓦①
- 図版43 軒丸瓦②
- 図版44 軒平瓦①
- 図版45 軒平瓦②
- 図版46 丸瓦・平瓦・道具瓦
- 図版47 墳輪・竈
- 図版48 土管・土製品
- 図版49 石器・石製品
- 図版50 玉類・金属製品・木製品ほか

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過 (表1)

1. 調査の経緯

和歌山県立向陽中学校・高等学校内において体育館建設工事が計画され、平成20年12月10日付けで、和歌山県知事より文化財保護法第94条に基づく工事等の通知が提出された。工事対象地は秋月遺跡に該当することから、平成21年3月19日～30日に県生涯学習局文化遺産課による確認調査が実施された（試掘調査の成果は、「1秋月遺跡」『和歌山県埋蔵文化財調査年報－平成20年度－』和歌山県教育委員会2010.03参照）。調査の結果、古墳時代と中世の2面の遺構面が確認され、須恵器・土師器等が多数出土したことから、記録保存のための本発掘調査を要すると判断され、当センターが発掘調査業務を受託した。

体育館建設予定地は旧体育館2棟が既存していたので、撤去後に建物建築部分1,696m²の発掘調査を実施した。調査の契約期間は平成21年5月19日から11月30日までである。

2. 発掘調査の経過

発掘調査は工事請負方式で実施し、掘削作業は（株）弘安建設に、基準点測量および航空撮影・写真測量図化は（株）南紀航測センターに委託した。調査準備および現況測量後、6月17日より機械掘削を開始した。8月15日に第1面の航空撮影を行い、排土仮置き場所確保のため調査区の一部を埋め戻し、9月29日に第2面の航空撮影を行った。その後10月7日より調査区の埋め戻しを開始しながら下層確認等の補足調査を行い、10月16日に調査及び埋め戻しを終了した。準備・片付けを含めた現地調査期間は6月15日から10月23日である。

発掘調査に際し、考古学の専門家を調査委員に委嘱して9月11日（井藤徹氏、工楽善通氏、坪ノ内徹氏、和田晴吾氏）、9月24日（森郁夫氏）の両日に発掘調査現場で調査委員会を開催した。調査委員会では特に古墳や井戸の調査方法に関する指摘を受け、その後の調査に反映させた。

表1 全体工程表

年	21									22										23							
月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4
試掘調査																											
発掘調査																											
遺物整理																											
普及啓発																											

3. 整理作業の経過

発掘調査で出土した遺物及び写真・図面について、応急整理作業及び整理作業を行った。応急整理作業は、発掘調査と同じ年度に実施し、現地調査事務所および一時保管場所において実施した。作業は遺物の水洗、台帳登録・コンテナ収納を行った。また、玉類・骨片・炭化物などの微細な遺物を採集する必要性から、一部の遺構の埋土を持ち帰り、水洗を行った。

整理作業は平成22年6月1日から平成23年2月14日まで、当センターの和歌山市土佐町分室において実施した。出土遺物はコンテナ計174箱分あったが、作業を経てコンテナ207箱分に整理した。（3箱分は木製品45本入りの大型の箱を使用）これらの遺物は洗浄・注記・接合を行い、必要に応じて補強・復元・実測・トレースして報告書に掲載した。

遺跡写真と図面はファイルに入れて整理した。遺物の写真撮影と図面作成は適宜行い、報告書に掲載した。

出土遺物については、事業完了後に県教育委員会に移管した。調査・整理業務で作成した写真及び図面については、当センターにて保管している。

4. 普及啓発活動（写真1・2）

発掘調査の成果を広く公開するために、平成21年9月18日（金）、向陽高等学校文化科学科生徒80名、付属中学校生徒240名を対象に現地説明会を行った。また翌9月19日（土）に一般向けの現地説明会を行い、向陽高等学校生徒を含め187名の参加があった。これら両日の公開に先立ち調査成果の報道を行い、各紙の県内版等に取り上げられた。

調査・応急整理後の平成22年5月19日（火）から7月11日（日）にかけて、和歌山県民文化会館にて当センターの速報展「紀州の歩み」を開催した。古墳時代の玉と平安時代の軒瓦を計18点展示し、見学者は約316名であった。また、6月26日（土）に県内文化財調査報告会「地宝のひびき」にて秋月遺跡の調査成果を報告し、49名の参加者があった。平成23年1月30日（日）には、公開シンポジウム「和歌山平野の集落遺跡—弥生時代から古墳時代へ—」にて秋月遺跡の古墳群の調査成果を紹介し、109名の参加者があった。公開シンポジウムの会場では、出土遺物の一部を展示した。



写真1 現地説明会の様子



写真2 公開シンポジウムの様子

第2節 周辺の環境

1. 地理的環境 (図 1)

秋月遺跡のある和歌山市は、紀伊半島の北西端に位置する中核市である。市域の北は大阪府岬町、東は岩出市、南は海南市と接しており、西は紀伊水道に面している。

和歌山市は中央構造線により南北に分断されており、北側は領家帯の和泉層群、南側は三波川変成帯にあたる。北側の和泉山地は東から西へと標高を減じながら、紀伊水道へ没入する。和歌山市域では雄山峠で標高 180 m、雲山峰で標高 490 m、甲山で標高 212 m である。裾野には緩やかに南へ傾斜する幅約 1 ~ 2 km の平野部が続く。南には 山地が東から西へと標高を減じながら続くが、山地は貴志川で一度途切れ、古墳群の築かれた岩橋山塊も和歌山平野の東側で終わる。和歌山市内では高積山で標高 237 m、大日山で標高 141 m、和歌山城のある岡山で標高 49 m、日前宮では標高 4 ~ 6 m である。

中央構造線による地溝には紀ノ川が西向きに流れ、紀伊水道へ抜ける。紀ノ川の流路は幾度となく変化しており、古代末期以前は和歌山平野にて、現在の和歌川を抜けて和歌浦へ注ぐ流路を中心に、同入川や水軒川を抜けて紀伊水道へ抜けるルートなどを分流していたものとみられる。

秋月遺跡は紀ノ川下流域左岸の沖積地に立地しており、平野部の中ではやや安定した位置にあったといえるだろう。日前・国懸宮を中心とし東西・南北ともに約 550 m の広さを有した微高地となっており、東には鳴神遺跡群、北西には太田・黒田遺跡が隣接する。遺跡の北側には蛇行した紀ノ川の分流の跡が地形として残っており、南側の低湿地には水田が広がっている。

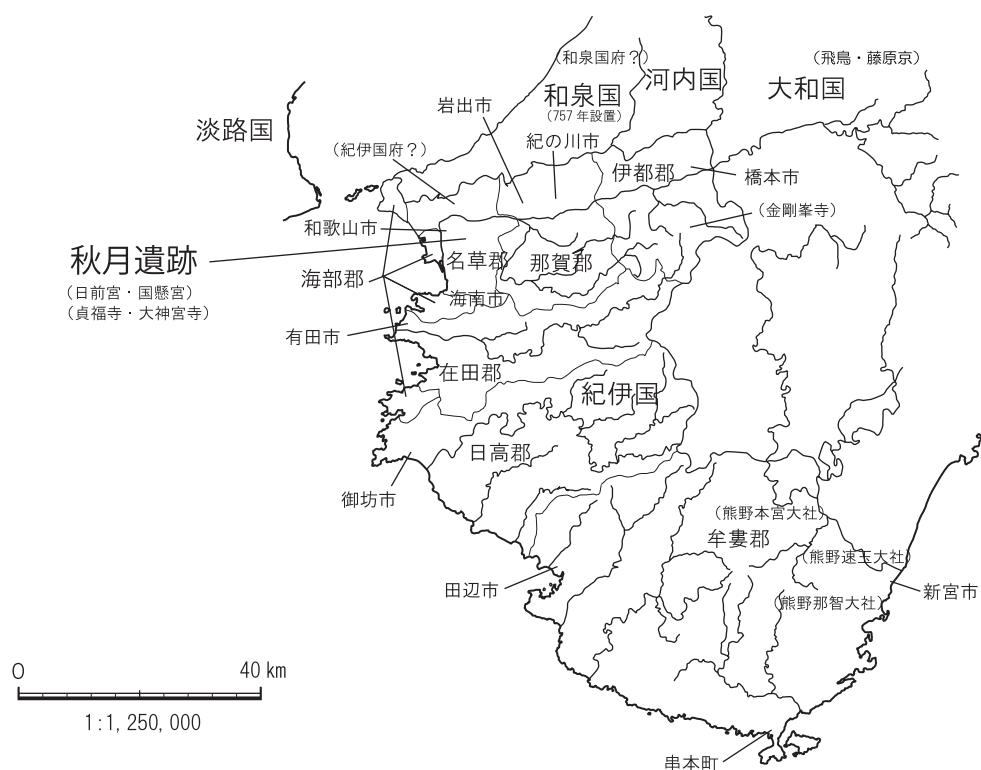


図 1 秋月遺跡の位置

2. 歴史的環境（図2）

旧石器時代

旧石器時代の明確な遺跡は確認されず、和歌山市の周縁部の山裾に石器の表採地点が散在している。和歌山市内では、西庄・園部・弘西遺跡でナイフ形石器が見つかっている。また、細石刃が岩出市根来寺遺跡や紀の川市貴志川町山東大池遺跡で見つかっている。

縄文時代

草創期の有舌尖頭器は比丘尼橋付近と湯屋谷池西遺跡、トロトロ石器（異形局部磨製石器）は名草池北遺跡で表採されており、木葉形尖頭器は弘西遺跡で出土している。ともに旧石器の出土地と同様に山地の谷部に位置し、土器は伴出していない。

縄文時代前期以降は、和歌山平野の縁辺部で貝塚が形成された。櫛宜貝塚・鳴神貝塚・吉礼貝塚・岡崎縄文遺跡で縄文土器の含まれた貝層がみつかっている。秋月遺跡から東へ800m、標高3～10mで確認されている鳴神貝塚は、明治28年（1895）に近畿地方で初めて確認された貝塚で、国史跡に指定されており、多数の埋葬人骨や装身具・骨角器が確認されている。晚期には、紀ノ川の自然堤防上に川辺遺跡が形成され、平地式住居や土器棺墓が検出されたほか、遮光器土偶片や石刀、蛇紋岩製の磨製石斧などが出土している。

弥生時代

弥生時代は、前期から中期にかけて紀ノ川流域の自然堤防上に集落が形成されている。弥生時代前期の土器は、秋月遺跡東部の土坑のほか、太田黒田遺跡・川辺遺跡で出土している。太田・黒田遺跡では、前期に大溝を掘削して集落の形成が始まり、後期初頭まで多数の竪穴建物等が展開している。中期には、宇田森遺跡で大溝を伴う集落、川辺遺跡で松菊里型の竪穴建物が確認されている。後期には、橘谷遺跡や滝が峰遺跡等で高地性集落がみられ、瀬戸内地域の集落間の緊張状態を示していると考えられている。後期末から古墳時代初頭には、集落は再び平野部に戻り、多数の遺跡を形成する。

古墳時代

古墳時代は微高地に集落が形成され、多くの古墳は丘陵に築造されている。秋月遺跡の東半では集落の居住域、西半では県内最古の前方後円墳として知られる秋月1号墳を含む古墳群が確認されている。周辺では古墳時代前期に多数の溝が掘削されており、紀ノ川からの用水を始めとする農業用水の整備が、和歌山平野の古墳時代の発展をもたらしたものと評価できる。鳴神遺跡群（鳴神I～VI遺跡・音浦遺跡）や田屋遺跡・西田井遺跡・北田井遺跡・西庄遺跡など中期を中心とする大規模な集落のほか、友田町遺跡・平尾遺跡でも古墳時代の集落が確認されている。

古墳時代中期の古墳は紀ノ川河口域北岸付近の車駕之古址古墳や大谷古墳のほか、当時は紀伊の勢力下にあったといわれる岬町淡輪の地に築かれた字土墓古墳や西陵古墳などが知られる。古墳時代後期には秋月遺跡から東へ約1.5kmにある岩橋山塊とそこから派生する花山・井辺前山と呼ばれる丘陵上に約850基から成る岩橋千塚が築かれる。秋月遺跡を取り巻く丘陵の山頂には、花山6号墳・大谷山22号墳・大日山35号墳・井辺八幡山古墳と古墳時代後期の前方後円墳が並ぶ。終末期の古墳は、これらの古墳が築かれた丘陵の南向きの場所を選んで築かれている。

秋月遺跡のような平野部の古墳群は、木の本古墳群や紀の川市三昧塚古墳群などが知られており、発掘調査により鳴神V遺跡や西庄遺跡、北田井遺跡の古墳群など、少しづつ増加している。

古代

古代（飛鳥・奈良・平安時代）には、和歌山県全域と三重県の東紀州地域が紀伊国となり、和歌山市付近は海岸沿いが海部郡、その他は名草郡となる。紀伊国分寺は紀の川市東国分、国分尼寺は岩出市西国分に所在し、紀伊国府は和歌山市府中の府中遺跡に所在したものと推定されている。名草郡衙や海部郡衙は和歌山市内にあった可能性が高く、名草郡衙は太田黒田遺跡、海部郡衙は関戸遺跡などが候補として挙げられる。紀ノ川北岸を南海道が走り、沿道には山口廃寺・上野廃寺・直川廃寺などの古代寺院が建立されている。

飛鳥時代の遺跡は、秋月遺跡のほか、岩橋高柳遺跡・川辺遺跡などが知られている。川辺遺跡では溝がまわる掘立柱建物跡を中心に、竪穴住居・掘立柱建物跡が複数検出された。

奈良時代の遺跡は、太田黒田遺跡・上野廃寺・山口廃寺・直川廃寺・薬勝寺廃寺等がある。名草郡の中央部には日前宮・国懸宮・伊太祁曾神社・竈山神社などの有力な神社があり、寺院は周辺部に分布するものと考えられている。県内で畿内系土師器が出土した遺跡は、秋月遺跡のほか、岩出市岡田遺跡・山一遺跡、和歌山市川辺遺跡・岩橋高柳遺跡・鳴神V遺跡・太田黒田遺跡・西庄遺跡、海南市且来VI遺跡、御坊市堅田遺跡（日高郡衙跡）がある。

平安時代の遺跡は、鳴神V遺跡・奥山田遺跡・高井遺跡などがある。後期に神仏習合が進み、熊野三山と参詣道が成立する。秋月遺跡においても、日前宮の西に貞福寺、国懸宮の東に神宮寺が創建され、室町時代まで続く。加陀廃寺・大同寺では、平安時代の瓦・泥仏が採集されている。

中世・近世

中世（鎌倉時代・室町時代）には、高野山・熊野・根来などの有力な寺社が勢力を強めるが、天正13年（1585）に羽柴秀吉による太田城の水攻めにより、和歌山の中世は終焉する。近世には、和歌山城を中心に城下町が形成され、紀州藩による統治が行われる。

鎌倉時代の遺跡は、西庄地区遺跡・岩橋高柳遺跡・川辺遺跡などがある。小規模な区画溝に囲まれた屋敷地に掘立柱建物と井戸、土坑墓などが築かれている。西庄地区遺跡では屋敷地が良好な形で検出され、呪符などが出土している。

室町時代の遺跡は、太田城跡・岩橋高柳遺跡・中野遺跡のほか、岩出市根来寺遺跡などがある。これらは根来寺や雜賀衆の城館跡と考えられる室町時代後期の堀状遺構を伴っており、検出された堀の規模は、秋月遺跡で幅4m、深さ1.8m、検出延長約12m、岩橋高柳遺跡で復原幅10.5m、深さ2.9m、検出延長約160m、中野遺跡で幅7m、深さ0.9m、検出延長約50m、根来寺遺跡（西山城跡）で幅8m前後、深さ2.3～4.0m、検出延長約96mであった。また、太田黒田遺跡・川辺遺跡・根来寺遺跡では、火縄銃の鉛玉が出土している。

江戸時代の遺跡は、和歌山城を中心に遺跡が分布する。城内（史跡和歌山城）と家老屋敷地（和歌山城跡）、門前町（鷺の森遺跡）、大庄屋湯橋家屋敷跡（岩橋高柳遺跡）等がある。紀州藩主の生活した和歌山城の二の丸や家老・庄屋の屋敷の発掘調査が進み、江戸時代の暮らしが具体的に分かるようになってきた。江戸時代末期には和歌山城や紀州藩の御殿で御庭焼が焼かれている。

近現代には、紀州藩から和歌山県となり、秋月遺跡の調査地周辺は学校用地となつた。秋月遺跡の西側付近は明治37年に県立海草農林学校が開校するが大正4年に廃校となり、跡地に県立海草中学校が開校する。昭和23年には学制改革で向陽高等学校となり、平成16年には中等部が併設され、現在の向陽中学校・高等学校となつた。



No.	遺跡名	主な時代	No.	遺跡名	主な時代
1	秋月遺跡	弥生～中世	12	神前遺跡	弥生～江戸
2	友田町遺跡	古墳・中世	13	岩橋高柳遺跡	飛鳥～江戸
3	太田・黒田遺跡	弥生～近世	14	花山古墳群	古墳
4	太田城跡	室町	15	花山8号墳	古墳
5	鳴神V遺跡	古墳	16	岩橋千塚古墳群	古墳
6	鳴神IV遺跡	古墳	17	大日山35号墳	古墳
7	音浦遺跡	古墳	18	井辺1号墳	古墳
8	鳴神貝塚	縄文	19	天王塚古墳	古墳
9	鳴神II遺跡	古墳	20	寺内古墳群	古墳
10	大日山I遺跡	古墳	21	井辺前山古墳群	古墳
11	井辺遺跡	弥生～中世	22	井辺八幡山古墳	古墳

図2 秋月遺跡の周辺

第3節 既往の調査 (図3・表2)

秋月遺跡は日前国懸宮を中心とした東西 550 m、南北 550 mに広がる弥生時代～中世の複合遺跡である。現在まで和歌山県関係（社団法人和歌山県文化財研究会、当センターを含む）の調査が 8 次、和歌山市関係（和歌山市文化体育振興事業団を含む）の調査が 9 次に渡り実施されている。日前国懸宮は紀伊国の一宮で、西に鎮座する日前宮と東に鎮座する国懸宮の総称である。古墳時代より現代まで紀国造家が奉伺する神社で、中世には神仏習合のもとに貞福寺と大神宮寺が併設されていたことが知られている。

日前国懸宮の東の日進中学校を中心とした範囲は主に和歌山市により調査が実施されており、弥生時代前期以降集落が連綿と継続する様子や、平安時代後期に神宮寺が創建されたことが確認されている。日前国懸宮の西の向陽中・高等学校を中心とした範囲は、主に当センターにより調査が実施されており、庄内期や古代・中世の遺構や古墳群、平安時代後期に創建された貞福寺の存在が確認された。遺跡全体の既往の調査については、和歌山市文化体育振興事業団編 1998『秋月遺跡第6次発掘調査概報』や同 2000『秋月遺跡第8次発掘調査概報』でまとめられているので、本書では今回の調査区のある向陽中・高等学校周辺を中心に述べておきたい。

向陽高等学校内の調査地においては、調査地の西側の校舎建設にともない昭和 60 年度（2 次）、平成 4・5 年度（5・6 次）、また南側のプール建設にともない平成 11 年度（8 次）に本発掘調査が行われ、今次は秋月遺跡 9 次調査となる。

県2次調査（県II）

2-1 区 県内最古相の古墳時代前期の前方後円墳が発見され、隣接して古墳時代前期～中期の方墳 5 基が検出された。上層の遺構では掘立柱建物群と方形区画溝を検出し、奈良時代の「〇田」（大田カ）と記された木簡を転用した馬形や、貞福寺に関わる平安～鎌倉時代にかけての遺構・遺物が注目される。

2-2・3 区 調査区全域で溝・土坑・ピットを確認し、鎌倉時代の瓦器などが多数出土した。

県3次調査（県III）

テニスコートのポール基礎を埋設するため、小規模な調査を行った。

県4次調査（県IV）

グランド整備・排水施設設置のため、調査を行った。グランド南東部の東西トレーニングでは、今回の調査区の北側で 5～6 世紀の溝などを確認した。

県5・6次調査（県V・VI）

古墳時代中期初頭の方墳 2 基や甕棺墓など、奈良時代の溝、平安～室町時代の溝、掘立柱建物 2 棟、井戸 3 基など、豊富な遺構・遺物が発見された。

県7次調査（県VII）

室町時代の堀状遺構のほか、奈良時代の掘立柱建物跡等を確認し、古代の日前宮の土地区画の変遷を窺う資料となった。

県8次調査（県VIII）

北東から南西に流れる溝などを確認した。大量の土師器皿・瓦器碗のほか、若干の軒瓦・埴輪片が出土した。

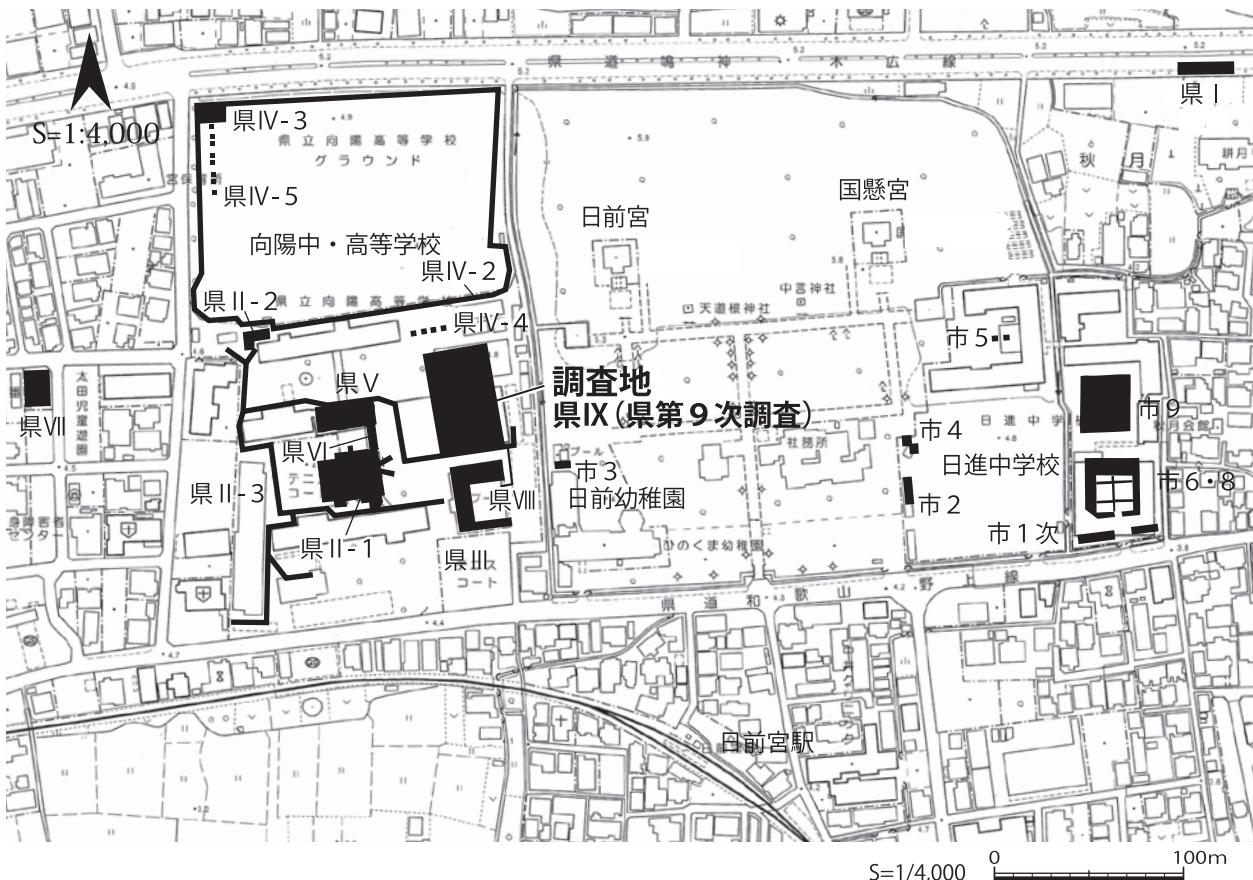


図3 既往の調査地点

表2 既往の調査一覧

調査名	略号	調査年度	調査の原因・種類	面積	調査主体	文献	発行	文献発行年月
県1次	I	1970	県道和歌山港鳴神線建設	約240m ²	和文研	「秋月遺跡」「和歌山県史 考古資料」	和歌山県	1983.02
県2次	II 1	1985	県立向陽高校特別教室建築	約970m ²	"	「秋月遺跡」「緊急雇用対策特別基金事業に係る発掘調査資料整理概報」	和文セ	2005.03
"	II 2	"	合併浄化槽建設	約190m ²	"	"	"	"
"	II 3	"	排水施設埋設設立会	約400m ²	"	"	"	"
県3次	III	1986	硬式テニスコートポール基礎 硬式テニスコートポール基礎	グリッド6ヶ所 グリッド6ヶ所	県教委			
県4次	IV 1	1987	ラグビーゴールポール基礎	グリッド2ヶ所	和文セ			
"	IV 2	"	グランド整備・排水施設	約530m ²	"			
"	IV 3	"	グランド北西隅砂場	約120m ²	"			
"	IV 4	"	バレーコートポール基礎他	グリッド5ヶ所	"			
"	IV 5	"	北西隅テニスコートポール基礎	グリッド8ヶ所	"			
"	IV 6	"	グランド内グリッド	グリッド9ヶ所	"			
県5次	V	1992	危険校舎改築1次	約390m ²	"	『秋月遺跡』	和文セ	1994.03
県6次	VI	1993	危険校舎改築2次	約60m ²	"	"	和文セ	"
県7次	VII	1997	和歌山県警太田交番建設	約300m ²	"	『秋月遺跡発掘調査概報』	和文セ	1997.10
県8次	VIII	1999	県立向陽高校体育施設(プール)整備	約520m ²	"	『(財)和歌山県文化財センター年報1998』	和文セ	1999.06
県9次	IX	2009	県立向陽中・高校体育館建替	約1,696m ²	"	『秋月遺跡(県第9次調査)』(当報告書)	和文セ	2010.03
市1次	1	1985	市立日進中学校自転車置場建設	約72m ²	市教委			
市2次	2	1986	" クラブ部室建設	約60m ²	"			
市3次	3	1987	私立日前幼稚園舎建設	周囲トレンチ	"			
市4次	4	"	市立日進中学校体育倉庫建設	約70m ²	"	『秋月遺跡現地説明会資料』	市教委	1987.10
市5次	5	1988	" 下足箱建設	約8m ²	"	『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1』	和文体	1992.03
市6次	6	1997	" 校舎及び屋内運動場建築に伴う遺跡確認	約260m ²	和文体	『秋月遺跡第6次発掘調査概報』	和文体	1998.03
市7次	7	"	個人住宅建築	約2m ²	市教委			
市8次	8	2000	市立日進中学校屋内運動場建設	約900m ²	和文体	『秋月遺跡第8次発掘調査概報』	和文体	2000.03
市9次	9	2001	" 校舎建設	約800m ²	和文体	『秋月遺跡第9次発掘調査概報』	和文体	2002.03

和文研—(社)和歌山県文化財研究会、県教委—和歌山県教育委員会、和文セ—(財)和歌山県文化財センター、市教委—和歌山市教育委員会、和文体—(財)和歌山市文化体育振興事業団

第2章 遺構

第1節 調査の概要

地区割りの設定

地区割りの基点 (X=-195.0km, Y=-73.0km) は太田・黒田遺跡県1次調査時を踏襲した。今回の調査では1km四方の大区画は用いていない。この基点から100m四方の区画を1単位とした中区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の大文字でA～Jと、南方向へアラビア数字で1～10と表記した。今回の調査区はG13区となる。さらに4m四方の区画を1単位とした小区画を設定し、北東端を基点とし西方向へローマ字の小文字でa～yと、南方向へアラビア数字で1～25と表記した。遺構図作成や遺物取り上げの際には原則として、4m四方の小区画で行い、中区画一小区画を組み合わせて表記し用いた。

調査区の設定

調査区は建物建築部分の面積に合わせ、東西約33m、南北約54mの長方形で、調査面積は1,696m²である。配置は向陽高校敷地の中央東に位置し、街区と共に座標北で西に約10°振れる。

掘削手順

掘削排出土は全て調査区周囲に横置きし、反転せずに掘削手順は一度で行った。掘削に際し、現代造成土（第0層）、近代造成土（第1層）、近代耕作土（第2層）まで機械掘削を行った。中世～近世を含む遺物包含層（第3層）と古墳～奈良時代の遺物包含層（第4層）は人力掘削をおこない調査を進めた。遺物包含層から出土した遺物は小区画ごとに取り上げた。包含層掘削後に遺構を検出し、遺構検出は第4層上面および第5層（基盤層）上面の計2面で行った。その後、各遺構の埋土を人力掘削した。遺構掘削に際し、土坑・ピットは半裁し、溝は数箇所に畦を設け、土層断面の実測・写真撮影を行った。土層断面は基本的に東面もしくは南面を観察対象とした。

遺構と遺物の管理

検出遺構はその種類にかかわらず、検出順に1から通し番号で遺構番号を付した。これらの遺構番号は遺構台帳によって検出地区および遺構の種別を管理し、遺構番号の総数は357である。

出土遺物は小区画・遺構・層位ごとに取り上げ、1番からの登録番号を与え遺物登録台帳によつて管理している。出土遺物は収納コンテナ（28ℓ）207箱分であり、遺物登録番号の総数は1199である。

写真と図面の管理

調査における記録として、写真撮影と記録図面を作成した。写真撮影については4×5判・6×7判・35mmのカラーリバーサルおよびモノクロフィルムを使用した。また600万画素相当のデジタルカメラを補助的に使用した。撮影内容は、基本的に写真台帳に日時・調査区・対象・方向・使用フィルムを登録したほか、デジタル画像データに内容を付して保存している。

記録図面については、航空写真測量によるS=1:50の遺構平面図と、調査員・調査補助員によるS=1:100の遺構配置図、S=1:10・1:20の遺構実測図（断面図・平面図）、1:20の調査区土層図を作成した。

航空撮影・測量については、ラジコンヘリにより遺構面2面を2回にわたり、それぞれ調査地遠景の斜め写真と図化用の垂直写真を撮影した。

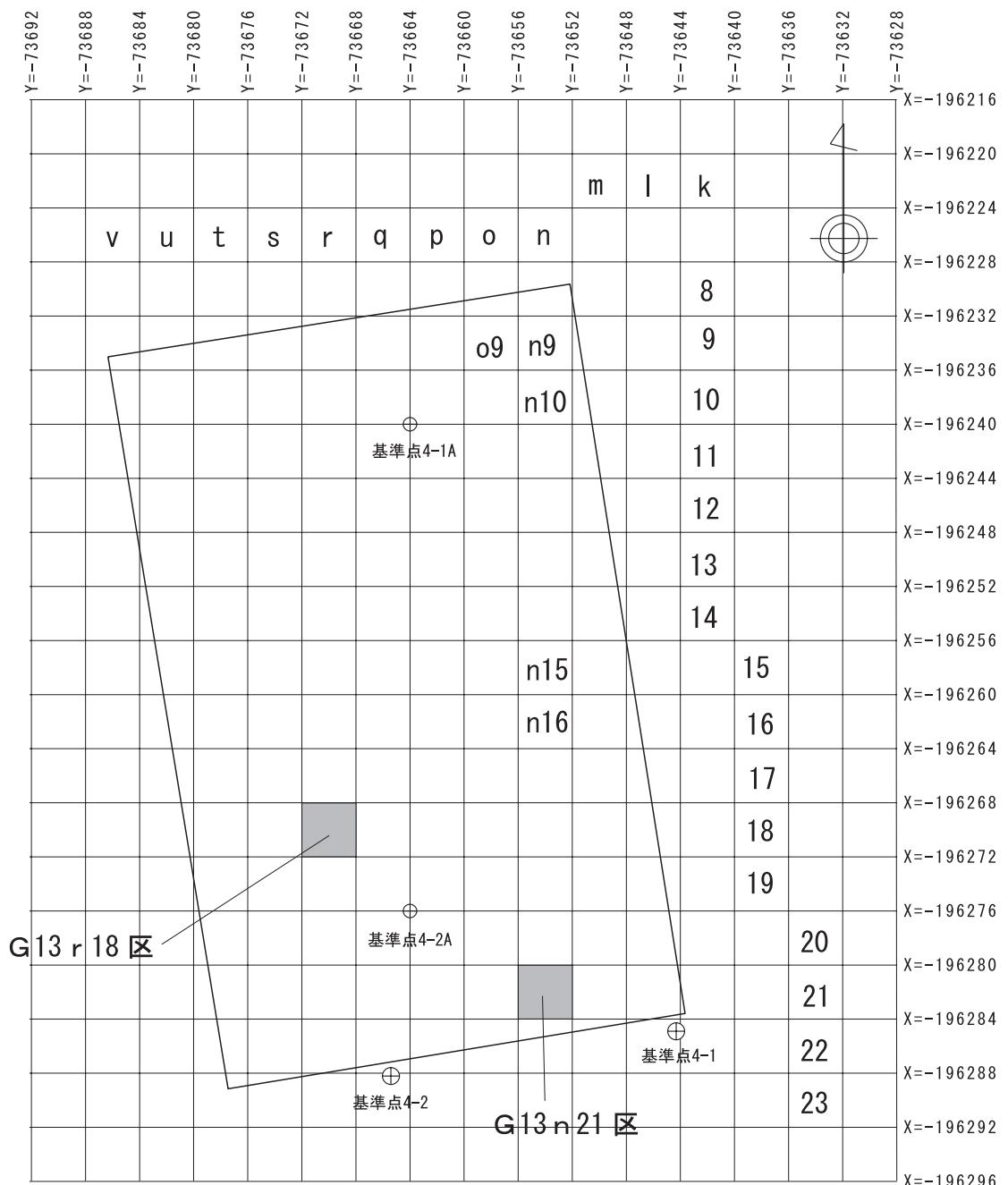


図4 調査区地区割り図



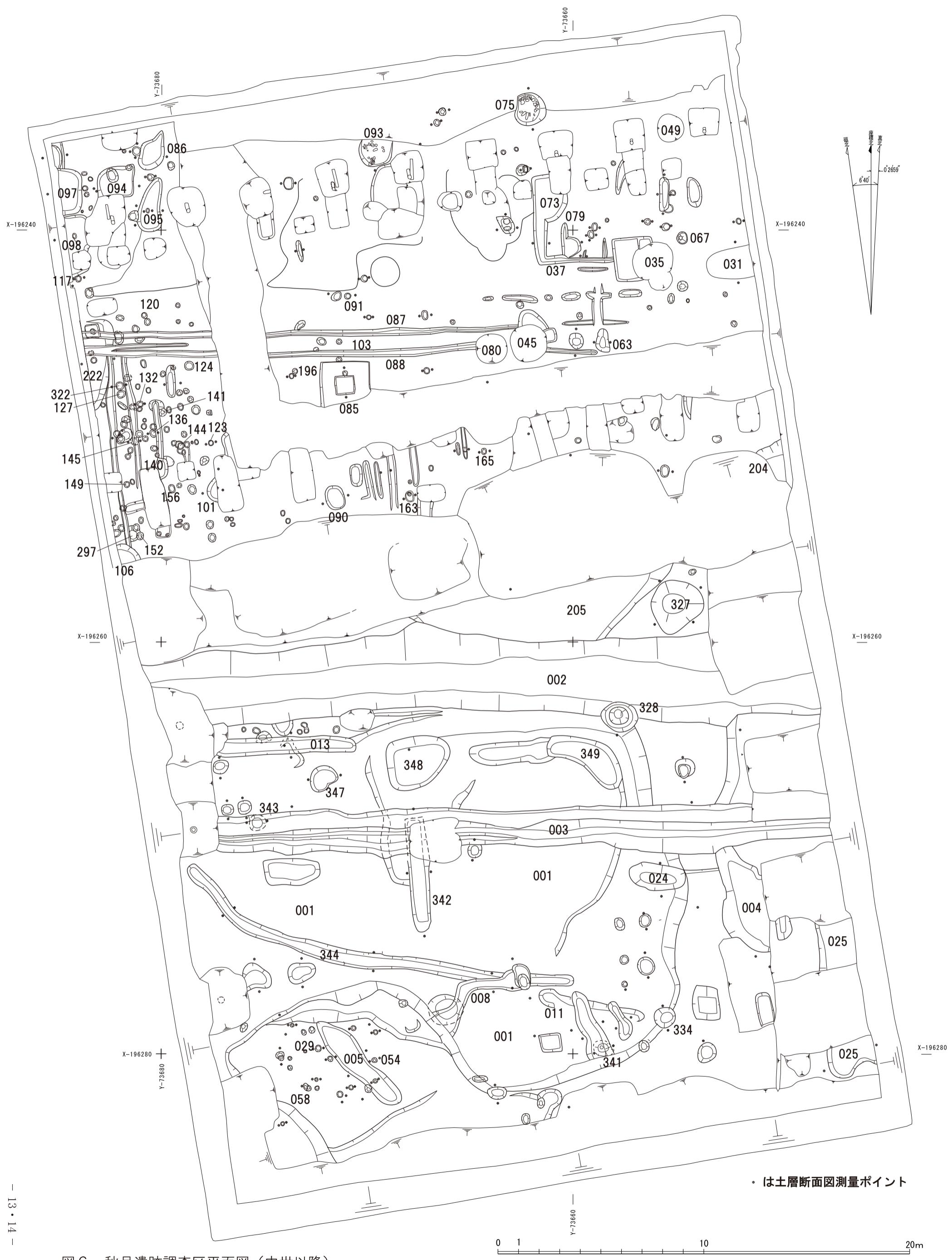
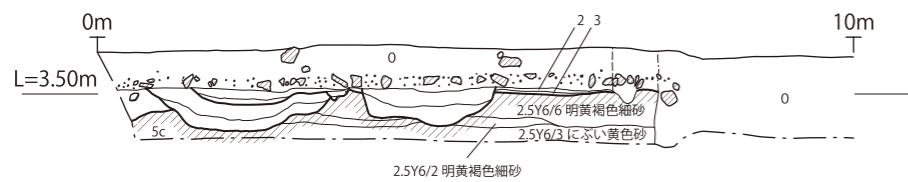
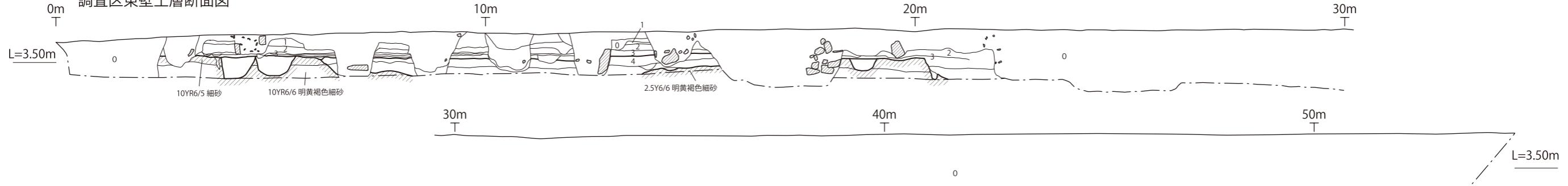


図6 秋月遺跡調査区平面図（中世以降）

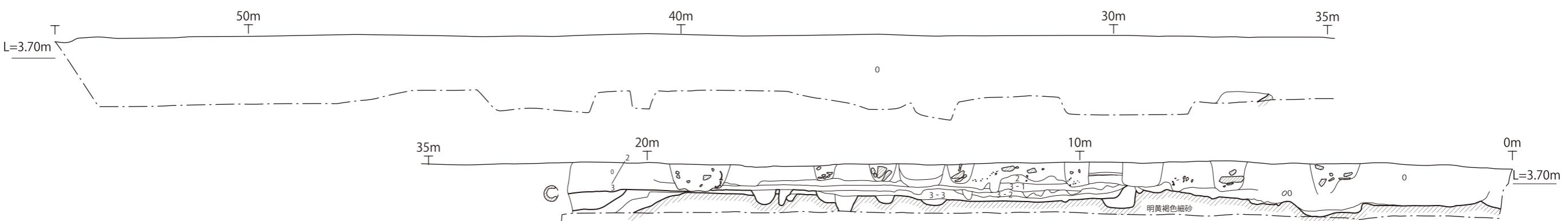
調査区北壁土層断面図



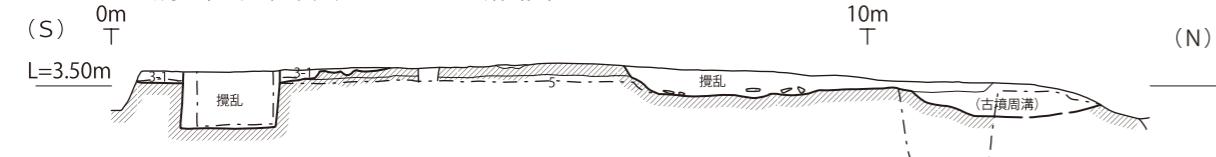
調査区東壁土層断面図



調査区西壁土層断面図



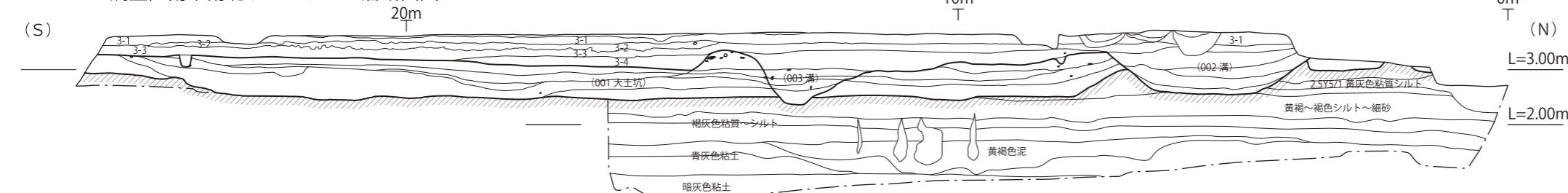
調査区北半中央セクション断面図



第0層 現代造成土 灰黄褐色シルト、明褐色微砂
第1層 近代造成土 10YR5/4 にぶい黄褐色微砂
第2層 近世～近代耕作土 10YR7/1 灰白色細砂
第3-1層 近世耕作土 10YR6/1 褐灰色シルト
第3-2層 近世耕作土 3-1・3-3層に 10YR4/3 にぶい黄褐色混じる

第3-3層 近世耕作土 10YR6/1 褐灰色シルト
第3-4層 中世～近世耕作土 10YR5/1 褐灰色シルト
第4層 古墳～奈良時代の遺物包含層
10YR5/1 褐灰色細砂～10YR5/2 灰黄褐色細砂
第5層 地山 10YR6/6 黄褐色シルトほか

調査区南半南北トレンチ 土層断面図



(W) 0m 調査区南半東西トレンチ 土層断面図

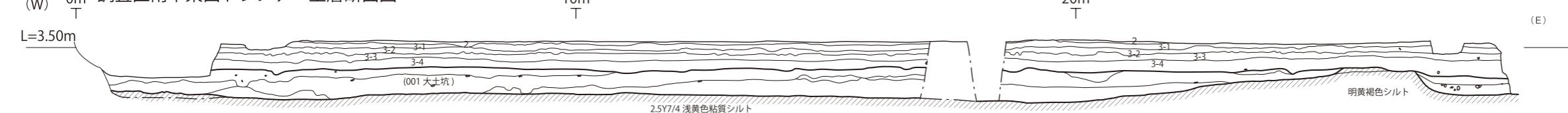


図7 調査区土層断面図

第2節 基本層序

調査前には既存の体育館2棟が南北に並んでおり、その建物基礎撤去跡が調査区内で約1/3の面積を占める。北側の旧木造体育館跡は調査区北東にかけて逆コ字状、南側の体育館兼講堂跡はロ字状に検出され、双方とも地山まで達する深さでその部分の遺構面は残らない。現況では調査地は平坦であるが、向陽高校創立以前の状況としては、調査区の中央を境に南北で段差があり、南側は低地を嵩上げする形で近世の耕作土層・整地層が厚く堆積する。また中世の土地改変によりそれ以前の遺構は残存していない。北側は微高地であり、現地表から約70cm下の地山上面には古墳時代～中世の遺構が累積して残存していた。

基本層序

確認調査時の基本土層を踏襲して一部改変し、以下の基本層序とした。調査区北半と南半では土層堆積状況が大きく異なり、第3・4層は必ずしも共通しない。

第0層：現代造成土 灰黄褐色シルト、明褐色粗砂

第1層：近代造成土 にぶい黄褐(10YR5/4)微砂(均質)

第2層：近世～近代耕作土 灰白(10YR7/1)細砂(均質)

第3層：近世耕作土 北半一褐灰(10YR6/1)細砂(3-0層)

南半一褐灰(10YR5/1)細砂(3-1～3-4層)

第4層：古墳～奈良時代の遺物包含層

北半一褐灰(10YR5/1)細砂～灰黄褐(10YR5/2)細砂

南半一削平され残存しない。

第5層：地山 黄褐(10YR6/6)シルト(均質)

包含層と遺構面

調査区北半では、古墳～奈良時代の遺物包含層である第4層上面で、第1面として鎌倉～室町時代の遺構を検出した。また第4層を少し掘り下げて奈良時代の遺構を検出した。その後、第5層上面まで掘り下げ、第2面として古墳時代の遺構を検出した。

調査区南半では、当初に中世包含層とみなした第3層を人力掘削したが、出土遺物から近世初頭以降の耕作土が厚く累積することが判明し3-1～3-4層とした。北半における第4層は、南半では残存しない。第5層上面では室町時代の大溝と大土坑を検出した。なお本来であれば第1面(中世)の航空撮影は大溝と大土坑を完掘した状態であるが、作業の都合上、大溝を完掘し、大土坑は下層上面の状態で撮影を行った。第2面の撮影は大土坑を完掘した状態で行った。

基盤層

地山である黄褐色シルト層は、同様の土層が太田黒田遺跡県1次調査でも認識されており、周辺地域の基盤を成す河成堆積の砂泥層と考えられる。下層確認調査を行ったところ、この黄褐色シルト層の下には青灰色粘土層が堆積し、黄褐色シルトを含む層により侵食を受けている。青灰色粘土層の下には安定した暗灰色粘土層があり、縄文海進時の海成堆積の粘土層の可能性がある。暗灰色粘土層の上面は細砂層であり透水層となる。暗灰色粘土層の上面は標高1.1mで、粘土層の深さは標高0.7m地点(現地表から3.6m下)まで確認した。さらに下層に存在するとされる基底礫岩層等に関しては、作業が困難であるため確認を見送った。

第3節 遺構

調査区北半では古墳時代前期の土坑、古墳時代前期～後期の古墳、奈良時代の掘立柱建物・溝、平安末～鎌倉時代の井戸、室町時代の井戸等、各時期の遺構を検出した。

調査区南半では、室町時代の大土坑、東西大溝、瓦溜まり等が大きな面積を占めており、それ以前の古代の土坑等を大土坑の底面で検出した。

1. 古墳時代の遺構

調査区北半に庄内期の土坑4基、前期の方墳1基、中期から後期の円墳3基がある。そのほか土壙墓の可能性がある土坑1基と柱穴列がある。

調査区南半では、中世の土地改変により古墳時代の遺構面はほとんど残らないが、包含層から古墳時代の遺物が少なからず出土しており、当初は古墳群が調査区南半まで展開していた可能性もある。ただし南に向けて低地に移行する地形であるため、南側への展開範囲は限られる。また調査区南半の中世整地層から埴輪片が出土しており、付近に埴輪をもつ古墳が存在した可能性がある。

〈古墳時代前期の土坑〉(図8)

217 土坑

調査区の北西部に位置する。径0.9m、検出面からの深さ0.5m。弥生V様式系の土師器甕が出土し、庄内期と考えられる。

268 土坑

調査区の北西部に位置する小型の土坑。ミニチュア土器の底部が出土した。

354 土坑

調査区の北西部に位置し、直近に355土坑がある。径1.4m、検出面からの深さ1.1m。埋土には炭化物、腐食質細片が微量に混じり、最下層には青灰色砂質土が堆積し、溜水の痕跡がある。

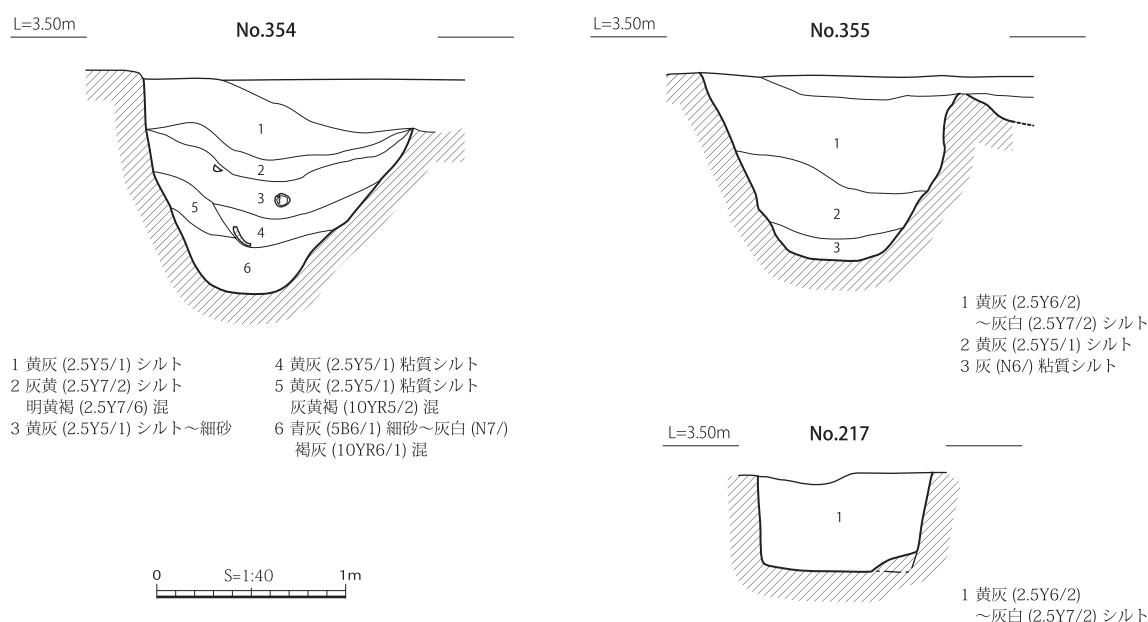


図8 古墳時代前期の遺構 断面図

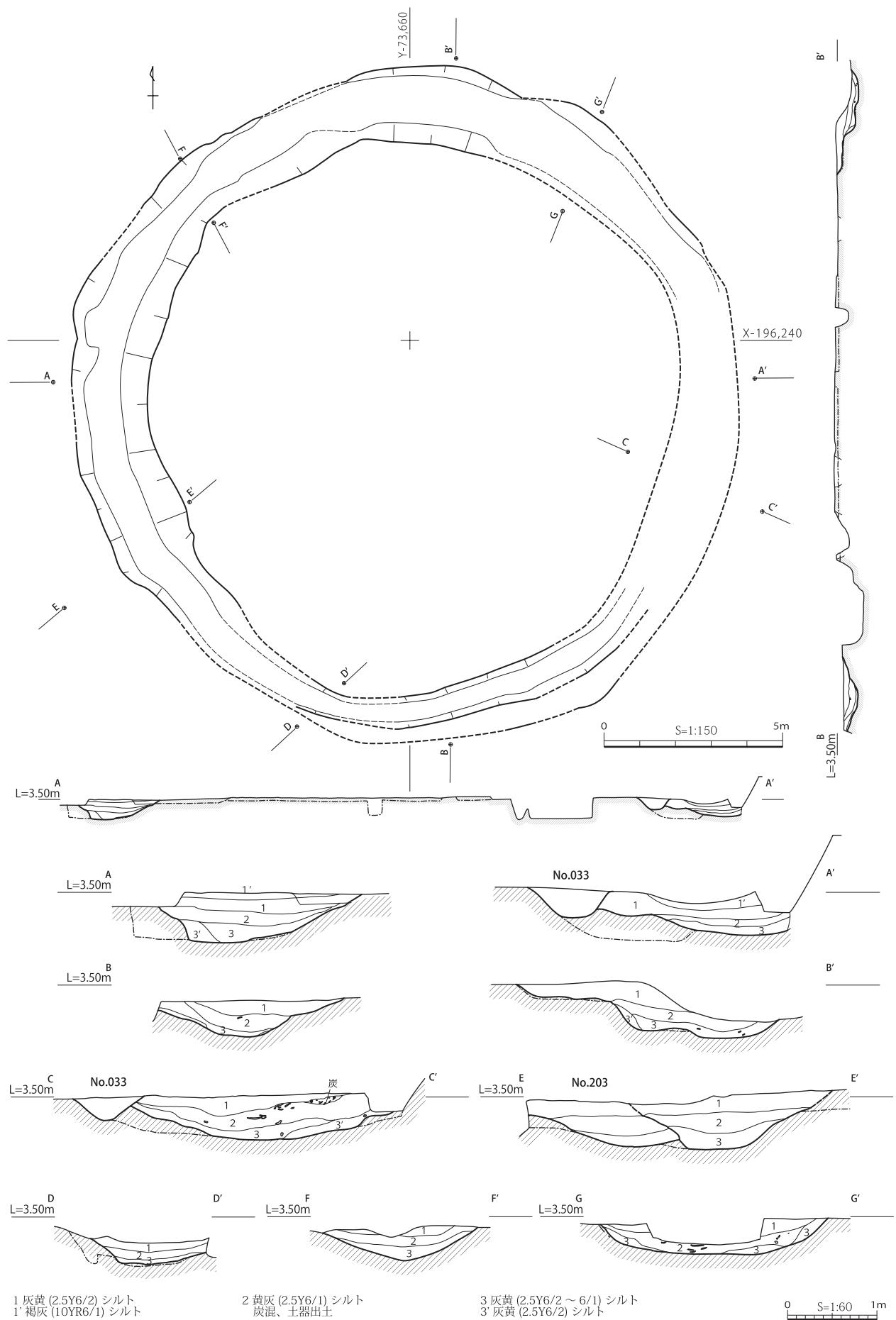


図9 秋月9号墳 平面図・断面図

透水層に達しないため、井戸としての機能はないが、水溜め程度の使用が考えられる。あるいは貯蔵用の土坑等の可能性がある。庄内期と思われる土器細片が出土した。

355 土坑

調査区の北西部で、354 土坑の北東 1.2 m に位置する。径 1.3 m、検出面からの深さ 1.0 m。354 土坑と規模・埋土とも近似し、同様の性格の土坑と考えられる。

以上から、堅穴住居等は検出していないが、これらの 217・268・354・355 土坑が立地する調査区北西部から調査区外にかけて、庄内期の集落が存在した可能性がある。

〈古墳〉

秋月 9号墳 (200 周溝) (図 9 ~ 18)

調査区北東部に位置し、墳丘規模は直径約 14 m、周溝幅 2.0 m、検出面からの深さ 0.5 m の

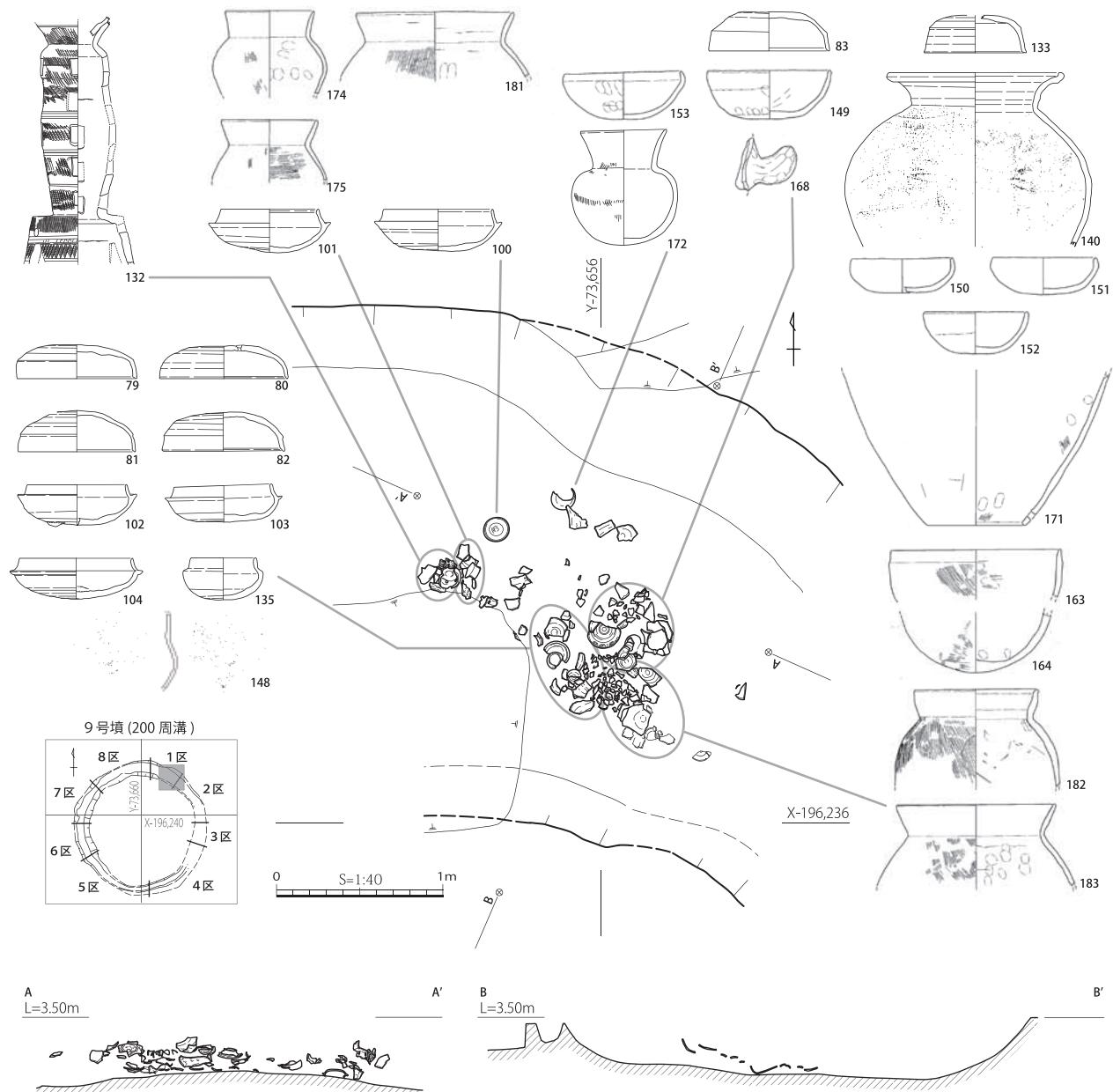


図 10 秋月 9号墳 1区 遺物出土状況図

円墳である（図9）。主体部は削平されて残存しない。周辺の地形や周溝の状態から、高い墳丘が築かれたとは考えにくく、また石室の痕跡やまとまとった石材も発見されなかった。低墳丘の古墳で、埋葬主体は石棺あるいは木棺の直葬と推測する。

周溝には、放射状に8方向の土層観察用の畔を設け、その畔によって区分された区間を、北東から時計回りに1～8区と区分して遺物の取り上げを行った。

周溝の埋土（図9下）は、大きく3層にわかれ、下層は古墳築造時からの1次堆積、中層は2次堆積、上層は後世の堆積とした。周溝からは下層および中層から、多量の土器が出土し、出土状況は3群にわかれ。北東の1・2区では、残存状況は良いものの破損した状態が多く、器種も多様である。損壊を受け、墳丘側から周溝に流入した状態と推測する。南東の4・5区と北西の7・8区では完形の土師器甕、須恵器壺・甕が出土した。これらは残存状況が極めて良好であ

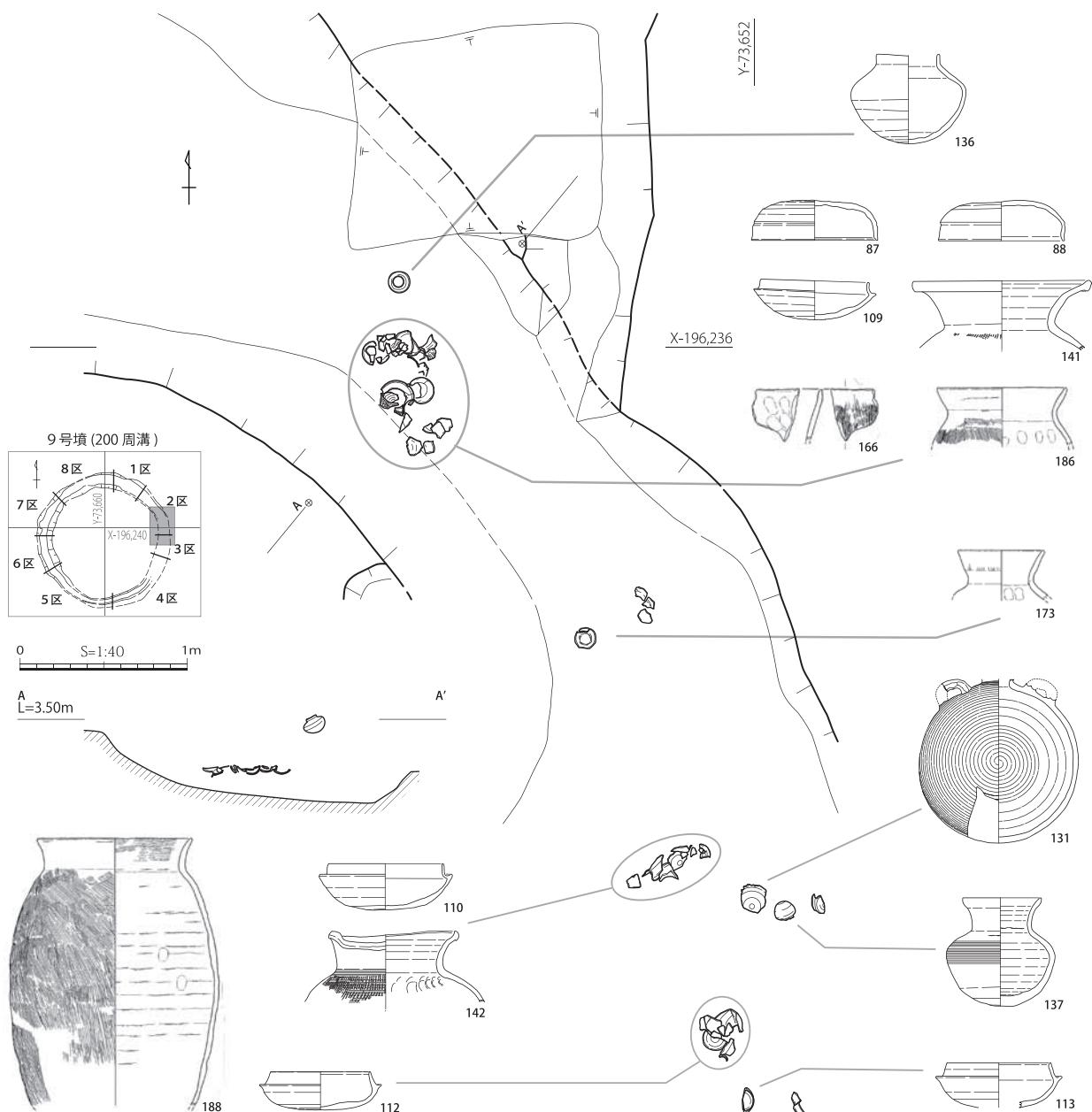


図11 秋月9号墳2・3区 遺物出土状況図

り、また組成が近似し、かつ対置する位置にあることから、周溝内に供献された土器とみなされる。以下、図面に沿って各区の出土状況を詳述する。

1区(図10)からは、須恵器壺蓋(79～82)・壺身(100～104)・短頸壺(135)・甕(140)・筒型器台(132)、土師器壺(150～152)・鉢(163・164)・甕(181～183)・甌(168)、滑石製臼玉、植物種子などが出土した。また図10に図示したほかにも多くの土器がまとまって出土した。いずれも破損した状態で、離れた地点の破片と接合する場合もあった。周溝下層からの出土であるが、墳丘側の周溝底面からは遊離した状態であり、古墳築造時から少し時間が経過した後、周溝に流入したと考えられる。また付近の埋土には炭化物が含まれていた。出土遺物の時期は6世紀初頭から末までと幅がある。

2～3区(図11)からは、須恵器壺蓋(87・88)・壺身(109～113)・短頸壺(136)・甕(141・142)、土師器甕(186・188)、移動式竈(595)などが出土した。多くは周溝中層から出土し、周溝底面からは遊離した状態であった。1区と同様、周辺の埋土には部分的に炭化物が含まれてい

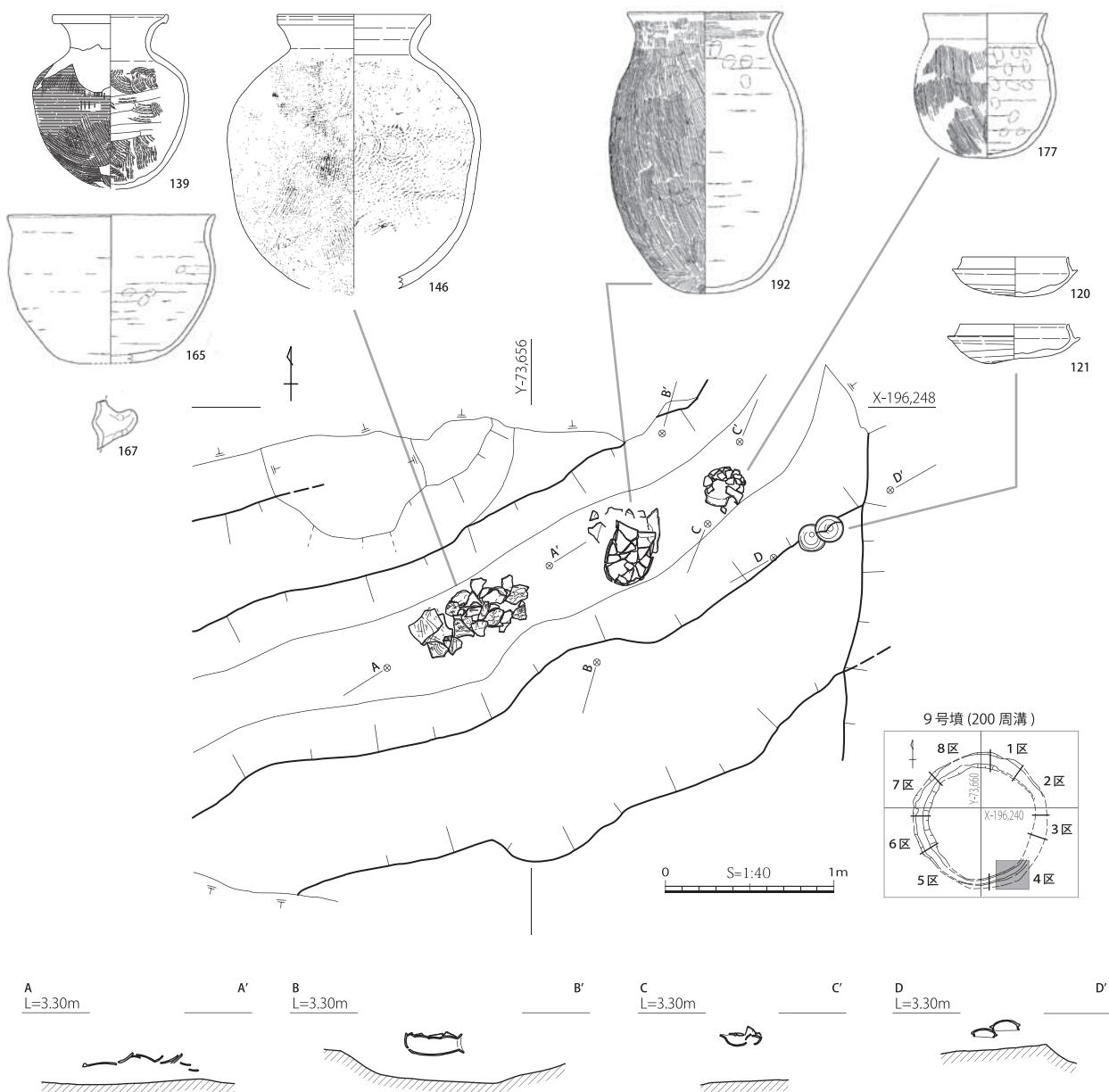


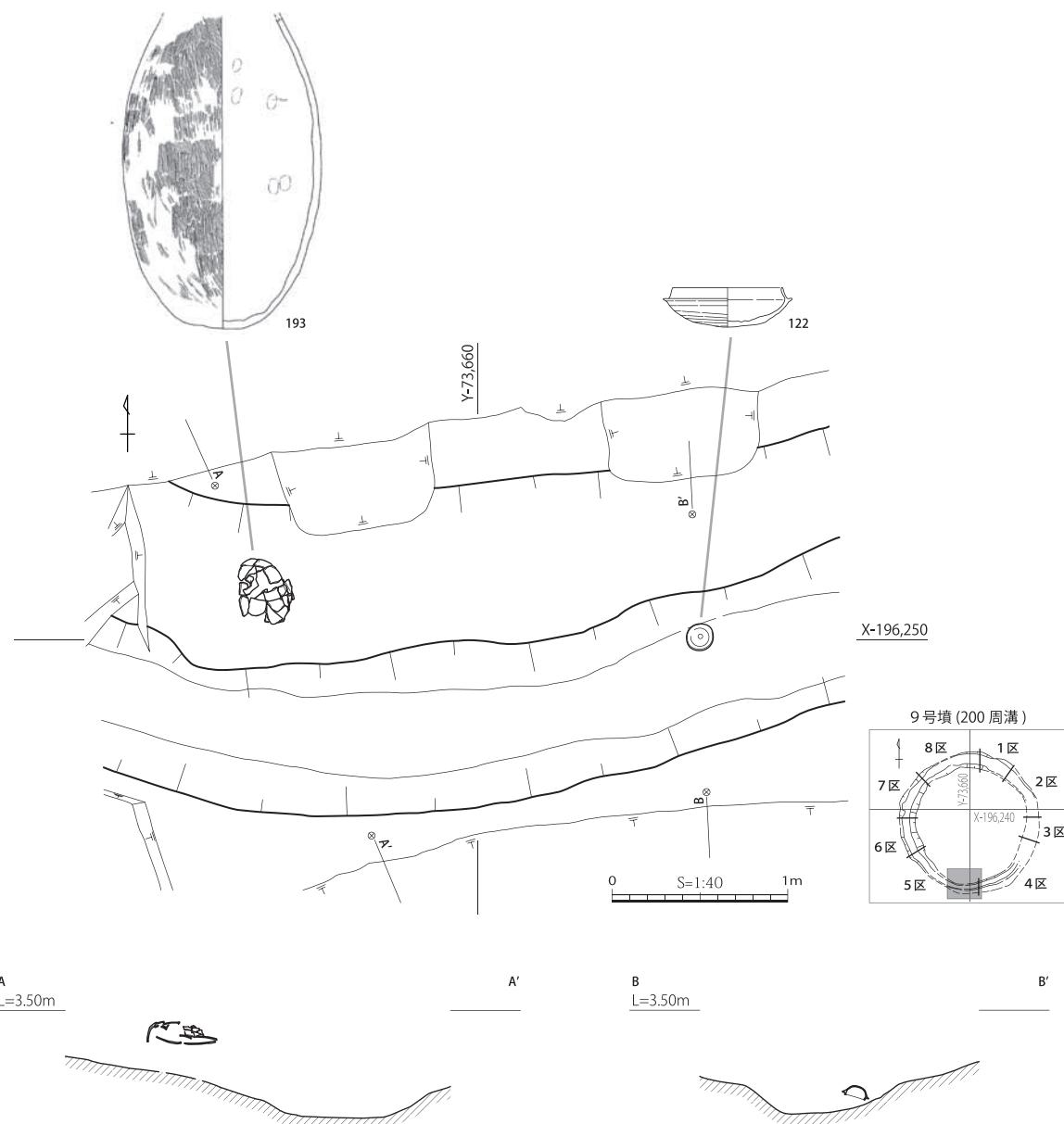
図12 秋月9号墳4区 遺物出土状況図

た。短頸壺(136)は最上層から出土し、時期が下るものである。

4区(図12)からは、須恵器坏身(120・121)・甕(139・146)、土師器鉢(165)・甕(177・192)が出土した。須恵器坏身2個体は、周溝肩部に伏せた状態で並置しており、須恵器甕、土師器鉢・甕は周溝中層から横臥した状態で出土した。いずれもほぼ完形であり、配置された状態で残存していた。周溝底面からは遊離しており、古墳築造からある程度時間が経過した後、供献されたと推測できる。時期は6世紀中葉である。なお土師器甕(192)内からは骨片が出土している。

5区(図13)からは、須恵器坏身(122)、土師器長胴甕(193)が出土した。4区と同様に、周溝中層から、須恵器坏身は伏せた状態、土師器甕は横臥した状態で出土した。遺物の時期も4区とほぼ同時期である。

7区(図14)からは、須恵器坏蓋(96～98)・坏身(124・125)、土師器高坏(161)・甕(197～199)などが出土した。いずれも周溝底面からは遊離した状態であるが、出土層位が異なる。



下層から須恵器坏 (97・98・124・125) と土師器甕 (199)、それに重複して中層から土師器甕 (200)・高坏 (161) が出土し、また土師器甕 (198) は肩部の上層近くから出土した。このことから、同じ地点に二時期以上に渡って供献された可能性もある。下層の須恵器坏身 (124) は口縁を下に伏せた状態、坏身 (125) は口縁を上に向けた状態、蓋 (97・98) は伏せた状態で出土した。本来は坏身 (125) に蓋 (98) を被せていた可能性もある。また土師器甕はそれぞれ横臥した状態で出土したが、後述する8区の出土状況を鑑みると、本来は直立していた可能性もある。

8区(図15)からは、須恵器坏蓋 (99)・坏身 (126)、土師器小型甕 (179・181)・長胴甕 (202～204) などが出土した。ほかに8区の北岸から石製紡錘車1点が出土した。周溝底面近くの下層から土師器小型甕 (180)、長胴甕 (202)・小型甕 (179) が出土し、中層から須恵器坏蓋 (99)、長胴甕 (203・204) が出土し、肩部上層近くから須恵器坏身 (126) が出土した。7区と同様に、二時期以上にわたる可能性がある。なお、長胴甕 (202) は口縁を下に伏せた状態でほぼ直立しており、その下に重なって小型甕 (180) が配置されていた。長胴甕 (203) は口縁を上に直立した状

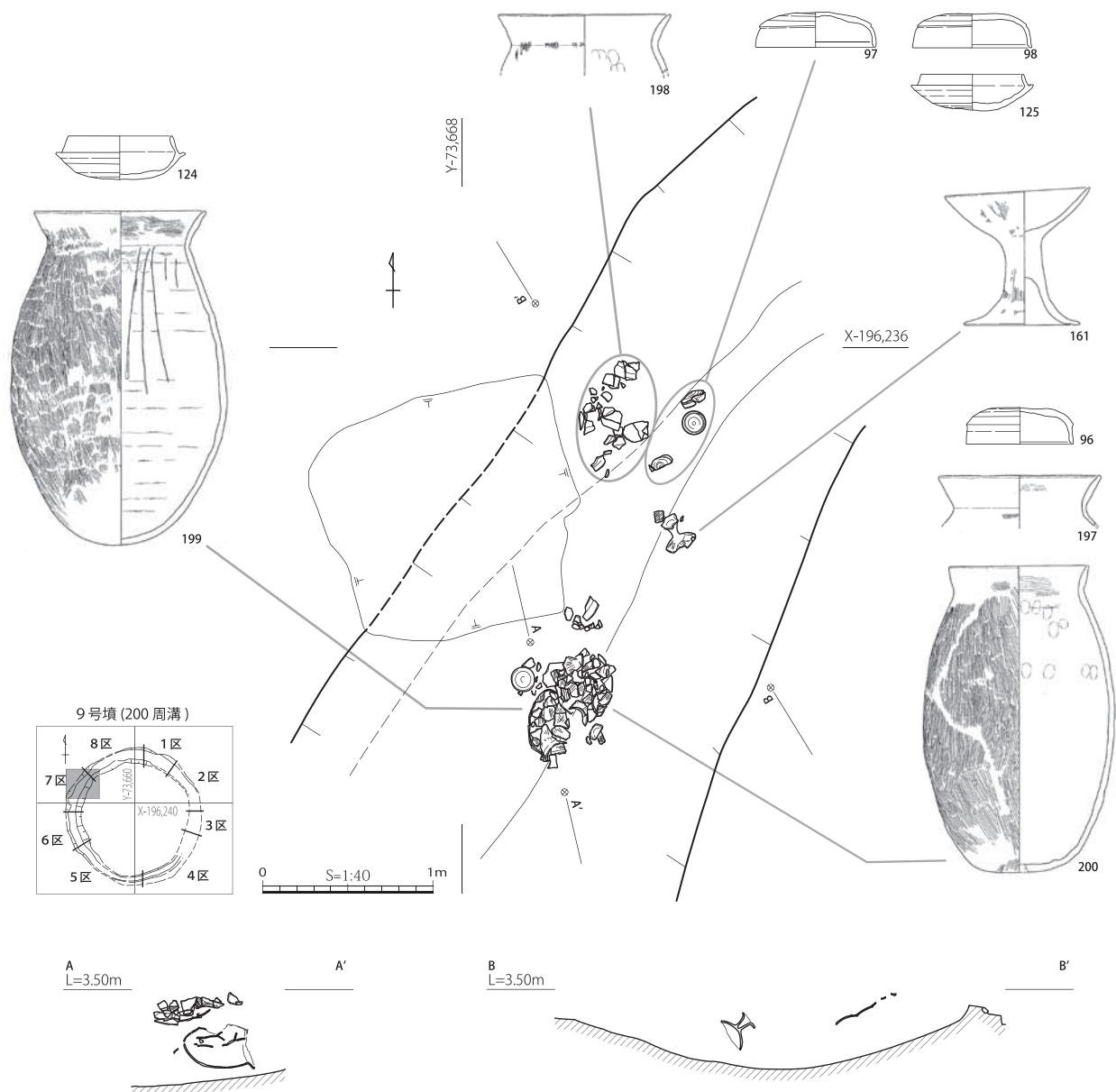


図14 秋月9号墳7区 遺物出土状況図

態で出土し、もう1点の長胴甕(204)も検出時にはやや横転していたが、本来は口縁を上に直立した状態であった可能性が高い。これらの直立した長胴甕は、あるいは周溝が埋没した時点で土坑を掘削して埋納したとも考えられるが、検出時にそのような掘方が認められなかつたため、周溝に直立して配置されたとみなした。

9号古墳の周溝出土遺物にはかなりの時期幅があり、6世紀初頭から末葉までとなる。古墳築造当初の状態が残らないため時期を決定するのは難しいが、6世紀前葉と考えたい。そして6世紀中葉から後葉にかけて墳丘上が再整備され、周溝に土器が供献されたと想定できる。古墳時代前期から末まで通じて、一帯が墓域であると意識され続けたようである。その後、7世紀後半から8世紀前半にかけて、古墳の認識が薄れ、墳丘上に重複して掘立柱建物が建てられ、また周溝に一部重複して南北溝が掘削されている。

秋月10号墳(201周溝)(図16~18)

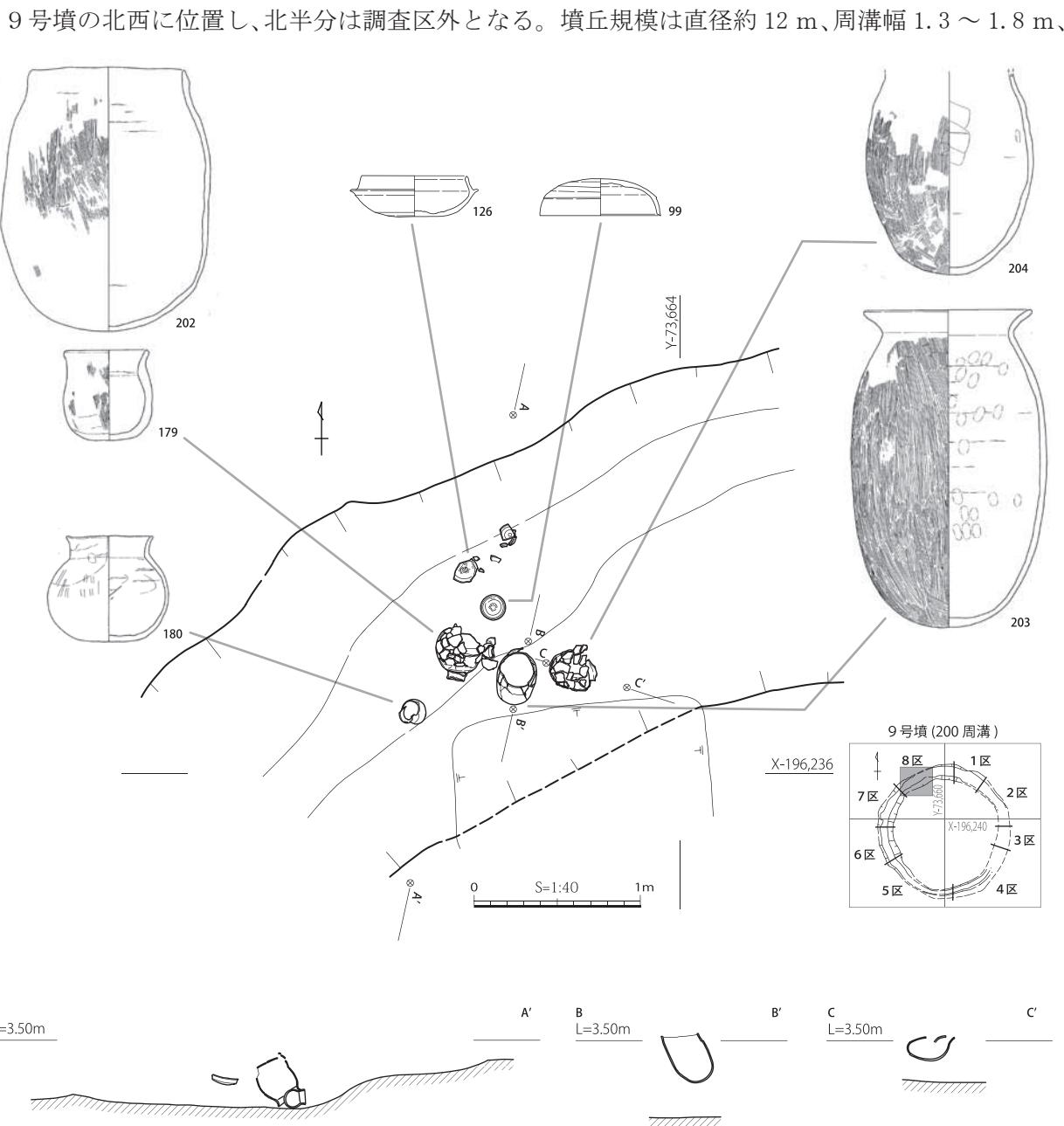


図15 秋月9号墳8区 遺物出土状況図

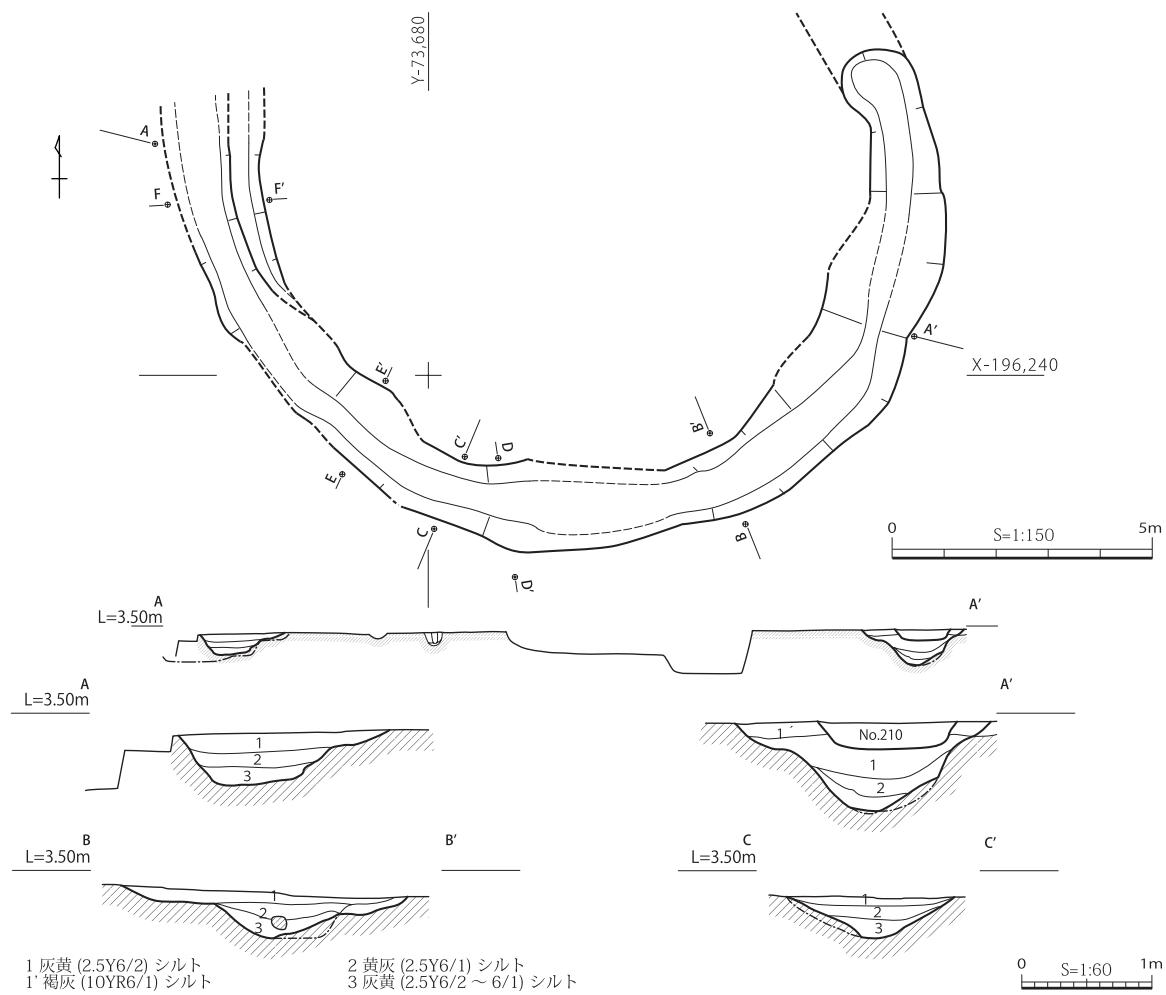


図 16 秋月 10 号墳 平面図・断面図

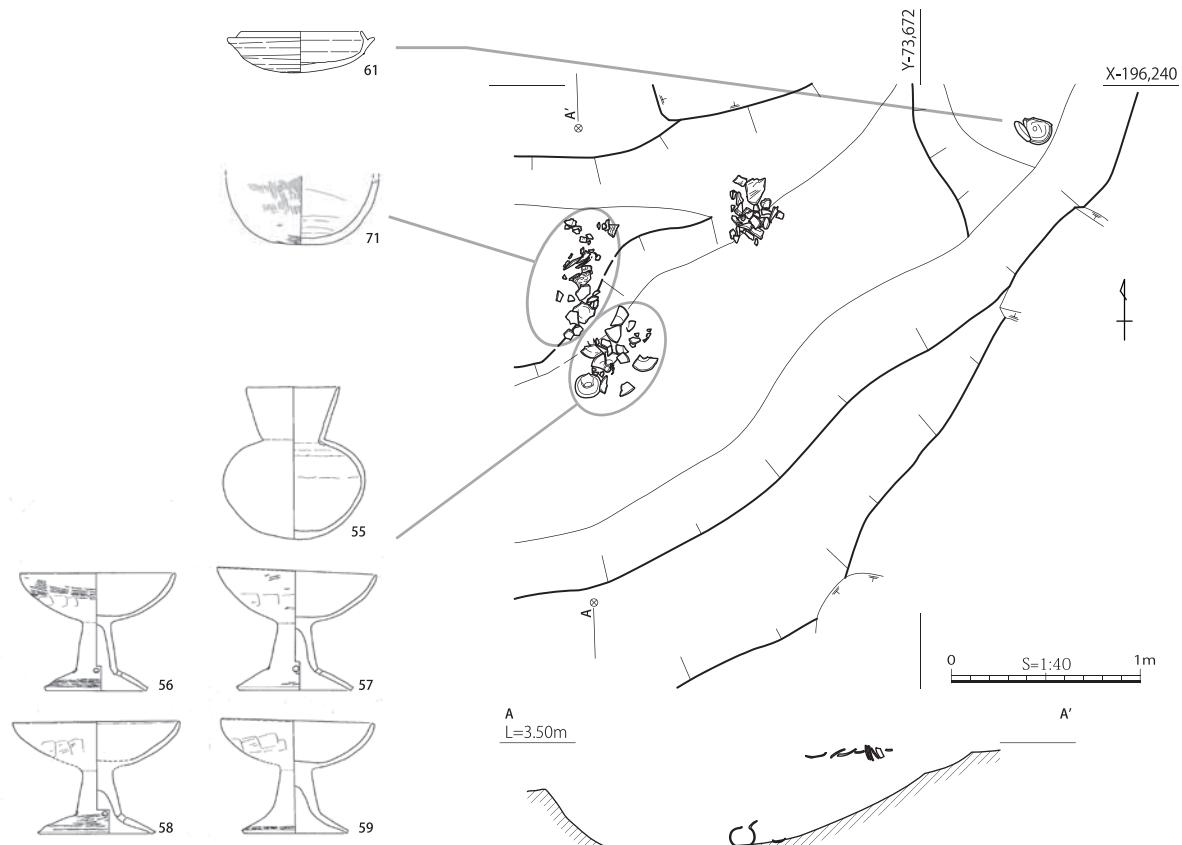


図 17 秋月 10 号墳 2 区 遺物出土状況図

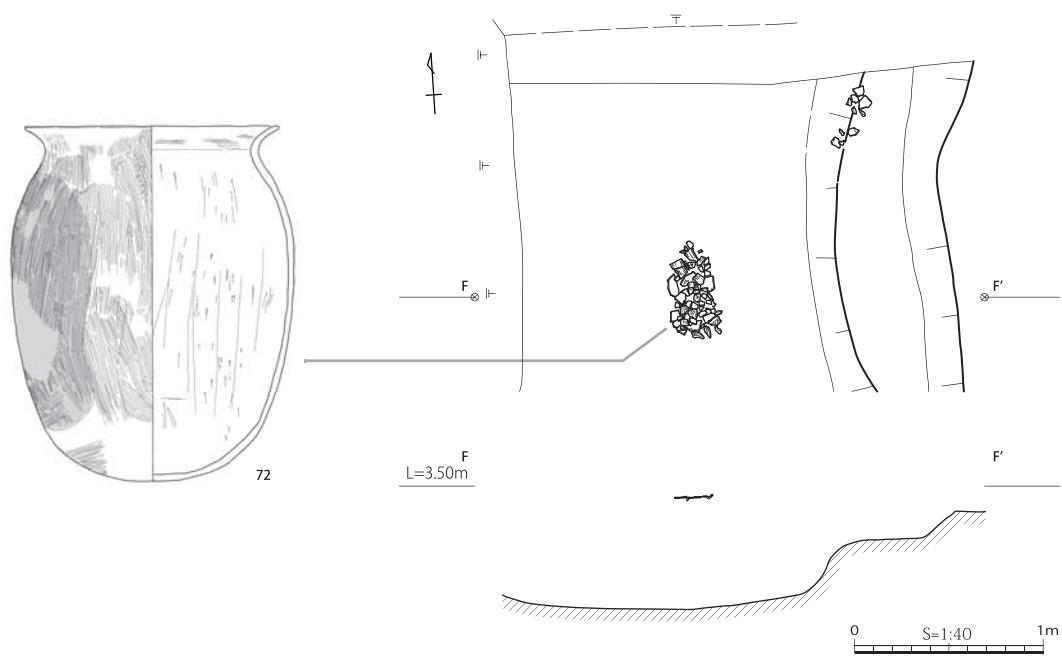
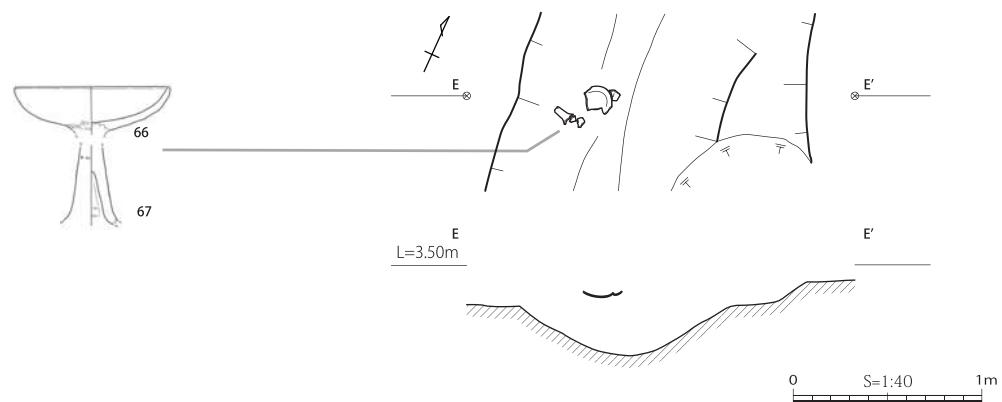
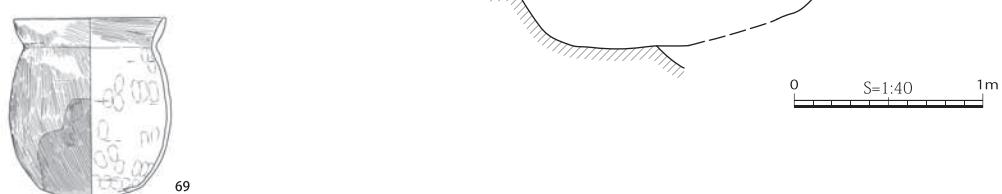
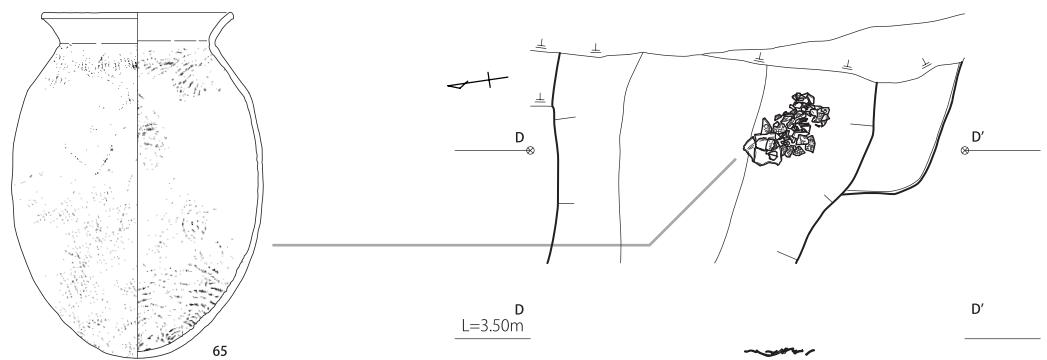


図 18 秋月 10 号墳 3・4 区 遺物出土状況図

検出面からの深さ 0.3 ~ 0.6 m の円墳である（図 16）。9号墳より一回り小さい。周溝の埋土は、大きく 3 層にわかれ、下層は古墳築造時からの 1 次堆積、中層は 2 次堆積、上層は後世の堆積とした。また東側の最上層には後世の溝が重複する。遺物の取り上げに際し、周溝半周分を北東から時計回りに 1 ~ 4 区に区分した。

1 区からは最上層から土器の細片が出土したのみである。後述する 2 区と同様に、いずれも後世に供献された土器と考えられる。

南東の 2 区（図 17）では、周溝底面から完形の土師器直口壺（55）・高坏（56 ~ 59）が、いずれも口縁を上にした正位で出土した。出土状況から、古墳築造当初に供献された土器である可能性が高い。これらの遺物から、古墳築造時期は 5 世紀後半と考えられ、9号墳より先行する。また同地点の上層から 6 世紀後葉の須恵器坏身（61）、土師器甕（71）が出土しており、後世に供献された土器と考えられる。

南西の 3 区（図 18 上・中）では、上層から後世に供献された土器のみが出土した。土師器甕（65・69）、高坏（66・67）で、いずれも 2 区と同時期と考えられる。

北西の 4 区（図 18 下）でも、3 区と同様に上層から後世に供献された土師器甕（72）のみが出土した。

以上から、10号墳は 9号墳より先行して築造され、後に 9号墳に供献され始めた後に 10号墳にも供献が行われたと推測できる。

秋月 11号墳（202 周溝）（図 19）

11号墳は、9号墳の南西に位置し、西半分は調査区外となる。墳丘規模は直径約 10 m、周溝幅 1.0 m、検出面からの深さ 0.4 m の円墳で、10号墳よりやや小型である。出土遺物は少なく残存状況が良いものはないが、出土土器を総合すると 10号墳より先行すると考えられる。また 10号墳

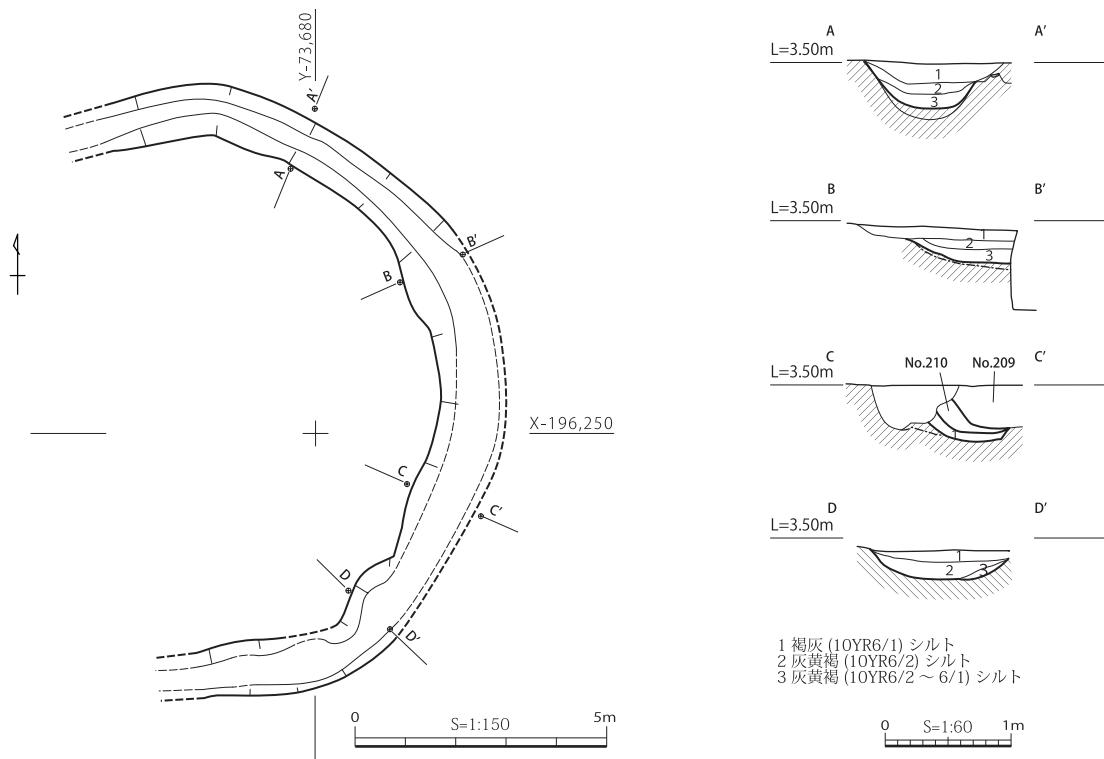


図 19 秋月 11号墳 平面図・断面図

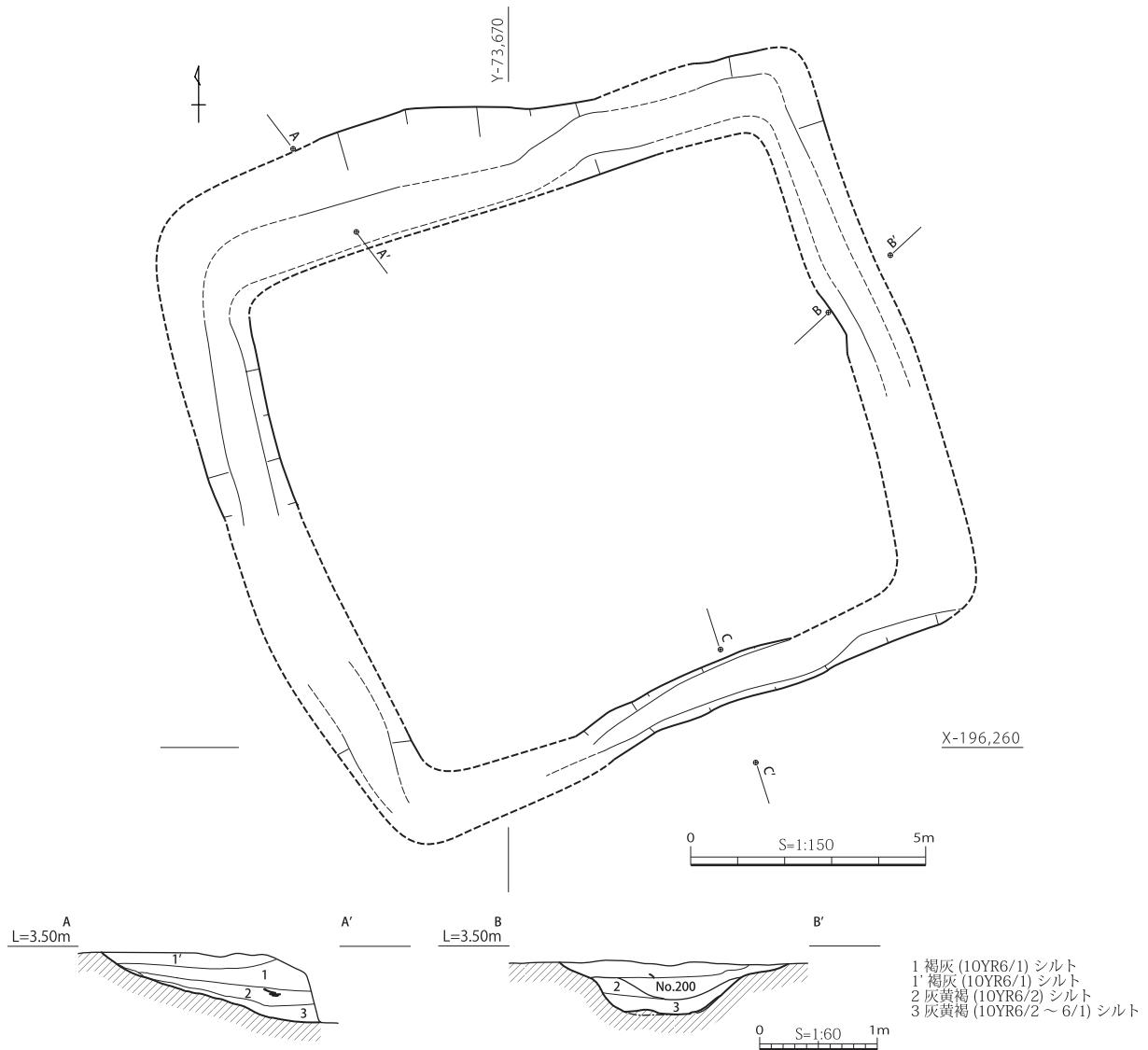


図 20 秋月 12 号墳 平面図・断面図

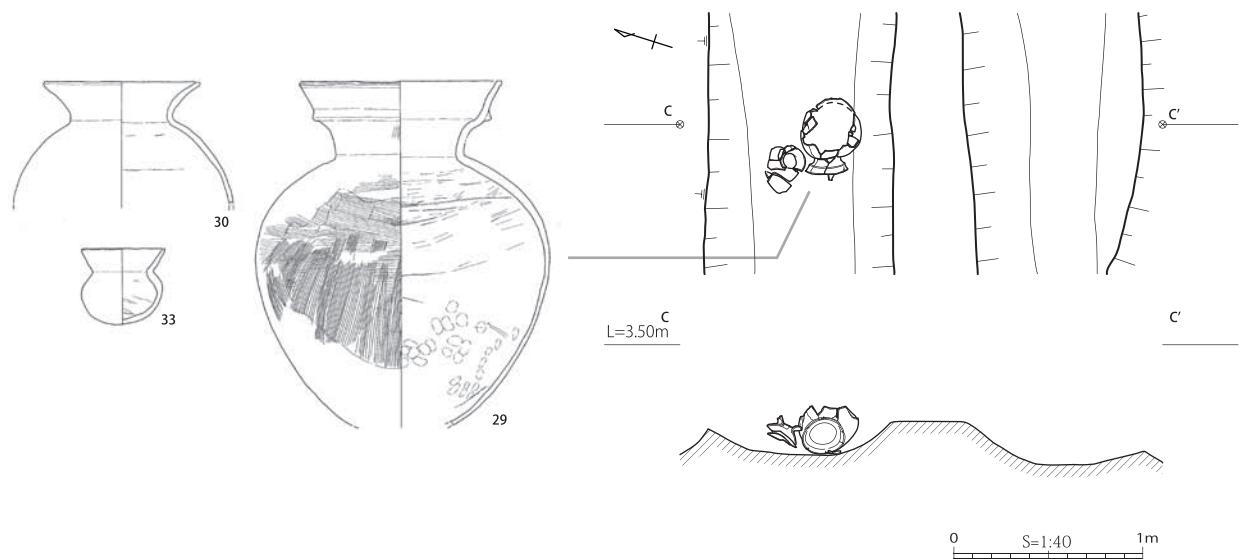


図 21 秋月 12 号墳 遺物出土状況図

および 12 号墳では、墳丘南側の周溝内に古墳築造時の供献土器が配置されており、11 号墳にも同様の状況を想定できるが、墳丘の西半が調査区外にかかるため確認できない。

今次調査の円墳の築造順を総合すると、11 号墳、10 号墳、9 号墳という順となり、時期が下るにつれ大型化する傾向がある。

秋月 12 号墳（203 周溝）（図 20・21）

12 号墳は方墳であり、墳丘規模は一辺約 12 m、周溝は幅 1.5 m、検出面からの深さ 0.5 m である。中央部は校舎基礎の搅乱により破壊されており、また主体部は削平されて残存しない。北東には 9 号墳の周溝が重複する。南半は中世以降の土地改変を受け、遺構面が削平されている。

墳丘南側の周溝中央の底面から、土師器二重口縁壺（29）、広口壺（30・33）が出土した。二重口縁壺（29）は胴部中央が欠損しているが、これは後世の削平時のものである。これらは古墳築造時の供献土器と考えられ、古墳時代前期後半に位置付けることができる。

12 号墳は、今次調査で発見された古墳のなかでは最古相である。今次調査区の南西に位置する県Ⅱ次調査時の秋月 1 号墳（前方後円墳）とそれに隣接する方墳群に次ぐものと考えられる。そして 12 号墳の後、県Ⅴ・Ⅵ次調査時の方墳群が築造され、その後、今次調査の円墳 3 基 11 号墳、10 号墳、9 号墳へと移行していくと想定できる。

＜その他の遺構＞（図 22）

205 溝

12 号墳（203 周溝）の南に隣接する東西方向の溝。時期が判明する出土遺物はないが、検出状況から 203 周溝と前後する時期と考えたい。205 溝が 203 周溝と同様に古墳の周溝であるとすると、12 号墳の南に方墳が隣接する可能性がある。205 溝の延長には、中世の 002 大溝が重複するため、全容は不明である。

210 溝

調査区北西部で、11 号墳周溝の東側に重複する南北方向の溝である。東方向に緩く屈曲するが、古墳の周溝となる可能性は低い。須恵器坏蓋（212）が出土し、6 世紀初頭と位置づけられる。

232 土坑

調査区北西部に位置する長方形の浅い土坑。土師器細片が出土した。

307 土坑

307 土坑は調査区北側中央に位置し、9 号墳墳丘上に立地する長方形の土坑である。前述の 232 土坑と同様に、検出状況から 9 号墳に先行する遺構と考えている。長辺 2.0 m、短辺 0.6 m、検出面からの深さ 0.1 m で、東端からまとまって玉類（図 95-1～31）が出土した。土坑の形状や出土遺物からみて、土壙墓の可能性がある。出土した玉類は、滑石製勾玉 8 点、滑石製臼玉 15 点、滑石製棗玉 1 点、緑色片岩製管玉 6 点、ガラス小玉青色 4 点、ガラス製小玉赤色 2 点である。玉類の様相は、古墳時代中期の可能性があり、土坑の検出状況とも矛盾しない。

238・239・243・245・246 柱穴

9 号墳墳丘上での柱穴列であり、238・239・243 柱穴は南北に並ぶ。建物あるいは塀となる可能性がある。堀方は方形もしくは長方形で一辺 0.7～1.0 m であり、径 15c m の柱痕跡を検出した。奈良時代の掘立柱建物 1 と並行するが、柱穴の規模・埋土の様相が異なるため、掘立柱建物 1 と同時期とは考えがたい。時期が判明する出土遺物はないが、検出状況から古墳時代の可能性がある。245・246 柱穴は東西に並び、238 柱穴等と同時期かそれ以後の可能性がある。

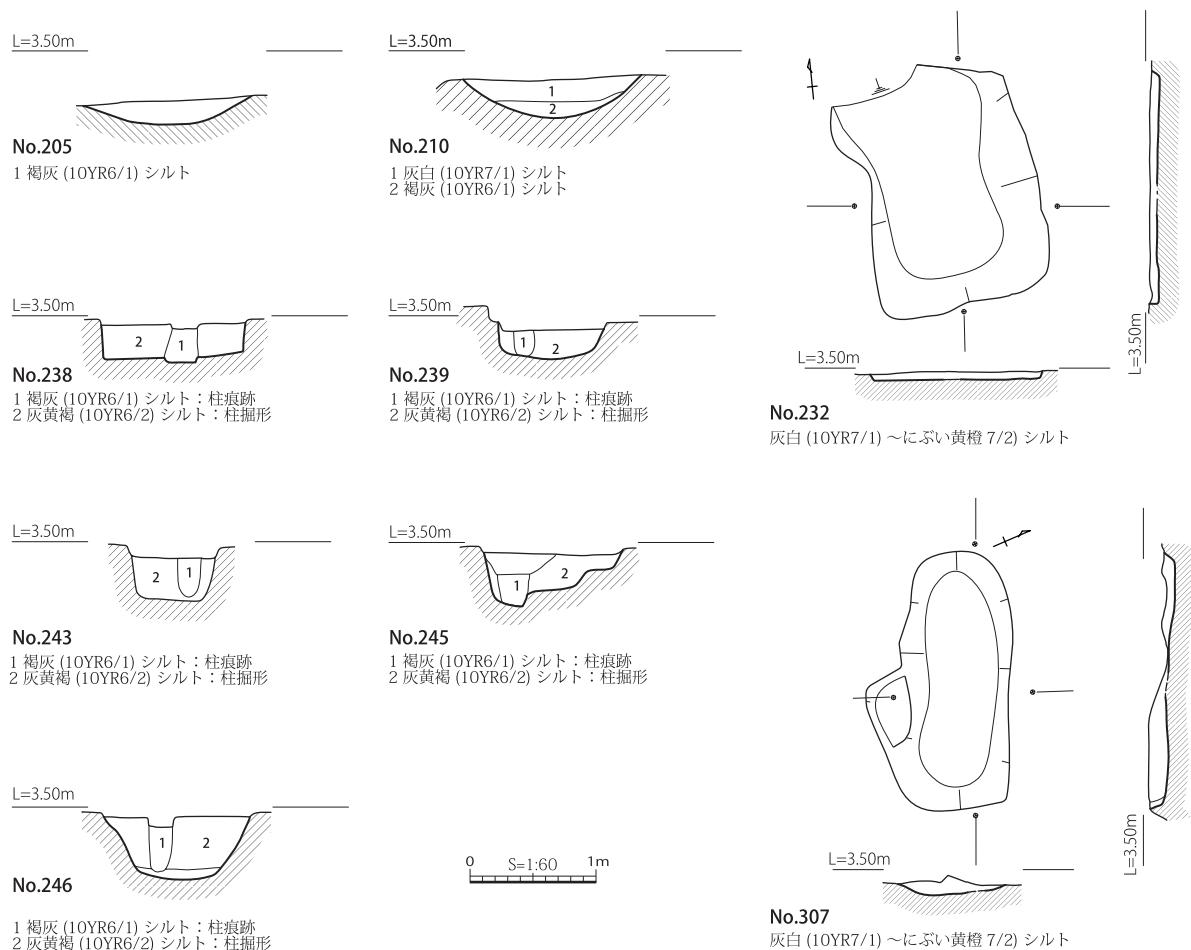
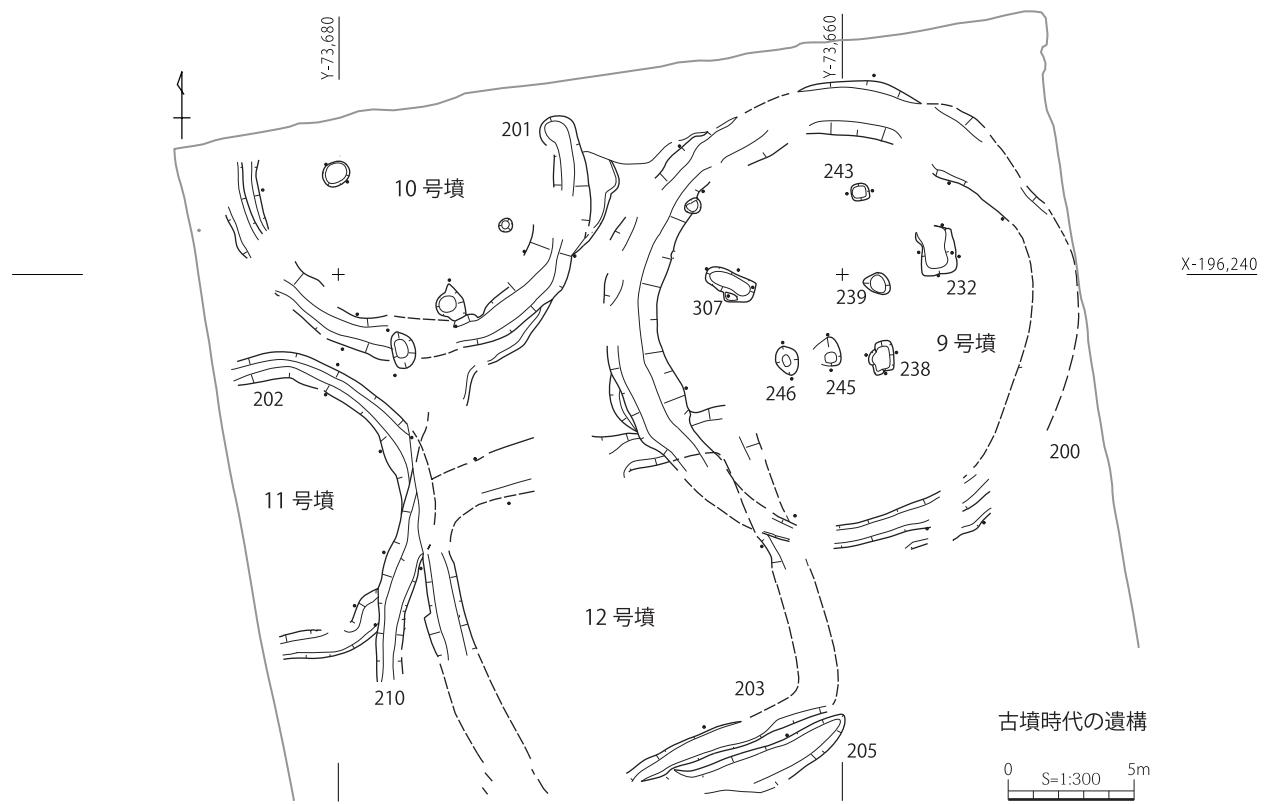


図 22 古墳時代中期～後期の遺構 平面図・断面図

2. 古代の遺構（飛鳥時代～平安時代中期の遺構）

7世紀中頃の土坑1基があり、包含層等から7世紀台の遺物が少量出土している。7世紀後半から奈良時代の8世紀前半にかけて、掘立柱建物3棟、南北溝3条、土坑4基がある。平安時代前半の9世紀台は土坑1基があるほか、遺構・遺物とも少ない。

調査地の東側には現日前宮があり、文献資料などから少なくとも奈良時代には同所に存在していた可能性が高い。また秋月遺跡の北西に隣接する太田・黒田遺跡は、古代の名草郡衙に推定さ

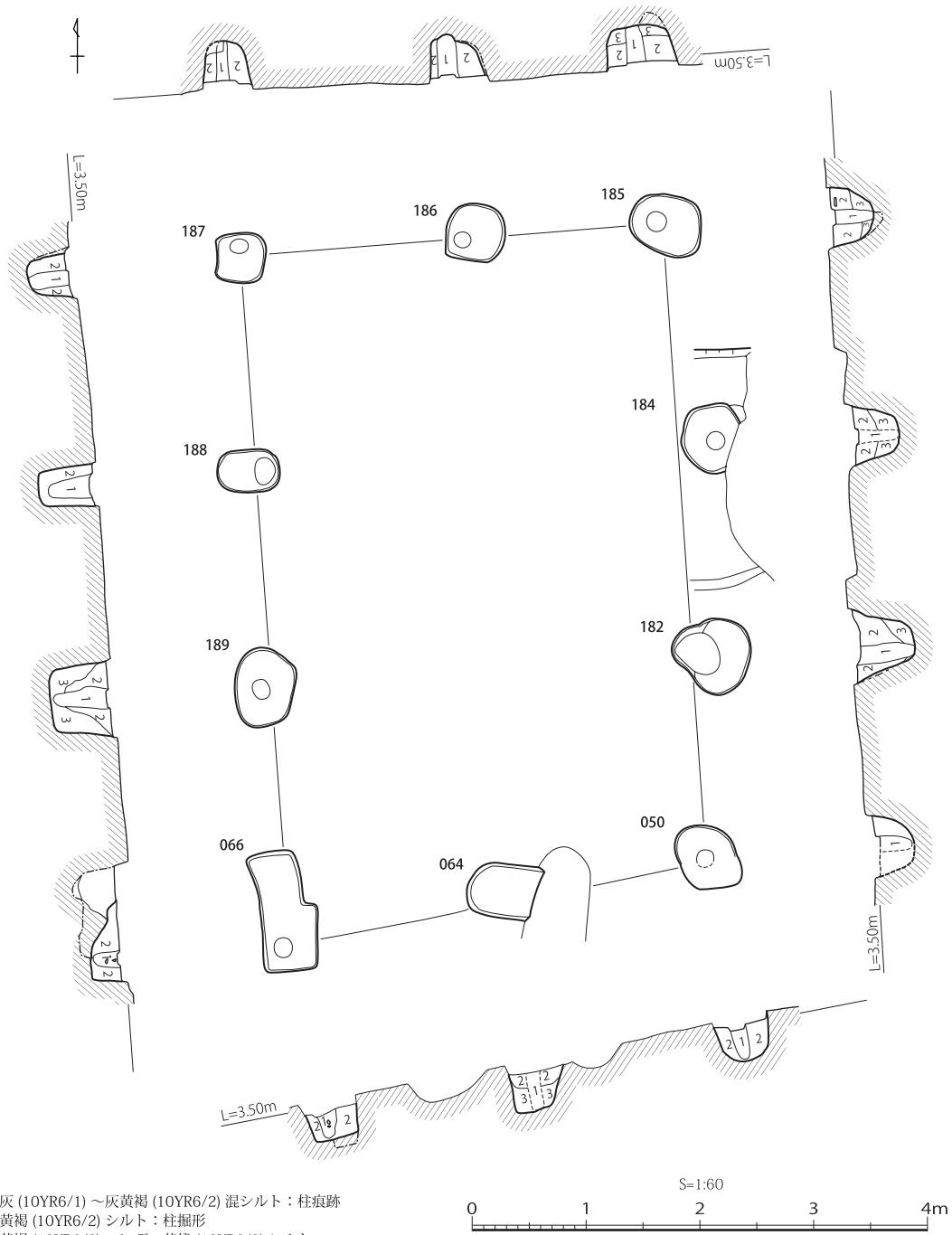


図 23 掘立柱建物 1 平面図・断面図

れている。今次調査で検出された奈良時代の建物、溝、土坑等の遺構は、暗紋土師器などの畿内系の遺物がみられ、古代の日前宮や郡衙などの周縁の施設として捉えることができる。

＜掘立柱建物＞

掘立柱建物 1 (図 23)

調査区北東に位置し、梁間 2 間 (3.6 m)、桁行 3 間 (5.4 m) の南北棟である。建物主軸は座標北で西に約 5° 振れる。北東から時計回りに、185・184・182・050・064・066・189・188・187・186 柱穴で構成される。南西隅の 066 柱穴のみ軸からずれる。柱堀方は一辺 0.5 m の方形、検出面からの深さ 0.5 m で、径 15cm の柱痕跡が残る。柱穴から 7 世紀後半の土器が出土した。後述する掘立柱建物 2・3、033 溝、100 土坑等と一連の遺構とすると、建物の存続時期としては 7 世紀から 8 世紀初めにかけての時期程度と考えたい。

掘立柱建物 2 (図 24)

掘立柱建物 2 は、調査区のほぼ中央に位置する。梁間 2 間 (3.8 m)、桁行 1 間分 (1.5 m～) を検出した。南側は校舎基礎の搅乱にかかるため桁行は不明である。おそらく掘立柱建物 1 と同様に、2 × 3 間程度の南北棟であろう。建物主軸は座標北にほぼ等しい。柱堀方は一辺 0.6 m の方形、検出面からの深さ 0.5 m で、径 15cm の柱痕跡が残る。

掘立柱建物 3 (図 25)

掘立柱建物 3 は建物 2 の北に位置する。搅乱がかかるため柱穴は揃わないが、梁間 2 間 (3.8 m)、桁行 3 間 (5.6 m) の南北棟である。建物主軸は座標北で西に約 4° 振れる。柱堀方は径 0.4～0.5 m の不整隅丸方形、検出面からの深さ約 0.5 m で、部分的に柱痕跡が残る。

＜奈良時代の溝・土坑＞

033 溝 (図 27)

掘立柱建物 1 の東側に位置する南北方向の溝。幅 0.7～0.8m、検出面からの深さ 0.4～0.7 m で、南側が深くなる。暗紋土師器を含む 7 世紀後半から 8 世紀前半の土器が出土した。掘立柱建物群が立地する空間の東端を画する区画溝と考えられる。調査地の東側に存在する日前宮の社地を意識した区画と思われる。

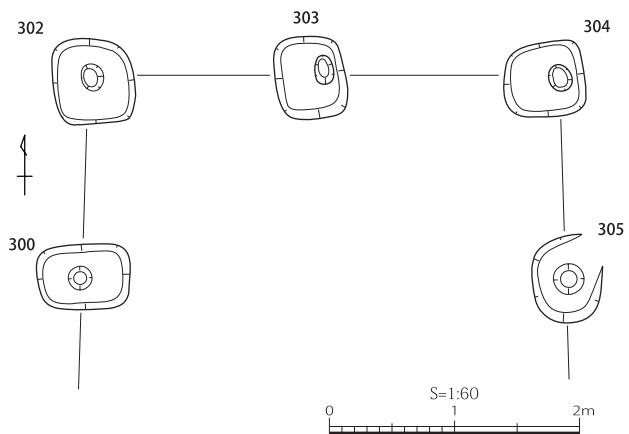


図 24 掘立柱建物 2 平面図

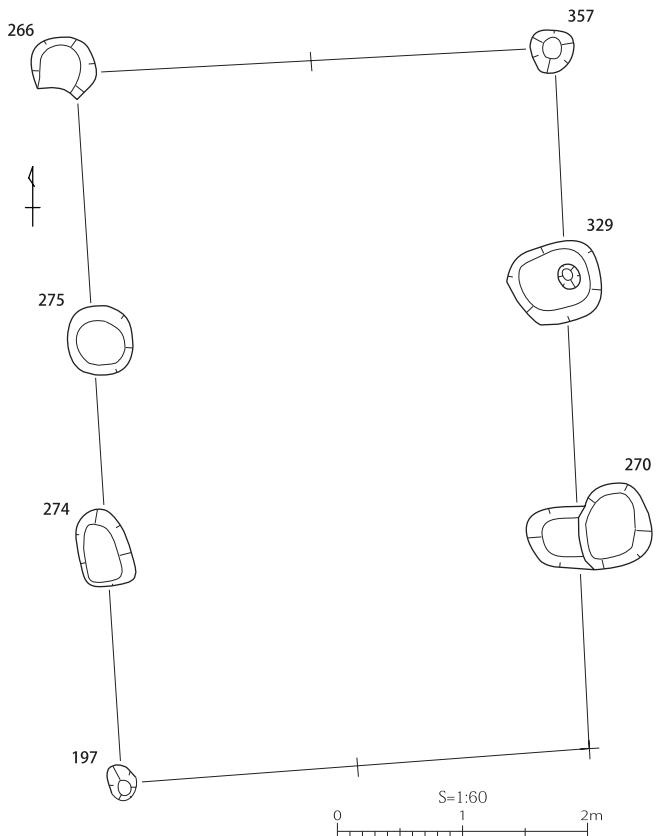


図 25 掘立柱建物 3 平面図

034 溝 (図 27)

033 溝の西側に並行する南北方向の浅い溝。幅 0.7 m、検出面からの深さ 0.1 m。出土遺物が少ないが、033 溝と前後する時期と考えられる。掘立柱建物 1 と近接するため、建物廃絶後に掘削された溝である可能性が高い。

040 溝 (図 27)

033 溝の西側に隣接する。南北方向の浅い溝が 2 条重複し、各幅 0.5 m、検出面からの深さ 0.1 m。そのうち 1 条は西側に屈折して 034 溝につながる可能性があるが、搅乱にかかるため不明。034 とほぼ同時期と考えられる。

100 土坑 (図 27)

100 土坑は長径 2 m 以上、検出面からの深さ 0.5 m のやや大型の土坑。埋土は炭化物を含む。暗紋土師器を含む土器片が多く出土した。出土遺物 (273 ~ 291) は、須恵器杯身・坏蓋・鉢・甕、土師器杯身・坏蓋・鉢・甕であり、8 世紀前半と位置づけられる。後述する 194・209 土坑と同様に、掘立柱建物の廃絶にともなう廃棄土坑の可能性がある。

194 土坑 (図 27)

搅乱にかかるため全容は不明だが、残存する最大径 1.2 m、検出面からの深さ 0.1 m の浅い土坑である。搅乱を挟んで対向する 209 土坑につながる可能性もある。出土遺物の内容もほぼ同時期である。

209 土坑 (図 27)

194 土坑と同じく校舎基礎の搅乱にかかるため全容は不明。平面形が不整橢円形の大型の土坑で、残存する長さ 6.0 m、幅 3.5 m、検出面からの深さ 0.2 m である。100 土坑と同じく、埋土には炭化物を含む。出土遺物 (225 ~ 245) は、須恵器杯身・坏蓋・鉢・甕、土師器杯身・坏蓋・鉢・甕であり、7 世紀から 8 世紀前半にわたる。100 土坑と同じく、畿内系暗紋土師器を含む。194・209 土坑とも、出土遺物から前述の掘立柱建物 1 ~ 3、033・034・040 溝と一連の遺構群とみな

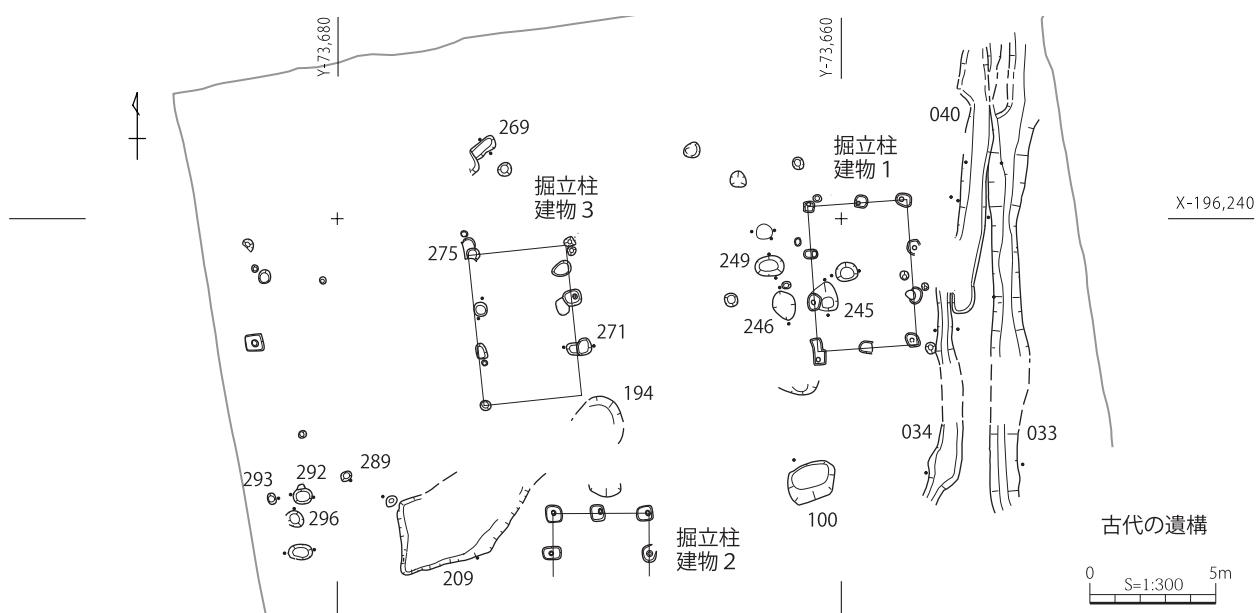


図 26 古代の遺構 (北半) 遺構図

される。209・194 土坑は、建物 2 および建物 3 と近接するため、建物と並存したとは考えにくい。建物建造前あるいは廃棄後の整地にともなう廃棄土坑である可能性がある。

123 土坑 (図 28)

径 50cm、検出面からの深さ 7cm の浅い土坑で、中央に黒色土器 (301) 1 点が正位で配置されていた。遺構面は削平されていた可能性があるが、本来の土坑の規模もそれほど深いものとは考えられず、土器を埋納するための土坑と考えられる。出土遺物から平安時代後期と位置づけられる。

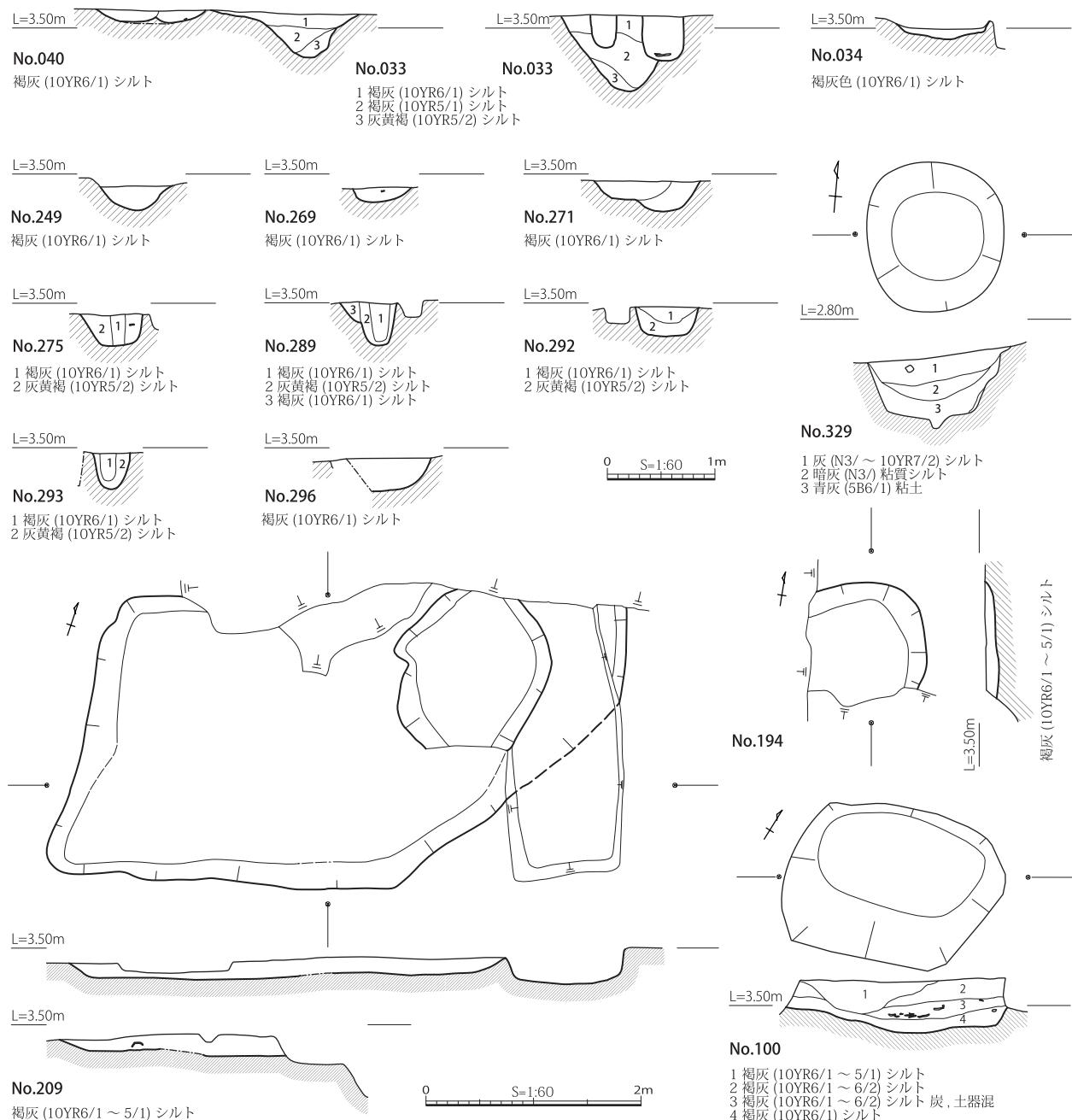


図 27 古代の遺構 (北半) 平面図・断面図

257 土坑 (図 28)

掘立柱建物 1 の西側に位置する。長径 1.4 m、短径 1.2 m の橢円形で、検出面からの深さ 0.3 m の土坑である。7 世紀中頃の須恵器壺 (306・307) の破片、完形に近い土師器甕 (308) が出土した。掘立柱建物に先行する時期の遺構と考えられる。

329 土坑 (図 27)

調査区南半で中世の 001 大土坑の底面で検出した。径 1.2 m、検出面からの深さ 0.6 m である。上層は腐食質を含む黒褐色粘質シルト、下層はグライ層化した青灰色粘土である。透水層には達していないが、雨水あるいは滲みだした地下水を溜める程度の使用が考えられる。上層下半から平安時代前期の土師器壺 (313・314) 2 点が、口縁部を合わせた状態で出土し、意図的に埋納したものと考えられる。

353 土坑 (図 28)

329 土坑と同じく、001 大土坑の底面で検出した。径 0.8 m、検出面からの深さ 0.5 m である。上層は灰色粘質シルト、中央部のみ深くなり、下層はややグライ層化した灰色粘土となる。7 世紀後半から 8 世紀の土師器甕 (317)・把手付鍋 (318) が出土した。把手付鍋 (318) は搅乱のため上半を欠損するが、埋納時には完形であった可能性が高い。

329・353 土坑と同様に、調査区南半の 001 大土坑の底面および周辺からは、001 大土坑より以前の時期の土坑が複数検出された。検出面からの深さが 0.5 m 以上ある土坑が多く、透水層には達していないが、水溜め等の機能が考えられる。こうした土坑の存在から、001 大土坑の周辺は元々、谷状の低地であったと想定できる。遺物の出土状況から、353 土坑の形成後、上面が削平され 001 土坑が掘削されたと考えられる。

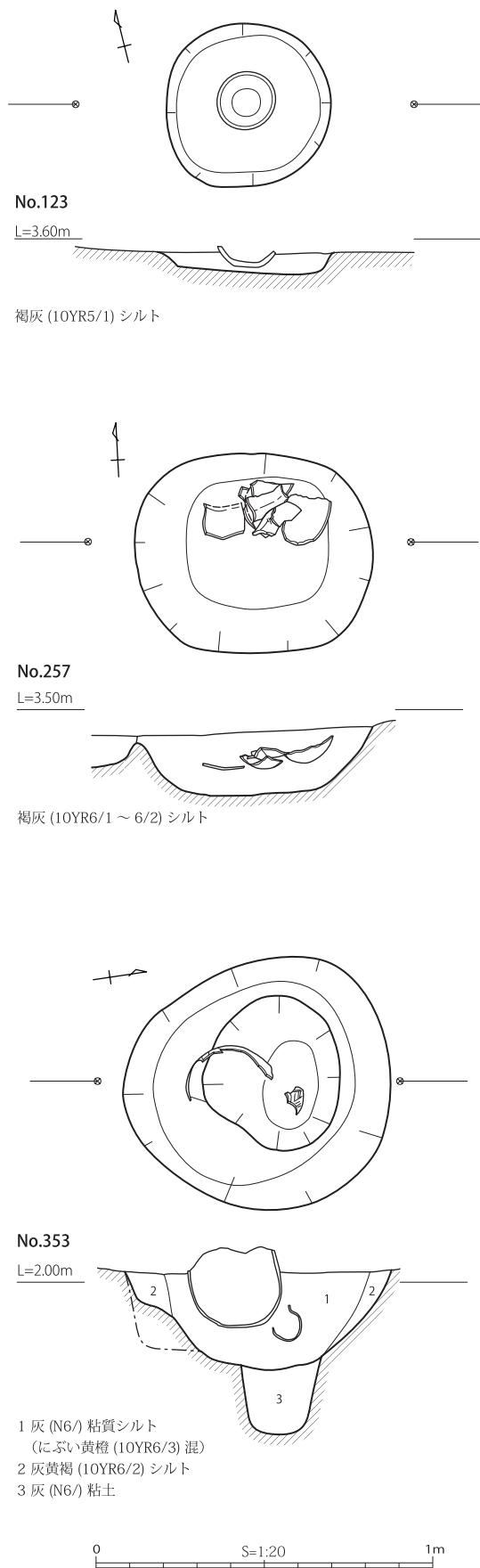


図 28 古代の遺構 遺物出土状況図

3. 中世の遺構（平安時代後期～安土桃山時代の遺構）

平安後期から鎌倉時代では、調査区中央で井戸 1 基と、その南側で土師器小皿が一括廃棄された土坑 1 基を検出した。調査区南半には井戸状の土坑 5 基がある。また包含層等から当該期の軒丸・軒平瓦が数点出土している。

室町時代では、全域にわたって遺構が展開し、また包含層等から同時期の瓦が大量に出土した。調査区北半には、瓦組井戸 1 基、土坑（瓦溜まり）と掘立柱建物の可能性がある柱穴群等がある。南半には、谷状の大土坑、東西方向の大溝、大溝と並行する東西溝、瓦溜まり等がある。これらの遺構は瓦が多量に出土したことから貞福寺に関わる可能性があるが、伽藍や寺域に直接関わる遺構は検出していない。

＜平安時代末期～鎌倉時代の遺構＞

085 井戸（図 29）

080 井戸は、一辺 2.4 m の方形の堀方で一辺 1.0 m の方形の井戸側痕跡が残る。井戸側材は抜き取られほとんど残存しないが、痕跡から縦板組横桟の木製井戸側と推定できる。堀方埋土は褐灰色細砂と黄褐色シルトが混じり、井戸側内埋土は黒褐色シルトで下層は暗灰色粘質土である。井戸堀方および井戸側内下層から瓦器椀、土師器小皿等が出土し、それにより形成時期は 12 世紀代と考えられる。井戸底は検出面から約 3 m 下（標高 0.8 m）の暗褐色粘土層上面に達する。この暗褐色粘土層上面は、砂層で透水層となる。井戸最下層からは井戸側木材の断片が出土し、特に隅木の一部は原位置に近い位置から出土した。ほかに遺物は少なく、廃棄にともなう祭祀行為等は特に認められなかった。

090 土坑（図 30）

調査区ほぼ中央で、085 井戸の南に位置し、奈良時代の掘立柱建物 2 の柱穴に重複する。長径 1.2 m、短径 1.0 m、検出面からの深さ 0.1 m の深い土坑である。土師器小皿が約 80 枚出土した。小皿は径 18cm の大型品と径 9 cm の小型品がある。土器を一括して廃棄した

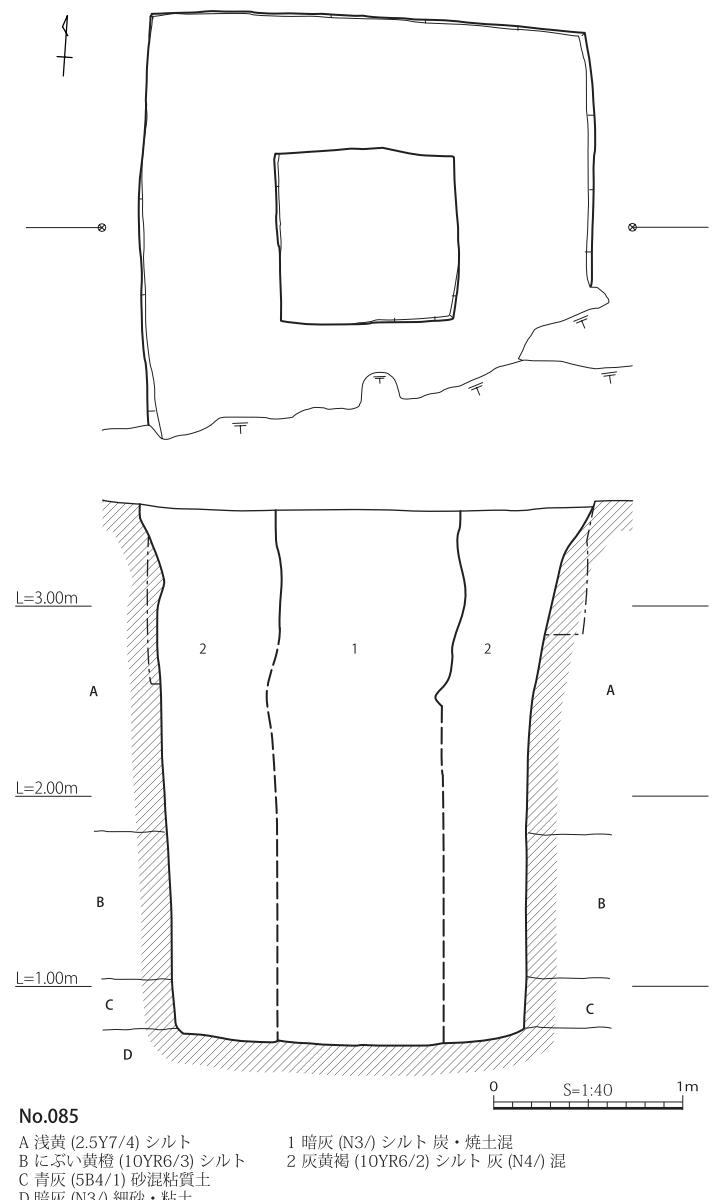


図 29 085 井戸 平面図・断面図

土坑と考えられる。

165 ピット

調査区北西部の柱穴群の一つで、土師器小皿が出土した。

328 井戸

調査区南半の 001 大土坑底面で検出した井戸状の土坑。径 1.5 m、深さ 1.0 m で瓦器、土師器の破片が混じる。

341 土坑

調査区南半の 001 大土坑南肩で検出した土坑。341 土坑は径 0.7 m、深さ 0.6 m で、下層から完形の瓦器碗 1 点が出土した。

〈室町時代の遺構〉

075 井戸（図 31）

075 井戸は、調査区中央北端で古墳 1 周溝に重複する。平瓦を平積みして井戸側とする珍しい形態で、県内では他に橋本

市利生護国寺遺跡 2 例があるのみである。井戸側の最上部には完形の軒丸瓦 1 点があり、またその下に軒平瓦数点が混じり、いずれも瓦当面を内側に向ける。また平瓦を主体として構築されるが、結晶片岩板石も混在する。堀方は長径 1.2 m の不整円形、井戸側は内径 0.5 m のほぼ円形で、検出面からの深さ 1 m まで瓦を使用するが、下半は結晶片岩の割合が多くなる。上半が瓦積みで下半が石積みという構造は、利生護国寺例とも共通し、外観を意識したものと思われる。その下は、長さ 1 m の木製の結桶を二段重ねて井戸側としている。結桶は幅 8 cm の板材を円形に並べ、外面の 2 箇所をタガで束ねて結合する。結桶の上層からは、須恵器甕の口縁が出土した。井戸の位置が古墳 1 周溝と重複することから、古墳 1 に由来する遺物と判断できるが、井戸形成時に出土した古墳の遺物を意図的に井戸内に配置した可能性もある。前述の 085 井戸と同じく、井戸底は検出面から 3.1 m 下（標高 0.6 m）の暗灰色粘土層上面に達する。この暗褐色粘土層上面は、砂層で透水層となる。最下層からは遺物はほとんど出土していない。また井戸の廃棄にともなう祭祀行為等も特に認められなかった。築造時期は、井戸堀方から出土した瓦器片や、井戸側に使用された軒瓦から、室町時代と考えられる。

093 土坑（図 33）

調査区北端に位置する土坑で、瓦片が多く出土した。整地の際などに瓦を廃棄した土坑と考えられる。075 井戸とほぼ同時期と考えられる。

調査区北西の柱穴

調査区北半の西側で、掘立柱建物の可能性がある柱穴 50 基余りを検出した。径 20 m 程度、深さ 20 ~ 40 cm で根石（礎石）があるものを含む。複数の建物が重複すると考えられる。

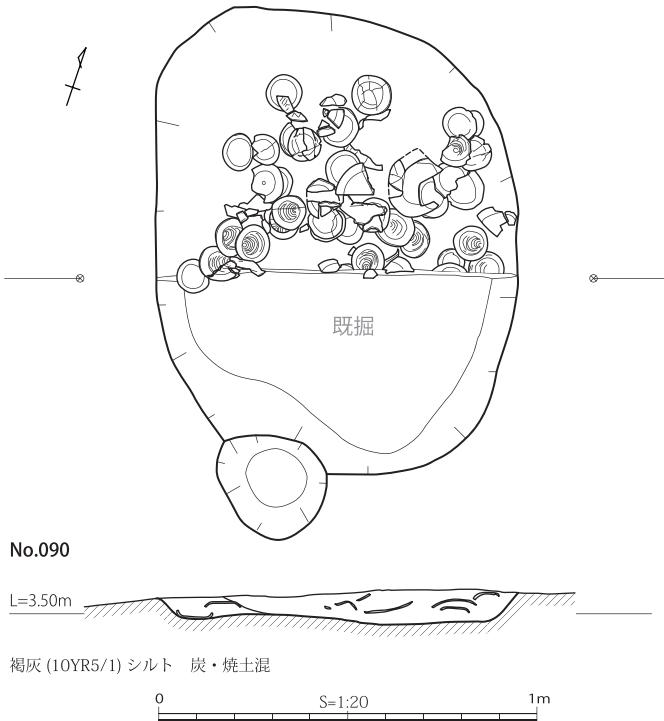


図 30 090 土坑 平面図・断面図

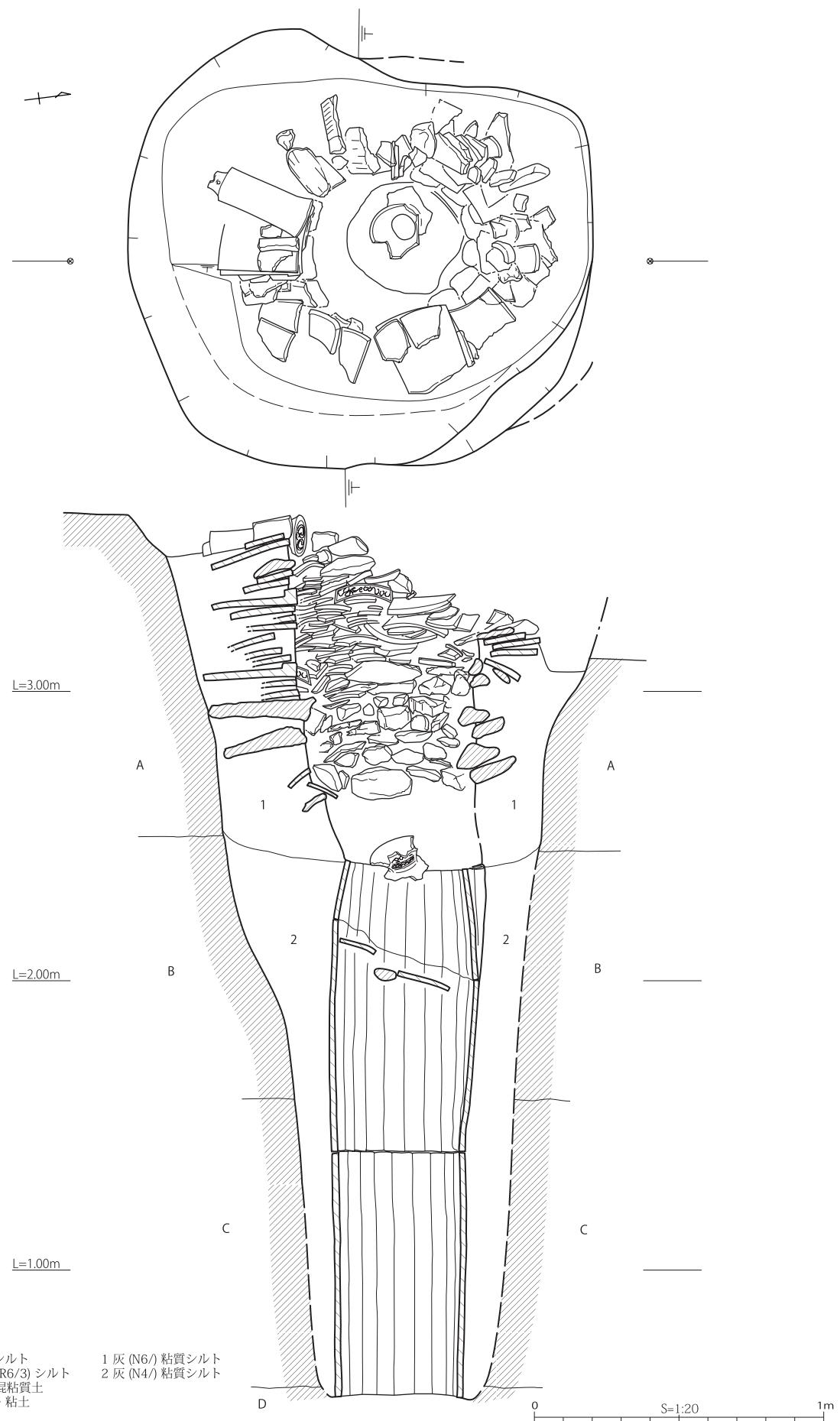


図31 075 井戸 平面図・断面図

001 大土坑 (図 34)

001 大土坑は、調査区南半の大部分を占める池状の遺構で、東西 25 m 以上、南北 18 m、検出面からの深さは 0.6 m である。平面形は不整形で、西側は幅を狭めて調査区外に延び、西側を除く三方はすり鉢状に浅くなる。北側縁辺は 002 大溝の掘削時に破壊されている。埋土は褐灰色中砂～細砂で上層と下層にわかれ、下層には粘質土が混じる。一時的に溜水した可能性はあるが、長期間にわたる形跡は見られない。また下層上面には部分的に整地とみられる黄褐色粘質土層が混じる。上層からは大量の瓦とほかに瓦器片が出土し、下層からは瓦と残存状況のよい瓦器碗・小皿が出土した。上層と下層の出土遺物に時期差は認められず、水成堆積ともみなされないことから、短期間で人為的に埋め戻した可能性がある。埋土は土坑底面の形状に沿ってすり鉢状に堆積するが、上面は削平され耕地化したと考えられる。その上に近世の遺物を含む耕作土が厚さ約 0.6 m で 4 層にわたって堆積する。

出土遺物は、瓦器、土師器、瓦などがある。軒丸瓦は蓮弁文と巴文があり、軒平瓦は点珠文と唐草文がある。遺物の時期は鎌倉時代から室町時代に及ぶ。

001 大土坑に関連する遺構としては、底面に 342 溝状土坑、344 溝がある。ほかに 001 大土坑の底面には 001 大土坑の形成前後に掘削されたと思われる井戸状の土坑 (341・352) がある。また 001 大土坑底面には前代の遺構として、329・353 土坑がある。前述の中世の土坑 238・341 と同じく、検出面からの深さが 0.5 m 以上ある土坑で、水溜め等の機能が考えられる。こうした土坑の存在から、001 大土坑の周辺は元々、谷状の微低地であったと想定できる。しかし 001 大土坑の形状は自然地形とは考えにくく、人為的に掘削されたと考える。329 土坑の遺物出土状況からは、001 大土坑形成時に遺構面が削平されたことが窺える。遺構の性格は明らかでないが、

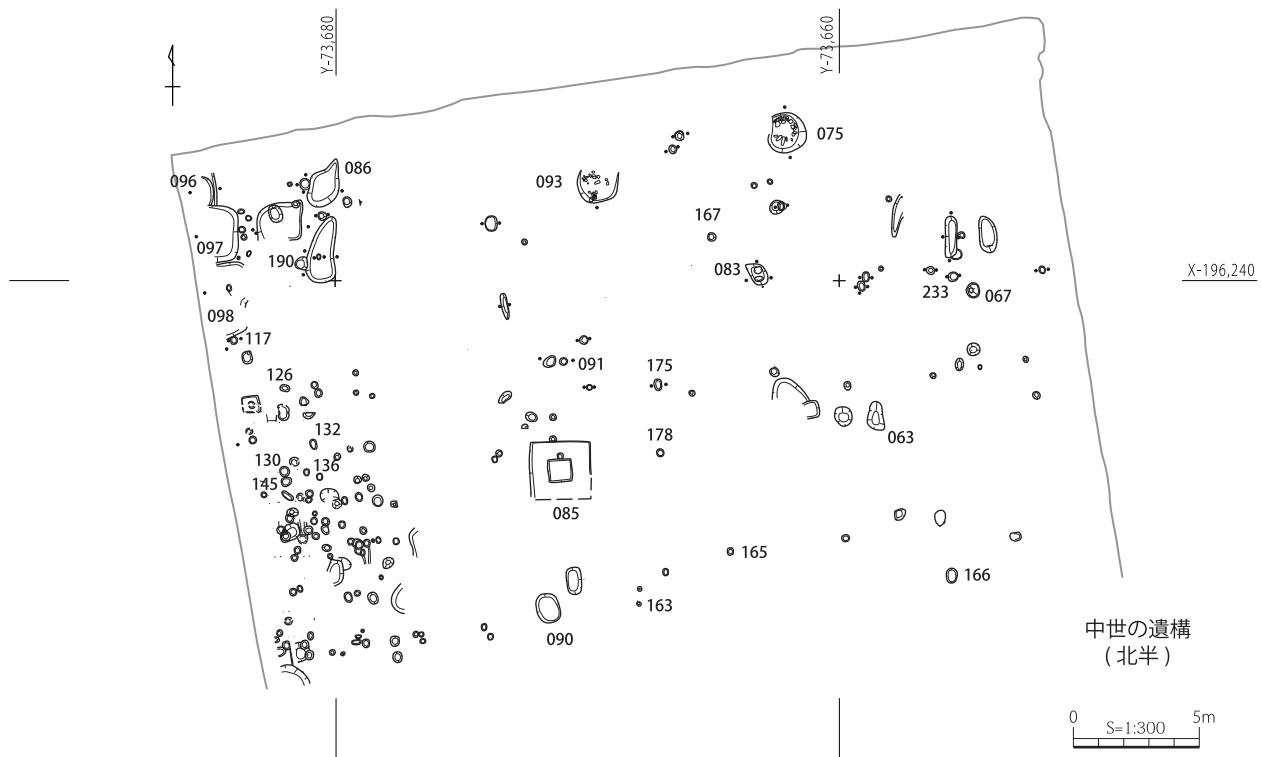


図 32 中世の遺構 (北半) 遺構図

周辺の整地に伴うものと考えられる。001 大土坑はその後埋め立て整地され、002・003 溝が掘削される。いずれにしても、大規模な土木工事であったと思われ、貞福寺を含む日前宮の全体的な整備にともなうものであろう。

002 大溝 (図 34)

002 溝は、調査区の中央を東西に横断する大溝で、幅 4～5 m、検出面からの深さ 0.9 m である。第 3 層直下で検出し、001 大土坑の北辺に重複する。上層は褐灰色シルト、下層は灰色粘質土、最下層は約 10cm の厚さで青灰色粘土が堆積する。埋土には全体的に 001 と同様に瓦、瓦器が多く混じるが、上層は唐津、古瀬戸等の陶器を含み後世に埋め立てられた整地層とみられる。出土遺物から室町時代前期に 001 大土坑が埋め立てられ、ほぼ同時期に 002 大溝が掘削されて比較的短期間で廃棄され、上層まで完全に埋没するのは 16 世紀代と考えられる。

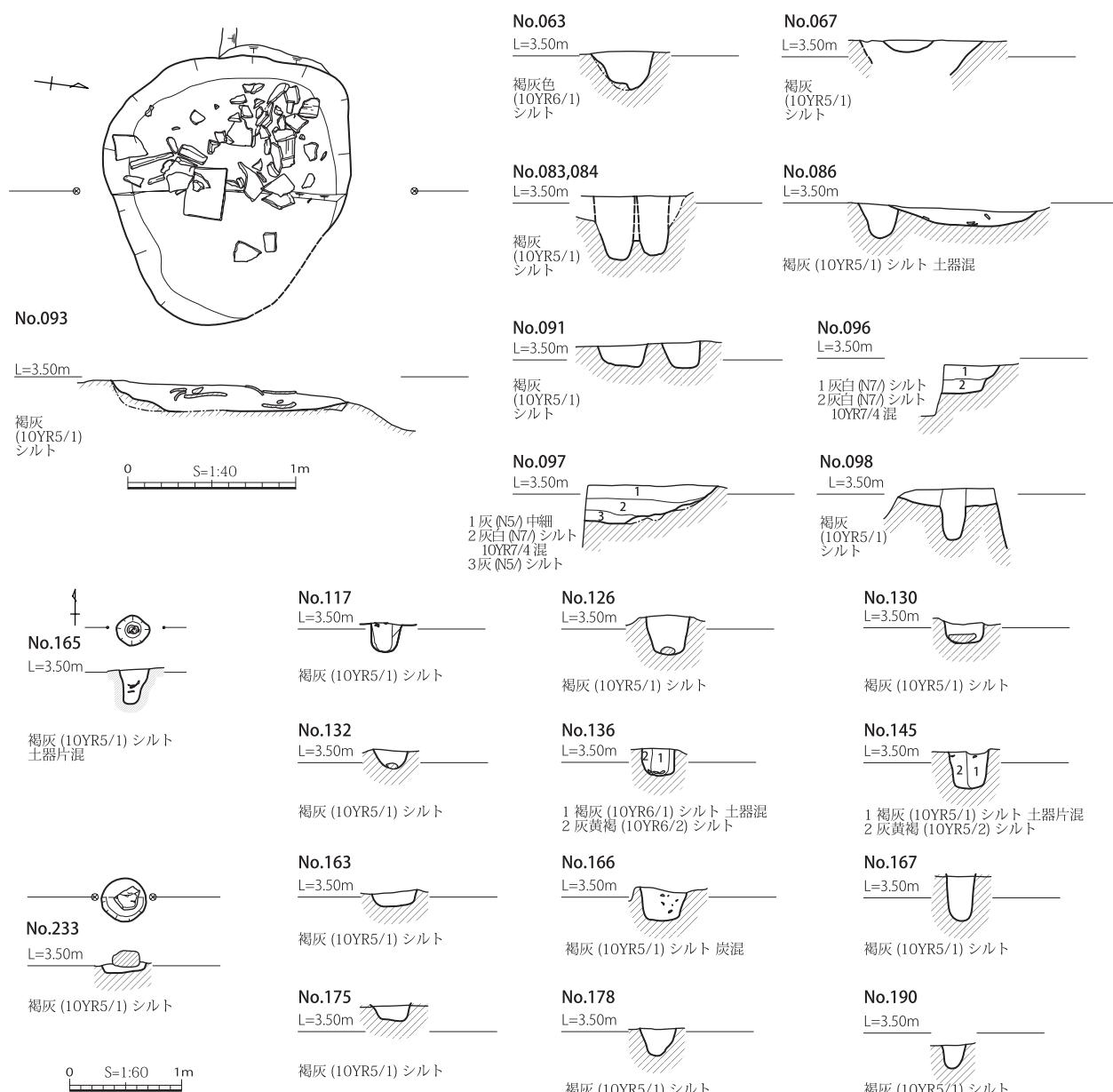


図 33 中世の遺構 (北半) 平面図・断面図

日前宮をはさんで東側の和歌山市9次調査でも、002溝と同時期、同規模の大溝SD12が検出されている。SD12もほぼ座標軸の東西に平行する配置であり、002溝の延長上に一致するため、現日前宮社地を横断する形で中世の大溝が存在した可能性が高い。西側のSD12と東側の002溝では、溝底面のレベルに約10cmの比高差があり、西流する用水路等の可能性を挙げることができる。しかし流水堆積は長期間にわたるものではないため、比較的短期間で廃棄された可能性がある。

002溝の西側の延長は、約30m西に位置するVI次調査区北端にあたるが、遺構は検出されていない。このため、今次調査とVI次調査の間で南に曲がる可能性がある。ちょうどその地点に、明治19年仮製二万分の一地形図には現向陽高校敷地の中央を南北に縦断する小道が記載されている。この小道は原地形に沿ったものと考えられ、002溝がここから南流する傍証ともいえるが、直接的な確証に欠ける。

003 大溝（図34）

003溝は、002溝の約5m南に並行する溝で、幅約2m、検出面からの深さ0.6mである。001大土坑が埋没した後、その上面から掘削される。溝の深さは001大土坑底面の地山部分まで達する。溝の断面形は浅いU字状で、中央部分のみ楔形に深くなる。南肩には畦状の盛土が隣接し、溝掘削時に排出土を盛り上げたと考えられる。003溝は検出状況から002溝と同時に成立した可能性が高いが、出土遺物からみると埋没したのは002溝より早い。並行する2条の溝の間が道路であった可能性もあるが、路面の整地等は認められなかった。003溝からは、瓦、瓦器、土師器、轆羽口、鉄滓等が出土した。特に鍛冶関連遺物の出土は、調査地周辺に日前宮あるいは貞福寺に属する鍛冶工人が存在した可能性を示す。

004 土坑（図34）

004瓦溜まりは001大土坑の東に位置する土坑で、東側は後世の建物基礎により破壊されて残らないが調査区外まで延びる可能性がある。南北13m以上、検出面からの深さ0.4mである。検出面は第3層直下で、001大土坑が埋め立てられた時期とほぼ同時と考えられる。埋土は青灰色粘質土で、大量の瓦片が混じる。001大土坑と004瓦溜まりの間は幅約3mの高まりとなって残り、南北方向の通路であった可能性もある。また004土坑は、この高まり部分をはさんで024土坑と対向する。

024 土坑（図35）

前述の004土坑の西側に位置する。001大土坑が埋め立てられた上面から形成される。004土坑と同様に大量の瓦片が出土した。東西3.0m、南北1.2m、検出面からの深さ0.4mである。

342 溝状土坑（図35）

342長方形土坑は、001大土坑の西側に位置する南北約6mの長大な土坑である。北端から完形の瓦器椀1点が出土した。土坑の大きさからみて土壙墓とは考えられない。001大土坑の幅が狭まる地点に立地するため、001大土坑と関係する遺構の可能性がある。

344 溝（図35）

344溝は、001大土坑底の南側を巡り、342溝状土坑の南端の脇を通り、西側は調査区外まで延びる。深さ0.1mの浅い溝で、埋土は褐灰色細砂で流水痕跡とみられる。通水を目的とした人為的な溝であるかは明らかでない。

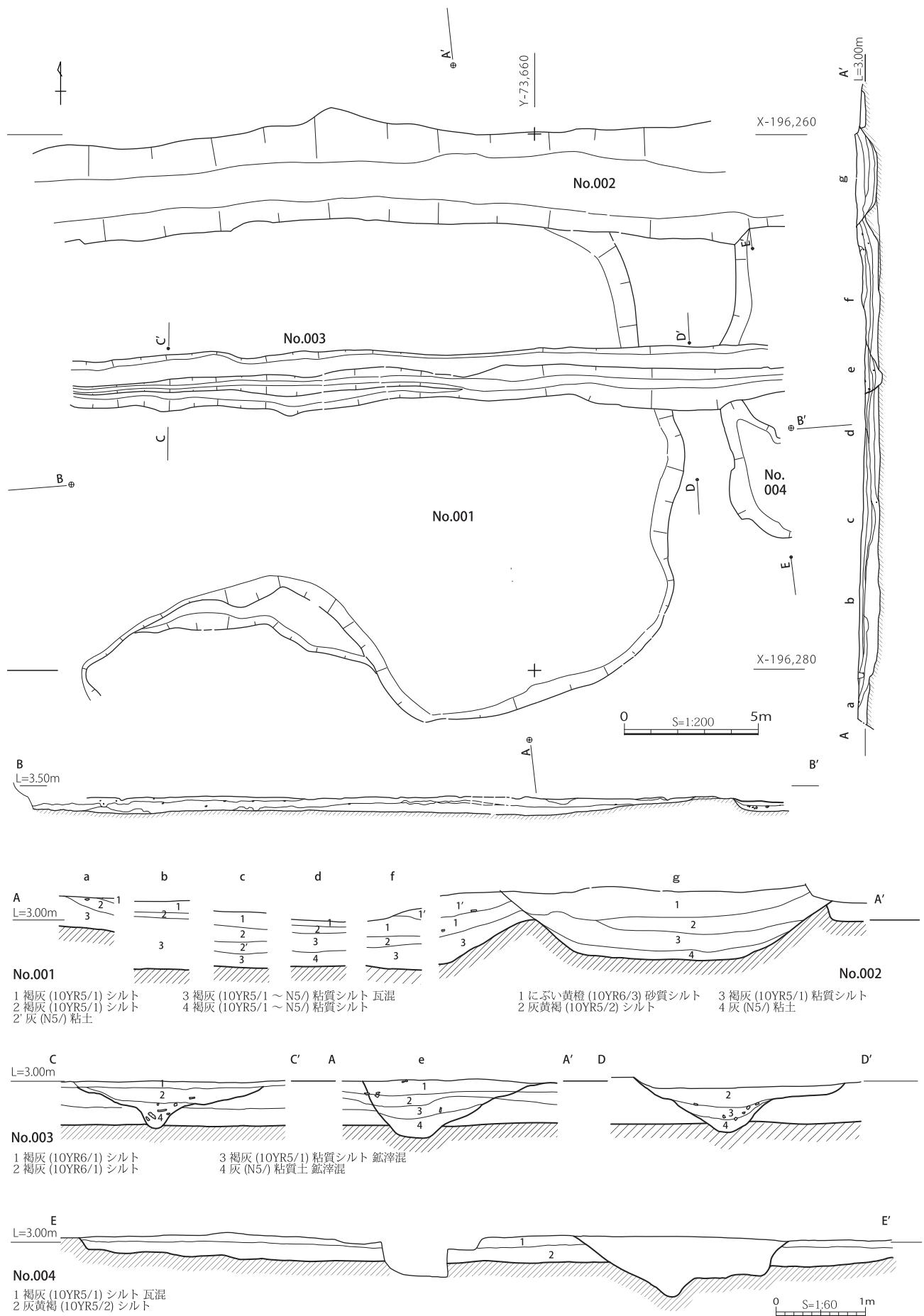


図34 中世の遺構（南半） 平面図・断面図

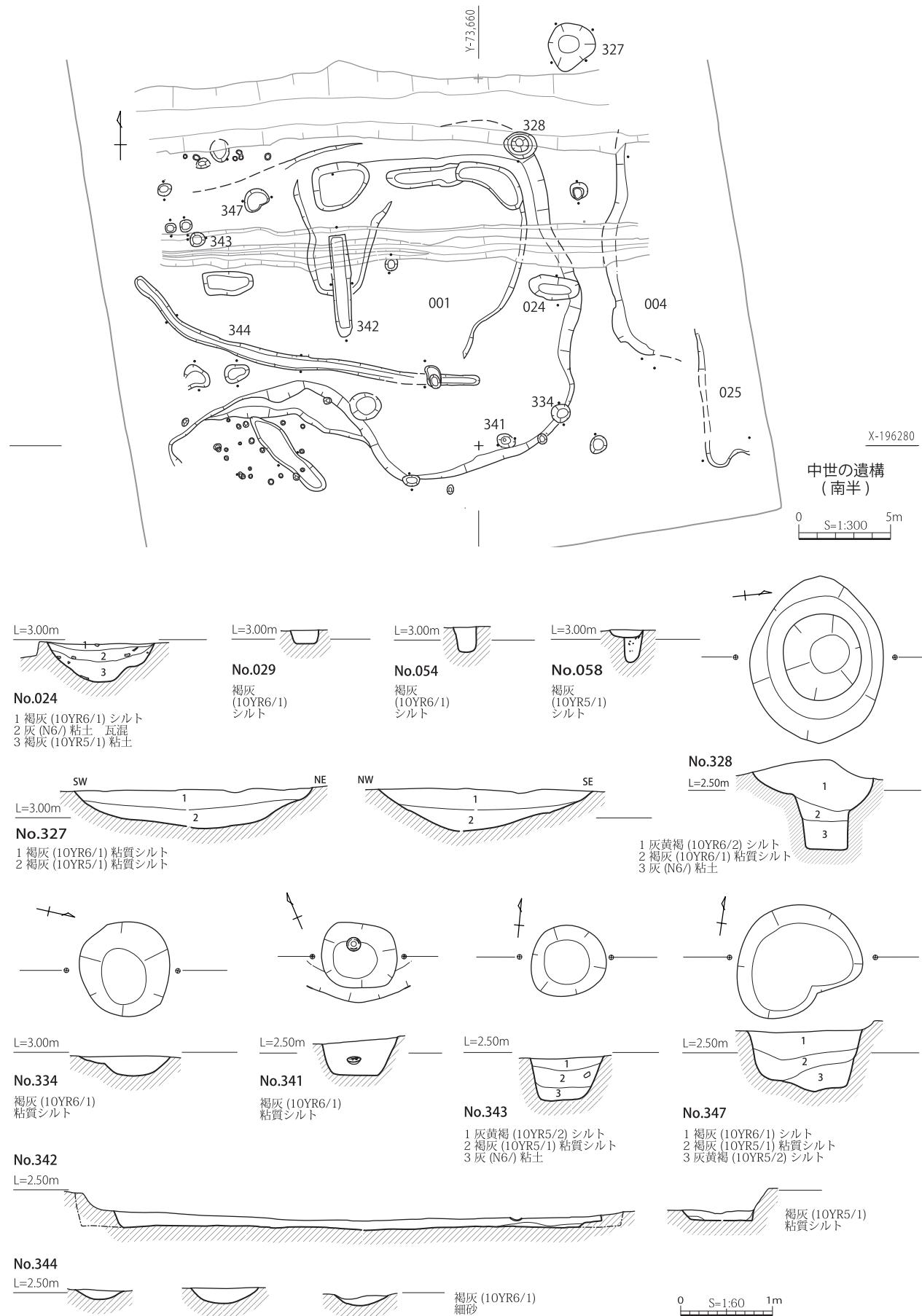


図 35 中世の遺構 (南半) 平面図・断面図

4. 近世・近現代の遺構 (図36)

＜江戸時代の遺構＞

調査区北半の第3層上面で、東西方向および南北方向の鋤溝と井戸4基がある。北半の中央に東西方向の通路状の高まりがあり、その南に東西方向の鋤溝数条がある。さらにその南側に南北方向の鋤溝が展開する。いずれも座標軸に平行する配置であり、日前宮の南に展開する河南条里の地割とは異なる。また調査区南半は近世初頭以降の耕作土が厚く累積する。

＜近現代の遺構＞

明治37年に県立海草農林学校が開校する。明治19年仮製二万分の一地形図には、現向陽高校敷地の中央を南北に縦断する小道があり、農林学校の校舎配置図からみると、校地は現向陽高校の東半分にあたる。今次調査地は校舎中央にあたり、建物跡は残らないが近代の瓦や陶磁器が出土した。

大正4年に海草農林学校が廃校となり跡地に県立海草中学校が開校する。現向陽高校に南面する道路は当初約50m北にあり、大正14年に南面の旧道路地を取得して校地を拡張したという記録がある。このときに同時に日前宮の敷地も南側に拡張し、道路が南側に移動したとわかる。海草中学時代の校舎のうち、今次調査地は講堂と剣道場の位置にあたる。調査区南半では大正9年建設の講堂と思われる基礎跡が南北15m、東西24mの方形に検出された。また大正7年に武道場が建設された後、昭和11年に焼失し、翌年に剣道場が建設される。調査区北半には剣道場基礎跡と考えられる方形の堀方をもつ木製の支柱が東西方向に並ぶ。

昭和23年に戦後の学制改革で向陽高等学校となる。昭和27年に剣道場跡地に被服教室等が建設され、剣道場基礎跡に重複して教室基礎が東西方向に2列並ぶ。昭和33年教室焼失後に体育館に建替えられ、その基礎跡が調査区北半で検出された。昭和42年には講堂跡地に体育館兼講堂が新設され、調査区南半ではその基礎跡が大きな面積を占めている。

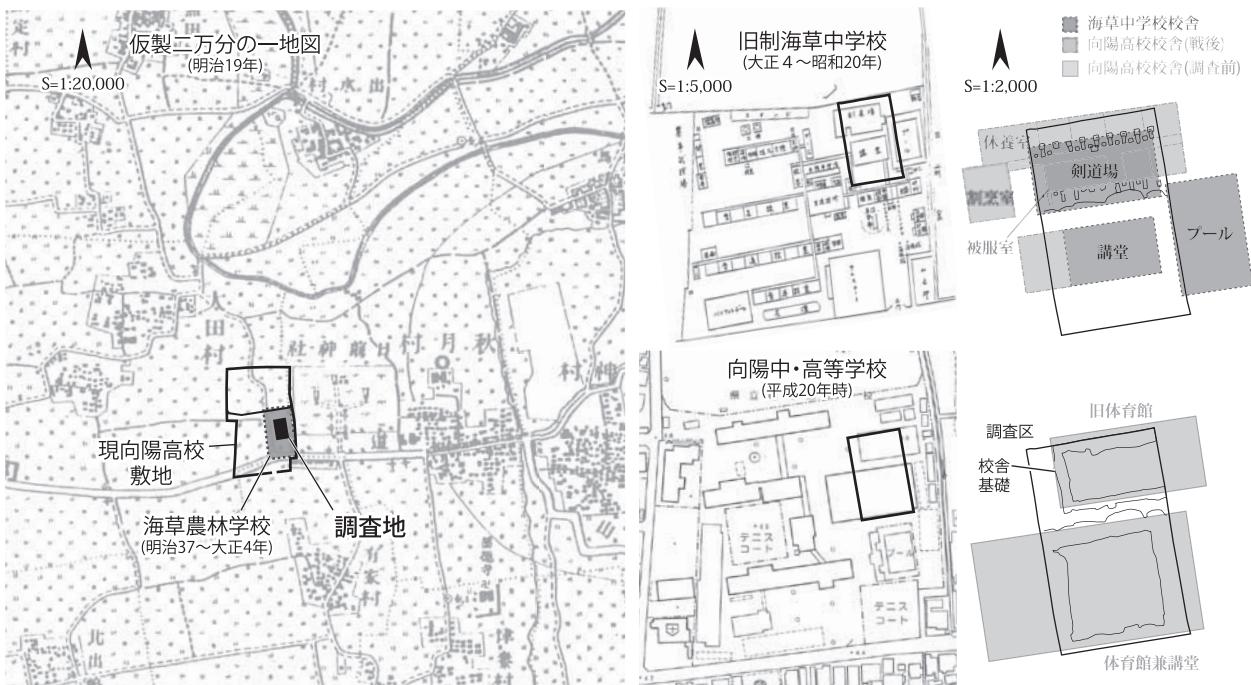


図36 近代・現代の建物跡

第3章 出土遺物

秋月遺跡では、土器・瓦が191箱分、石器・石製品が2箱分、木製品が6箱分（3箱と45本）、炉壁及び金属関連品が3箱分、土製品が5箱分、骨・玉類・種子・その他が計1箱分、合計207箱分の遺物が出土した。出土遺物は種類別、時代・遺構別にまとめて記述した。秋月9号墳周溝出土土器と貞福寺跡の瓦が主体を占めている。

第1節 土器

1. 包含層の形成年代を示す土器（図37）

包含層からは古墳時代の土器と中世の土器・瓦を中心に33箱分の遺物が出土しているが、ここでは、第3・4層の形成年代の参考になる資料のみを掲載する。なお、第2層は近現代、第5層は地山である。

第4層出土土器

1は須恵器壺。底部は平坦で、口縁部は斜め上方に開く。外面と底部に自然釉がかかる。2は土師器の蓋。天井部に摘みの剥離痕が残り、口縁部は丸くおさめる。3は畿内系土師器の壺。内面に放射状暗紋が施される。1～3は奈良時代の遺物である。

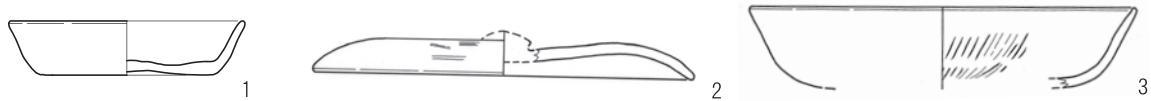
第3層出土土器

4～6は3-4層から出土した。4は灰釉陶器壺の底部。内面壁体部に灰釉がかかっており、高台の外面はほぼ垂直で、三角形を呈する。百代寺式段階の灰釉陶器と考えているが、最古段階の山茶碗とも考えられる。5は土師器皿。円板状の底部から、口縁部が直線的に立ち上がる。6は備前焼播鉢の口縁部片。口縁部の拡張・凹凸が発達しており、おろし目は少ない。

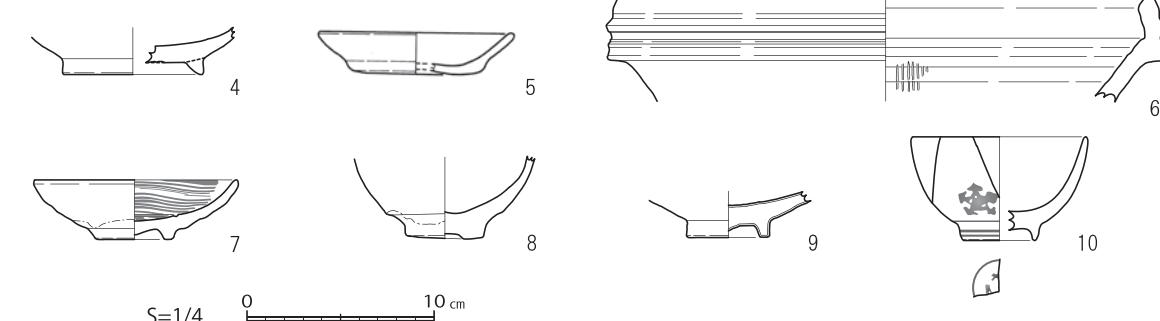
7～9は3-3層から出土した。7は肥前系陶器の刷毛目皿で、一部は3-2層の破片と接合した。見込みに4か所と高台には3か所の目跡がある。8は陶器碗で、赤い胎土の器の内外面に灰色釉をかけ、高台は不整形で露胎。9は陶器碗で、白い胎土の器の内外全面に灰色釉をかけている。10は3層掘削中に出土した肥前系磁器の染付碗。外面に五弁花紋を押す。

3-1～3-3層は江戸時代後期まで、3-4層は室町時代までの遺物が確認できる。

第4層（1～3）



第3層（4～10）



S=1/4

0 10 cm

図37 遺物包含層出土土器実測図

2. 弥生時代の土器 (図 38)

弥生土器は、後世の遺構から単独で出土した。

11 は弥生土器直口壺の口縁部片。口縁部は平坦で、外面に二条の凹線がまわる。表面は摩耗している。q 10 区画の近世攪乱坑から出土した。畿内第IV様式。12 は弥生土器壺類の底部片。表面は摩耗している。002 溝から出土した。

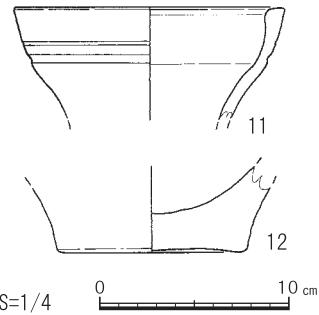


図 38 弥生時代の土器実測図

3. 古墳時代の土器 (図 39 ~ 54)

古墳時代前期の土器は秋月 12 号墳から少量、中期の土器は秋月 10 号墳から少量、後期の土器は秋月 9 号墳から大量に出土した。古墳周溝以外から出土した土器は微量である。

＜古墳時代前期の遺構から出土した土器＞ (図 39)

217 土坑出土土器

13・14 は弥生 V 様式系の土師器甕。13 は口縁部片で、14 は底部片である。

268 ピット出土土器

15 はミニチュア土器の底部と考えられる。平底で、外面はナデられている。

354 土坑出土土器

16 は高坏脚部片。ミガキ調整を施す。

355 土坑出土土器

17 は弥生 V 様式系の甕底部。ドーナツ底になっている。

＜後世の遺構・包含層から出土した古墳時代前期の土器＞ (図 39)

18・19 は垂下口縁壺の口縁部。20 は二重口縁壺。21～23 は塊形高坏、24～28 は弥生 V 様式系の土師器甕。24 は口縁部がやや厚く内湾する。25 はドーナツ底、28 は底部に孔を穿つ。

庄内式期の土器が比較的多く、布留式期の土器はごくわずかである。

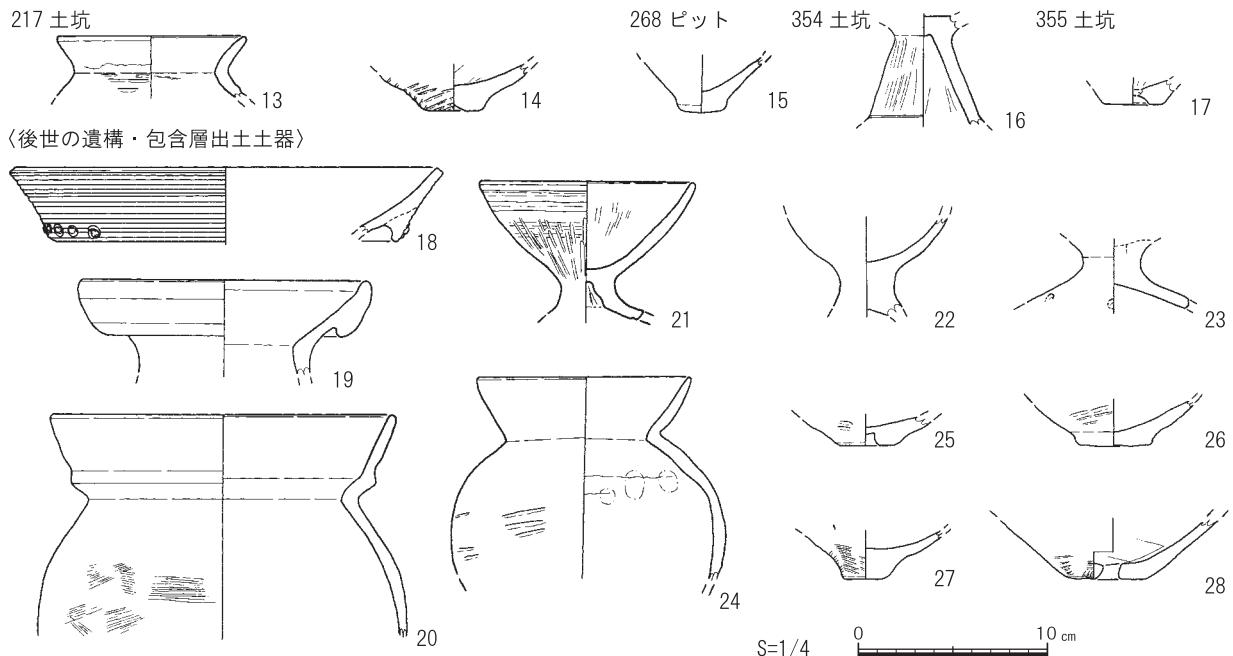


図 39 古墳時代前期の土器実測図

〈古墳の周溝から出土した土器〉

秋月 12 号墳周溝 (=古墳 4 (203 周溝)) 出土土器 (図 40)

203 周溝からは、コンテナ 2 箱分の土師器が出土した。

29 は土師器二重口縁壺。口縁屈曲部上方に粘土紐を貼り付ける。外面はハケ、内面上半はケズリ調整、下半には指頭圧痕が観察できる。30～32 は土師器広口壺。31 は口縁下部に貼り付けた粘土紐の上に、竹管で押した円形浮紋を貼り付ける。32 は口縁部の内外面に櫛描波状紋を施す。33・34 は小型丸底土器。厚手で粗い作りをしている。35 は平底の壺類底部。

36～41 は土師器高坏。36～39 は短脚の塊形高坏。40 は棒状の脚部、41 は円錐形の脚部である。36・40 は縦方向ミガキ調整を施す。42～47 は土師器甕片。42 は口縁部片。43 は頸部付近の破片で、外面ハケメ、内面ケズリ調整。44～46 は平底の底部、47 は丸底の底部。48・49 は製塩土器の底部。50 はミニチュア土器の甕。

古墳の築造に伴う資料は周溝南辺の一括資料 (29・30・33) で、古墳時代前期後半の資料と考えられる。周溝内には庄内式期・布留式期の土器片が多数混入する。

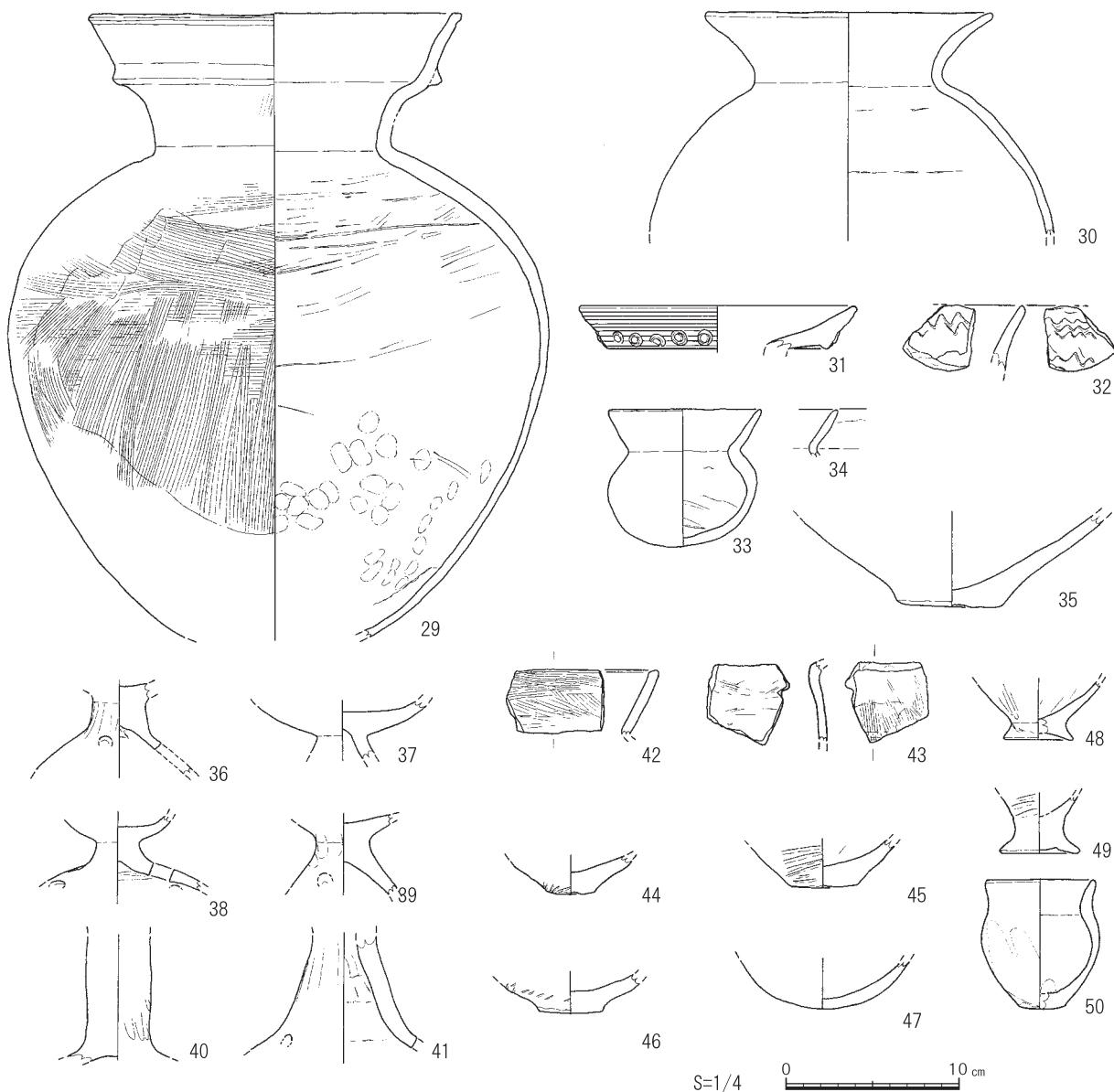


図 40 秋月 12 号墳周溝出土土器実測図

秋月 11 号墳周溝 (=古墳 3 (202 周溝)) 出土土器 (図 41)

周溝から土器片が微量出土した。

51 は平底で厚手の甕の底部片。52 はタタキ痕のある壺の頸部片。53 は須恵器甕類の破片。断面は赤紫色で、焼成は堅緻、自然釉がかかる。54 は土師器甕の口縁部。外反する口縁の端部を若干内側に肥厚させる。頸部内面直下にケズリ調整を、外面はハケ調整を施す。

古墳の築造年代を直接示す遺物はないが、出土した土器片から、秋月 10 号墳に先行する古墳であるものと推定される。

秋月 10 号墳周溝 (= 201 周溝) 出土土器 (図 42・43)

55～59 は周溝南側の底に正位置で置かれた状態で出土した土師器である。55 は直口壺。薄手で丁寧に作られている。56～59 は高杯。塊型の坏部に屈曲して開く脚部をもつ。坏部の口縁附近は、並行タタキを連続して施したのち、ヘラケズリを行い、最後に回転ナデを施す。脚は屈曲部より下を並行タタキで押された後、回転ナデを施す。脚部の内面も回転ナデにより整形する。55～58 では脚の屈曲部の四方向に上面から円形の透かしを開けてある。

60～72 は周溝上層から出土した土器である。60～65 は須恵器である。60・61 は坏身。62・63 は坏蓋。64・65 は甕。66～72 は土師器である。66・67 は高坏。68 は底部全体が開いているタイプの甕の底部。69～72 は甕。

73～78 は周溝の検出面から出土した土器である。73 は須恵器坏蓋。74 は須恵器高坏脚部。75 は土師器坏。76 は土師器高坏。77・78 は土師器甕。

周溝の底から 5 世紀後半の一括土器が出土しており、古墳築造時のものと考えられる。タタキを施す高坏は鳴神IV遺跡（鳴神地区遺跡調査 J 地区）の SK271 で類例が見られる。周溝の上層では 6 世紀後半、検出面では 7 世紀前半の土器が出土しており、供献土器と考えられる。

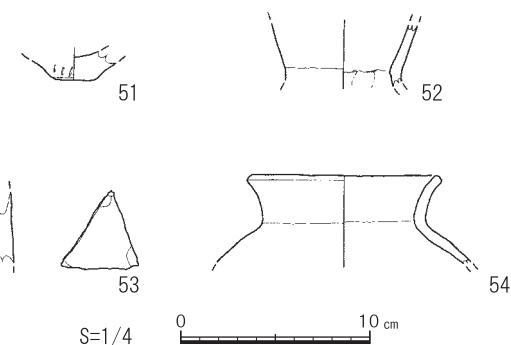


図 41 秋月 11 号墳周溝出土土器実測図

55～59 は周溝南側の底に正位置で置かれた状態で出土した土師器である。55 は直口壺。薄手で丁寧に作られている。56～59 は高杯。塊型の坏部に屈曲して開く脚部をもつ。坏部の口縁附近は、並行タタキを連続して施したのち、ヘラケズリを行い、最後に回転ナデを施す。脚は屈曲部より下を並行タタキで押された後、回転ナデを施す。脚部の内面も回転ナデにより整形する。55～58 では脚の屈曲部の四方向に上面から円形の透かしを開けてある。

60～72 は周溝上層から出土した土器である。60～65 は須恵器である。60・61 は坏身。62・63 は坏蓋。64・65 は甕。66～72 は土師器である。66・67 は高坏。68 は底部全体が開いているタイプの甕の底部。69～72 は甕。

73～78 は周溝の検出面から出土した土器である。73 は須恵器坏蓋。74 は須恵器高坏脚部。75 は土師器坏。76 は土師器高坏。77・78 は土師器甕。

周溝の底から 5 世紀後半の一括土器が出土しており、古墳築造時のものと考えられる。タタキを施す高坏は鳴神IV遺跡（鳴神地区遺跡調査 J 地区）の SK271 で類例が見られる。周溝の上層では 6 世紀後半、検出面では 7 世紀前半の土器が出土しており、供献土器と考えられる。

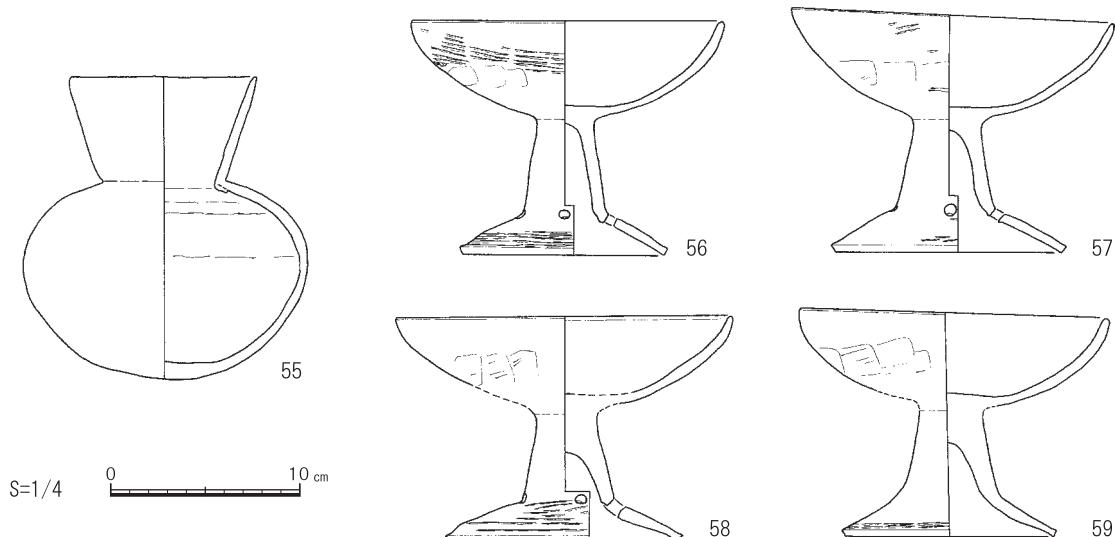


図 42 秋月 10 号墳周溝出土土器実測図①(底の一括資料)

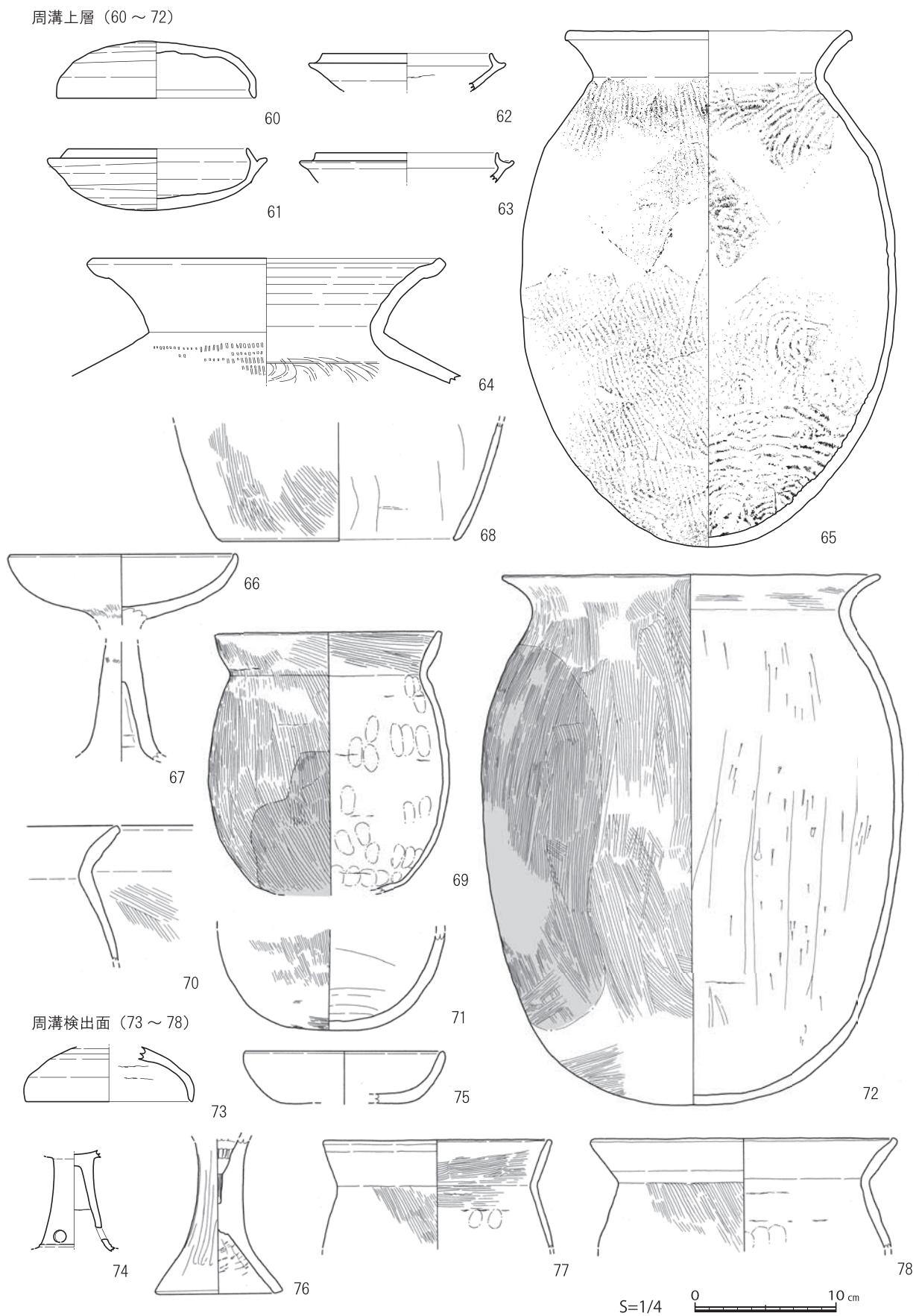


図 43 秋月 10 号墳周溝出土土器実測図②(上層出土土器)

秋月9号墳周溝（＝古墳1（200周溝））出土土器（図44～53）

秋月9号墳の周溝（200周溝）からは、コンテナ約27箱分の土器が出土した。原位置を保つ遺物は、周溝北西（7・8区）と南東（4・5区）から、長胴甕と須恵器蓋坏を中心とした土器が出土している。周溝の底からやや浮いた位置に、正位置ないしは横たえた状態で出土している。周溝の東から北東にかけて（1区～4区北半）の範囲では攪乱を受けて壊れたものが多く、出土した破片は地区や層位を超えて接合した。これらの土器は、田辺編年のMT15～TK209型式に相当する年代幅をもっており、大半が在地の土器と考えられる。なお、土器の出土状況については第2章、竈片（595・596）は第3節、滑石製紡錘車（620）・砥石（621）は第4節、滑石製小玉（666・667）は第5節、轆羽口片（675～678）は第6節、植物種子（704）は第8節、動物骨片（706～709）は第9節に掲載したのでご参照いただきたい。

79～99は須恵器坏蓋である（図44）。79～86は1区、87～91は2区、92・93は3区、94は4区、95は5区、96～98は7区、99は8区で出土した。周溝の底から正位で出土したものではなく、周溝の中層から上層にかけて出土している。肩に稜があり箱形を呈するものから、肩に稜のない丸いものまであり、胎土・焼成・規格・製作技法から大きく4タイプ、細分すると8タイプに分類できる。須恵器坏蓋は、30個体分以上出土した。

Aタイプの坏蓋は、灰色でおおよそ硬質に焼きあがっており、胎土に1mm程度の黒色土粒をやや多く含む傾向がある。口縁端部内側に沈線をもっており、須恵邑のMT15～TK10型式に対応する時期の土器と評価できる一群である。このうちA1タイプは、口径が14.0～15.2cmとやや大きく、外面の天井部と口縁部の境に稜をもつもので、79・81～83・87・88・91・94・95・97～99が該当する。94は高坏の蓋の可能性もある破片である。一方、A2タイプは口径が13.0～13.6cmと小さく、肩部の稜はほぼ消失している段階のもので、84・89が該当する。

Bタイプの坏蓋は黒色土粒がやや少なく、生焼けで乳白色を呈する一群であり、肩部の稜のほか、口縁端部内面の沈線がなくなってきた段階の土器である。須恵邑のTK43～TK209型式に対応する時期の、在地の土器と評価できる一群である。B1タイプは、肩に丸みを帯びた稜と、口縁内面にやや曖昧な沈線をもつもので、85が該当する。口径は14.2cm、器高は4.8cmである。B2タイプは、肩に沈線がまわり、肩のすぐ上方が強い回転ナデにより窪んだもので、86が該当する。口径は14.5cm、器高は5.2cmである。B3タイプは、肩に稜がなく、口縁端部がまるいものうち、胎土に黒色土粒・白色粒がやや多く須恵質焼成のもので、80・93が該当する。口径は15.3～15.7cm、器高は3.9～4.5cmである。80は天井部上方から小孔をあけたうえで、内面から当て具で押さえられている。93は天井部にヘラ記号「一」が確認できる。B4タイプはB3タイプ同様に肩に稜がなく、口縁端部が丸いものであるが、胎土は水簸したかのように精良で、瓦質焼成のものである。92が該当し、口径は14.5cm、器高は4.2cmである。

Cタイプの坏蓋は、胎土に砂粒が大量に混じり、色調は灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼きあがる。口径は小さく、肩部に稜があり、口縁端部に沈線をもつもので、96が該当する。口径12.5cm、器高4.3cmで、外面に自然釉がかかっている。TK47型式に近い特徴をもつが、稜は低くなっている。

Dタイプの坏蓋は、黒色土粒が少なく、色調は表面が青灰色、断面が赤紫色で、焼成は良好堅緻に焼きあがる。肩に稜をもち、口縁端部内面に沈線があるもので、90がこれに該当する。口径は13.4cm、器高は4.6cmで、外面に若干自然釉がかかる。

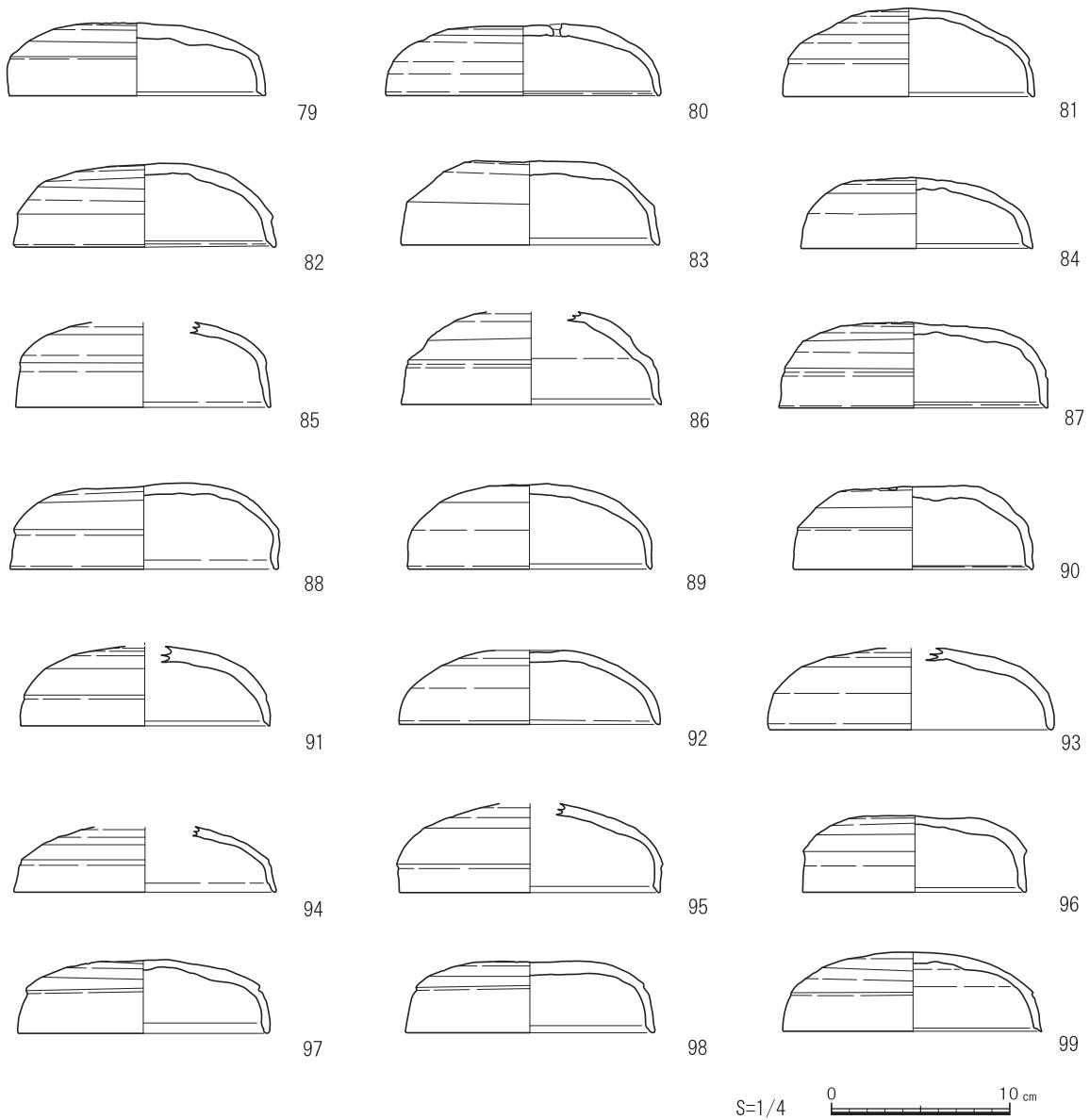


図 44 秋月 9 号墳周溝出土土器実測図①(須恵器坏蓋)

坏蓋のうち 80・83・90 では天井部に粘土紐巻き上げ痕、79・80・87・89・90 では回転ヘラ切り痕、80・82～86・89・90・97 では天井部内面に当て具痕が確認できる。

100～126 は須恵器坏身である(図 45)。100～108 は 1 区、109～115 は 2 区、116～121 は 4 区、122 は 5 区、123 は 6 区、124・125 は 7 区、126 は 8 区で出土した。なお 116～119 は 4 区の北半、120・121 は南半で出土した。底部がやや平坦で口縁部の立ち上がりが長く端部に沈線をもつものから、器高が低く底部が尖り気味で口縁部が短く端部をまるめるものまであり、胎土・焼成・規格・製作技法から大きく 5 タイプ、細分すると 10 タイプに分類できる。A～D の 4 タイプは坏蓋と胎土・焼成が対応している。須恵器坏身は、40 個体分以上出土した。

A タイプの坏身は、焼成は微妙に甘いが、灰色でおおよそ硬質に焼きあがっている。胎土に 1 mm 程度の黒色土粒をやや多く含む傾向がある。MT15 型式～TK43 型式に相当する年代幅をもつた土器と評価できる一群である。A1 タイプは、口径がやや大きく、口縁端部内側に沈線をもつ

もので、101・105・107・108・112・113・120・121 が該当する。口縁の立ち上がりはやや長く、体部から受部を挽き出している。口径は 11.7 ~ 13.0 cm、器高は 4.6 ~ 5.3 cm である。A2 タイプは口径がやや小さく、口縁端部が丸いもので、102・103・114・122・125 が該当する。口縁部の立ち上がりは A1・A3 タイプの双方の特徴をもつものがある。口径は 11.7 ~ 12.0 cm、器高 4.3 ~ 4.8 cm。A3 タイプは、口径がやや大きく、器高が低く、短く内傾する口縁部立ち上がりの端部を丸めたもので、104・115 が該当する。体部から受部までを一気に作り、そこに短く内径する立ち上がり部をのせ、ナデにより繋げているのが観察できるので、口縁部貼り付け技法による一群として評価しておきたい。口径 12.4 ~ 13.0 cm、器高 4.0 ~ 4.9 cm。

B タイプの坏身は、黒色土粒がやや少なく、生焼けで乳白色を呈する一群であり、口縁端部内面の沈線がなくなってきた段階の土器である。須恵邑の TK43 ~ TK209 型式に対応する時期の、在地の土器と評価できる一群である。B1 タイプは生焼けの度合いが比較的弱く、口縁端部に沈線を施そうとした痕跡が若干認められる。受部の上面に指を垂直にして爪をたてた明確な沈線がみられるほか、見込み部の当て具痕も明瞭に残っている。100・126 が該当する。口径 12.6 ~ 13.0 cm、器高 4.9 ~ 5.0 cm。B2 タイプは、生焼けの度合いが強く、口縁端部は丸い。口縁部は、A3 タイプと幾分か類似しており、体部から一気に受け部まで作り、そこから内側に折り曲げ、さらに立ち上がりを上に湾曲させる状況が明瞭に観察できる。口縁部折り曲げ技法と呼ぶべき方法で作られている一群として評価できる。見込み部に当て具痕が残る。109・110 が該当する。口径 12.8 ~ 13.7 cm、器高 4.5 ~ 5.5 cm。B3 タイプは、やや瓦質焼成で、口縁部は普通の作り方をしており、端部が丸いもので、124 が該当する。口径 12.1 cm、器高 5.1 cm。

C タイプの坏身は、胎土に砂粒が大量に混じり、色調は灰色を呈し、焼成は良好で硬質に焼きあがる。口径は小さく、口縁端部に沈線をもつもので、123 が該当する。口径 10.5 cm、器高 5.2 cm で、外面に自然釉がかかっている。TK47 型式に相当する土器と推定される。

D タイプは、色調は表面が青灰色、断面が赤紫色で、焼成は良好堅緻。口径が大きく、器高は低く、口縁端部を丸めるもので、116 ~ 118 が該当する。口径は 12.4 cm、器高は 3.5 cm で、外面に自然釉がかかる。

E タイプは、細長い白色粒を多く含み、表面褐色、内面灰色を呈する硬質のものである。口径はやや小さく、口縁端部内面の沈線がある。組み合う坏蓋は確認できていない。E1 タイプは受部付け根の沈線が深く、立ち上がりは普通に上方へとのびる。106 が該当し、口径は 12.0 cm、器高は 4.6 cm である。E2 タイプは立ち上がりと体部が大きく内湾するもので、111 が該当する。口径 11.6 cm で、器高は 5.0 ~ 5.5 cm 程度と考えられ、体部の回転ナデ痕が明瞭にみられる。同一個体とみられる破片から、体部下端が屈曲して平坦な底部につながるものとみられる。

須恵器坏身のうち、74・89 ではヘラ記号「一」が確認できる。また、104・109・110・118・119・121・126 の見込みには当て具痕が見られる。

127 ~ 129 は須恵器高坏とその蓋である。127 は高坏の蓋。表面灰色、断面褐色で、天井部内面に当て具痕がみられる。摘みと縁が欠けている。同地点で胎土・焼成の一致する脚部片が出土している。128 は坏部の破片。復元口径は 10.6 cm で、脚部の透かしは 4 方向に見られる。2 区上層で出土した。129 は高坏の脚端部。3 区上層で出土した。このほか、高坏は 4 区を中心に 5 点が出土している。

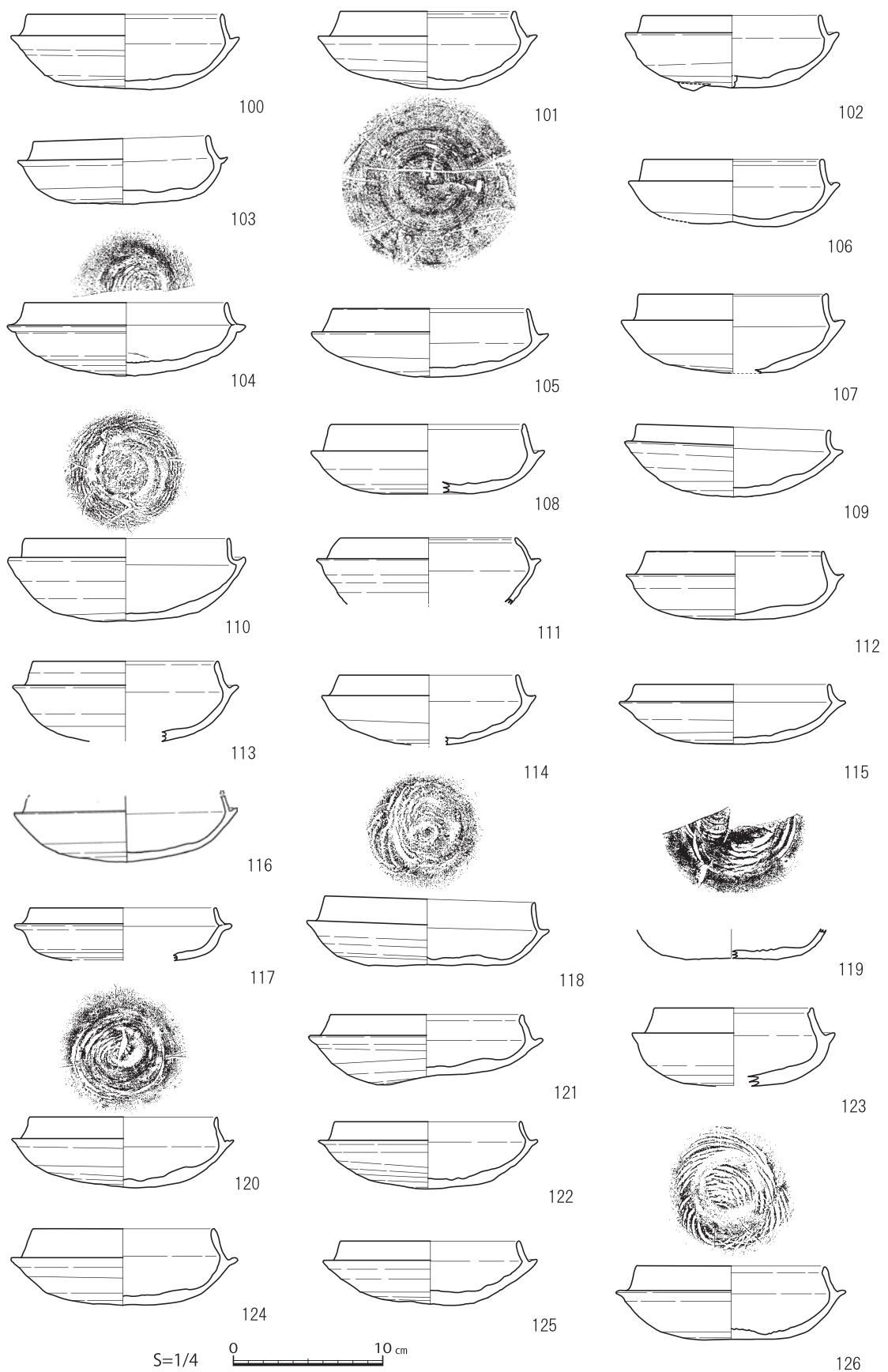


図 45 秋月 9 号墳周溝出土土器実測図②(須恵器坏身)

130 は須恵器壺。ラッパ状に開く頸部から、若干内湾気味に口縁部が開く。外面はともに櫛描波状紋を施し、口縁端部に沈線をもつ。肩部に段、底部との境に沈線をもち、その間を櫛書列点紋でうめる。胎土・焼成は蓋壺のDタイプと同じである。

131 は須恵器提瓶。環状の把手をもち、内面當具痕、外面カキメ調整する。破片が1区と2区の上層・下層に散乱しており、口縁部と把手の大部分を欠く。

132 は須恵器器台。いわゆる筒型器台で、口縁部と台の底部を欠く。口縁内に別個体の破片が融着している。脚部上段には4方向5段の方形透かし、下段には円形及び台形の透かしをあける。表面は沈線と櫛描波状紋・櫛描列点紋でうめる。胎土・焼成は蓋壺のDタイプと同じである。1区から出土した。

133～137 は須恵器短頸壺とその蓋である。胎土には黒色土粒がやや多く、表面は灰色、断面は紫色を呈し、焼成は堅緻で自然釉がかかる。133・134 は蓋で、直径は12 cm前後、摘みを欠失しており、1区から出土している。135 は口径7.8 cm、最大径9.6 cm、器高5.1 cm。小型で肩部がほとんどない。136 は口径7.4 cm、最大径13.8 cm、器高10.7 cmである。胎土には黒色土粒が多く、灰色で硬質に焼きあがる。135 は1区、136 は2区から出土した。

137～148 は須恵器壺甕類。焼成のあまいものが多く、146 は瓦質に近い。142 は灰色で焼成堅緻、145 は壺身のEタイプと同じ胎土・焼成である。137 は小型の壺で、口径9.3 cm、器高13.0 cm。口縁部が外湾しながら斜め上に伸び、端部は丸める。内外面に回転ナデ成形痕、カキメ調整痕がみられる。2区から出土した。138・139 はやや小型の壺である。口縁部が外湾しながら斜め上に伸び、端部は上下に肥厚して明瞭な縁をなす。体部上半をカキメ調整し、内面に當て具痕、体部下半にタタキ痕が残る。139 は口径13.5 cm、器高20.6 cmである。ともに4区から出土した。140～146 はやや大型の壺甕類。口縁部は大きく外湾し、端部を上下に肥厚させる。外面は並行タタキ後に、カキメ調整を行う。内面は當て具痕がみられるが、142・145 はナデ消している。140 は1区、141～144 は2区、145・146 は4区から出土した。

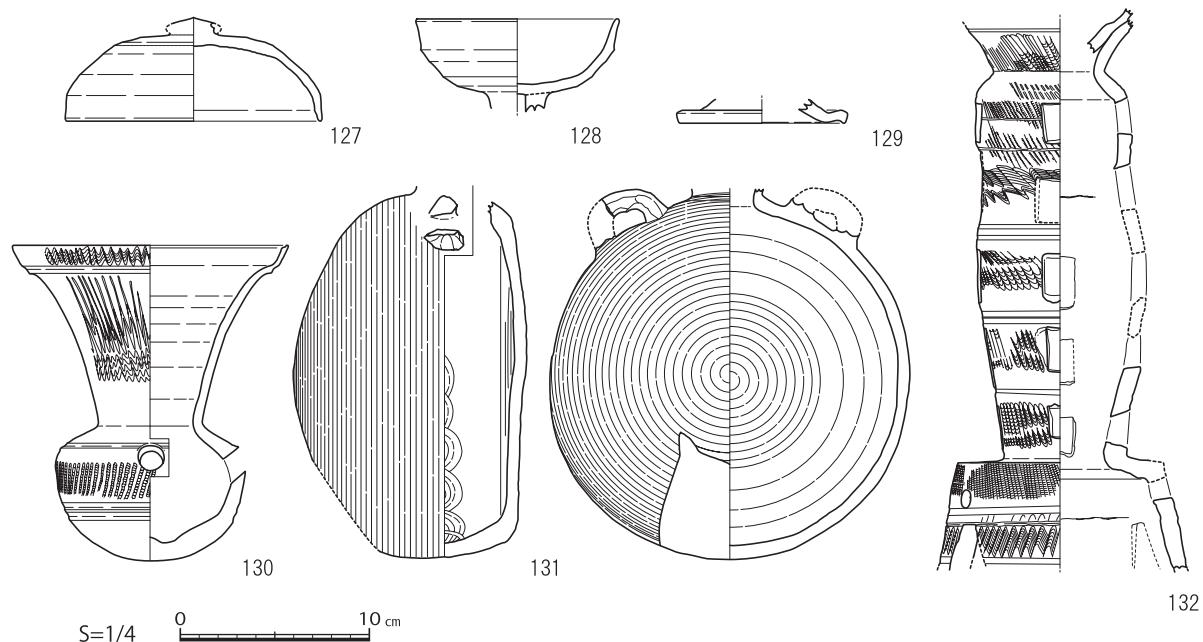


図 46 秋月9号墳周溝出土土器実測図③(須恵器器台ほか)

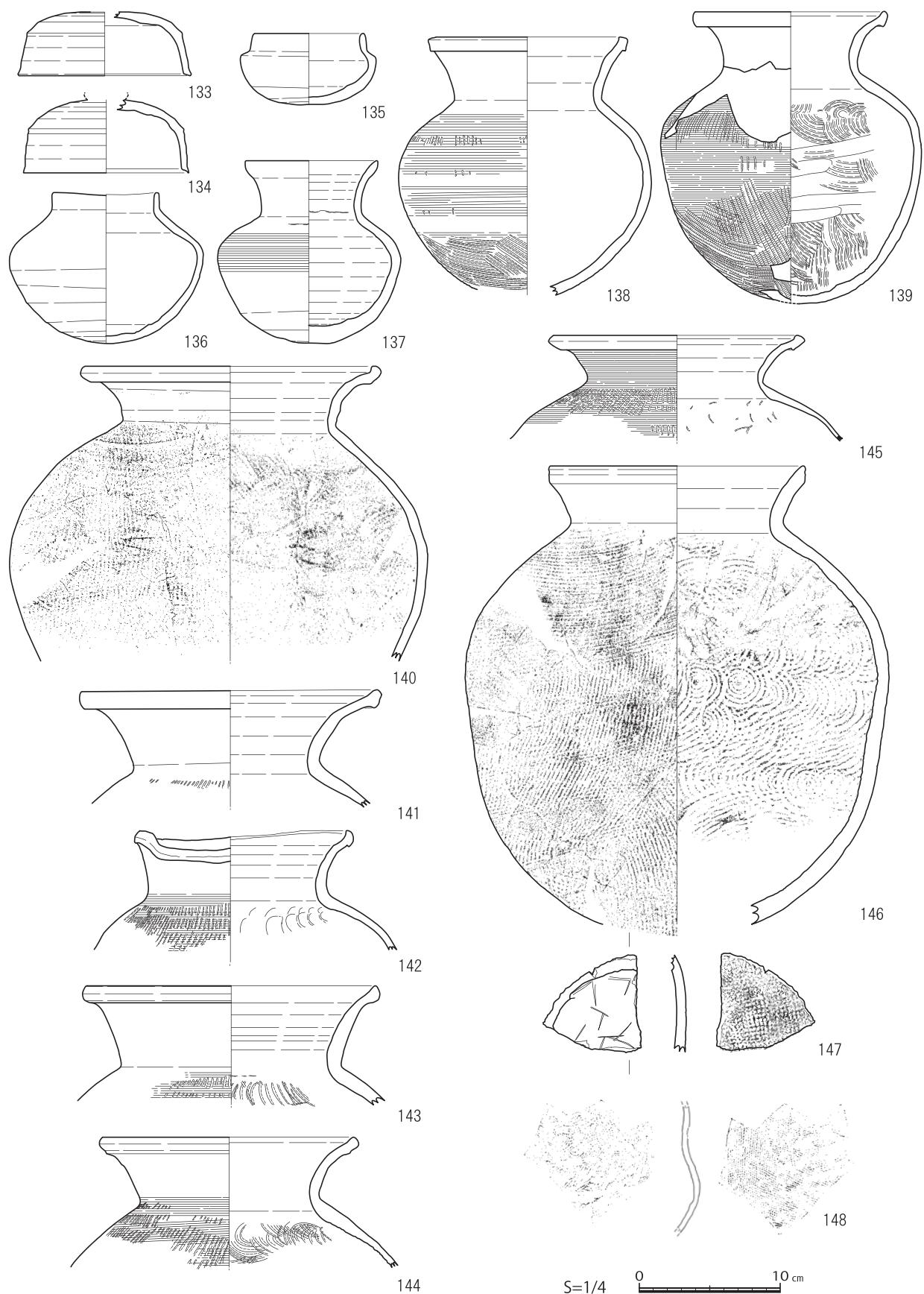


図 47 秋月 9 号墳周溝出土土器実測図④(須恵器壺・甕)

147・148は須恵器壺甕類の破片。147は壺底部と推定される格子タタキ痕のある破片である。内面は平滑で多数のV字形の圧痕がある。体部片とみられるものには圧痕が少ない。148は壺甕類の体部の破片である。外面並行タタキ、内面当て具痕で、焼成は良好、表面は灰色、断面は若干紫色を呈する。側面の破片と考えられ、外側から円形に窪んでおり、他の土器あるいは窯道具との釉着痕がみられる。147は5区、148は1区から出土した。このほか、須恵器壺甕類は1・2区を中心に約10個体分出土しているが、破片の量が少ない。

149～156は土師器塊である。胎土・焼成・器形の傾向によりある程度の区分はできるが、須恵器の蓋杯ほど明確には分かれない。残存状態の良好な149は口径14.5cm、器高5.7cm、153は口径13.9cm、器高5.7cm。やや大型で、胎土は浅黄橙色である。150・151は器高が4.0～4.3cmとやや浅く、橙色が強い。152・156は口径がやや小さく、胎土はやや粗い。151と153は底部に成形時に敷いた木の葉の葉脈痕が残り、口縁部がやや内側に屈曲する。底部に木の葉の圧痕がある土師器は、周辺では船戸箱山古墳や東国山1号墳などでみられる。149～155は1区、156は8区から出土しており、古墳の北側に集中して出土したものといえる。

157～161は土師器高坏である。坏部は浅く端部を単純に丸める。透かし孔はない。157は脚部の破片。裾部で屈曲する。158は坏部の破片。中ほどでやや内側に曲がる。159は脚部の破片。柱状部は短く中実で、ケズリ後ナデ調整、裾部は回転ナデ調整である。160・161は橙色が濃く、5mm以下の褐色粒を多量に含む。160は口径15.8cm、器高16.5cm。161は口径18.8cm、器高16.0cm。柱状部は上半が中実であり、外面をハケの後にナデ調整する。157は4区、158・159は2区、160・161は7区で出土した。

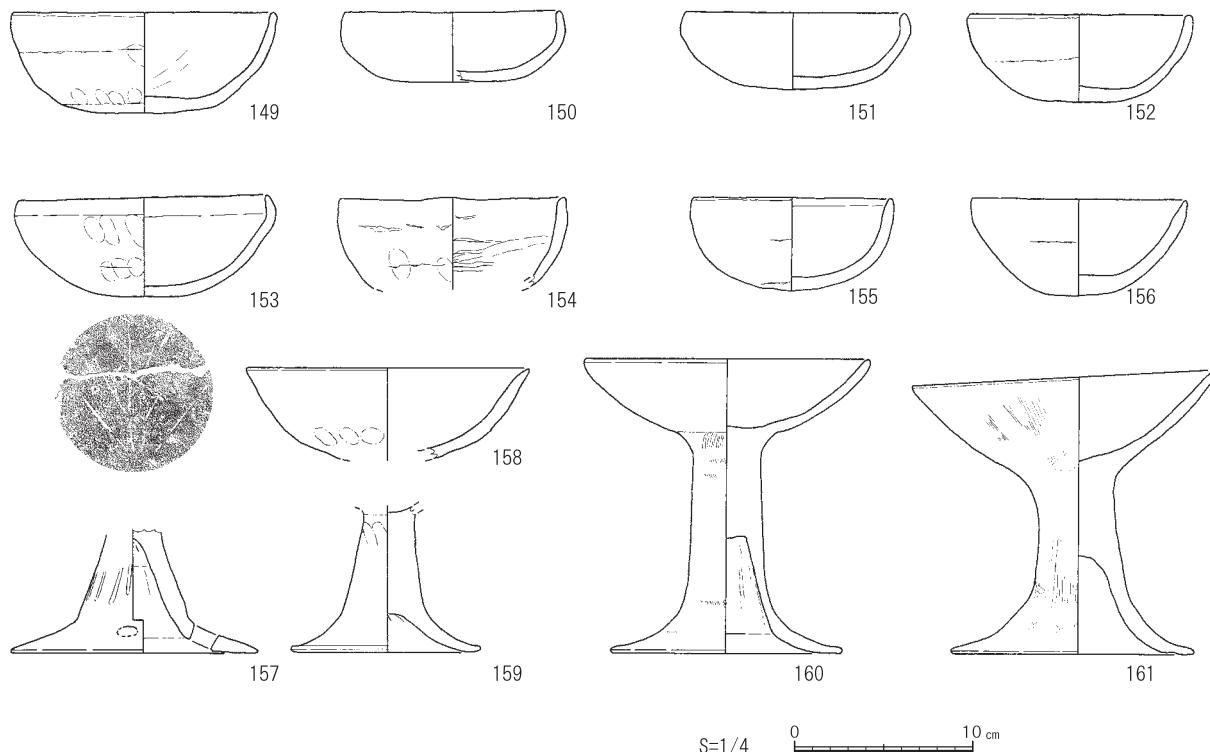


図48 秋月9号墳周溝出土土器実測図⑤(土師器塊・高坏)

162～165は土師器鉢である。162は甕の底部と同じ形の鉢。口径14.2cm、器高8.9cm。163・164は厚手で中型の鉢。同一個体の口縁部と底部である可能性も考えられる。復元口径20.0cm、器高は14cm程度になるものと考えられる。165は大型の鉢。口縁部はなだらかに外反し、底部はおおよそ平坦である。口径13.0cm、器高18.3cmである。胎土は159・160と同様である。161・163・164は1区、162は2区、165は4区で出土した。

166～169は土師器の鉢か甕の可能性の高い破片である。166は口縁部片で、外面ハケ調整。体部と口縁部が直線的に続き、外面下間に煤がついている。167～169は土師器の把手片のうちの一部を図化した。166・168は1区、169は2区、167は4区で出土した。

170・171は土師器甕である。170は体部が薄くやや開き、口縁部が外反する。外面はハケ調整、内面には粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。把手はやや雑に貼り付ける。底部の孔は5個である。口径24.4cm、器高24.6cm、底部径は約14cmである。171は体部が大きく開き、内外面ともナデ調整。底が抜けた形状の甕で、底部外面からやや斜め上方に向けて小孔をあけている。170・171は1区で出土した。

172・173は土師器壺。色調は浅黄橙色で、やや硬質。172は口径10.2cm、器高13.9cm。外面ハケ後、ナデ調整。1区で出土した。173は2区で出土した。

174～180は小型の土師器甕である。174～178は外面ハケメ調整で、内面に指頭圧痕が残る短胴の甕。口縁部はやや上方に伸び、外反の度合いが少ない。174・175は口径8cm前後と小さく、176～178は口径14.0～14.6cm、器高16.9～19.1cmである。174～176は1区、177は4区、178は5区で出土した。

179は厚手で特に小型の甕。他の甕と同様に黒班がある。口径9.5cm、器高9.7cm。180は器高の低い甕。胎土に白色粒を含み、にぶい黄橙色を呈し、半分まで黒色化している。調整は不明。棒状のものが内側から突き刺さった痕がある。口径10.3cm、器高7.3cm。

181～204は土師器の長胴甕である。181～188・191～204は口縁部径15～20cm、胴部最大径20～26cm、器高30～40cmの長胴甕。口径より胴部径の方が大きく、胴体が口径の2倍前後の長さとなる。口縁部はやや外反して斜め上方へ伸び、端部は丸くおさめるものが多い。頸部の屈曲はあまく、底部は丸底であるがやや平たくなっている。口縁部は横ナデ、外面はハケメ調整で、内面には粘土紐積み上げ痕と指頭圧痕が残る。187・189は外面に強いナデ調整を行う。194は外面ハケメ調整であるが、ミガキ調整のような仕上がりとなる。195・202は口縁部の成形・調整を省略しており、胴部はやや短い。189・190は大きく、189は口径31.5cm、胴体残存部最大径35.6cm、190は口径31.0cm、胴体残存部最大径31.2cmである。ほぼ完形の長胴甕の大きさは、以下の通り。192は口径18.6cm、器高33.2cm。195は口径15.0cm、器高31.6cm。196は口径15.7cm、器高34.6cm。199は口径19.9cm、器高38.9cm。200は口径16.0cm、器高35.8cm。202は口径18.0cm、器高31.5cm。203は口径19.6cm、器高39.1cm。橙色系の色調を呈するものが多いが、181・185・187・188・189・199は浅黄橙色を呈している。

181～184は1区、185～189は2区、190～192は4区、193～195は5区、196～200は7区、201～204は8区から出土した。1区から4区北半にあつた189～191はすべて破片となっており、4区南半～7区の192・193・199・200は横たわった状態、8区の202～204は立った状態で出土している。195は100土坑との切り合い部分で出土したため、帰属が判然としないものである。192の中からは骨片が出土しており、第9節に記載した。

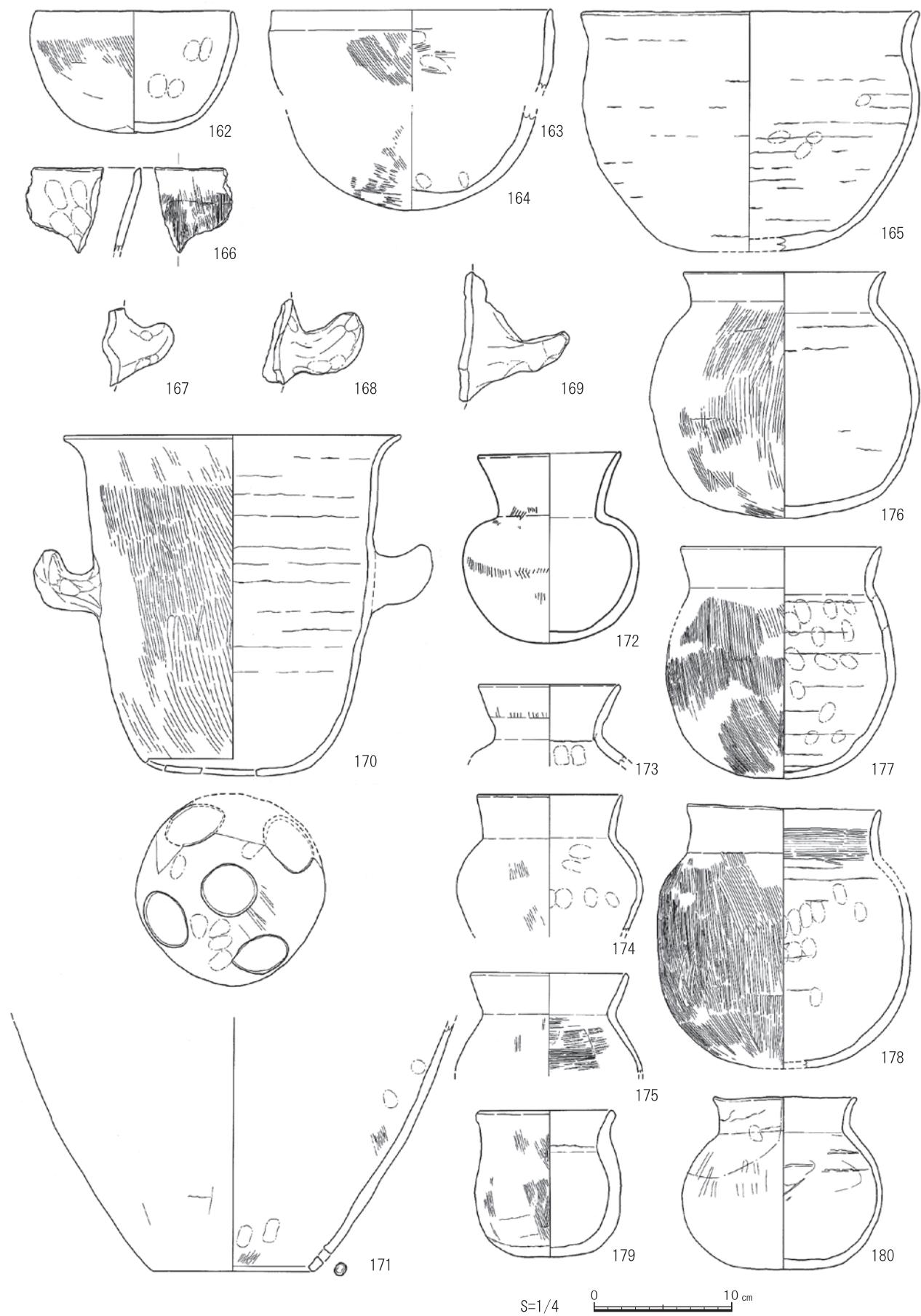


図 49 秋月 9 号墳周溝出土土器実測図⑥(土師器鉢・甌・甕)

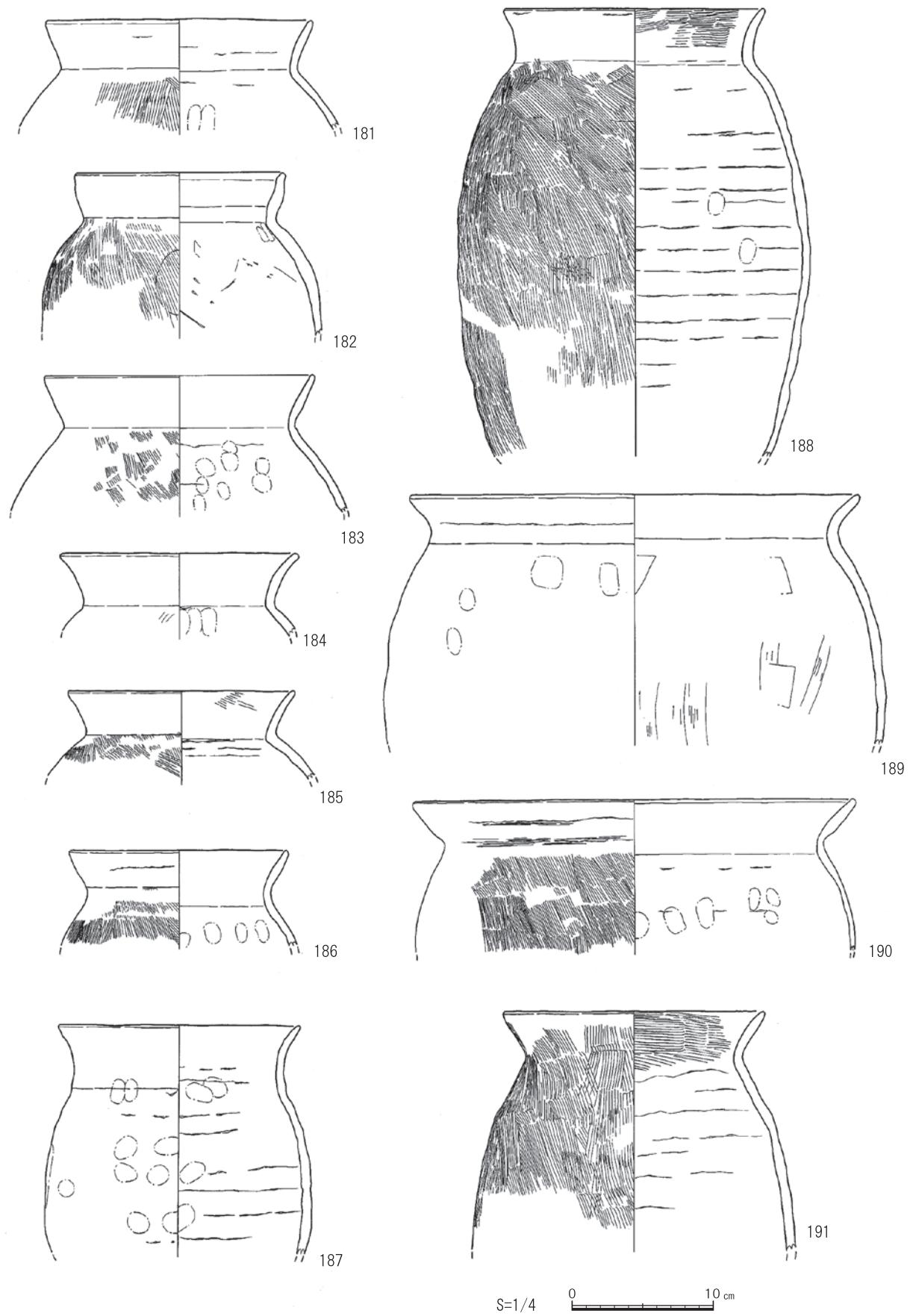


図 50 秋月 9号墳周溝出土土器実測図⑦(土師器長胴甕①)

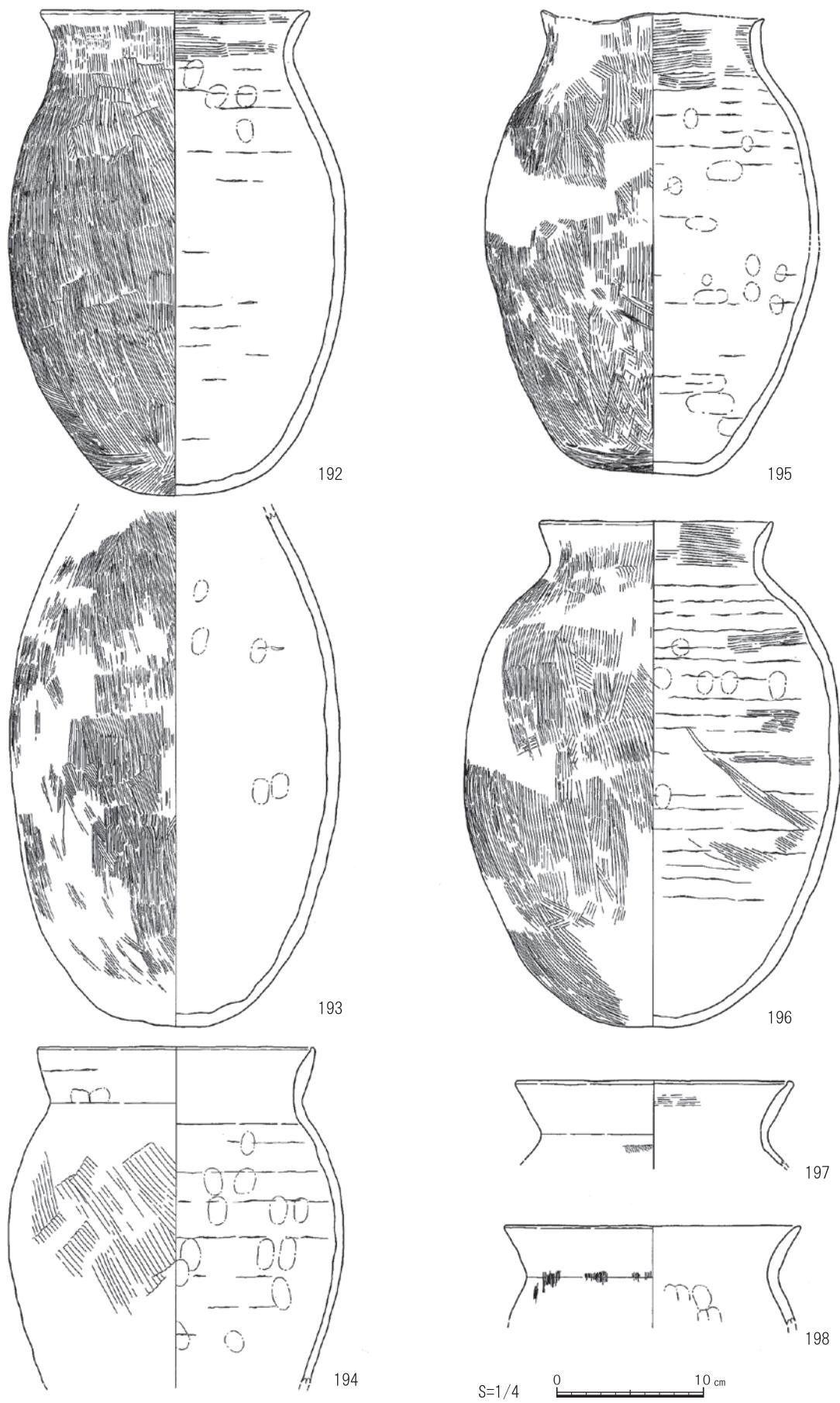


図 51 秋月 9 号墳周溝出土土器実測図⑧(土師器長胴甕②)

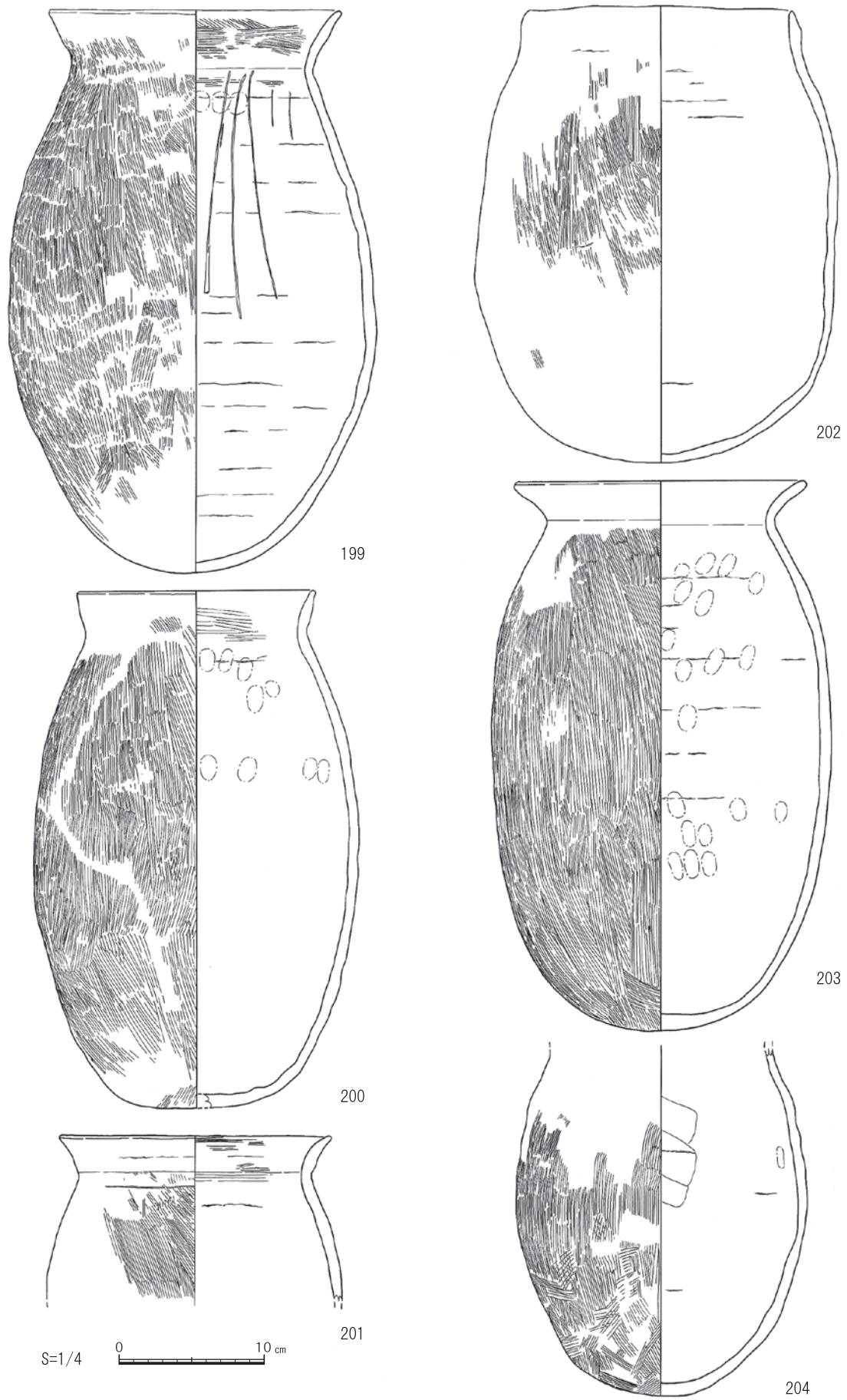


図 52 秋月 9 号墳周溝出土土器実測図⑨(土師器長胴甕③)

205～210は製塩土器である。205～209は小型半球形の製塩土器。西庄遺跡の丸底C類（丸底II式）に相当するもので、形状がややばらつきがあるが、他の周溝出土遺物と同年代のものといえる。205・209はやや浅い塊形をしており、207はやや大きい。209では内面に貝殻条痕が残り、205・208では外面に塩とみられる白色固形物が焼き付いている。210は甕形の製塩土器。粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る粗製の土器で、口縁部内側に貝殻条痕が残る。

205～207は1区、208は2区、209・210は4区で出土した。

＜その他の遺構から出土した土器＞（図54）

034溝出土遺物

211は須恵器壺蓋。口径15.6cm、器高3.5cmで、口縁部は丸めている。内外面ともに回転ナデ調整が行われ、天井部のみ回転ヘラケズリを行う。034溝からは遺物がほとんど出土しなかった。

210溝出土遺物

212は須恵器壺蓋。口径13.3cm、器高4.0cmで、天井部は平坦で、口縁部は垂直に長い。肩の稜はややあまく、口縁端部の平坦面は下方を指向する。秋月9～11号墳の築造年代に近い、5世紀後半の遺物と考えられる。胎土は密、焼成良好で青灰色を呈する。

＜後世の遺構及び包含層から出土した土器＞

213は須恵器広口長頸壺の上半部である。頸部を連続する凹線で3段に区画し、上2段に櫛描波状紋を、下2段に竹管紋を施す。室町時代の075井戸の井筒上方の中央に正位置で置かれた状態で出土しており、井戸廃絶時の祭祀的行為に転用されたものとも考えられる。214は製塩土器片。室町時代の075井戸内から出土した。外面に粘土紐積み上げ痕、内面に貝殻条痕が残る。215は須恵器壺の蓋。最大径は11.5cmで、かえりがしっかりと作られている。外面に列点紋が施されている。第2層から出土した。

このほか、古墳時代後期の土器は古代以降の遺構及び包含層から多数出土したが省略する。

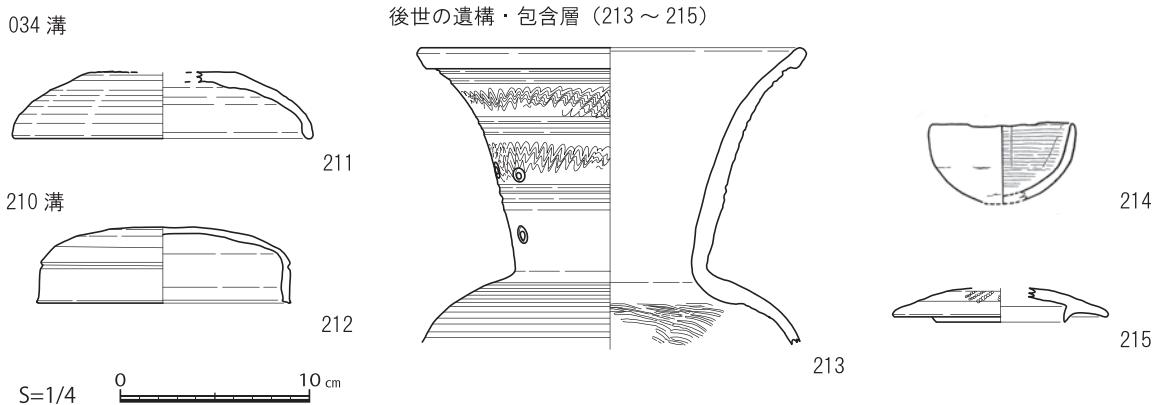


図54 その他の遺構・包含層出土土器実測図（古墳時代）

4. 古代の土器（飛鳥時代～平安時代中期）

飛鳥時代の土器は少なく、古墳の周溝検出面のほか、ピットと掘立柱建物柱穴から出土している。奈良時代の土器は土坑・溝からまとまって出土したほか、掘立柱建物の柱穴からも出土している。平安時代前期から中期の土器はあまりみられない。

奈良時代の遺物は、畿内系暗紋土師器が多数みられる特徴があり、土器以外に土管（598～600）が出土している点が注目される。

＜主な遺構から出土した古代の土器＞

掘立柱建物 1 の柱穴出土土器（図 55）

10 基の柱穴から計 82 点の土器片が出土した。216 は 066 柱穴から出土した土師器坏である。217 は 183 柱穴から出土した土師器坏片である。218 は 184 柱穴から出土した須恵器坏身。219 は 185 柱穴から出土した須恵器坏蓋と考えられる。このほか、183 柱穴から須恵器器台片が出土している。

掘立柱建物 1 の柱穴から出土した土器は、7 世紀中頃から後半にかけての遺物と考えられる。

掘立柱建物 2 の柱穴出土土器

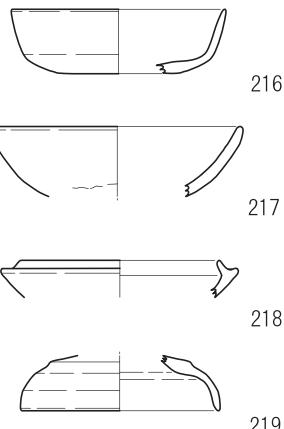
5 基の柱穴から、計 17 点の土器片が出土したが、実測しうる土器はなかった。303 柱穴から須恵器坏片、304 柱穴から土師器の皿か盤の破片が出土しており、掘立柱建物跡 3 と同様の年代の遺物と考えて問題ない破片である。

掘立柱建物 3 の柱穴出土土器（図 55）

7 基の柱穴から計 42 点の土器片が出土した。220 は 197 柱穴から出土した須恵器坏蓋片である。口縁部の近くで屈曲し、端部は下方に向く。221 は 274 柱穴から出土した須恵器坏蓋である。平坦な天井部に摘みが付いている。222 は 275 柱穴から出土した土師器甕の口縁部片。径 13.9 cm と小さく、頸部が明確に折れ曲がる形態をしている。223 は 319 柱穴で出土した須恵器坏蓋である。224 は 357 柱穴から出土した土師器坏である。高台があり、内面には放射線状暗紋と螺旋状暗紋を施している。このほか、319 柱穴から古代の製塩土器の破片が出土している。

掘立柱建物 3 から出土した土器は、8 世紀前半の遺物と考えられる。

掘立柱建物 1 (216～219)



掘立柱建物 3 (220～224)

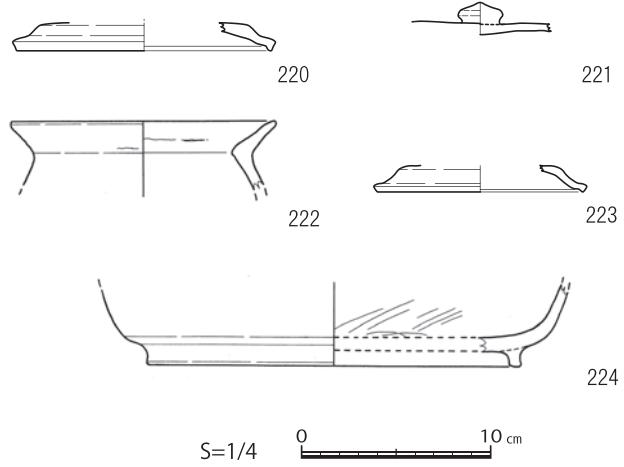


図 55 掘立柱建物柱穴出土土器実測図

209 土坑出土土器 (図 56)

225～231は須恵器壺蓋。225と226は古墳時代から継続するタイプのものであるが、口径が小さく、全体的に丸みを帯びている。227・228は平坦で端部内面に短いかえりをもつ。口径は227が13.0cm、228が16.1cmで、摘みを欠失している。229～231はやや高さがあり、端部を下方に折り曲げるタイプの蓋である。口径は229で13.5cm、231で18.8cm。232～234は須恵器壺身。232は口径11.0cm、器高3.2cm、233は口径12.3cm、器高3.3cm。234は高台がある壺Bで口径14.5cm、器高5.1cm。高台はやや内側に入った位置に、踏ん張った形のものが付く。235は須恵器高壺の脚部。低脚である。236は須恵器壺。肩部の稜の上に耳を付け、口縁部はやや開き、やや胴の長い印象を受ける個体である。底部の端にはややふんばった形の高台がある。

237～239は土師器壺蓋。237は端部を下方に折り曲げる。238は体部全体を下方に屈曲させており、器高が13.6cmある。239は内面に暗紋が確認できる。240～242は土師器皿。240は口径14.7cm、器高3.9cmで、丸みのある形状で、口縁端部を内側に曲げる。外面にミガキ痕が確認できる。241は底部から斜め上方に口径部が伸び、口縁端部内側がやや沈線状を呈する。内面には放射線状の暗紋を施す。242はやや尖り気味の底部と斜め上方に伸びる口径部をもち、端部は単純に丸める。底部には粘土紐回転巻き上げ痕が確認できる。243・244は土師器盤の破片。243は高台の径27.8cmで、内面に連結輪状暗紋を施す。244は高台がなく、底部は不定方向のケズリを施し、黒色化している。内面は連結輪状暗紋を施す。245は土師器甕。口縁部は非常に厚く、端部は面をなしている。頸部はなだらかに下方へ続いており、体部外面にハケメを施す。口径18.6cmに復元される。

209 土坑の出土遺物は7世紀から8世紀に及び、多数の破片が出土している。長期にわたる廐棄土坑の出土遺物と考えられる。

033 溝出土土器 (図 57)

246～248は須恵器壺蓋。246の摘みは扁平で、天井部から口縁部はなだらかに伸び、口縁端部は下方へ折れ曲がる。壺Bの蓋であるが、255～257とは規格・胎土・焼成ともに組み合わない。249～257は須恵器壺。249～254は壺Aで高台はなく、全体的に丸みを帯び、口縁部は若干外反する傾向がある。253は底部が平坦になっている。255～257は壺Bで、体部の立ち上がりからやや内側に入ったところに、ややふんばった高台がつく。256・257は焼成が甘く、底部に回転ヘラ切りの際の螺旋状の傷が明瞭に残る。258・259は須恵器壺。258は壺の直径を縮めた形状をしており、直径8.7cm、器高3.7cm。胎土に黒色土塊を多く含み、底部は回転ヘラ切り不調整。259は底部が平坦で、体部が垂直に立ち上がる。底部は不調整。260は須恵器把手。平瓶の把手と考えられる。平行タタキで形状を整えている。261は須恵器長頸壺。底部は平坦で、高台がつく。262は須恵器壺甕類の口縁部片。263は須恵器大甕。外面は平行叩き。

264は土師器鉢。口縁部が内湾する粗製の鉢で、外面はハケ調整。265・266は土師器の高台片。表面は摩耗している。267は土師器盤。体部の立ち上がりから内側に入ったところに、ふんばった高台を付ける。口径28.2cm、器高5.3cmで、口縁部がやや内側にふくらむ。体部にわずかに残る放射線状ミガキの下に刻み目状の圧痕が見られる。268・269は土師器高壺の脚部。中実で、ラッパ状に開く。270・271は土師器甕の口縁部片。口縁部内面にヨコハケ、体部外面にタテハケ。口縁部はぎこちなく屈曲しながら外反する。272は土師器の把手部分。

033 溝の出土遺物は8世紀のものと考えられる。

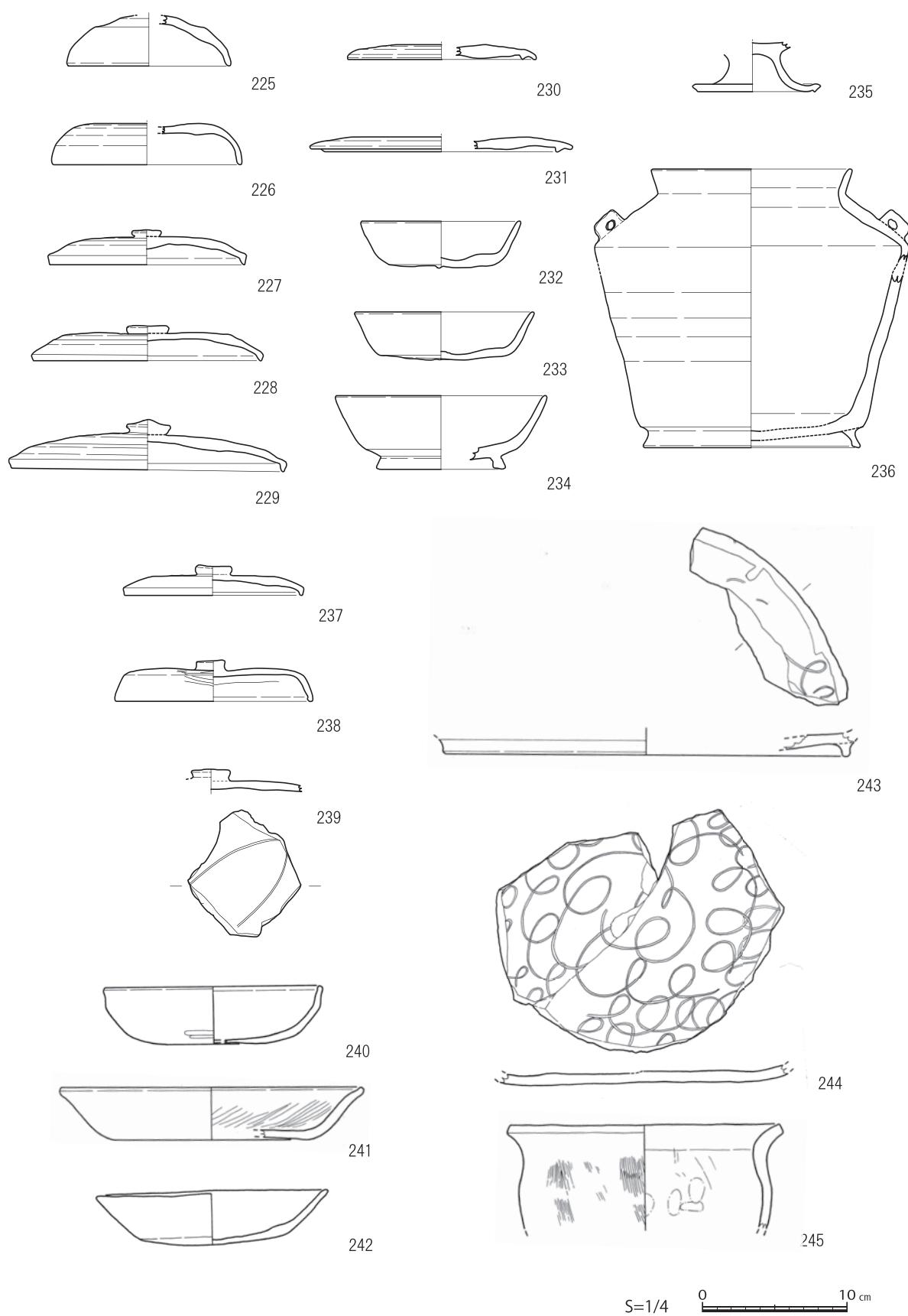


図 56 209 土坑出土土器実測図

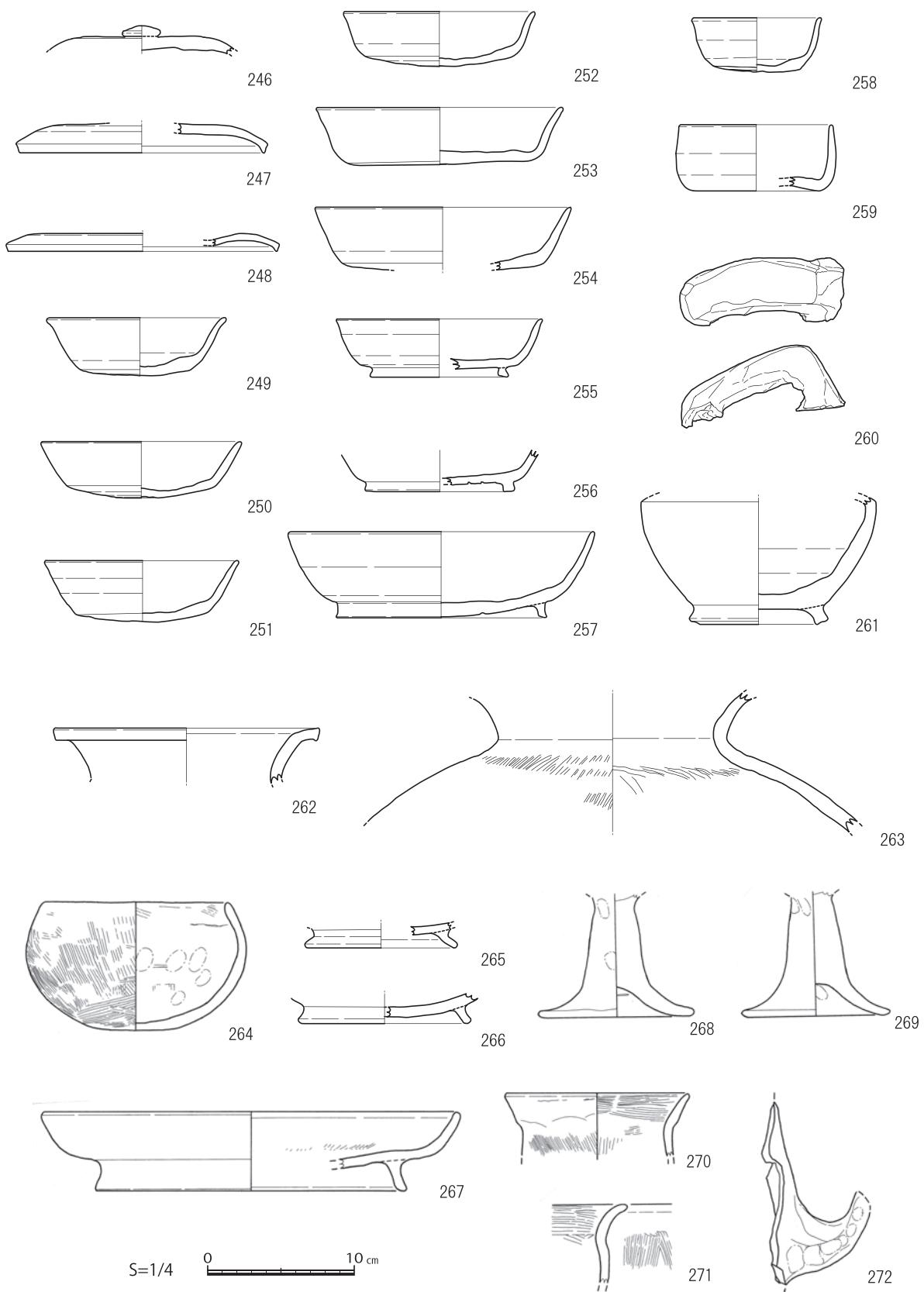


図 57 033 溝出土土器実測図

100 土坑出土遺物 (図 58)

100 土坑は、200 周溝上に形成された土坑である。

273～276 は須恵器坏蓋の破片。273 は扁平な摘みが確認できる破片。274～276 は口縁端部の破片で、復元口径 17.8～20.0 cm である。276 は色調が乳白色を呈し、口縁端部を下方に折り曲げるものである。274・275 は色調が青灰色で白色粒を多く含み、端部下面は三角形に被厚させるにとどめるものである。

277～279 は須恵器杯身。277・278 は胎土・色調が 273～275 と類似する平底の坏身。底部は

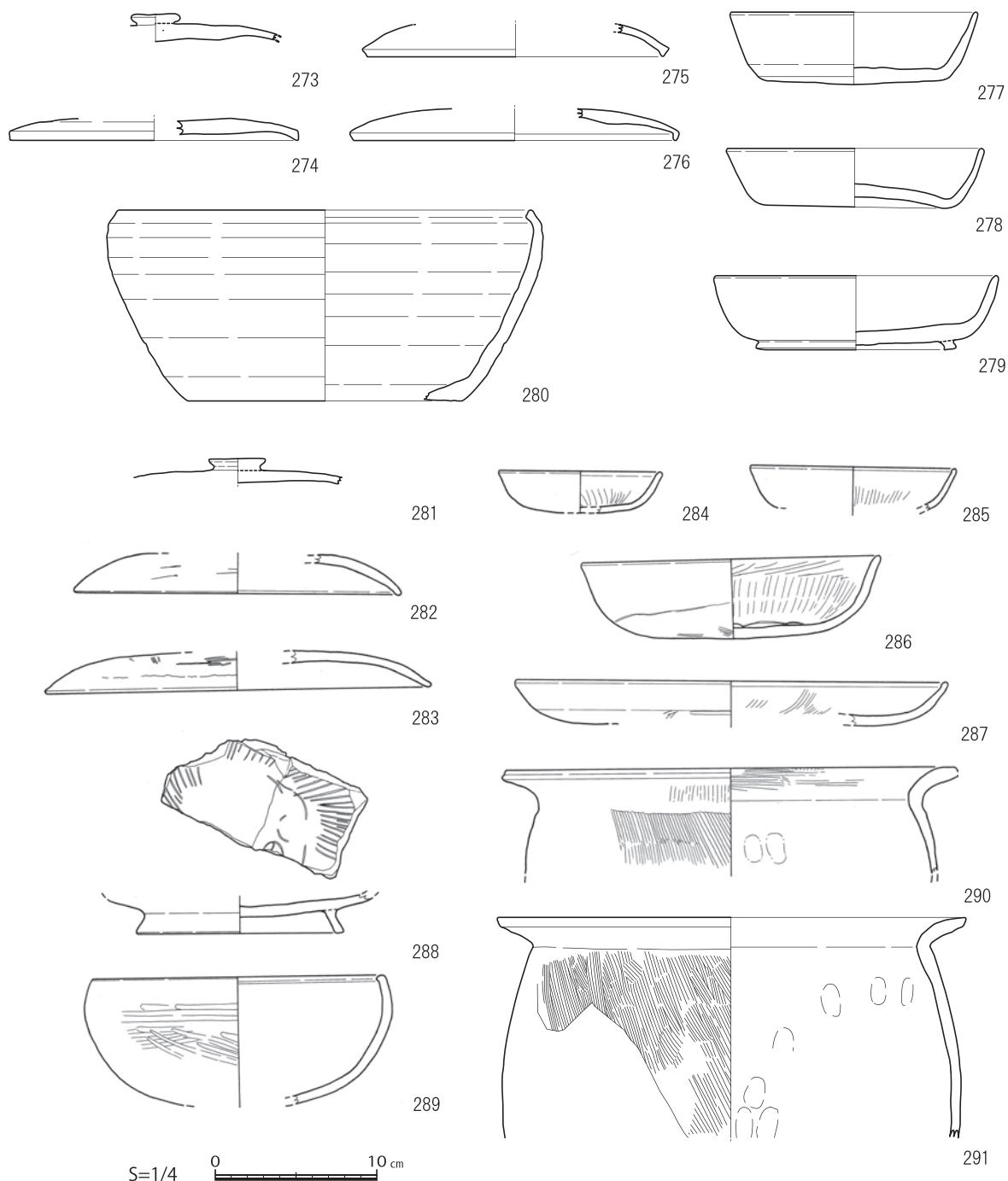


図 58 100 土坑出土土器実測図

あまりきれいに平坦ではなく、口径部はやや内湾する。底部と口径部の境の屈曲はあまい。279は高台が付く壊身。色調は灰色で、胎土に砂粒を多量に含む。

280は須恵器鉢。口縁部は内湾し、鉄鉢型を呈するもので、底部は平底となる。色調は乳白色。口径25.6cm、器高11.8cmである。

281～283は土師器蓋の破片。つまみのある蓋で天井部には不定方向のケズリを施した後、ミガキが施される。

284～288は土師器壊。内面に放射線状暗紋を施す畿内系暗紋土師器である。284は口径10.0cm、器高2.5cmと小さく、口径端面を丸める。285は口径12.5cm、器高2.6cmで、口径端面を内側に屈曲させる。286は口径18.1cm、器高5.0cmと深く、2段の放射状暗紋を施し、口縁端部は単純に丸める。287は口径26.4cm、器高2.7cmと大きく、口径部はなだらかに内湾し、口縁端面を内側に屈曲させる。288は高台があり、放射状暗紋のほか、見込み部に連結輪状暗紋が若干観察される。

289は土師器鉢。内湾度が深く、外面はミガキ調整。内面は表面がはがれた部分が多く、ミガキ調整の有無は不明である。

290・291は土師器甕。口縁部は厚く、頸部の屈曲度は大きい。内面は指頭圧痕が残り、外面はハケメ調整である。

100 土坑の出土遺物は、8世紀前半の土器群として評価できる。なお、土器のほかに、円筒埴輪片1点(587)と土管片1点(600)が出土している点が注目できる。

194 土坑出土土器 (図59)

292は須恵器壊蓋。口縁部が下方へ折れ曲がる。焼成がやや甘く乳白色を呈する。293～295は須恵器壊身。293～295は体部から口頸部が斜め上方へまっすぐ延びる。296は体部が丸みを帯び、口縁部が外反する。

297・298は畿内系暗紋土師器。口縁端部内側が丸く肥厚している。297は直径11.4cm、器高2.6cmで、体部に放射線状暗紋、底部に連結輪状暗紋を施す。297は橙色、298は浅黄橙色を呈する。299・300は土師器甕の口縁部。299は口径13.8cm、300は口径19.7cmで、頸部は大きなカーブを描いて曲がる。このほか、暗紋のある土師器片は3点出土しており、2点は鉢、1点は盤の破片と考えられる。古代の製塩土器片も6点出土している。

194 土坑の出土遺物は、8世紀の遺物と考えられる。

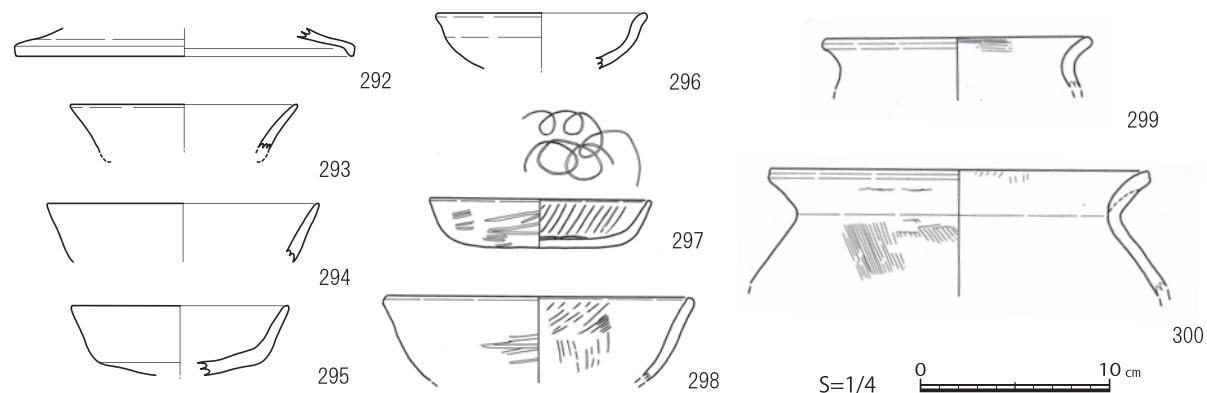


図59 194 土坑出土土器実測図

＜その他の遺構から出土した古代の土器＞（図 60）

123 ピット出土遺物

301 は黒色土器のミニチュア片口鉢。口径 7.8 cm、器高 2.8 cm の完形品である。内外両面にミガキを施し、黒色処理されている。平安時代後期のものと考えている。

141 ピット出土遺物

302 は黒色土器塊。内面全面に粗い磨きを施し、黒色処理する。直径がやや小さく、外側にふんばった高台をもつ。

144 ピット出土遺物

303 は土師器塊。内外面不調整。11世紀頃の遺物であろう。

221 ピット出土遺物

304 は土師器坏。強い回転ナデにより器壁に段がついている。305 は土師器皿。底部と体部の境界を回転ナデで面取りしている。底部は不調整。

257 土坑出土遺物

306 は須恵器蓋。最大部の復元径は 8.0 cm と小さく、口縁部よりもかえりが若干下にでている。体部は直線的であり、坏蓋とも壺類の蓋とも考えられる。307 は須恵器高坏の坏部片。口縁部が内湾するもので、須恵質というより瓦質焼成に近い。308 は土師器甕。口径 17.3 cm、残存高 21.5 cm で、やや胴が長い。外面はハケ調整で、胎土は粗く、内面は指頭圧痕が多い。頸部は緩やかな曲線を描き、口縁端部外面が面を持ち、尖った印象をもつ。

257 土坑の出土遺物は、7世紀中頃のものと考えられる。310 以外は小片である。

321 ピット出土遺物

309 は須恵器坏身。平底の底部から直線的に口縁部が立ち上がり、やや低い高台をもつ。310 は土師器の口縁部片。外面は回転ナデにより段差がつき、口縁端部内側に沈線をもつ。

322 ピット出土遺物

311 は黒色土器皿。内外面全面をミガキ、黒色処理する。底部は丸みを帯び、口縁部は強い横ナデにより薄く、外反する。

326 土坑出土遺物

312 は須恵器坏蓋。口径 11.1 cm と小型で、飛鳥Ⅲに相当するものであろう。胎土に黒色土塊を多量に含み。焼成時の変形と自然釉薬、別個体との融着痕がみられる。

329 井戸出土遺物

313・314 は土師器坏。平坦な底部と、斜め上に開く口縁部から成るが、口縁部は若干内湾する。口縁部外面は強い回転ナデにより段差をもつ。底部では粘土紐巻き上げ痕が若干観察できる。

313 は口径 12.6 cm、器高 3.2 cm、314 は口径 14.5 cm、器高 10.8 cm。315 は土師器皿片。表面は摩耗している。316 は土師器高坏の脚部片。中空の 8 面体で、胎土に 1 cm の石粒を含んでいる。

329 井戸の出土遺物は 313・314 が完形品であり、意図的に沈められたものと考えられる。315・316 は破片であり、投棄されたものと考えられる。ともに平安時代前期の遺物と考えられる。

353 土坑出土

317 は土師器甕。直径 14.7 cm、器高 16.6 cm。口縁部は比較的緩やかに湾曲し、端部はまるめる。外面をハケ調整するほか、口縁部内面から内部上半の一部までヨコハケする。底部はやや平坦な丸底。体部の 3 分の 1 を欠失する。318 は土師器把手付き鍋。胴部最大径が 24.3 cm と大きいもので、

口縁部を欠失する。外面ハケメ調整で、相対する方向に大小の黒班がある。

353 土坑の出土遺物は、7世紀後半から8世紀前半のものと考えられる。

＜遺物包含層から出土した古代の土器＞（図 60）

319 は須恵器蓋。摘みが宝珠をしており、口縁部の内側に微妙にかえりが残る。建物 1 検出中出土した。口径 15.6 cm。320 は須恵器坏蓋で、口径 9.8 cm。321 は須恵器坏身と考えられる破片である。7世紀中頃の遺物で、第 2 遺構面検出中に出土した。322 は土師器蓋。扁平な摘みをもち、ドーム状の形状をしている。203 周溝の検出中に出土した。口径 17.1 cm、器高 3.7 cm。

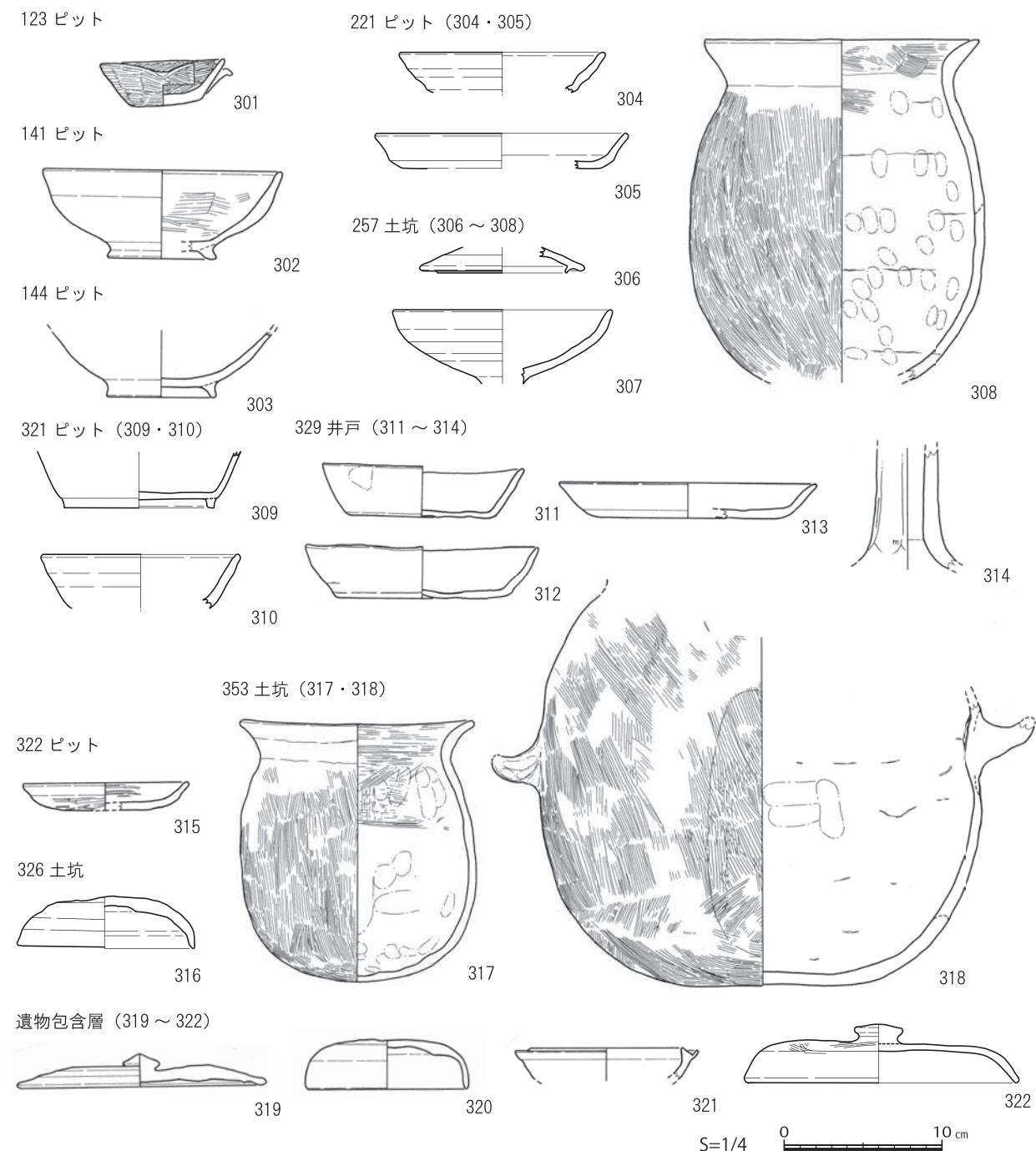


図 60 その他の遺構・包含層出土土器実測図（古代）

5. 中世の土器（平安時代末～安土桃山時代まで含む）

中世の土器は調査区北半の井戸・土坑・ピットのほか、調査区南半の001 大土坑・002・003 大溝などから、多量の瓦とともに出土した。

＜主な遺構から出土した土器＞

085 井戸出土土器（図 61）

323～325は掘り方から出土した土師器。323は暗紋のある土師器皿。底部から口縁部へ緩やかに立ち上がり、口縁端部を内側に被厚させる。暗紋は口縁部内側から皿の中心に向かって真っすぐ引かれている。底部は不定方向のケズリ。324は高台のある土師器皿。表面がやや摩耗しているが、323同様の暗紋があるようである。325は土師器の高台部分の破片。

326～328は白磁碗の破片。326・327は口縁部を外側に折り返す。328は高台がやや高い。

329～333は土師器小皿。すべて底部回転糸切りであるが、331のみ拓本を掲載した。口径は8.2～9.4cm。329・330は口縁部立ち上がりと口縁端部が丸みを帯びているが、331・332は若干シャープになる。333は口縁部外面が2段になり、底部がやや突出する。334・335は土師器皿であるが、口径の割に器高がある。底部は回転糸切りで、口縁部が内湾する。335は胎土は粗く、瓦質焼成で、口縁部外面の横ナデが強く段差を生じている。

336～342は瓦器。回転ヘラミガキが密に施されており、338・339は口縁部内面に沈線をもつ。340・341は底部の破片で、高台が高く、見込み部は不定方向のミガキで充填される。342は瓦器皿。口径10.3cm、器高2.4cm。内面全面にミガキを施す。

085 井戸内出土遺物は、11世紀後半を中心とする遺物と考えられる。

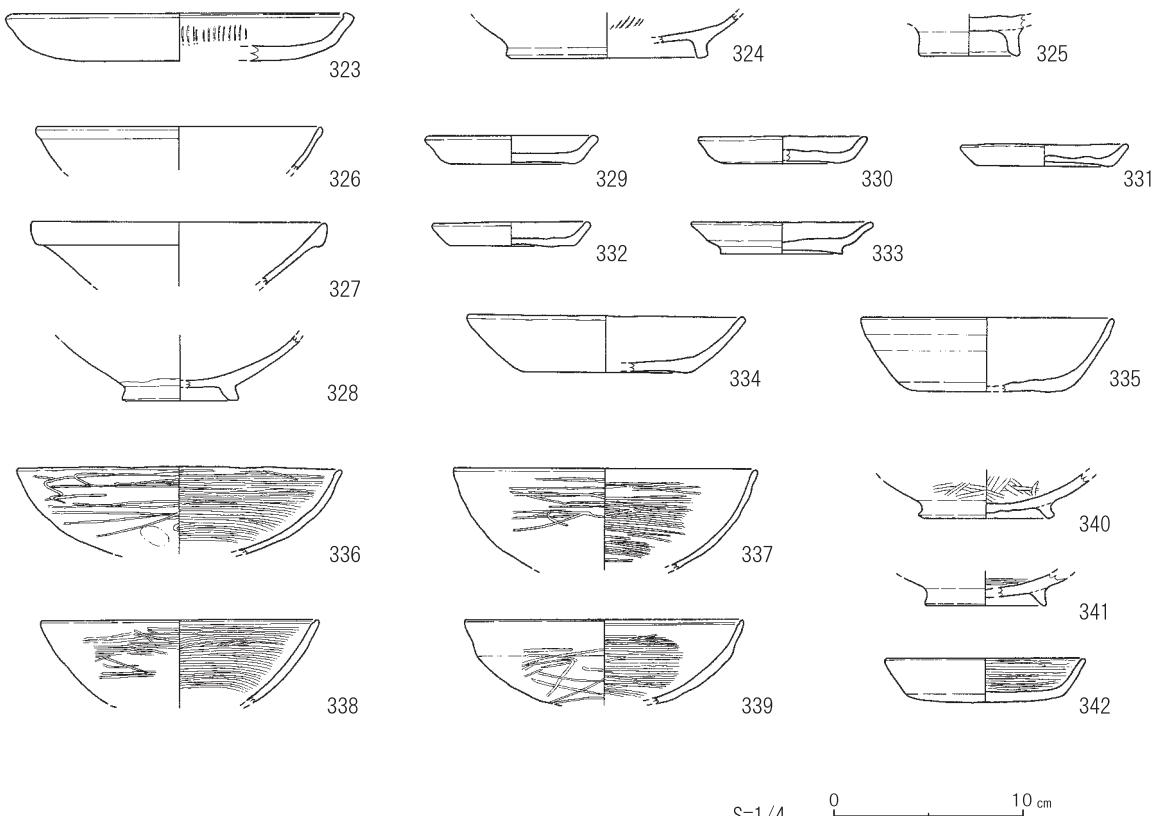


図 61 085 井戸出土土器実測図

090 土坑出土土器 (図 62)

343～354 は土師器小皿。口径 8.8～9.2 cm、底部径 6.3～7.0 cm、器高 1.3～1.6 cm で規格は統一されている。底部は回転糸切り痕の上に、横桟状の圧痕が若干残るものが半数を占める。底部内面が微妙に盛り上がり、口縁部は斜め上方に 1 単位の回転ナデで単純に立ち上がっている。口縁端部は丸めている。底部内面は胎土中に褐色土粒を多量、透明白色の石粒を数点含み、色調はややにぶい橙色で、焼成は良好。このうち、352～354 は灯明皿と考えられるもので、352 の口縁部は赤色化しており、353・354 の口縁部は煤が付着している。なお、354 は粘土紐積み上げ痕が明瞭に残り、353 は口縁部外面に重ね置きによる圧痕、内面に 6 本の短い沈線が確認できる。見かけ上は他の小皿と同一規格であるが、制作・使用上、区分して考えるべきかもしれない。

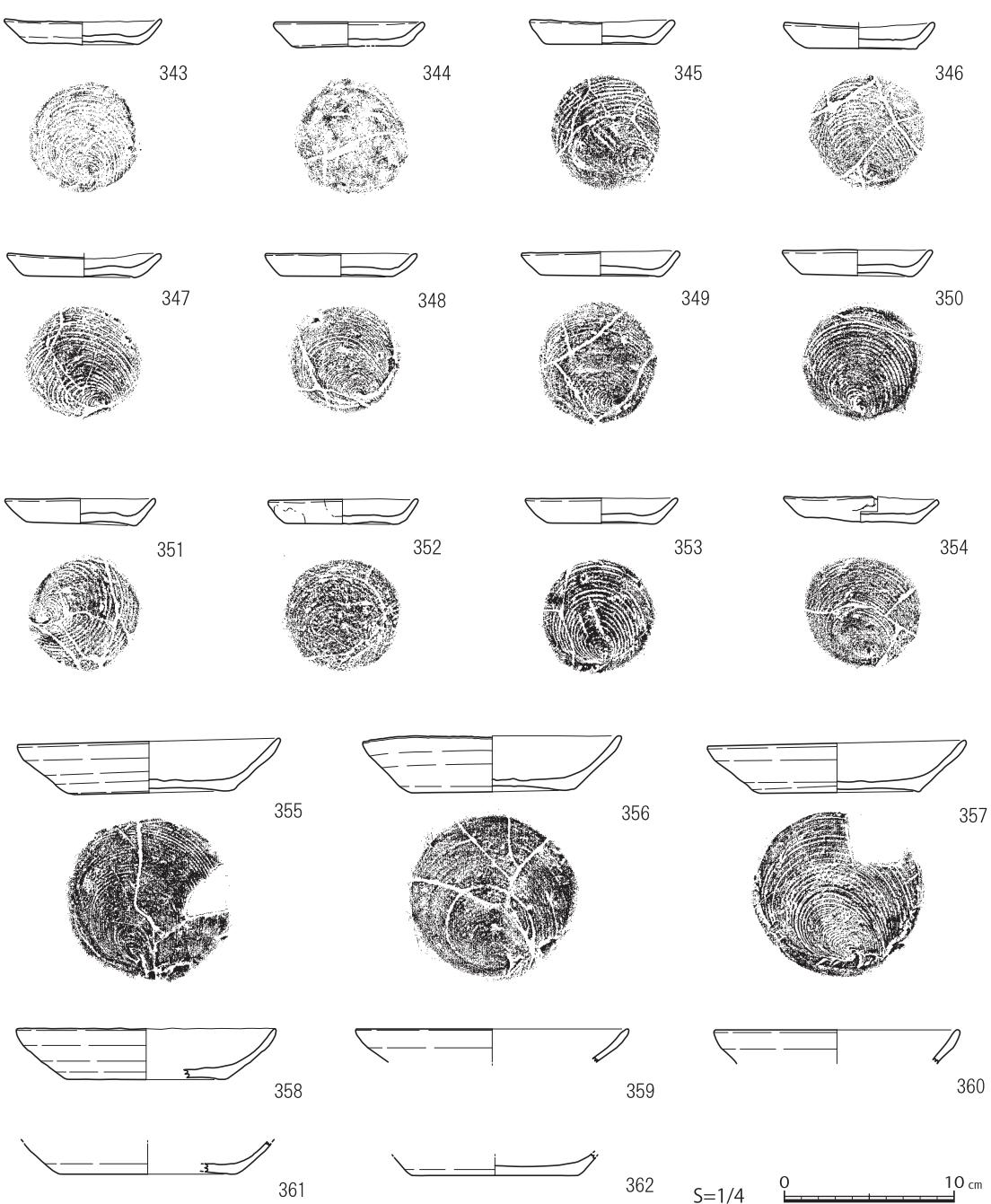


図 62 090 土坑出土土師器皿実測図

355～362は土師器大皿。口径15.2～15.6cm、底部径9.2～9.7cm、器高3.2～3.5cm。底部は回転糸切りで、横桟状の圧痕が確認できるものがある。平底の底部から口縁部が斜め上方へ立ち上がり、端部は丸い。約7回転の回転ナデによって成形されている。

090 土坑からは土師器小皿が50～60点、大皿が8～10点出土した。これらは11世紀の遺物と考えられる。

001 大土坑出土遺物 (図63・64)

363～374は土師器小皿。口径6.2～8.6cm、器高1.0～1.7cmで、制作技法・形状もばらつきが大きい。363～446までは回転糸切り痕が観察できる。363は薄手で、口縁部が厚い。364～368は口縁部が厚手で、器高が高い。369は器高が低い。370は口縁部が厚手で丸く、全体形状は歪んでいる。371は底部周縁を指押さえが連続して周り、底部と口縁部に稜がある。372は底部と口縁部に段差がある。373は底部と口縁部に微妙な段差があり、全体形状は丸みを帯びる。374は底部から口縁部まで丸みを帯びて続き、小さいものである。375・376は土師器中皿。375は口径9.7cm、器高2.1cm。平坦な底部から斜め上方へ口縁部が立ち上がる。底部に指頭圧痕が多数あり、その間に糸切り痕がわずかに残る。376は口径10.6cm、器高2.6cm。底部は丸く不調整で、口縁部外面は強く屈曲する。377～379は土師器大皿。口径は11.6～13.9cm、器高は2.5cm～3.2cm。377は厚手で、低い塊形を呈する。378は底がおおよそ平坦で、口縁部は2段に成形される。379は底部全面に指頭圧痕があり、口縁部は回転ナデ。380は突起の付いた土師器片。突起は回転糸切りによる平坦面の隅についた脚部状のもので、3足の土師器台付き皿か香炉のようなものと推定される。381・382は土師器台付皿。高台が直径4.8～5.3cm、高さ4.0～4.5cmとおおきく、回転糸切りの大皿がのるものと考えられる。

383・384は黒色土器塊。高台は高く、内面を黒色処理する。

385～408は瓦器。385～389は瓦器小皿。385は口縁部の横ナデが強く、386・387は横ナデが弱い。385・387・389は形状の歪みが大きい。390～40は瓦器塊。390～394は高台のある段階のもので、393は口径13.7cm、器高4.4cm。390は12世紀後半、391～394は13世紀の遺物であろう。397～404は高台が消失した段階のもので、容量が減っていく段階の資料がそろっている。399は口径13.8cm、器高3.4cm、404は復元口径10.6cm、器高2.6cm。405は瓦器鉢の底部とみられる破片。405～408は瓦器小碗。406は口径6.8cm、器高2.5cm。体部のミガキが少なく、13世紀代の遺物と考えている。

409・410は白磁碗の底部、410は青白磁の皿で、11世紀後半から12世紀にかけての遺物と考えられる。411～415は青磁の口縁部と底部の破片。411・413は龍泉窯I類の碗で12世紀後半、415は15世紀の遺物で二次焼成を受けている。417～419は土師器の土釜・羽釜の口縁部片。420は瓦質土器の羽釜。421・422は須恵器こね鉢。423・424は備前焼擂鉢。425は備前焼壺。土釜・羽釜は12～15世紀、捏鉢・擂鉢は13～15世紀、壺は14世紀の遺物と考えられる。

426～428は001土坑の検出面で出土した遺物である。426は唐津焼の皿と考えられる。427は唐津焼碗。内面に緑色釉を施し、底部高台内に墨書がある。墨書は不明であるが、「文」の可能性などあ考えられる。428は瀬戸美濃系の土瓶と考えている。

001大土坑は11世紀から15世紀の遺物が上層・下層ともに含まれており、検出面には安土桃山時代ないしは江戸時代初期の陶器が出土していることから、11世紀から15世紀に渡って遺物が投棄された谷状地形（池か）であり、中世末に完全に埋まったものと考えられる。

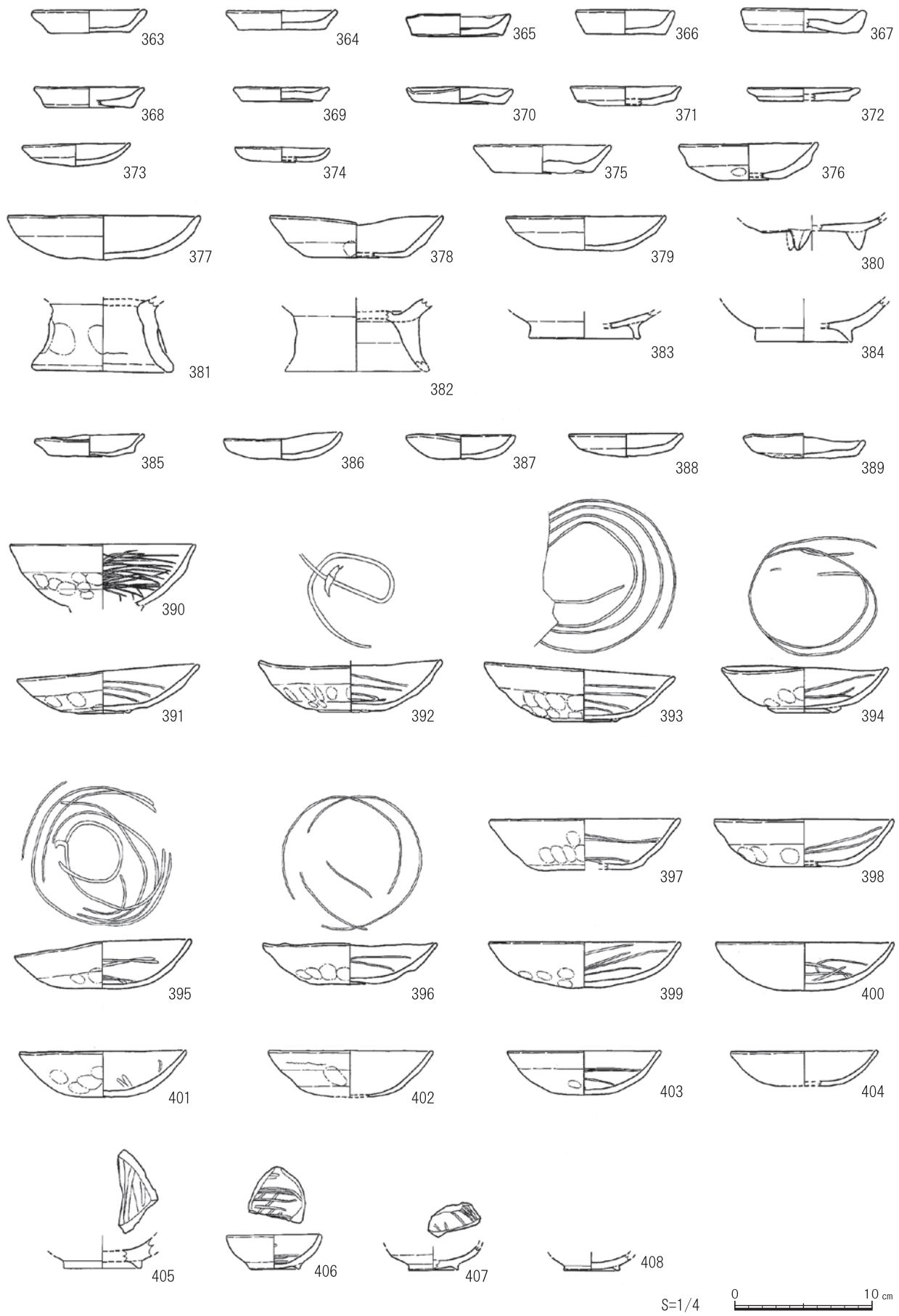


図 63 001 大土坑出土土器実測図①(土師器・瓦器)

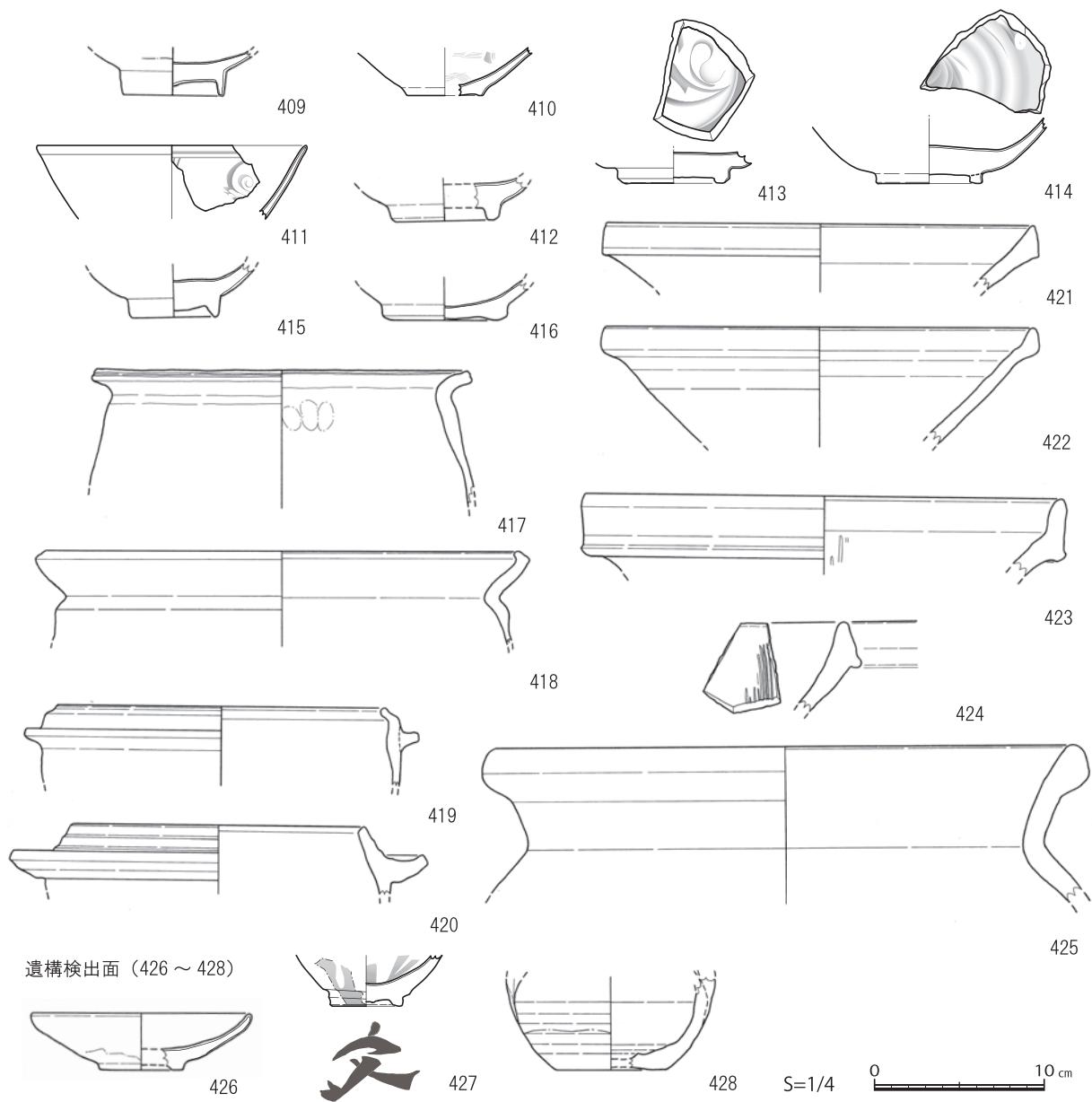


図 64 001 大土坑出土土器実測図②(陶磁器)

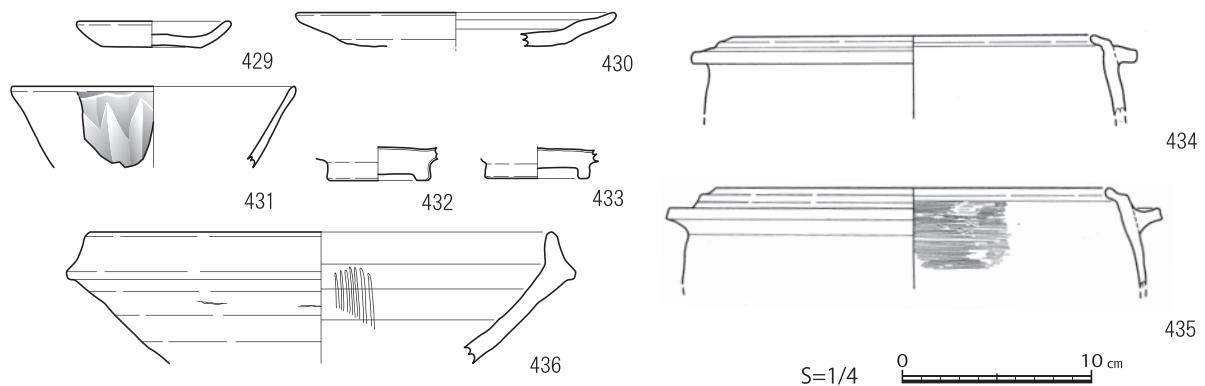


図 65 002 大溝出土土器実測図

002 大溝出土土器 (図 65)

出土遺物の大半を瓦が占めており、土器は破片が少量出土した。

429 は土師器小皿。430 は土師器大皿。皿の口縁部が屈曲する。431 は鎬蓮弁紋の青磁碗で 13 世紀後半、432 は 12 世紀の青磁碗底部。433 は 14 ~ 15 世紀の瀬戸美濃系陶器碗の底部。434・435 は土師器羽釜。ともに口縁部が内径し、短い鍔をもつ。436 は備前焼擂鉢。14 世紀後半。

002 大溝は 001 土坑の上層にあるため 15 ~ 16 世紀に形成されたものと推定されるが、出土遺物の年代が合致しないため、これらの土器は、埋め立て土に混入していた土器と推定される。

003 大溝出土土器 (図 66)

出土遺物の大半を瓦が占め、土器のほか鋳造関連の遺物が多数混在している。

437 ~ 440 は土師器皿。437・438 は回転糸切りによる平底と推定されるもので、437 は口径 8.6 cm、器高 1.2 cm。439・440 は不調整で、指頭圧痕が多数ついており、440 は口径 10.9 cm、器高 2.7 cm。441 は龍泉窯系の青磁碗で 12 世紀後半、442 は瀬戸美濃系の灰釉陶器碗で 15 世紀後半～16 世紀前半。443 は備前焼擂鉢片、444 は土師器羽釜、445 瓦質土器羽釜、447 は瓦質土器火鉢で、15 世紀頃の遺物と考えられる。447 は復元口径 33.4 cm。446 は瓦質土器甕、448 は備前焼の底部である。

003 溝出土遺物は 15 世紀のものが多いが、遺構の形成年代を示すか検討が必要である。

＜その他の遺構から出土した中世の土器＞ (図 67)

008 溝出土土器

449 は瓦器小碗。高台が高く、しっかりしている。

011 溝出土土器

450 は瓦器甕。器形は歪み、底部に微妙に高台を貼りつける。口径 13.1 cm、器高 3.5 cm。

013 溝出土土器

451 は土師器小皿。

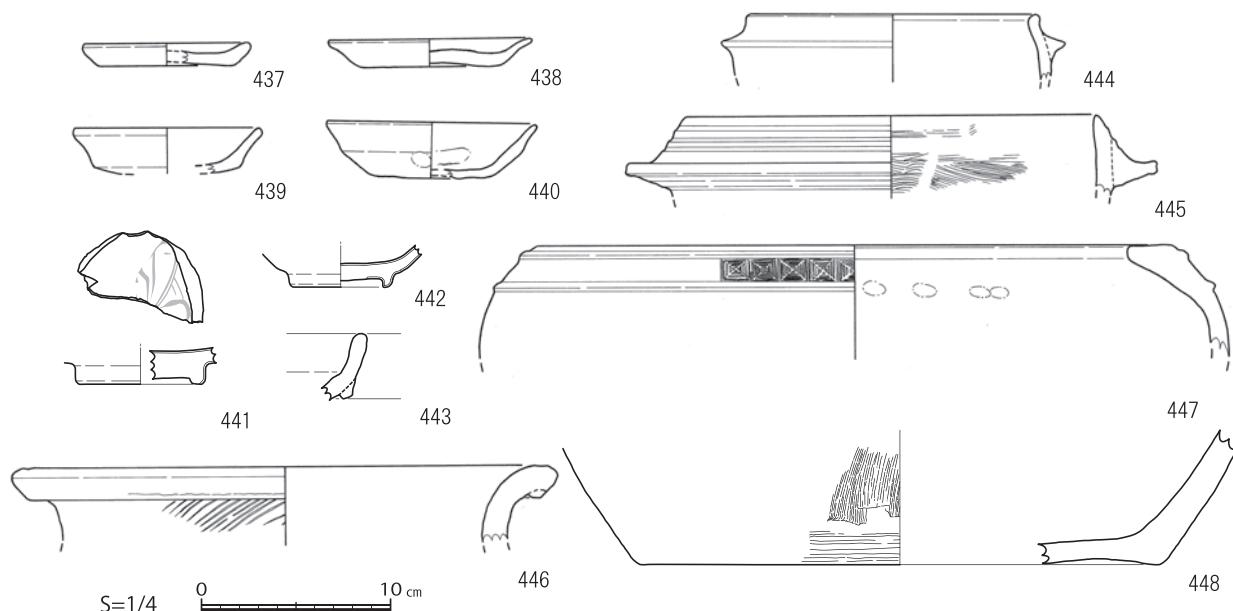


図 66 003 大溝出土土器実測図

024 土坑出土土器

452 は常滑焼甕の口縁部。14世紀後半頃の遺物と考えられる。453 は備前焼大甕の口縁部。

075 井戸出土土器

454 は青磁碗。455 は土師器皿。口径 12.5 cm、器高 2.4 cm。底部は不調整で、口縁部は横ナデ。

456 は土師器土釜の口縁部片。

086 土坑出土土器

457 は土師器皿。口径 13.3 cm、器高 3.3 cm。器壁はやや厚く不調整で、形状は丸みを帯びる。

091 ピット出土土器

458 は土師器小皿。口径 9.2 cm、器高 2.2 cm。底部は平底で、板状圧痕が残る。厚手で、口縁部は斜め上方へのびる。

093 土坑出土土器

459・460 は瓦器の台付皿。459 は口縁部片で、内湾している。460 は高台部分の破片。

101 土坑出土土器

461 は瓦器塊。内外面ともにミガキで充填されており、口縁端部内面に沈線がある。

103 ピット出土土器

462・463 は土師器小皿。462 は「て」字状口縁皿。口径 10.8 cm、器高 1.7 cm。463 は底部回転糸切りの皿。完形品である。

106 土坑出土土器

464 は瓦器塊。内外面ともにミガキで充填されており、口縁端部内面に沈線がある。

132 ピット出土土器

465 は瓦器皿。内面全面にミガキを施す。口縁部外面に沈線状の段差がある。

136 ピット出土土器

466・467 は土師器台付皿。口縁部外面は強い横ナデにより段差を生じている。

145 ピット出土土器

468・469 は土師器小皿。468 は「て」字状口縁皿。完形品である。口径 9.3 cm、器高 1.8 cm。

469 は底部回転糸切りの皿。口径 8.4 cm、器高 1.5 cm。

149 ピット出土土器

470 は土師器小皿。「て」字状口縁皿の破片である。

152 ピット出土土器

471 は土師器小皿。底部回転糸切りを施し、口縁部が丸みを帯びる。

165 ピット出土土器

472 は土師器小皿。粘土紐巻き上げ痕が観察でき、形状は歪みが大きい。

196 ピット出土土器

473 は土師器小皿。底部は不調整で、全体的に歪みが大きい。口径 9.2 cm、器高 2.2 cm。

204 土坑出土土器

474 は瓦器塊。口径 16.5 cm、器高 6.5 cm。口縁端部内面に沈線があり、見込みには平行線状の暗紋を施す。高台はしっかりとしている。

222 土坑出土土器

475 は備前焼擂鉢の口縁部片

297 土坑出土土器

476 は土師器小皿。口径 9.0 cm、器高 1.3 cm。477 は土師器大皿。復元口径 15.0 cm、器高 2.3 cm。

090 土坑出土遺物と類似する年代の資料と考えられる。

328 井戸出土土器

478 は青磁碗。479 は瓦器皿。480 は瓦器塊。

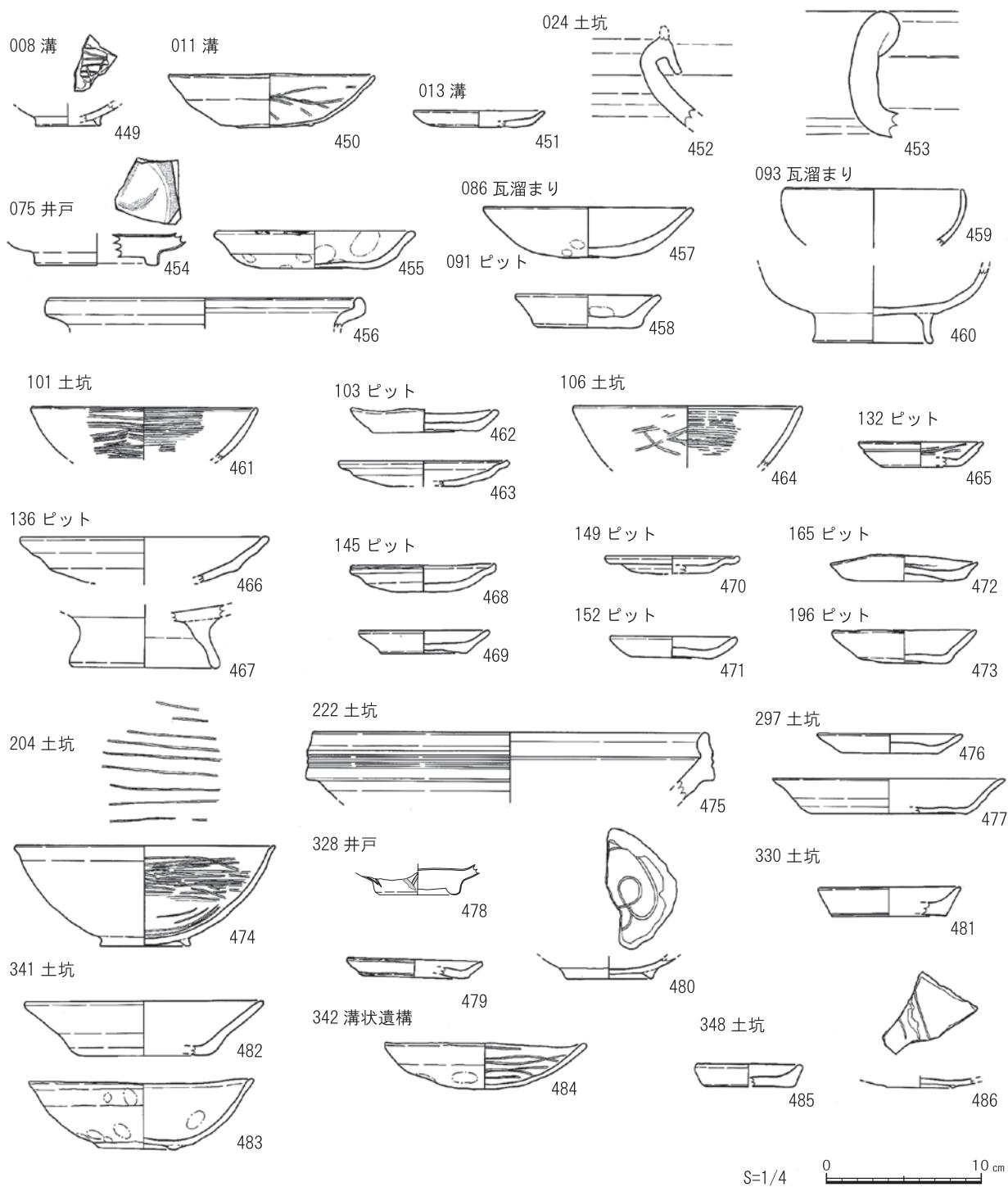


図 67 その他の遺構出土土器実測図（中世）

330 土坑出土土器

481 は土師器小皿。厚手で、復元口径 9.0 cm、器高 1.9 cm。

341 土坑出土土器

482 は土師器大皿。底部を回転糸切りする皿で、口縁部の横ナデの段は明瞭ではなく、やや厚手になっている。483 は瓦器塊。高台が低く、やや中心からはずれる。摩耗が激しくミガキ痕が判然としない。口径 14.4 cm、器高 4.5 cm。12 世紀前半頃の遺物と考えられる。

342 溝状遺構出土土器

484 は瓦器塊、浅く、高台はなく、見込みの暗紋と器壁のミガキは 5 回転の楕円状暗紋になっている。残存率 80%。口径 12.4 cm、器高 3.0 cm。

348 土坑出土土器

485 は土師器小皿。底部回転糸切りで、底部は厚く、口縁部は三角形状になる。486 は瓦器塊の底部片。高台が非常に低く、見込み部に重ね焼きによる融着痕が残る。

6. 近世・近現代の土器・陶磁器類 (図 68)

<遺構から出土した土器>

073 近世耕作溝出土土器

487 は青磁染付碗の口縁部片。

080 円形土坑出土土器

488 は遺伝子紋小碗。明治時代の遺物と考えられる。

近代土坑 (u9 攪乱) 出土土器

489～491 は灰色釉を施す京・信楽系陶器の灯火具。489 は灯明油皿、490 は灯明受皿、491 は脚付灯明受皿。このほか、通い徳利、蛸唐草紋染付など、近世末期と近代の遺物が混在している。

近代土坑 (q10 攪乱) 出土土器

492 は染付の水差し。493 は柿右衛門様式の色絵仏飯器。494 は土師質の焙烙。このほか、絵唐津の小碗や手描き五弁花紋のある染付片など、江戸時代後期～末期の遺物が出土している。

近代土坑 (p9 攪乱) 出土土器

495 はミルクガラス製のメンソレータム容器。大正 9 年 (1920) に輸入販売の始まった軟膏の容器で、海草中学校 (大正 4 ～昭和 23 年) か向陽高等学校 (昭和 23 年～) の遺物である。土器ではないが、類似する容器としてここに掲載する。

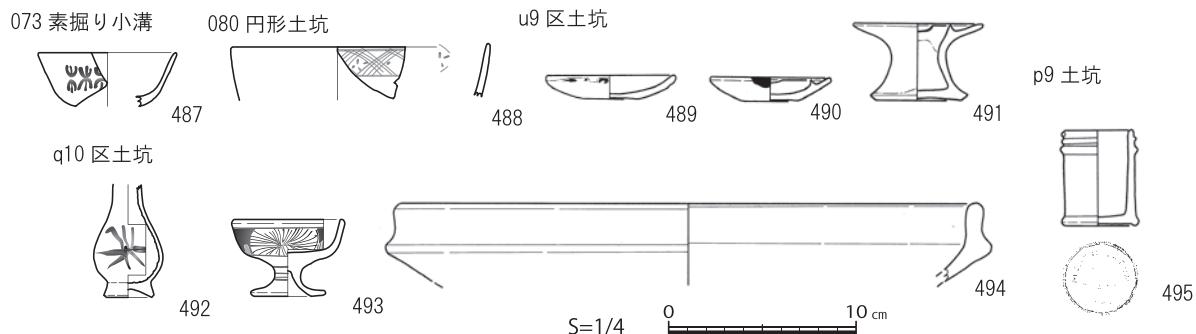


図 68 近世・近現代の土器実測図

第2節 瓦 (図 69 ~ 76)

調査地周辺は文献で知られる貞福寺跡にあたり、瓦・土器を収納した 191 箱のうちの半分を瓦が占めている。近世後半以降の 1 箱分を除き、平安時代末から室町時代末までの瓦である。075 瓦積み井戸で平瓦・軒平瓦の完形品が多数使用されていたほか、086 土坑・001 大土坑・002 溝・003 溝・004 土坑・024 土坑等で破片が出土した。

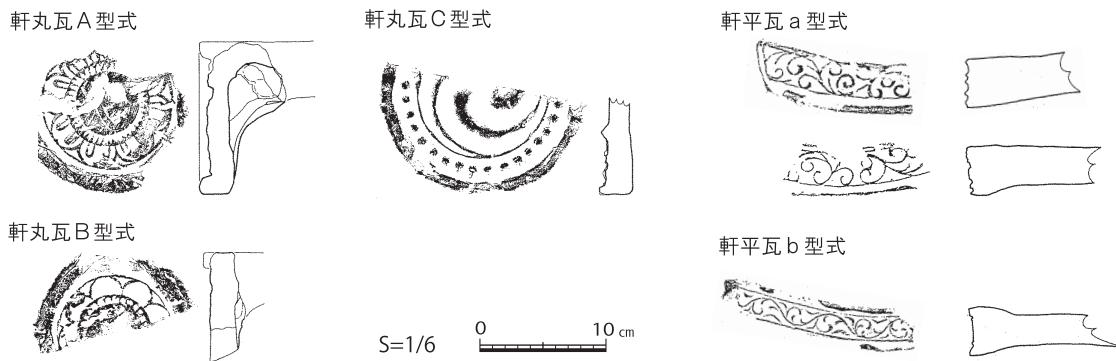


図 69 過去の調査で出土した貞福寺跡の軒瓦

1. 軒丸瓦 (図 69 ~ 71)

平安時代末～室町時代末のものと考えられる軒丸瓦が 18 型式、51 点出土している。県第5次調査では 3 型式あり、合わせて 21 型式の軒丸瓦が、文献で存在が知られている貞福寺の瓦と認識される。類似する瓦当紋様が多く煩雑なため、県第5次調査で出土した軒丸瓦を A～C 型式とし、今回の調査で出土した軒平瓦を D～U 型式として整理し、報告することとする。

このほか、表面採集品として調査区北側にあるグラウンドで白鳳期の上野廃寺式の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦 1 点と、調査地南側一帯の小字「神畔」で表採された平安時代後期の八弁蓮華紋軒丸瓦 2 点があるが、これらについては型式を設定しない。なお、瓦の計測値は基本的に平均値をとり、瓦当の厚さは瓦当中央付近の凹凸のない部位で測った。

〈県第5次調査で出土した軒丸瓦〉 (図 69)

A型式 雄蕊帶のある複弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、中央に梵字を表す (『秋月遺跡』和歌山県文化財センター 1994) の 174)。瓦当面の復元径約 14 cm、厚さ 17 mm。

B型式 A型式の子葉を省略した紋様の素弁八弁蓮華紋軒丸瓦 (同書 201)。瓦当面の径は 11.5 cm、厚さ 2.1 cm。

C型式 左三巴紋軒丸瓦 (同書 202) で、珠点数は推定 34。瓦当面の径は 16.0 cm。

〈複弁八弁蓮華紋軒丸瓦〉 (図 70)

平安時代後期の複弁八弁蓮華紋軒丸瓦が 3 型式、15 点ある。

複弁八弁蓮華紋で間弁が確認できるものを D 型式、複弁蓮華紋軒丸瓦の紋様構成を残しているが見かけ上单弁 16 弁蓮華紋となっているものを E 型式、中房が大きく、連弁が短く簡素化し、珠点数が多いものを F 型式とする。どの型式の個体もほとんどが瓦当面 4 分の 1 ほどしかない小破片となっており、中世の遺構埋土から出土している。

D型式 間弁のある複弁八弁蓮華紋の軒丸瓦。瓦当面の直径は不明で、厚さは 2.0 cm。

周辺の発掘調査で出土した軒丸瓦の中では最も古い型式に相当する。

496 は o 17 地点の 2 層～3～2 層を掘削中に出土しており、摩耗が激しく、鉄分が吸着している。出土点数は 1 点で、蓮弁部分の小片である。

E型式 単弁 16 弁蓮華紋軒丸瓦で、珠点数は 16。瓦当面の直径は 15.0 cm、厚さ 1.1 cm。

基本的に複弁 8 弁蓮華紋軒丸瓦が単弁化したものと考えられる。中房に小さい蓮子を 1 + 4 個配し、低い界線が回る。蓮弁の輪郭と間弁が一体化し、子葉は立体的。間弁どうしが繋がり、界線状に回る。周縁は素縁でやや高く、瓦当は薄く、裏面下半部の縁は丸みを帯びる。縁の内面と蓮弁には範が複数回当たった痕があるものが多い。丸瓦部は凹面布目、凸面縄叩き目の残る丸瓦 (567) を使用し、先端を加工せず瓦当に深くあてて、上下面から接合粘土を足す。胎土は粘質で、須恵質焼成。

001 大土坑から 4 点、003 溝・004 土坑・3～4 層から各 2 点、007 土坑・3～2 層・3～3 層から各 1 点、計 13 点が出土した。(497～507)

軒平瓦 b 型式と組み合い、貞福寺創建期の軒瓦の一つになるものと考えられる。

F型式 複弁八弁蓮華紋軒丸瓦の子葉がない型式のもので、復元珠点数は約 32。瓦当面復元径 14 cm、厚さ 1.8 cm。

蓮弁は短く、珠紋帶の内外には圈線がまわる。中房の周りに、A・B 型式同様の雄蕊帶が回る可能性がある。縁は平縁で、瓦当面に離れ砂が付着する。頸は D 型式のように丸くならず、しっかりと稜がある。胎土は砂質で、瓦質焼成。近世の耕作土中から 1 点が出土した。(508)

〈巴紋軒丸瓦〉 (図 70・71)

中世の巴紋軒丸瓦は 13 型式、27 点出土した。巴紋の巻きの方向は、巴の頭から尾へ向かって時計回り (右巻き) は少なく、半時計周り (左巻き) が多い。巴紋はすべて三巴で巴紋の尾がそのまま界線となるものが多く、すべて珠紋がまわる。丸瓦との接合は、先端無加工の丸瓦を瓦当に深く垂直に当て、凹凸面に接合粘土を足して接合する。I 型式が 8 点、H・N 型式が 3 点、G・L 型式が 2 点、その他の型式が各 1 点、型式不明のものが 1 点出土している。

G型式 左三巴紋で、珠点数は 16。瓦当の径は 15.3 cm、厚さは 2.5 cm。

巴の頭は離れ、尾は細く長い。珠点径 11 mm。509 の瓦当面は型抜き後に押圧を受けしており、木目が浮き上がっている。丸瓦部凸面は縦方向のケズリ、凹面は糸切りと布目痕が残る。胎土は細かく、瓦質焼成。086 瓦溜りと 001 大土坑から各 1 点出土した。

H型式 左三巴紋で、珠点数は 17 か 18。瓦当面の復元径は約 14.0 cm、厚さは 0.9～2.1 cm。巴の頭は尖り、最大幅は 19 mm、尾は長い。珠点の大きさは 10 mm。胎土はやや細かく、瓦質焼成。001 大土坑から 1 点、075 井戸から 2 点出土している。

I 型式 左三巴紋で、珠点数は 22。瓦当の径は約 13.7 cm、厚さ 2.0 cm。

巴の頭は尖り、最大幅 18 mm。珠点は径 7 mm である。

I 1 段階 範の木目が浮き上がっていない段階の資料。075 井戸で完形品が 1 点 (513)、001 大土坑・002 大溝・3-3 層から破片が各 1 点出土した。

I 2 段階 範の木目が浮き上がった段階の資料。002 大溝・003 大溝・3-3 層・3-4 層から各 1 点、計 4 点出土した。(514・515)

- J型式 左三巴紋で、珠点数は推定 21。瓦当面の径は約 13.6 cm、厚さは 1.7 cm。巴の頭は細く、最大幅 13 mm。珠点は 9 mm。丸瓦部は内面は布目、外面はナデ調整がみられる。胎土は砂粒が多く、瓦質焼成。024 土坑から 1 点出土した。(516)
- K型式 左三巴紋で、珠点数は 20 か 21。瓦当面の径は約 11.0 cm、厚さは 1.8 cm。巴の巻き込みが大きい。珠点は径 10 mm。024 土坑から 1 点出土した。(517)
- L型式 左三巴紋で、珠点数は推定 32。瓦当面の径は約 12.0 cm、厚さは 1.6 cm。巴はやや細く、珠点は径 6 mm。瓦当面に多量の離れ砂が付着する。胎土は粘質で、須恵質焼成であるが、018 土坑出土資料は二次焼成を受け赤くなっている。018 土坑と調査廃土から各 1 点 (519)、計 2 点出土した。
- M型式 左三巴紋で、推定珠点数 25。縁がやや歪み、瓦当面の径は 13 ~ 16 cm、厚さは 15 mm。珠点は径 4 mm と小さく、縁が広い。胎土はやや砂質で、2 次焼成を受け赤みを帯びる。018 土坑から 1 点出土した。(520)
- N型式 左三巴紋で、珠点数は 14。瓦当面の径は 13.5 cm、厚さ 16 mm。巴の頭は丸く、立体的に突出する。珠点は径 8 mm で高く、縁も高さ 1.4 cm ある。丸瓦部凹面はナデとケズリを施した上で側面を面取りし、凸面は縦方向にハケ状工具でナデる。胎土はやや砂質で、須恵質焼成に近く、瓦当面に多量の離れ砂が付着する。001 大土坑 (521)・024 土坑・2 ~ 3 層から各 1 点、計 3 点出土した。ともに珠点を横断する范傷が認められる。
- O型式 左三巴紋で、珠点数は 21。瓦当面の径は 13.7 cm、厚さ 19 mm。巴の頭は丸く、珠点は径 8 mm。縁は高さ 8 mm と比較的高い。巴紋と珠紋の間に圈線が回る。胎土は砂質でやや粗く、瓦質焼成。瓦当面に離れ砂が多量に付着する。001 大土坑から 1 点出土した。(522)
- P型式 右三巴紋と考えられ、珠点数は 19 か 20。瓦当面の径は約 13 cm、厚さ 1.7 cm。巴は S 型式に比べ巻き込みが緩い。珠点は径 8 mm で、珠点と外縁の間に圈線がみられる。縁の高さは 1.4 cm と高い。胎土は砂粒を比較的多く含み、2 次焼成の影響と思われる赤みがある。001 大土坑から 1 点出土した。(523)
- Q型式 左三巴紋で、珠点数は 33 か 34。瓦当は丸瓦接合部から剥離したものとみられ、直径は不明。厚さは 2.0 cm。巴の外側が広く、緩やかな凹凸がある。珠点の径は 6 mm。胎土は砂質で、二次焼成を受け赤みを帯びている。003 大溝から 1 点出土した。(524)
- R型式 左三巴紋で、珠点数は 16。瓦当面の径は不明、厚さは 1.9 cm。巴の頭は丸く、細く、尾は長い。珠点の径は 7 mm。胎土・焼成は H 型式に類似し、砂質で、瓦質焼成。3 ~ 4 層から 1 点出土した。(525)
- S型式 右三巴紋で、珠点数は 20。瓦当面の径は約 13 cm、厚さは 1.1 cm。巴は S 型式より巻き込みが強い。珠点は径 8 mm で、縁の高さは約 3 mm と低い。胎土は砂質で、瓦質焼成。2 ~ 3 層から 1 点出土した。(526)
- このほか近世以降のものと推定される巴紋軒丸瓦の破片が 2 点出土している。529 は瓦当面に離れ砂を用い、丸瓦部凹凸面をナデる。530 は瓦当面にキラコを用い、丸瓦部凸面はミガキ、凹面はゴザ状の圧痕がある。

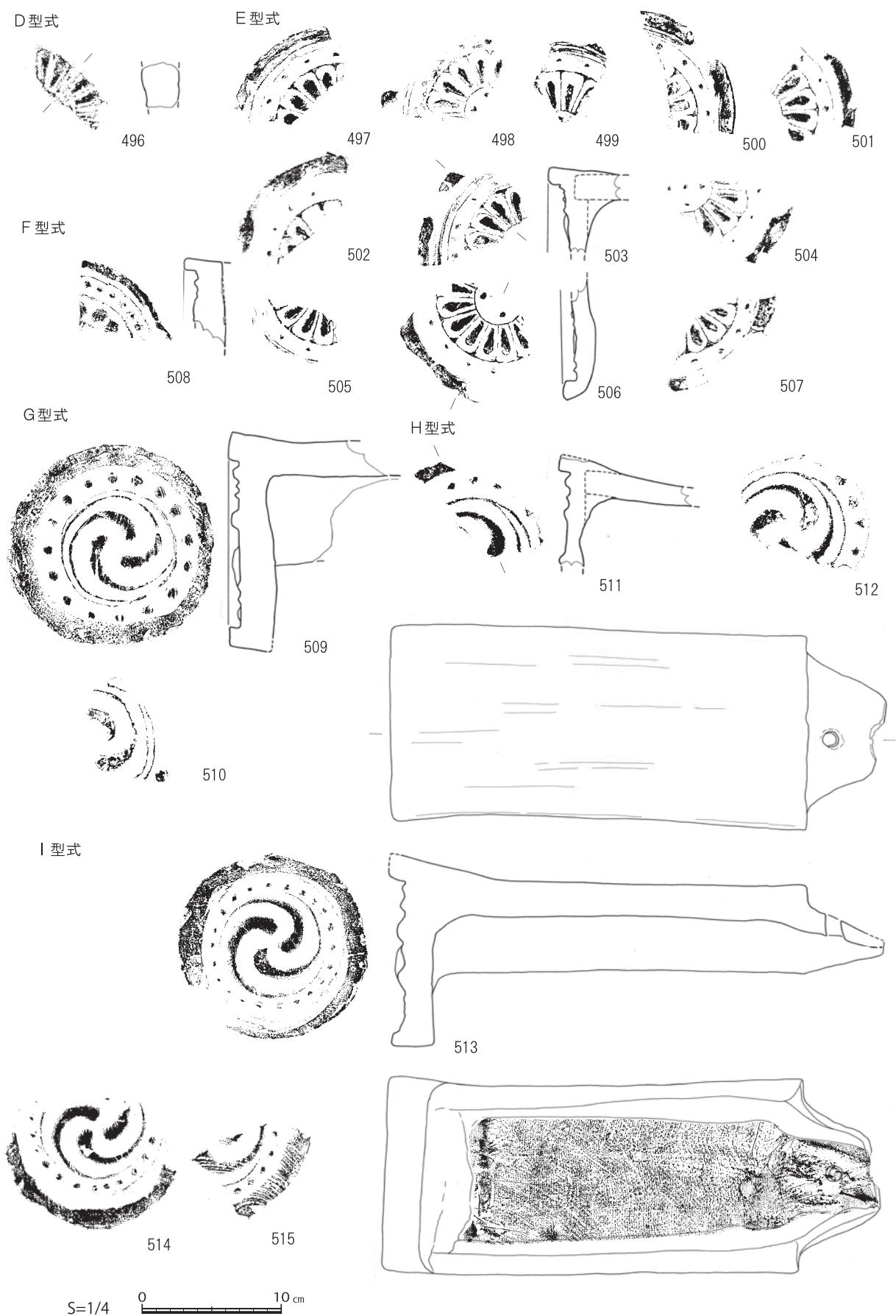


図 70 軒丸瓦実測図①

＜その他の軒丸瓦＞（図 71）

蓮華紋・巴紋以外瓦当紋様をもつ軒丸瓦の破片が2型式、2点ある。

T型式 紋様不明の軒丸瓦で、瓦当の径は15cm前後。厚さは1.8cm。

瓦当中央に梵字とも推定されるものが一部残存している。珠紋の内外に圈線がめぐり、蓮子数は20個に復元できる。胎土は砂質で、瓦当面は離れ砂が付着する。002大溝から1点出土した。（527）

U型式 紋様不明の軒丸瓦で、瓦当の径は14cm。厚さは1.5cm。

珠紋帶はなく、縁が高さ7mm、幅18～20mmと広い。丸瓦接合部の凸面に、二条の溝がある。胎土は砂粒が若干入るが粘質で、瓦質焼成。3-3層で1点出土した。（528）

このほか、瓦当紋様の不明な軒丸瓦片が5点出土している。

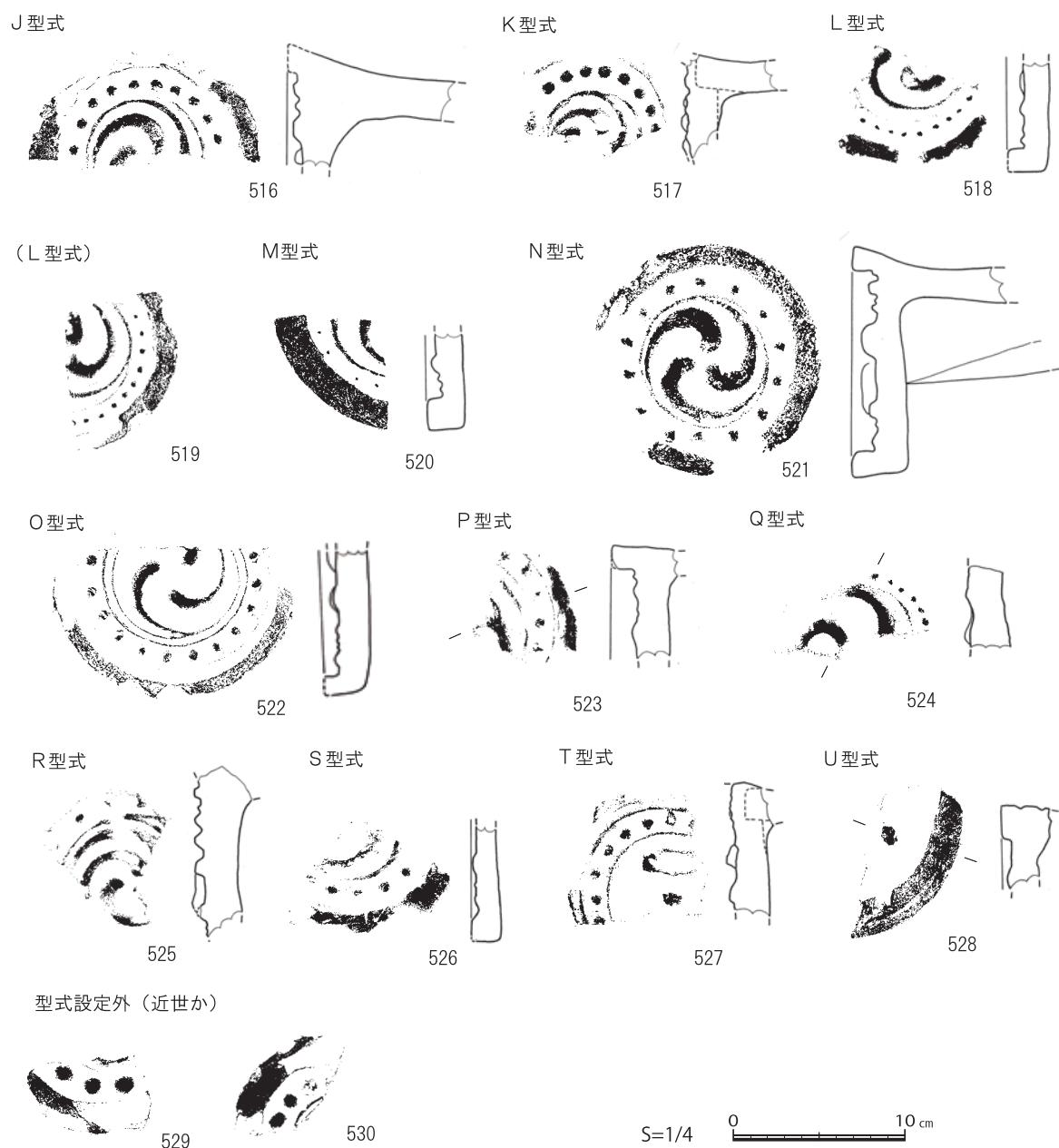


図 71 軒丸瓦実測図②

2. 軒平瓦 (図 69・72・73)

軒平瓦は 19 型式、44 点が出土している。過去の調査で出土した軒平瓦が 2 型式あり、合わせて 21 型式の軒平瓦が認識できる。過去の調査で出土した軒平瓦を a・b 型式とし、今回の調査で出土した軒平瓦を b～q 型式として整理し報告する。このほか表面採集された資料が 1 型式あるが、これについては型式設定していない。

＜既往の調査で出土した軒平瓦＞ (図 69)

a 型式 平安時代後期と考えられる唐草紋軒平瓦。破片資料の唐草紋が同様の形状をしている部分を繋げると、横幅 23.5 cm、縦幅 3.8 cm の軒平瓦になるが、b 型式の横幅が長いことが分かったため、この瓦も中心飾りがある横幅の広い瓦である可能性もある。b 型式に対して、唐草の主葉に相当するものが二重になっている点が特徴といえる。(『緊急雇用対策特別基金事業に係る発掘調査資料整理概報』和歌山県教育委員会・財団法人和歌山県文化財センター 2005 の「3. 秋月遺跡」58・59 及び『秋月遺跡』財団法人和歌山県文化財センターの 176)

b 型式 今回の調査でも出土している。既存の調査では 3 点出土している。(『緊急雇用対策特別基金事業に係る発掘調査資料整理概報』和歌山県教育委員会・財団法人和歌山県文化財センター 2005 の「3. 秋月遺跡」57 及び『秋月遺跡』財団法人和歌山県文化財センターの 175)

＜宝相華唐草紋軒平瓦＞ (図 72)

蓮華紋軒丸瓦と組み合う、平安時代後期の軒瓦と考えられる。1 型式、2 段階分の資料があり、瓦当が剥離したものも含めて 16 点出土した。原位置から出土したものはない。

b 型式 平安時代後期の宝相華唐草紋軒平瓦で、瓦当面は復元横幅 29.0 cm、縦幅 3.2～3.6 cm。瓦当紋様は、宝相華紋の中心飾りから左右に 5 単位の唐草が反転する均整唐草紋である。唐草は巻き込み、支葉が派生する。上下には界線がある。平瓦部は、凹面に布目と粘土板切り出しの糸切り痕があり、凹面側端部に布の端と粘土の盛り上がりを観察できる。瓦当と平瓦部の接合は、瓦当部と凹面・凸面に粘土を足して接合する「包み込み技法」である。接合面はヨコナデし、側面近くでは一部縦方向にナデる。顎は低い曲線顎に分類できるが、実際には上下に肥厚する。胎土は粘質で灰色を呈し、硬く焼成されている。瓦当が剥離したものを含めて 16 点出土した。(531～541)

b 1 段階 瓦当面がきれいな段階のもので、凸面がナデ調整。001 大土坑から 5 点、3-4 層から 3 点、3-3 層から 1 点出土した。

b 2 段階 瓦当面に木目が入った段階のもので、ナデを施さず、離れ砂がやや多く付着する。001 大土坑から 2 点、004 土坑から 1 点出土した。

＜連珠紋軒平瓦＞ (図 72)

鎌倉時代のものと考えられる連珠紋軒平瓦が 8 型式 (c～j 型式)、13 点出土している。

瓦当紋様は珠点の数や間隔・大きさのほか、界線の有無などが少しずつ異なっている。離れ砂が瓦当面・平瓦凹面・凸面に多量に付着する。平瓦との接合は顎貼り付け式で、顎凸面をヨコハケ、顎裏面をタテハケしており、低く幅の広い曲線顎から、高く幅の狭い曲線顎へ変遷する傾向がうかがえる。これらの連珠紋軒平瓦は巴紋軒丸瓦と組みあうものと考えられる。

- c 型式 珠点は径 11 mm で、珠点数は不明、界線はない。瓦当横幅は不明、縦幅は 35 mm。珠点間隔は平均 16 mm であるが、左端の珠点を瓦当面に収めるため、間隔が調整されている。胎土は精良、瓦質焼成。001 大土坑から 2 点出土した。(542)
- d 型式 珠点は径 12 mm で、珠点数は不明、界線はない。瓦当横幅・縦幅は不明。珠点間隔は平均 19 mm で、右端の珠点は間隔を調整せず、枠に当てられている。胎土は精良、瓦質焼成。001 大土坑・024 土坑 (543) から各 1 点、計 2 点出土した。瓦当面から 3 ~ 5 cm の平瓦凸面に、朱が付着している。
- e 型式 珠点は径 10 mm で、珠点数は不明、上下に界線がある。瓦当横幅は不明、縦幅は 33 mm。珠点間隔は平均 13 mm。胎土はやや粗く褐色を呈し、瓦質焼成。075 井戸と 3-4 層から各 1 点、計 2 点出土した。瓦当面から 10 cm の平瓦凸面に、朱が付着する。(544・545)
- f 型式 珠点は径 7 mm で、珠点数は不明、界線はない。瓦当横幅は不明、復元縦幅は 25 mm。珠点間隔は平均 14 mm。胎土はやや砂質で、須恵質焼成。001 大土坑から 1 点出土した。(546)
- g 型式 珠点は径 11 mm で、珠点数は不明、界線はない。瓦当横幅は不明、縦幅は 35 mm。珠点間隔は平均 15 mm。胎土は粗く褐色を呈し、瓦質焼成。瓦当面から約 10 cm の平瓦凸面に、朱が付着する。001 大土坑と 002 大溝から各 1 点出土した。(547・548)
- h 型式 珠点は径 11 mm で、珠点数は不明、界線はない。瓦当横幅は不明、縦幅は 36 mm。珠点間隔は平均 16.5 mm。胎土はやや砂質で、瓦質焼成。001 大土坑と 2 ~ 3-2 層から各 1 点、計 2 点出土した。(549・550)
- i 型式 珠点は径 9 mm で、珠点数は不明、上下と脇に界線がまわる。瓦当横幅は不明、縦幅は 53 mm。珠点間隔は平均 17.5 mm で、右端はやや狭い。頸は幅が狭く高い。胎土はやや粘質で、瓦質焼成。3-4 層から 1 点出土した。(551)
- j 型式 珠点は径 7 mm で、珠点数は不明、界線はない。瓦当横幅は不明、縦幅は 35 mm。珠点間隔は 17 mm。平瓦との接合が頸貼り付け式か不明で、頸は幅が狭く高い。胎土はやや砂質で、二次焼成を受け、赤みを帶びている。3-4 層から 1 点出土した。(552)

〈鋸歯状紋軒平瓦〉 (図 73)

鋸歯状紋軒平瓦は 1 型式 (k 型式)、2 点出土した。

- k 型式 瓦当紋様は 2 本一組の直線を V 字状に連続して配する。瓦当の上縁をヘラケズリにより面取りする。平瓦との接合は頸貼り付け式で、頸凸面をヨコハケ、頸裏面をタテハケしており、低く幅の広い曲線頸をもつ。離れ砂が瓦当面・平瓦凹面・凸面に多量に付着するものと、あまりみられないものがある。連珠紋軒平瓦と製作技法に共通点が多い。瓦当面の横幅は不明、縦幅は 4.2 cm。075 井戸から 2 点出土した。(553・554)

〈均整唐草紋軒平瓦〉 (図 73)

均整唐草紋軒平瓦は 6 型式 (1 ~ q 型式)、13 点出土した。

- 1 型式 瓦当横幅 22.0 cm、縦幅 4.2 cm。中心飾りが唐草状で、左右に 6 回ずつ唐草が反転するが、右端の唐草は途中で塗切れている。左右の 3 つ目の唐草まで、圈線状の線で繋がり、2 つ目と 4 つ目の唐草には子葉が派生する。瓦当面と凹凸面に離れ砂が多量に付着している。凹面には摸骨痕状の跡が残り、凸面の頸付近には凹型整形台の端部が

残る。面取りはなく、歪みが大きい。平瓦狭端面寄りに釘穴がある。075 瓦組井戸で完形品が使用されている（556）ほか、3-4 層から 1 点出土している。

- m 型式 瓦当復元幅は 26.0 cm、縦幅 4.2 cm。中心飾りから、左右に二本一対の唐草が 4 回反転し、端部の唐草では子葉が派生する。離れ砂は 1 型式より少ない。凹型台を使用し、顎貼り付け技法を行う。003 大溝から 2 点、3-4 層から 1 点出土した。（557～559）
- n 型式 二本一対の唐草が反転するもので、m 型式と類似する瓦当紋様の軒瓦と推定される。唐草紋の周りに圈線があり、顎貼り付け技法を行う。第 3 層から 1 点出土した。（560）
- o 型式 瓦当横幅 21.8 cm、縦幅 4.9 cm。瓦当紋様は m 型式に類似するが、唐草が 1 本で圈線がまわる。平瓦部は長さ約 30 cm で、凹面瓦当寄りから瓦当上縁まで布目が残り、凹面はナデ、凸面は凹型整形台痕が残る。凹面の広端と側面に面取りを施す。釘穴あり。075 瓦組井戸で 4 点使用されていた。（561～563）
- p 型式 瓦当縦幅 3.8 cm。中心飾りと巻き込みの大きい唐草、圈線が確認できる。顎の裏面は横ナデが施されている。003 大溝と 3-4 層から各 1 点出土した。（564・565）
- q 型式 均整唐草紋軒平瓦の破片。瓦当面縦幅 4.2 cm で、薄く、平瓦との接合部を横ナデする。3-4 層から 1 点出土した。（566）

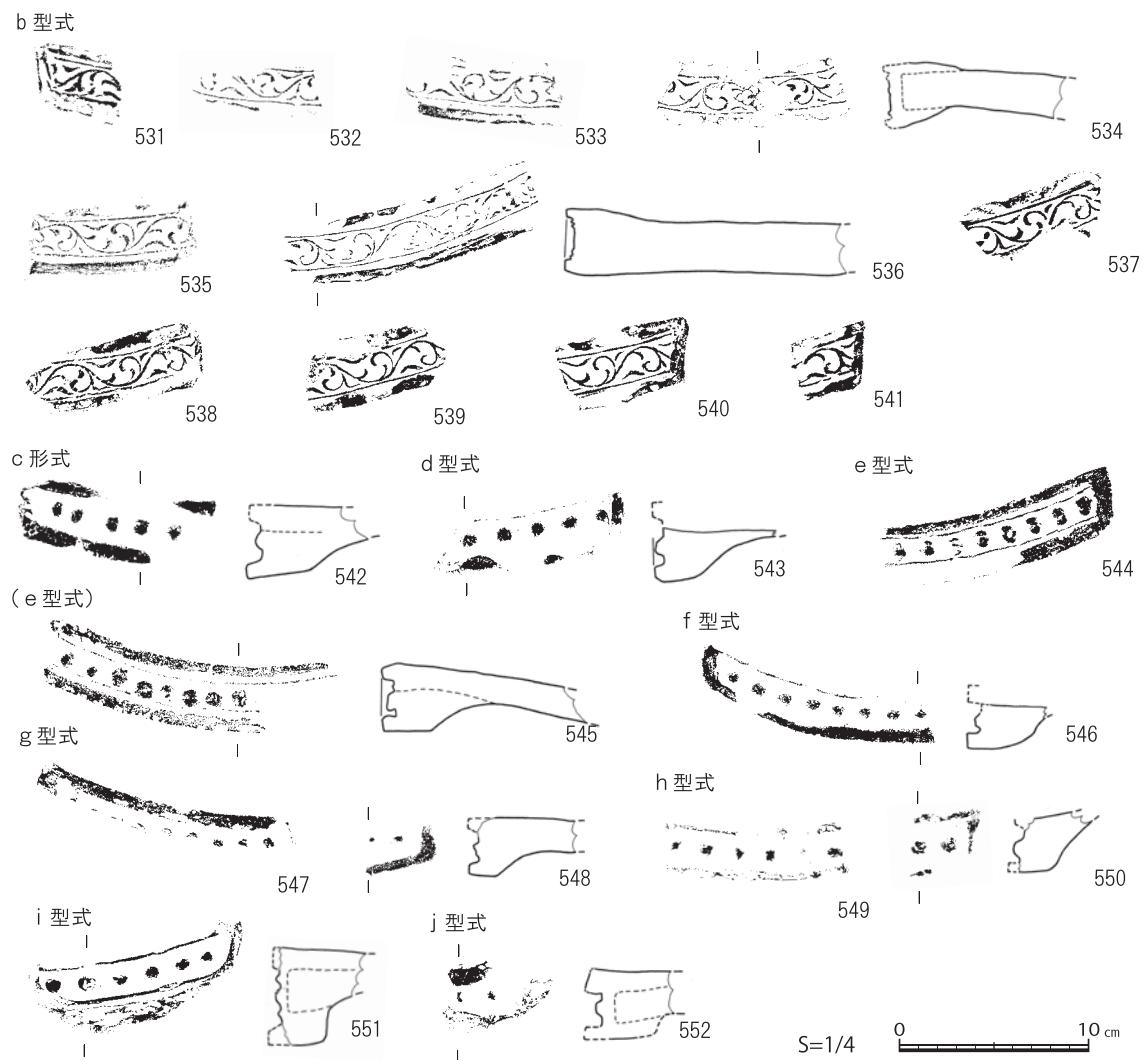


図 72 軒平瓦実測図①

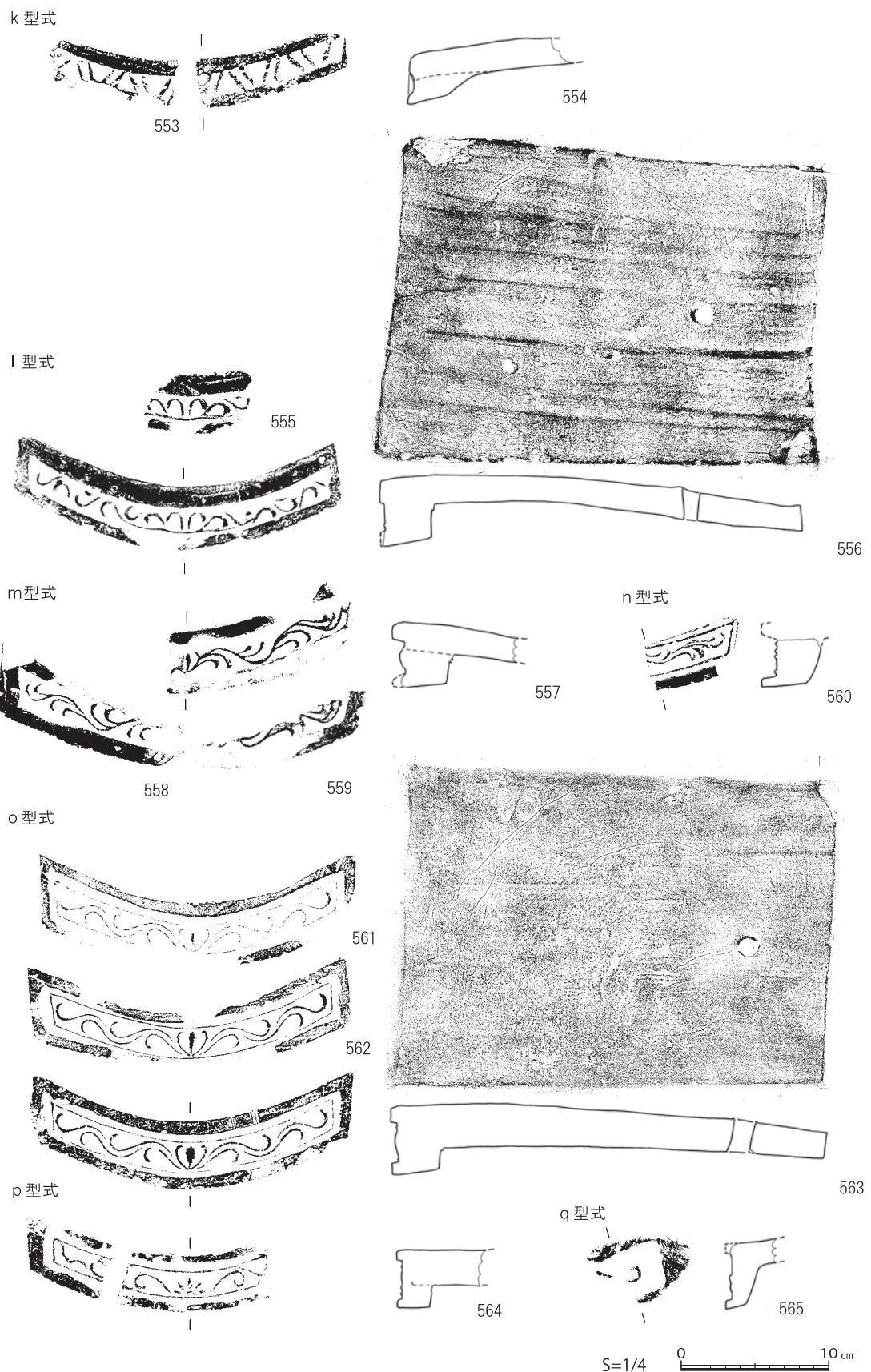


図 73 軒平瓦実測図②

3. 丸瓦 (図 74)

丸瓦は特徴の異なる破片資料が多量に出土しており、型式分類が困難なため、代表的なものを取り上げることとする。

567 は玉縁がある丸瓦で、長さ 35.0 cm、幅 15.3 cm。凹面は糸切りと布目圧痕が残り、面取りは小さい。凸面は縄叩き痕が明瞭に残る。093 瓦溜りから出土しているが、同一タイプの丸瓦片は少なく、残存状況も悪い。E 型式の蓮華紋軒丸瓦で使用されているタイプのものである。568 は玉縁のある丸瓦で、凹面は細かい布目が残り、面取りはやや大きい。凸面はナデ調整である。003 から出土した。569 は玉縁のない丸瓦。凹面は糸切り痕と布目痕が残り、面取りは小さく、凸ナデ調整であるが、縄叩き痕が若干観察できる。003 から出土しており、二次焼成を受けている。570 は玉縁のある丸瓦である。凹面は布目痕が残り、面取りが非常に大きい。凸面は縦方向にミガキ調整しているが、若干縄叩き痕が観察できる。焼成は堅緻で 002 から出土した。貞福寺の末期の瓦と判断している。長さ 30.5 cm、幅 16.3 cm。

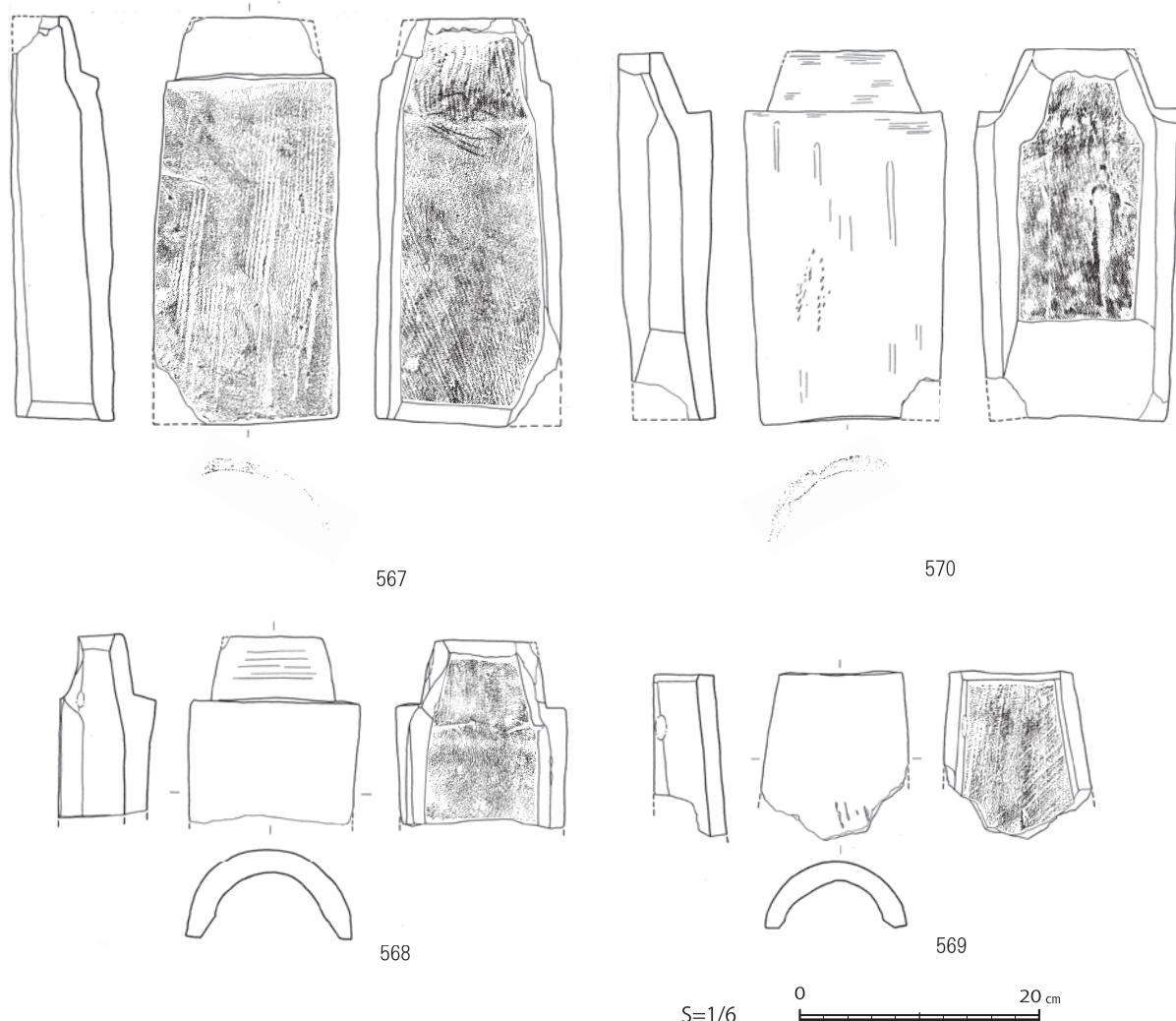


図 74 丸瓦実測図

4. 平瓦 (図 75)

平瓦は多様な破片が出土しているが、代表的なものを取り上げることとする。

571・572 は須恵質で薄く、斜格子タタキのある大型の平瓦。571 は端面幅が 30.3 cm あり、長さは 35～40 cm と推定される。厚さは 18 mm と薄い。凹面は糸切り痕と縦方向の圧痕、布目痕と斜格子タタキ痕、指頭圧痕が残る。側面端部の粘土がせり出しており、広端面とみられる端面が面取りされている。凸面は糸切り痕と離れ砂のほか、端面近くにハケ目と斜格子タタキ痕が若干みられる。また、乾燥時の補助具の跡と思われる長さ 2～3 cm、幅 5 mm 程度の圧痕が 6 か所均等に確認できる。572 は同様の瓦の狭端面の破片と考えられる。タタキが側面に及び、端面は面取りしていない。これらは軒平瓦 b 型式で使用されるタイプの平瓦であり、r 10 瓦溜り等から出土した。573 は 571・572 より厚手で離れ砂が多く、凸面の斜格子叩き痕が明瞭である。574 は広端面横幅 21.0 cm、縦長さ 27.3 cm の平瓦。凹面に縦方向の圧痕が残り、凹凸面に離れ砂が多量に付着する。粘土紐の接合痕が観察できる。1 型式の均整唐草紋軒平瓦で使用されているタイプの平瓦であるが、凹面の両側面と狭端面を面取りしている。575 は厚手で甘い瓦質の平瓦である。凹凸面に糸切り痕と離れ砂がみられる。広端面横幅 22.0 cm、縦長さ 28.4 cm。576・577 は瓦質で釘穴のある平瓦である。576 は糸切り痕、577 は凹面にコビキ痕と推定される縦方向の筋、凸面に凹型整形台痕がある。574～577 は 075 瓦組み井戸で使用されていた。

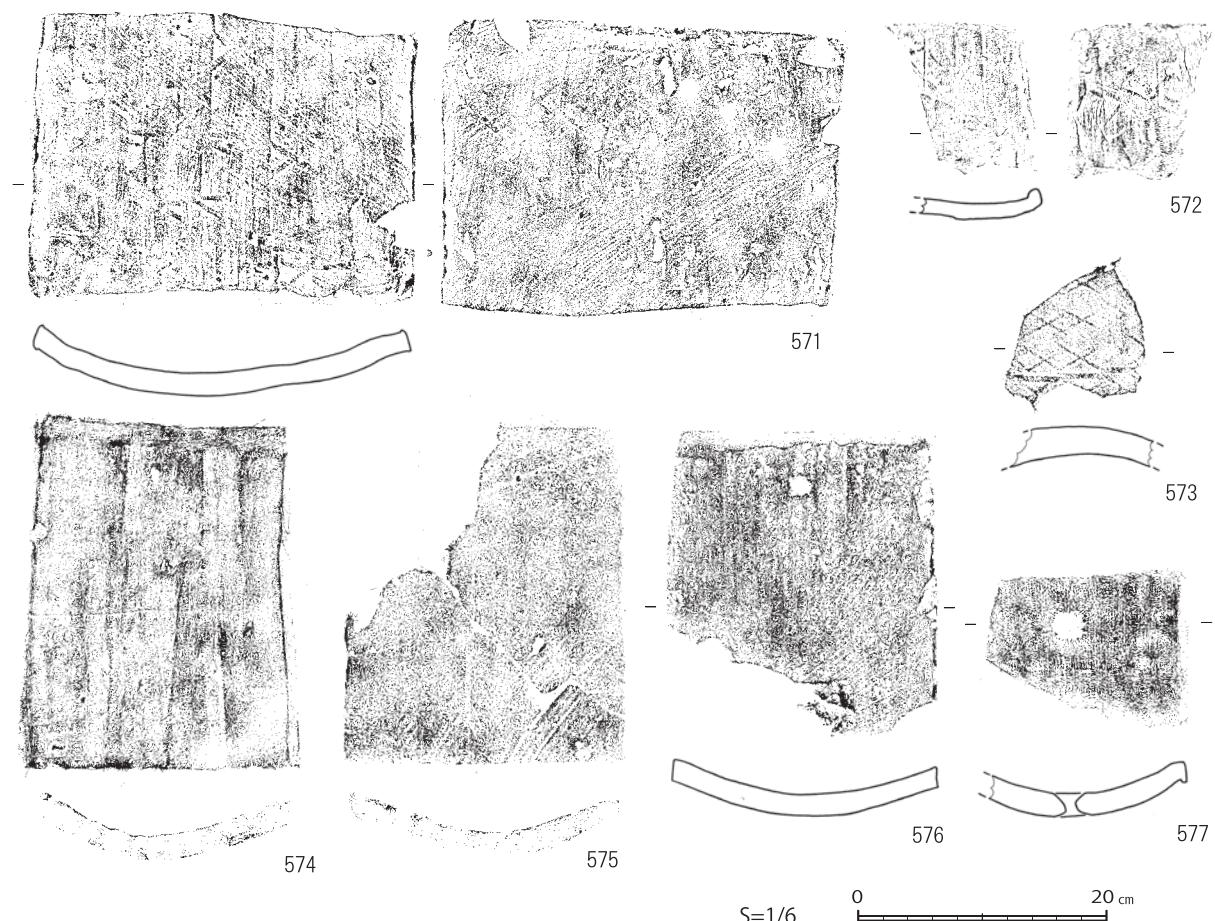


図 75 平瓦実測図

5. 道具瓦 (図 76)

道具瓦は鬼瓦と熨斗瓦、雁振瓦を確認した。その他、003 大溝下層から面戸瓦の破片が 1 点、001 大土坑から壇の可能性のある破片が 1 点出土した。

578～580 は鬼瓦の破片である。578 は厚さが約 4～5 cm あり、須恵質焼成の鬼瓦。裏面には離れ砂が付着する。004 土坑下層から出土した。579 は 578 と類似する鬼瓦の破片。2～3 層から出土した。580 はやや薄手で瓦質焼成の鬼瓦片。縁に沿って圈線がまわり、裏面には離れ砂が付着する。002 から出土した。

581 は熨斗瓦である。幅 12.5 cm、厚さ 20 mm。凹凸面に離れ砂が付着しており、瓦はやや湾曲している。片方の側面で、凹面側半分までヘラで切り込みを入れ、凸面側半分を割ったことが確認できる。003 大溝上層から出土した。

582 は雁振瓦である。横断面が「八」形を呈したもので、約 50% 残存している。復元幅約 30.0 cm、長さ 32.2 cm で、玉縁部が 2.4 cm を占める。凹面に糸切り痕と布目痕のほか、離れ砂がみられる。広端面には玉縁にあたる部分を面取りしている。凸面には、ミガキ調整が確認できる。002 下層から出土した。雁振瓦片はこのほか、004 土坑・024・3～4 層から各 1 点出土している。

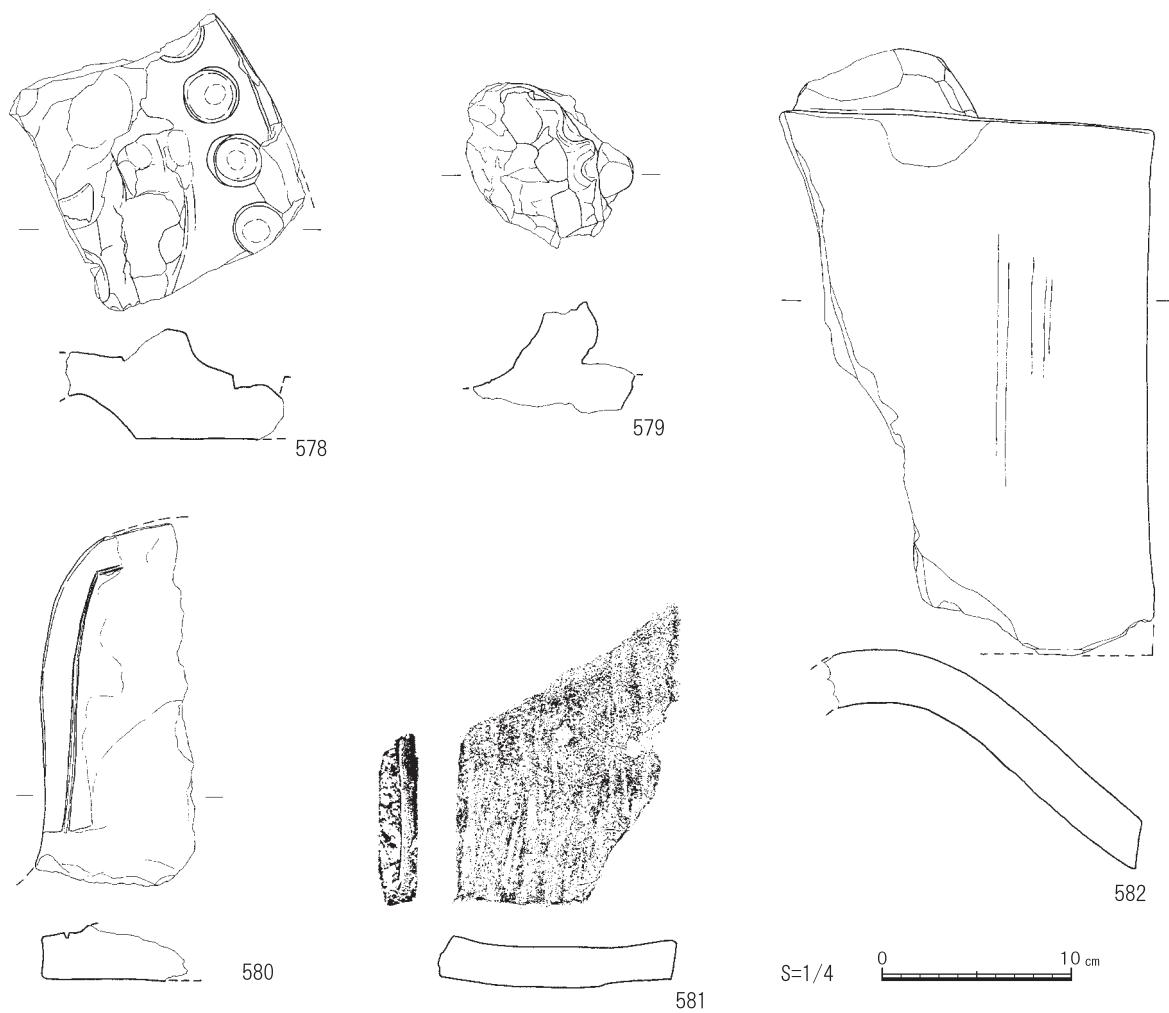


図 76 道具瓦実測図

第3節 その他の土製品

1. 増輪 (図 77)

円筒増輪・朝顔形増輪の破片が47点出土した。増輪片は1点が奈良時代の100土坑、その他はすべて調査区南半の室町時代の遺構および包含層から出土している。

583～592は円筒増輪片。円筒増輪片は外面がタテハケのものとナデのものに分けられる。外面タテハケのものはやや硬質で、表面はにぶい橙色、断面は灰色を呈し、内面は強い指頭圧痕が観察できる。突帯の断面は低いM字形である。583・586～592が該当する。583は復元口径約30cmである。外面ナデのものは橙色を呈し、突帯断面はなだらかな三角形である。584・585が該当する。584は復元口径約28cm。591は表面褐色、断面灰色で須恵質焼成に近い。

592～594は朝顔形増輪と考えられる破片。592は大きく開く口縁部で、端部は四角くなっている。外面はハケメ調整で、突帯は低い。593は頸部の破片である。594は調整・焼成・色調が592・593と類似し、朝顔形増輪の体部である可能性が高い破片である。

これらの増輪は秋月遺跡の古墳が円墳化した時期のものであるが、秋月9～11号墳周溝からは出土していない。

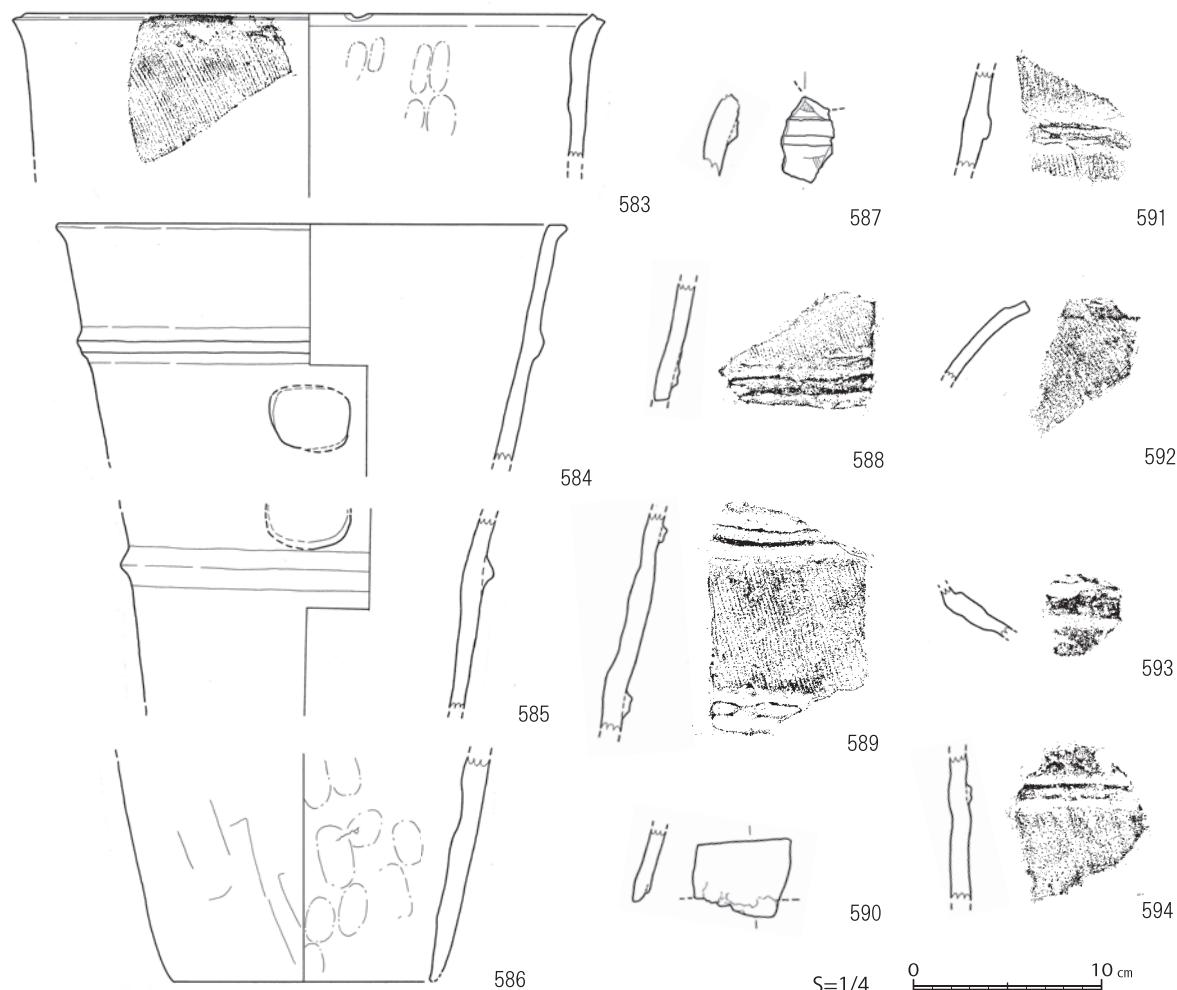


図 77 増輪実測図

2. 竈 (図 78)

595 は秋月 9 号墳の周溝上層で出土した移動式竈の底部片。斜めにヘラ切りされた焚口に沿って、庇の剥離痕がみられる。胎土・焼成のほか、底部から 3 cm の高さに突帯がまわり、外面タテハケ、内面ナデ調整を施すなど、円筒埴輪と共にした特徴をもつ。同一個体と考えられる破片 (596) が古墳 1 周溝から包含層にかけて 5 点出土しており、底部の高さは約 5 cm とみられる。

597 は室町時代の溝と包含層から出土した竈の焚口部片。高さ 26.5 cm で、竈上部の口縁の一部が残存する。焚口部は高さ 19.5 cm、最大幅約 23 cm で、4 ~ 7 cm の庇がまわる。把手は焚口に近くやや低い位置に付けられており、把手をつける前と後の 2 度にわたりタテハケが施されている。色調は明赤褐色で、白色粒と褐色土粒が多量に混じる。002・003・3-4 層から出土した破片が接合している。このほか約 30 ~ 40 点の竈破片が出土している。

3. 土管 (図 78)

598 ~ 600 は奈良時代の土管。須恵質焼成で、粘土紐接合痕が残る。598・599 は高さ 3.0 ~ 3.5 cm の鍔がまわり、鍔上部での外径は約 15 cm。600 は外面は平行タタキののち、ハケとナデで調整し、

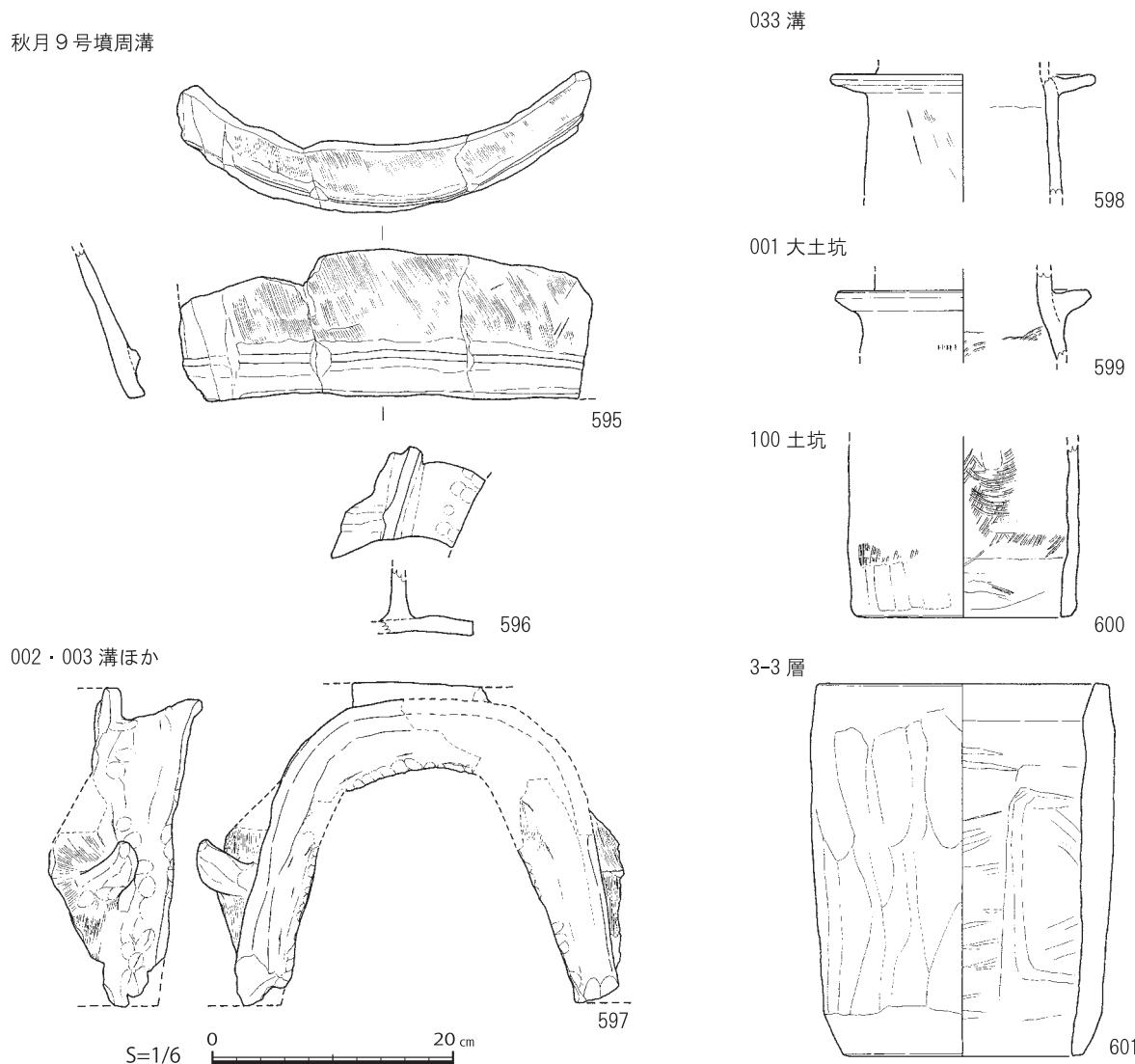


図 78 竈・土管実測図

内面は青海波状の当具をあて、端部はケズリ調整。端部内径は約 16 cm。598～600 は上流側から鍔のある方を、鍔のない端部に差し込んで設置するものと考えられる。598 は 033 溝、599 は 001 大土坑、600 は 100 土坑から出土した。

601 は 3-3 層から出土した土管。長さ 31 cm、受部外径 21.5 cm、差し込み部外径 20 cm の円筒形であり、瓦質焼成。室町時代の土管と考えている。

4. 土錐 (図 79)

602 は棒状土錐。長さ 6.2 cm、径 1.8～2.3 cm、重さ 22 g。603～606 は管状土錐。603 は長さ 5.4 cm、径 2.2 cm、重さ 18 g。604 は長さ 3.4 cm、径 1.0 cm、重さ 3 g。605 は長さ 4.7 cm、径 1.5 cm、重さ 6 g。606 は残存長 8.0 cm、径 3.9 cm、約 50% の破片で、重さは 54 g である。001 大土坑・002 大溝・003 大溝及び 3 層から出土した。

5. 円板状土製品 (図 79)

607～611 は土器の底部を打ち欠いて転用した円板状土製品である。607・608 は平底の土器底部、609 は高台のある土器の底部、610 は磁器の底部、611 は染付碗の底部を使用している。円板状になるように打ち欠いているが、611 の高台は残っている。001 から 3-3 層、3-4 層から出土した。近世の遺物と考えられる。

6. 戸車 (図 79)

612 は白磁製の戸車である。直径 5.6 cm で中央に 1.6 cm の穴をもつ。側面には離れ砂が付着している。045 円形土坑掘方から出土した。近世末から近代の遺物と考えられる。

7. 瓦牛 (図 79)

1 は瓦牛の頭部片。合わせ型の接合痕が確認できる。近世末期から近代にかけて、瓦牛はクサ(皮膚病)を食べて直すという理由から和歌山市津秦天満宮などで授与・奉納されている。日前宮境内西側に合祀された叢神社に奉納されたものである可能性も考えられる。U9 攣乱炭層から出土した。

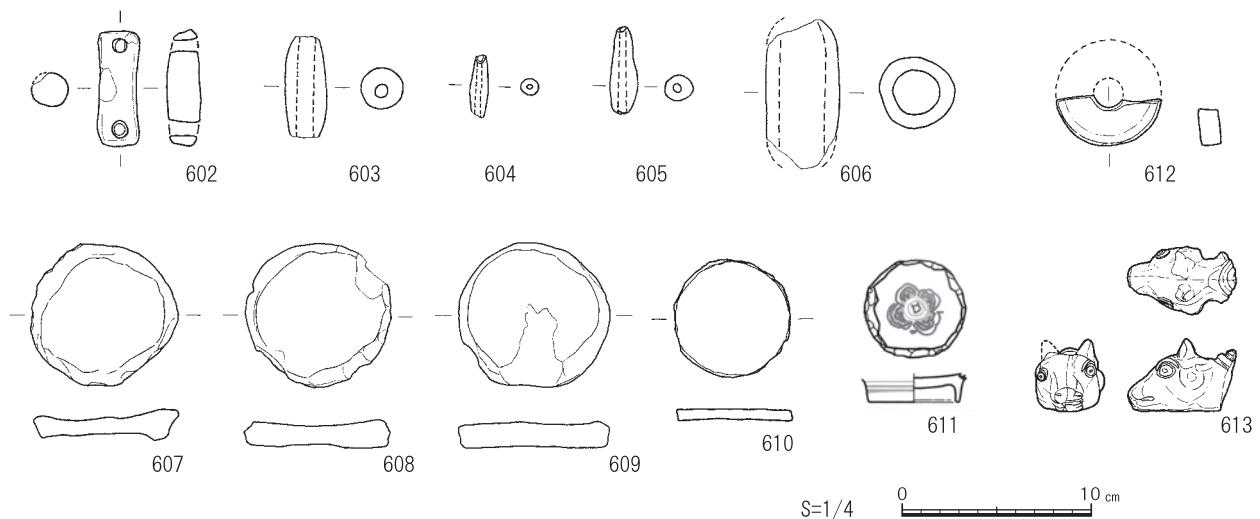


図 79 その他の土製品実測図

第4節 石器・石製品 (図 80)

1. サヌカイト剥片

614 はサヌカイト剥片。長さ 6.1 cm、幅 2.9 cm、最大厚 1.0 cm で、重さ 13 g。刃部は機能しておらず、風化はあまり進んでいない。近代の攪乱から出土した。

2. 叩き石

615～617 は叩き石。砂岩系の石を用いており、端部または縁辺部に敲打痕が明瞭に確認できる。615・616 は扁平な石を使用した叩き石の破片である。617 は長さ 10.7 cm、径 5.8 cm の短い棒状を呈しており、重さは 505 g。側面には熱を受けて赤く変色している。縄紋～弥生時代の遺物と考えられるが、中世の遺構から出土した。

3. 石庖丁

618・619 は緑色片岩製の石庖丁である。板状の石材を半月形に成形しており、刃部は直線的に伸びる。刃部は片刃で、孔は両面から回転穿孔されている。618 は残存長 7.4 cm、幅 5.2 cm、厚さ 7 mm。619 は残存長 8.8 cm、幅 4.3 cm、厚さ 5 mm。古墳時代と室町時代の遺構から出土した。

4. 紡錘車

620 は滑石製の紡錘車。全体的に丸みのある截頭円錐形を呈し、中央に孔を有する。下端径 4.1 cm、上端径 3.6 cm、高さ 1.9 cm。孔は径 6.5 mm。残存率は 80～90%。秋月 9 号墳周溝北西部検出面で出土した。

5. 砥石

621～627 は砥石である。621 はやや薄い板状で両端が割れている。目が細かく、灰色を呈し、上下面ともやや擦り減っている。622・623 は大型皿状の砂岩製の砥石の割れたもので、目が粗く、乳白色を呈する。表裏及び側面に面を形成している。624 も同様の色調を呈するが、太い方柱形の両端が割れたもので、表面が平滑である。625 は細い棒状で、中央が擦り減って窪んでいる。目は細かいが、鉄分が沈着している。626 は細い棒状で両端が割れている。灰色を呈している。棒の狭い面が平滑になっている。627 は一方に孔を有する。621 は秋月 9 号墳周溝 6 区上層から、622・623 は第 2 遺構面検出中に、624 は 001 大土坑、その他は包含層から出土した。

6. 茶臼

628 は茶臼の破片。和泉砂岩を使用しており、復元径約 22 cm である。火熱を受け、表面が破損している。003 大溝から出土した。

7. 磨石

629・630 は黒い磨石である。扁平な円形に加工されている。629 は径 22 mm、厚さ 5 mm で現在の磨石とほぼ同じ大きさである。色調は灰色 (N4 /) で、両端にカケがある。重さは 5 g。630

は径 25~28 cm と大きく、暗灰色 (N3 /) を呈する。厚さは 6 mm、重さは 8 g。631~633 は遺跡周辺に自然散布していない石であり、白い碁石と考えている。1.4~2.0 cm と小さく硬質で、黒い石のように加工されていない。

8. 琥

634 は近代の琥。長方形で、周縁が欠けている。u 14 区の近代建物の基礎から出土した。向陽高校に先行する学校の遺物であろう。

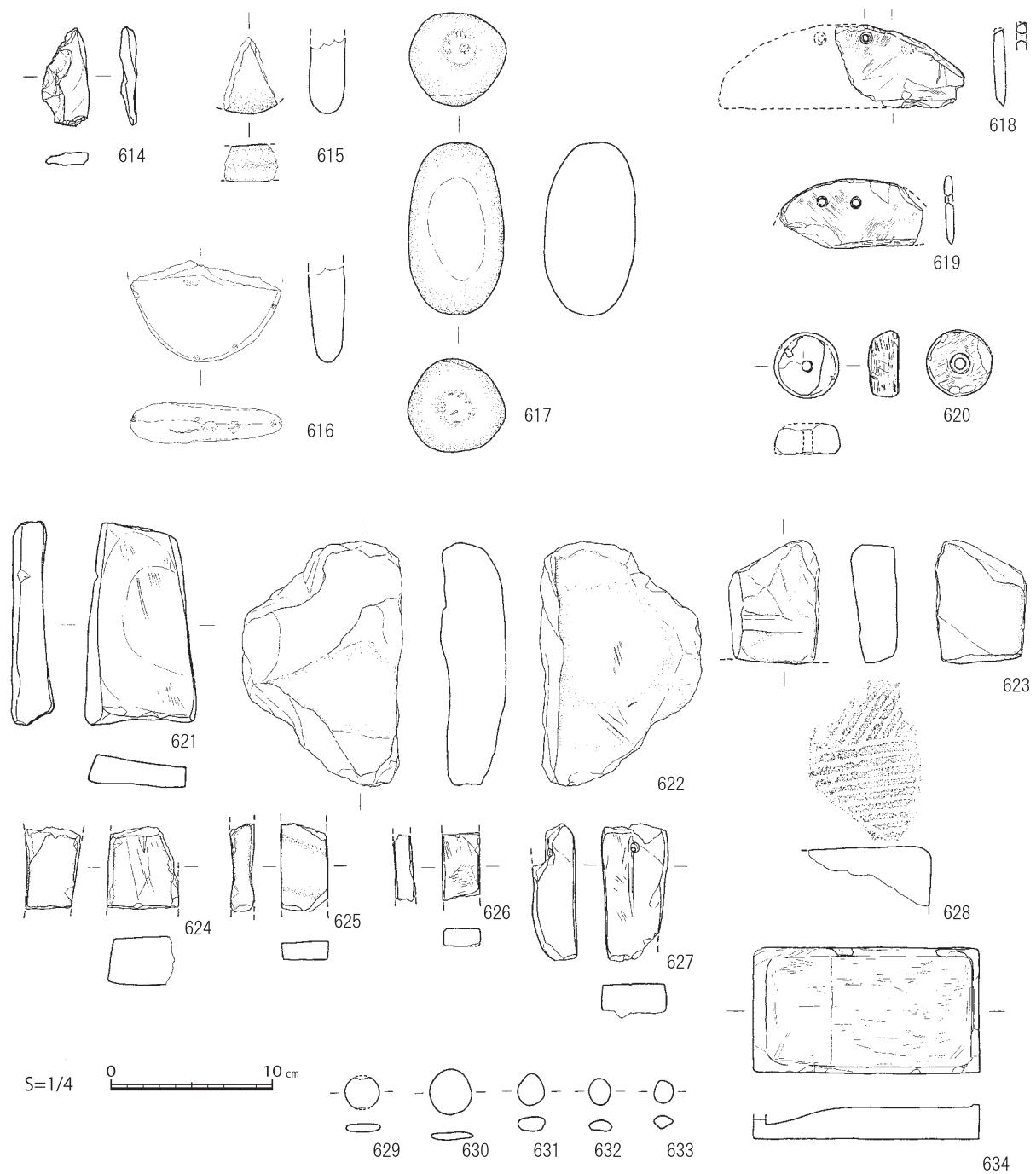


図 80 石器・石製品実測図

第5節 玉類 (図81・表3)

玉類の原材产地分析は付章に掲載しているので、ここでは目視による観察所見等を記す。

＜307 土壙墓で出土した玉類＞

307 土壙墓からは、滑石製勾玉7点、滑石製臼玉9点、琥珀製小玉1点、管玉6点、棗玉1点、ガラス製小玉青色4点・赤紫色2点、計31点の玉が出土した。

635(1)～641(7)は滑石あるいは片岩製の勾玉である。635・636(2)は縦長で、仕上がりに光沢がある丁寧なつくりをしている。635は長さ18.0mm、幅9.9mm、厚さ3.8mmで、にぶい橙色を呈する。636は長さ17.4mm、幅9.8mm、厚さ4.3mmで、やや青みがかった色調をしている。勾玉の尾が少し欠けている。637(3)～641は635・636に比べると短くて丸みがあり、色調は黄色味があり、擦痕が残っている。長さ12.0～14.0mm、幅7.4～10.2mm、厚さ3.3～4.4mm。

642(8)～651(17)は滑石あるいは片岩製の臼玉である。石材はにぶい橙色系の色調を呈し、光沢がある。研磨痕は判然としない。形状は扁平で、側面が膨らみ、基本的に上下面は平坦である。642～646(12)は直径4.6～5.2mmで、比較的大きい。このうち642・643(9)は片方の端面が丸く壅んだうえに、穿孔されている。647(13)・648(14)は直径4.0～4.2mmである。649(15)～651は直径3.4～3.8mmと比較的小さくが孔は若干大きい。

652(18)は琥珀製小玉である。破片を接合すると、直径は6.9mm、長さは3.2mm。

653(19)～658(24)は緑碧玉あるいは片岩製の管玉である。6点あり、すべて両端面から穿孔している。653の石材は薄緑色で、濃緑色の微斑が混じる。長さ26.0mm、直径7.8mmと、比較的大きい。654(20)の石材は濃緑色で、白色の微斑が混じる、長さ22.7mm、直径6.4mm。655(21)～658の石材は薄緑色。655は長さ16.5mm、直径4.2mm、656(22)は長さ14.1mm、直径3.7mm。657(23)・658(24)は直径3.6mmの管玉の破片である。657は6点、658は2点の破片を接合したもので、657と658も同一個体の可能性がある。

659(25)は緑碧玉あるいは滑石製の棗玉である。長さは10.3～11.6mmで、上下端面は斜めに成形されている。最大径は5.6mmである。

660(26)～665(31)はガラス製小玉である。660～663(29)は水色を呈す。直径3.5～4.8mm、長さ2.6～3.6mmで、丸みがある。661(27)はやや暗い色調をしている。664(30)・665は赤紫色を呈し、練りこまれたような黒い筋が走る。透明度はないが、光沢はある。直径3.0mm、長さ2.1mmの個体と直径2.8mm、長さ3.0mmの個体があり、ガラス小玉としては非常に小さい。孔は約1mmで、上下端面は孔と直交しておらず、管玉を切ったような形状を呈している。これらの特徴から、664・665はインド・東南アジアを原産とする玉(ムティサラ)と考えられ、和歌山県内では大谷古墳・天王塚古墳に続き3遺跡目の出土例である。

＜秋月9号墳周溝(200周溝)で出土した玉類＞

668(32)・669(33)は滑石製臼玉である。側面に膨らみはなく、縦から若干斜め方向に擦痕が確認できる。端面は平坦である。668は径5.3mm、長さ3.3mm。669は径5.4mmで、片方の端面が欠失している。200周溝の北西から出土した。

＜秋月10号墳周溝(201周溝)で出土した玉類＞

668(34)は滑石あるいは片岩製管玉と推定される破片である。径9.0mm、残存長7mm。201周溝から出土したが、割れや磨り減りの度合いが強いため、原位置かどうか不明である。

〈307 土壙墓〉 勾玉

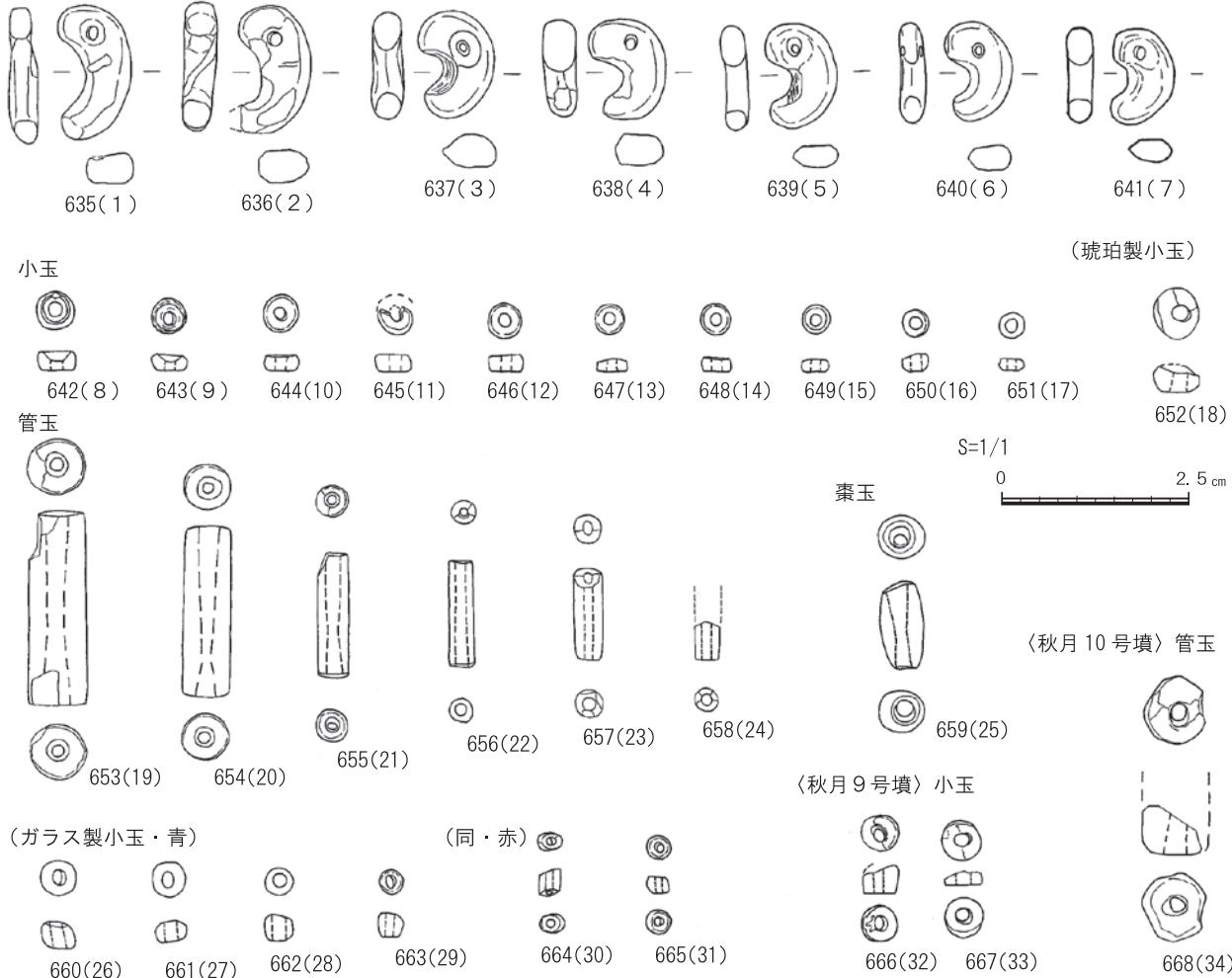


図 81 玉類実測図

表 3 玉類一覧

遺物番号	No.	種類	版分類	石材	色調	長さ(mm)	径・幅(mm)	厚さ(mm)	遺構・層位	備考
635	1	勾玉	A	滑石か片岩	黒褐(10YR3/1)	18.0	9.9	3.8	307土坑・東側	光沢有
636	2	勾玉	B	滑石か片岩	オリーブ黒(7.5Y3/1)	17.4	9.8	4.3	307土坑・東側	光沢有、欠け有
637	3	勾玉	C	滑石か片岩	暗灰黄(2.5Y4/2)	14.0	10.2	4.1	307土坑・東側	
638	4	勾玉	C	滑石か片岩	暗灰黄(2.5Y4/2)	14.0	10.0	4.4	307土坑・東側	接合
639	5	勾玉	C	滑石か片岩	暗灰黄(2.5Y4/2)	13.8	9.2	3.3	307土坑	
640	6	勾玉	C	滑石か片岩	暗灰黄(2.5Y4/2)	13.0	8.7	3.4	307土坑・東側	
641	7	勾玉	C	滑石か片岩	暗灰黄(2.5Y4/2)	12.0	7.4	3.9	307土坑・東側	接合
642	8	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	2.3	5.1	—	307土坑	片面窪む
643	9	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	2.2	4.8	—	307土坑	片面窪む
644	10	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	1.8	5.2	—	307土坑	
645	11	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	2.3	4.7	—	307土坑	欠け有
646	12	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	2.2	4.6	—	307土坑	
647	13	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	1.2	4.2	—	307土坑	
648	14	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	1.9	4.0	—	307土坑	
649	15	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR2/2)	1.3	3.8	—	307土坑	
650	16	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/2)	1.9	3.6	—	307土坑	
651	17	臼玉	H	滑石か片岩	黒褐(10YR3/1)	1.7	3.4	—	307土坑	
652	18	玉	I	琥珀	褐(7.5YR4/6)	(3.2)	6.9	—	307土坑・東側	接合。欠け有
653	19	管玉	D	緑色石材	濃緑に濃緑斑	26.0	7.8	—	307土坑・東側	
654	20	管玉	E	緑色石材	濃緑に薄緑斑	22.7	6.4	—	307土坑・東側	
655	21	管玉	F	緑色石材	薄緑	16.5	4.2	—	307土坑・東側	
656	22	管玉	F	緑色石材	薄緑	14.1	3.7	—	307土坑・東側	接合。欠け有
657	23	管玉	F	緑色石材	薄緑	12.5	3.6	—	307土坑	接合。破片
658	24	管玉	F	緑色石材	薄緑	5.0	3.6	—	307土坑・東側	接合。破片
659	25	糸玉	G	緑色石材	薄緑～黒	11.6	5.6	—	307土坑・東側	短い部分で10.3mm
660	26	小玉	J	ガラス(青)	水色	3.6	4.8	—	307土坑・東側	
661	27	小玉	J	ガラス(青)	水色	2.6	4.7	—	307土坑・東側	
662	28	小玉	J	ガラス(青)	水色	3.3	3.5	—	307土坑・東側	
663	29	小玉	J	ガラス(青)	水色	2.9	3.6	—	307土坑	
664	30	小玉	K	ガラス(赤)	暗赤紫	3.0	2.8	—	307土坑・東側	
665	31	小玉	K	ガラス(赤)	暗赤紫	2.1	3.0	—	307土坑	
666	32	臼玉	L	滑石	褐灰(10YR5/1)	3.3	5.3	—	9号墳周溝	周溝北西出土
667	33	臼玉	I	滑石	褐灰(10YR5/1)	(1.9)	5.4	—	9号墳周溝	周溝北西出土
668	34	管玉	M	滑石	灰白(5Y8/1.5)	(6.0)	9.0	—	10号墳周溝	欠け有

第6節 金属製品と鍛冶関連資料

1. 錢貨 (図 82)

錢貨は、中世から近現代までの6枚が、包含層から出土した。

669～671は中国の北宋錢である。669は篆書の皇宗通寶で1039年初鑄。670は真書の熙寧元寶で1068年初鑄。671は元豐通寶で1078～1085年鑄造。中世に広く流通した貨幣で、3-3層等から出土した。

672・673は寛永通寶。672は古寛永で、寛永13(1636)～万治2(1659)年鑄造。直径24.5mm。673は「寛」と「通」の字の部分が残る破片。「寛」の字の裏に「文」という字があり、寛文8(1668)年に鑄造が始まった文錢であることが分かる。直径25.5mmで、やや歪んでいる。672は3-1～2層、673は3層から出土した。

674は50銭硬貨。表面に桜花の枝と「五十銭」の文字、裏面に「50」「日本国」「昭和二十三年」の文字が鋳出された黄銅貨で、1947年初鑄、1953年には小額通貨整理法により通用停止となっている。1層出土。

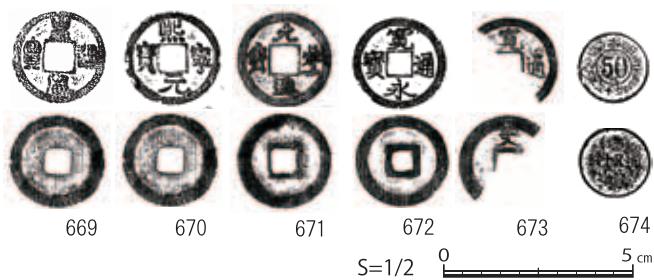


図 82 錢貨 (拓本)

2. 鍛冶関連資料 (図 83・表 4・写真 3・4)

鍛冶関連資料は、古墳時代と室町時代のものに分かれる。

675～678は秋月9号墳周溝から出土した轍羽口。675は残存長9.2cm、内径2.6cmの孔を有する。先端部径約5cmに対して、残存部最大径が約8cmあり、基部で開いた形状を呈する。先端は金属滓が付着し、基部に向かって斜めに暗灰色、灰色、橙色と変化しており、炉壁に斜めに差し込んだ状況が確認できる。676は炉への差し込み口付近の破片で、外面では灰色から乳白色、褐色と色調の変化がみられる。差し込み部で外径約6cm、内径約2.5cm。外面に筋が多数走っているのが観察される。羽口の破片は周辺で5点出土している。

679～682は室町時代の遺構から出土した轍羽口。679は外径約6.5cm、内径約2.4cmの孔を有する。やや円筒形に近い形状を呈する。680～682は轍羽口の先端部の破片である。680の孔内表面と682の外表面が紫色を呈している。679と680は003大溝、681は3-4層、682は2～3層から出土した。このほか、破片が001から2点、003から約10点出土している。

683～687は鍛冶に関連する可能性のある土製品。683・684は厚手の土器の口縁部片、685は厚手の高坏、686は不明土製品。683・686は001大土坑から、684・685は003大溝から出土した。

688は炉壁と推定される壁土片で、室町時代の遺構から出土している。多量の石粒を含み、灰色で表面が藁のようなもので覆われた痕跡が残り、直交する2つの面をもっていることが観察できる。688と同様の特徴のある灰色の壁土片は1,530g出土している。また、褐色から乳白色へ漸移的に変わる壁土片が2,620g出土している。

689・690は金属滓の塊。689は秋月9号墳周溝から出土した。11g。690は003大溝の最下層から出土した。一部に炭が入り、表面に気泡がみられる。75g。金属滓は2,150g出土しており、

金属滓の混じる壁土片は 5,175 g 出土している。

古墳時代の鋳造関連遺物は、秋月 9 号墳周溝からは出土した。中世の鋳造関連遺物は、001 大土坑・002 大溝・003 大溝及び包含層から出土している。周辺で使用されたものが混入したと考えられ、土器や瓦と同様に中世の遺物と推定される。

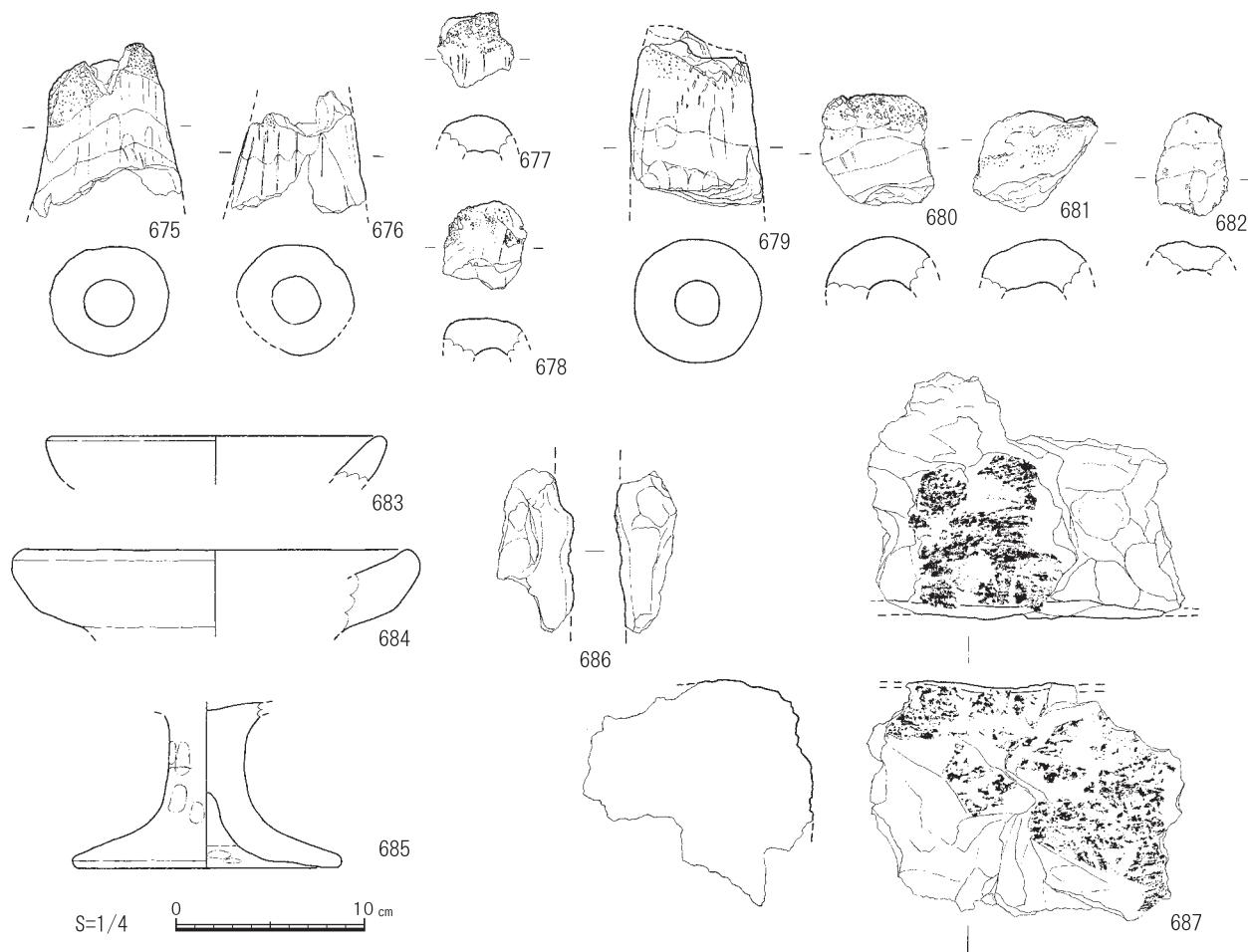


図 83 金属製品・鍛冶関連資料実測図



写真 3 炉壁・壁土

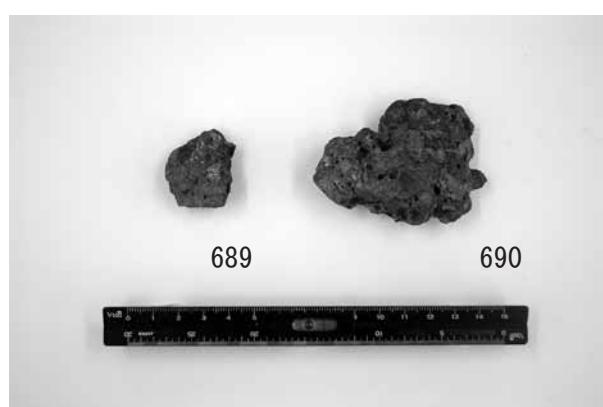


写真 4 金属滓

第7節 木製品 (図84)

木製品は085井戸と075井戸の井戸枠及び075から曲げ物と札状の木製品が出土した。このほか、木片が001大土坑や002・003大溝などから出土している。

691～693は085井戸の枠材。691は長辺5.5～6.5cm、短辺4cm、長さ86.5cmの角材。各面は手斧で面取り加工されており、両端約4cmが脣状となる。692は幅約7cm、厚さ5～8mm、残存長97cmの薄い板材。693は幅約9cm、厚さ約6mm、残存長54cmの薄い板材。691は8本、692は破片で50点以上、693は6点が出土している。

694～697は075井戸の枠材。694～696は長さ75～78cm、厚さ約1.5cmの板材。694は抉りがあり、幅約7cm。695は幅約8cm、696は幅約5cm。697は下方で幅約8cm、厚さ約1.6cm、上方で幅約5cm、幅約0.8cm、残存長100cmの板材。694は9本、695は8本、696は5本あり、井戸枠の下段を構成している。なお、694の抉りは下向きに組まれている。697は20本あり井戸枠の上段に組まれている。枠を把めるために698のような篠竹を縦に割った材が使用されている。

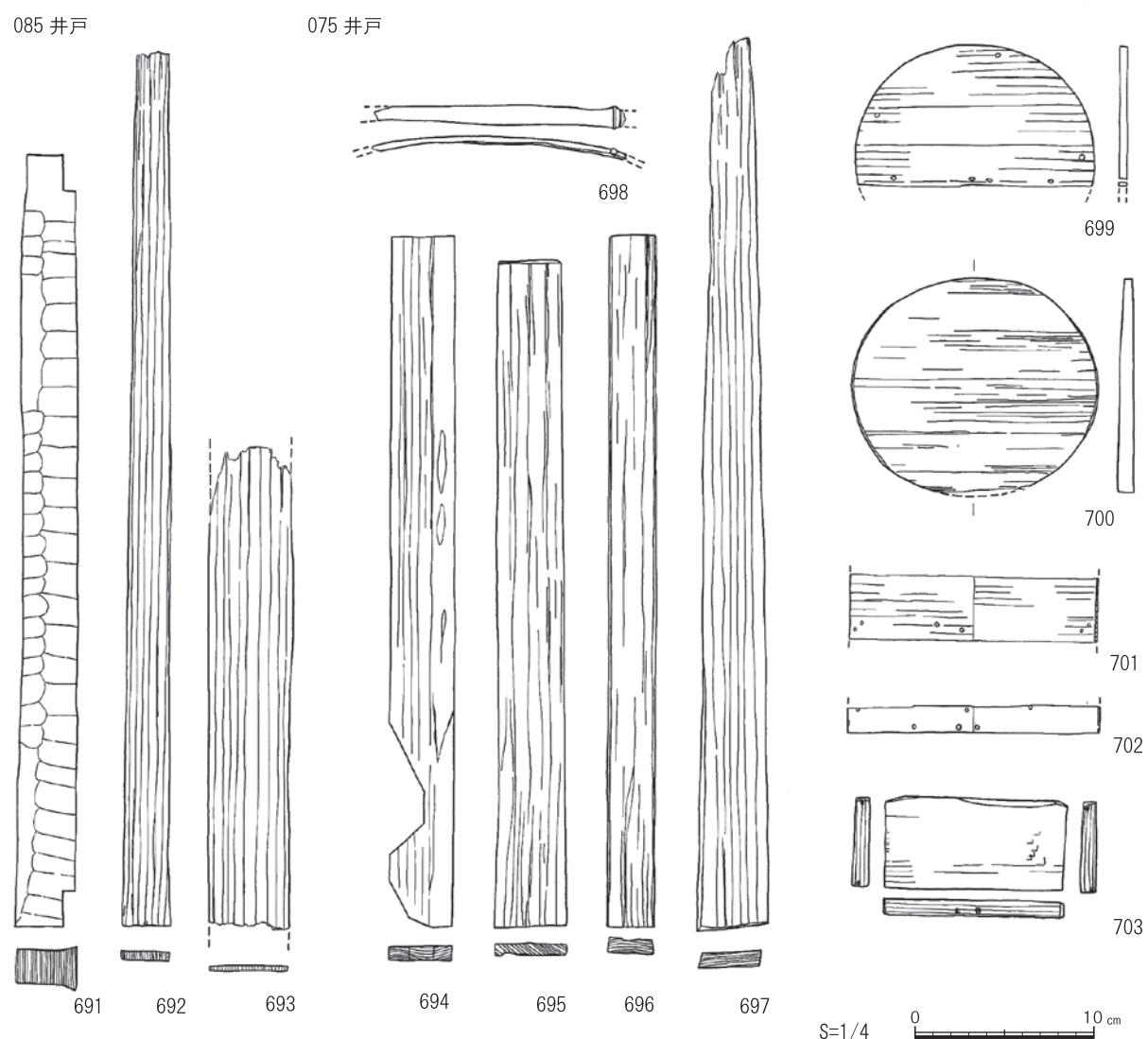


図84 木製品実測図

699～703は075井戸から出土した曲げ物の部材。699・700は蓋・底板と考えられる円板。699は長径13.3cm、厚さ5mmで、4割ほど欠けている。周囲に3か所、割れた面に沿って4か所の孔をあけている。700は長径13.8cm、復元短径12.2cm、厚さ5～9mm。701・702は曲げ物の側板で2個一対の小孔をあけている。703は3方に2か所ずつの小孔を穿った札状の木製品。

第8節 植物種子（写真5）

秋月遺跡では、植物種子が2点出土している。

704は秋月9号墳周溝の北西部検出中に、周溝の肩付近で出土した植物種子である。古墳時代末～奈良時代の包含層に属するものと考えられる。この種子は長さ18mm、幅13mm、厚さ9mmで、先端が尖っている。色調は現状で灰褐色を呈する。表面に特有の小孔がみられることなどからナラ科サクラ属のウメ種と考えられる。

705は307土壙墓から出土した植物種子片である。炭化して黒色を呈しているものとみられ、殻の一部しか残存していない。704よりも表面により深い溝があり、アーモンド属の桃に近縁の種とみられるが、現代の桃よりこの溝は浅く、種も小さい。

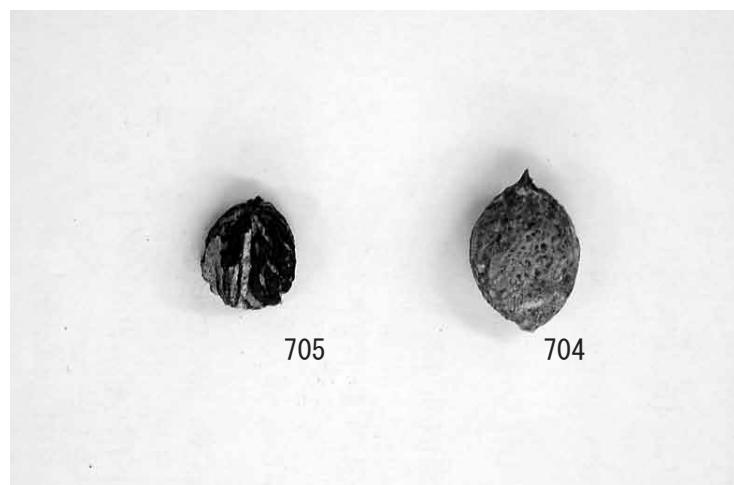


写真5 植物種子

第9節 動物骨（写真6）

秋月9号墳周溝の南東で出土した土師器長胴甕（図51の192）の中から、骨片が出土した。

706～709は人骨を含む大型哺乳類の四肢の骨片である。長さ3～5cm程度の骨片が4点と微小な破片が少量であり、細かい種の特定は困難であった。秋月9号墳周溝からは多数の長胴甕が出土したが、他の個体からは、内容物は確認されていない。

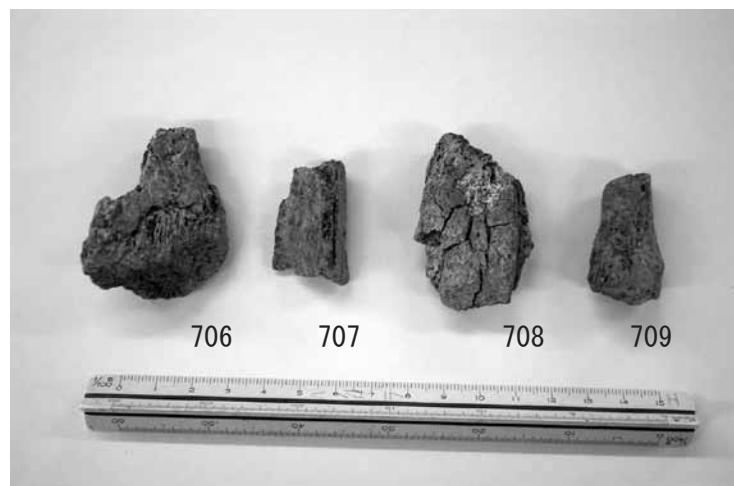


写真6 動物骨

なお、調査区の周辺では、秋月遺跡県第V次調査の甕棺墓S X 5で、土師器長胴甕を使用した土器棺墓が認められる。また、東に隣接する鳴神IV遺跡・鳴神V遺跡にある古墳時代中期から後期の古墳の周溝からは、多数の馬歯が出土しているが、これらは周溝に直接馬の頭部のみを埋めたものとみられ、土器は伴っていない。周辺の様相から、秋月9号墳で出土した動物骨は、人か馬の骨である可能性が高いものと思われる。

第4章 まとめ

1. 県第9次調査の概要

平成21年度に実施した県第9次調査では、向陽中学校・高等学校の体育館建替えに伴い、1,696m²の発掘を行った。古墳時代前期初頭から近現代の建物基礎まで確認されたが、遺跡の主な時期は古墳時代と奈良時代、平安時代末～室町時代末である。

古墳時代には4基の古墳が築造されている。秋月12号墳は前期の方墳で一辺約12m、古式土師器が出土した。秋月9～11号墳は一辺10～15mの円墳で、周溝からは中期末の土師器高壺・壺や後期の須恵器蓋壺、長胴甕などが多く出土した。今回の調査では、秋月古墳群には後期の円墳があり、岩橋千塚と平行する時期まで継続する墓域であることが確認された。

奈良時代には、掘立柱建物3棟とともに溝、土坑が分布しており、居住域になったことが分かる。畿内系暗紋土師器が多く、土管が出土したことから、一般的な集落というより官衙的な色彩の強い遺跡であると考えられる。

平安時代後期の遺物では、蓮華紋軒丸瓦と宝相華唐草紋軒平瓦が多数出土した。建物跡は確認されなかったが、室町時代末までの軒丸瓦が18型式、軒平瓦が19型式出土しており、今回の調査区周辺が貞福寺の跡地であることがより明確になった。調査区南側は谷状の地形(001大土坑)であり、その底の中央には平安～鎌倉時代の遺構が残されている。遺構は瓦や土器、埴輪が入った土で埋められており、その上層に東西方向の大溝002・003がつくられている。これらの溝は目前宮の南側を区画する溝と考えられるが、鍛冶関連の遺物を含む土で埋められている。

江戸時代には耕作地、明治時代遺構は学校の敷地となり、現在に至っている。

2. 秋月古墳群について(図85)

秋月遺跡で確認された古墳は12基あり、秋月古墳群と呼称できるまとまりをもっている。

古墳は、県第2次調査で6基、県第5・6次調査で2基、県第9次調査で4基確認された。古墳群の年代は前期の前方後円墳1基と方墳2～4基、中期の方墳4～6基と円墳2基、後期の円墳1基から構成されるものとみられ、岩橋千塚に先行し、長期に渡り継続する古墳群として重要な古墳である。秋月1号墳の周溝では、底から庄内期の土器片、上層から布留式古段階の小型丸底壺や広口壺の破片が出土しており、古墳時代前期初頭ないし前期前葉の前方後円墳として注目される。隣接する秋月3号墳からは底部有孔の二重口縁壺が出土しており、古墳群の形成期は庄内期であると評価できる。

古墳時代中期には、方墳から円墳へ墳形の移行がみられる。秋月10号墳周溝の底からは土師器の高壺4脚と直口壺1個が並んで出土しており、これらは5世紀後半のものと考えられる。また、土器棺墓SX5や307土坑(土壙墓)のような墓も確認されている。

古墳時代後期初頭には秋月9号墳が築造される。この古墳の周溝の上層からは須恵器蓋壺と土師器長胴甕を中心に大量の土器が出土している。

秋月古墳群は和歌山平野の中心的な位置を占め、古墳時代前期初頭から後期まで継続する古墳群である。岩橋千塚の出現や目前宮との繋がりも考える必要のある古墳群として重要であり、今後も周辺に存在する埴輪をもった古墳の確認等が重要な課題といえる。

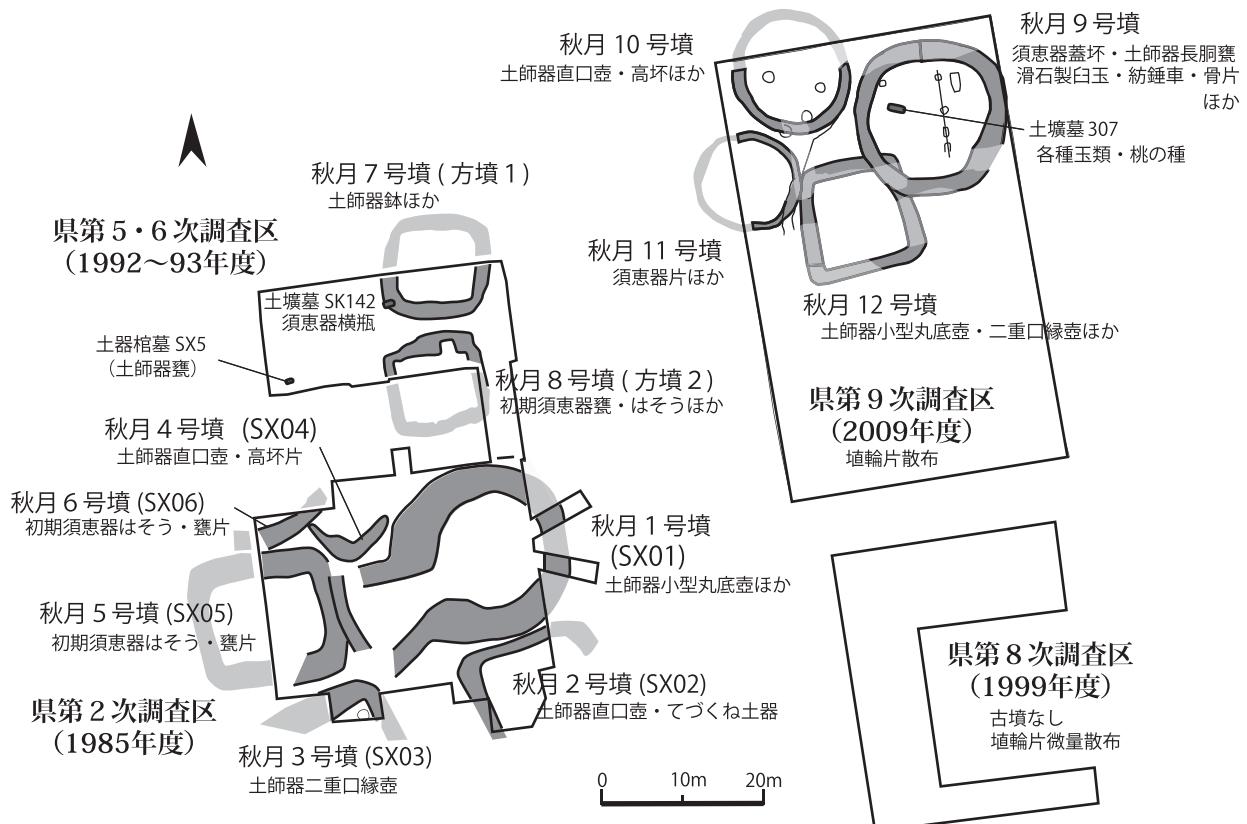


図 85 秋月古墳群の古墳分布状況

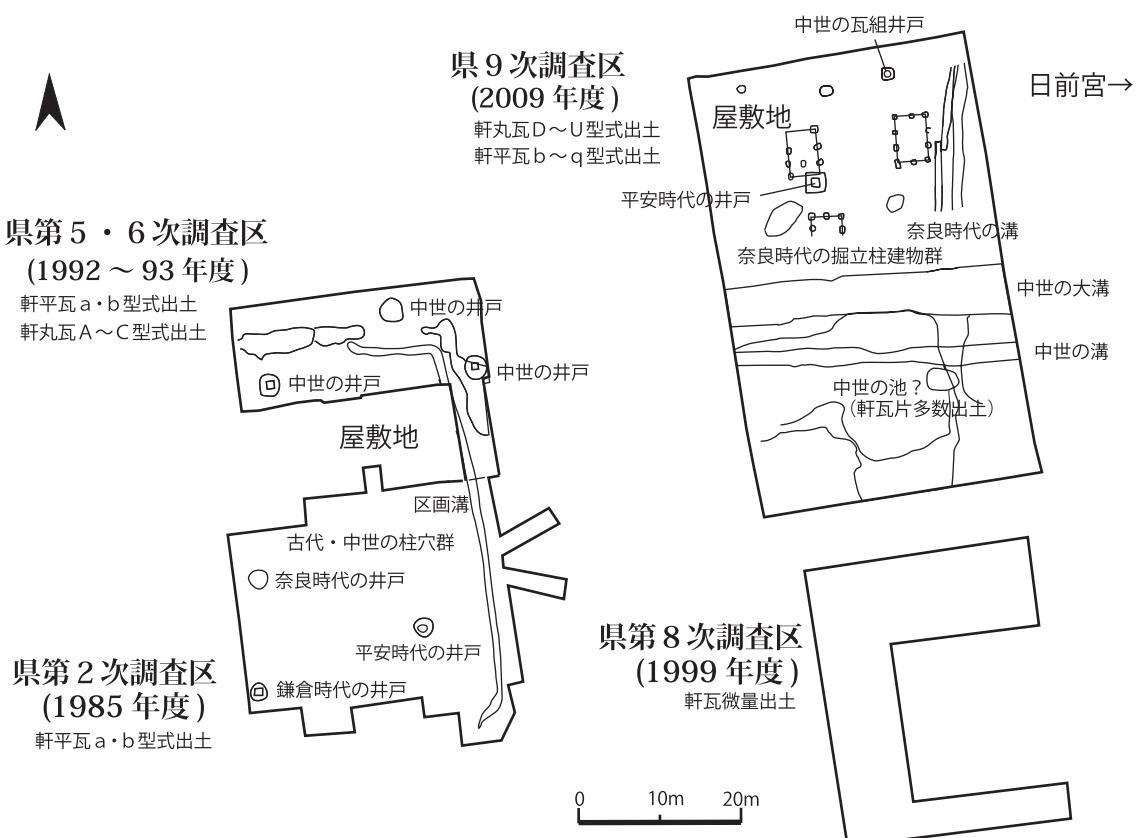


図 86 貞福寺関連の軒瓦出土状況

3. 貞福寺跡の軒瓦について（図 86）

秋月遺跡西部で出土した貞福寺関連の瓦は、表面採集されたものも含めると、軒丸瓦・軒平瓦がそれぞれ 23 型式ある。

最も古いものとして、表採された白鳳期の上野廃寺式軒丸瓦が知られており、奈良・平安時代の瓦は向陽高校グラウンド周辺に分布するようである。（軒丸瓦 D 型式及び表採品軒丸瓦 1 種類・軒平瓦 1 種類）。貞福寺に先行する寺院の有無の確認は、古代の紀伊国を考えるうえで重要な課題といえる。

平安時代後期には文献で知られる貞福寺が創建されたものとみられ、向陽中・高等学校の校舎がある周辺で蓮華紋軒丸瓦・唐草紋軒平瓦が出土した。各調査区で出土する軒瓦の型式が異なることから、複数の建物が建てられたものと推定される（軒丸瓦 A・B・E・F 型式と表採品 1 種、軒平瓦 a・b 型式）。

中世の瓦は巴紋軒丸瓦と連珠紋・均整唐草紋軒平瓦であり、今回の発掘調査区から多様な型式の破片が少量ずつ出土した。建物跡は確認されず、瓦積み井戸で使用されたもののほかは、谷や大溝の埋め立て土などから出土した小破片である。『紀伊続風土記』によると、貞福寺には本堂（大日堂）・寺・鎮守社・鐘楼・大門があり、長寛 2 年（1164）、天文 2 年（1533）と永禄 5 年（1562）に日前宮で火災があったほか、天正 13 年（1585）には羽柴秀吉による太田城水攻めに伴い破却されており、隣接する貞福寺も火災や戦乱の影響を被ったものと考えられる。多様な瓦の出土状況は、貞福寺が平安時代後期から室町時代まで長期にわたり大切に維持管理されてきた寺院であることを示しているものと考えられる。その後、貞福寺は中世から近世への移り変わりの中で廃絶し、整地のうえ、耕作地へと変貌している。

今回の調査では廃棄された瓦片が整地土から多量に出土したが、今後は周辺でこれらの瓦が葺かれた寺院の建物や関連施設の調査が進むことが期待される。

参考文献

＜秋月遺跡西部県発掘調査報告＞

山本高照・丹野拓「秋月遺跡」『緊急雇用対策特別基金事業に係る発掘調査資料整理概報』和歌山県教育委員会・和歌山県文化財センター 2005. 03（県 2 次）

土井孝之『秋月遺跡—向陽高校危険校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』和歌山県文化財センター 1994. 03（県 5・6 次）

武内雅人『和歌山市所在 秋月遺跡発掘調査概報』和歌山県文化財センター 1997. 10（県 7 次）

齋藤有美「秋月遺跡の発掘調査」『和歌山県文化財センターワン報 1998』和歌山県文化財センター 1999. 06（県 8 次）

富永里菜「秋月遺跡の発掘調査」『和歌山県文化財センターワン報 2009』和歌山県文化財センター 2010. 06（県 9 次）

＜その他の関係資料＞

丹野拓「瓦からみた寺社・官衙の動向—平安時代の紀ノ川下流域を中心に—」『紀伊考古学研究 8』2005. 08

海津一朗編『和歌山平野における莊園遺跡の復元研究—中世日前宮領の研究—』2006. 03

富加見泰彦「古墳時代紀ノ川流域の様相」『郵政考古紀要 48』大阪・郵政考古学会 2010. 05

丹野拓「秋月遺跡と平野部の古墳—「秋月古墳群」と「鳴神古墳群」の設定と分析—」『和歌山平野の集落遺跡—弥生時代から古墳時代へ—』和歌山県文化財センター 2011. 01

付章 秋月遺跡出土玉類の原材产地分析

秋月遺跡第9次調査では、307土壙墓から31点(635(1)～665(31))、秋月9号墳周溝から2点(666(32)・667(33))、秋月10号墳周溝から1点(668(34))の玉が出土した。肉眼による観察と実測図は第3章第5節「玉類」に掲載し、原材产地分析については有限会社遺物材料研究所へ委託した。原材产地分析については、紙幅の都合上、報告を一部抜粋して掲載している。特に「2. 秋月遺跡出土管玉の石材产地同定分析」については、日本各地のいずれの原石・遺物群ともデータが一致しなかったこともあり、前提条件や比較データを省略した。これらの詳細については、当センターで刊行した『太田・黒田遺跡』の第5章第5節「太田・黒田遺跡出土遺物整理に伴う管玉原材产地分析」に掲載しているので、参照していただきたい。

1. 秋月遺跡出土滑石・緑泥石片岩製玉類の产地分析

有限会社 遺物材料研究所 藦科哲男

和歌山県和歌山市に位置する秋月遺跡から出土した滑石様・緑泥石片岩様製勾玉7個・小玉13個の棗玉1個、紡錘車1個の合計22個の分析結果が得られたので報告する。

滑石・緑泥石片岩様製玉類の蛍光X線分析と分類

蛍光X線分析法による分類と产地分析結果

秋月遺跡出土勾玉、管玉は、超音波洗浄器で水洗を行うだけの完全な非破壊分析で行い、大きな玉類は肉眼で汚染の少ない面を選んで直径約1cmφ以内の部分を分析した。

滑石・緑泥石片岩様製玉類のエネルギー分散型蛍光X線分析の蛍光X線スペクトルを勾玉、管玉について図1-1～1-22に示す。分析された元素のピークは、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、珪素(Si)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ニッケル(Ni)で、緑泥石片岩には微量にイットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)などが観測できる。これら元素含有量の分析値には、分析遺物の形状の違いによる影響が含まれているために、遺物相互の組成比較は、元素比を取って形の影響を取り除き元素比組成を求め、また比重を求めて表1に示した。秋月遺跡出土玉類と同じ石材が阪南市亀川遺跡および可児市昼飯大塚古墳群で使用されているか判定するために、表2-1に示した亀川遺物群と昼飯大塚遺物群と秋月遺跡の遺物をマハラノビスの距離を求めてホテリングのT2乗検定によって同定を行い。また秋月遺跡出土玉類の原石产地を求めるために、表2-2の各产地の滑石・片岩原石で作った原石群と比較しマハラノビスの距離を求めてホテリングのT2乗検定によって同定を行い。結果を表3に示した。また、さらに判定の精度を上げるためにESR分析を併用した。

ESR分析による分類

ESR分析は滑石、緑泥石片岩などの鉱物結晶および共生鉱物に含有されているイオンとか、岩石が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号違いから产地間を区別する指標を見つけて、产地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の玉なら分析は可能で、ESR信号の強度が大きい場合は、胡麻粒大の試料で分析ができる場合がある。滑石、緑泥石片岩の代表的なESRスペクトルとして、昼飯大塚古墳出土遺物のESR信号を図2-1に示した。また各产地の滑石・片岩原石の代表的ESRスペクトル信号を図2-2-1～2-2-5に示した。滑石、緑泥石片岩などのESR信号は全て基本的には6本から構成されその間隔はESR信号のg値決定用の標準試料Mn2+に一致していることから、滑石、緑泥石片岩の中のMgを置換したMnに関係した信号と推測した。(1)の0mT(ミリテス

ラー)から600mT間のE S R信号の中で、100mT～200mTの信号は鉄の高スピノの信号と推測され、遺物の中には2本に分裂した信号を示すものも見られた。また200mT～600mT間の大波の信号は鉄の低スピノの信号と思われ、この鉄信号に300mT～400mT間にMnイオンの6本が重なる形で分析される。(2)の信号は240mT～430mT間を拡張してMnイオン信号に注目して示した。変成岩では変成度の違いなどで、生成鉱物種も異なり、鉱物ごとにMnイオンの周り原子との相互作用が異なると推測される。Mnイオンの6本の信号は分裂し超微細構造を示し複雑な形となる(仮に複6形と呼ぶ)。この超微細構造はg異方性を示す場合が多く、試料を回転させて分析すると、E S R信号が変化するため、信号が異なる事が直ちに遺物玉材の岩石の種類が違うとはいえない。実際に試料を回転させて信号が変化するか否かを確かめる必要がある。しかし、幅の広い単純な6本(仮に単6形と呼ぶ)の信号を示す遺物は、回転させても、信号の形の変化はない。従って、複6形と単6形は異なった鉱物の可能性が推測され、岩石を区別する指標になると思われる。同じ変成度で同じ鉱物であれば、同じ信号になることは想像できる。分析番号76965番で明確に確認できる鉄イオンの信号と思われる大波の信号は、多少の差はあるものの全ての滑石、緑泥石片岩に含有されている。分析番号76945は鉄信号と小さな単6形の信号が重なり(鉄・単6形)、さらに不明の常磁性種(他イオン)の小さな信号も重なっている。これら代表的な、4個の形のE S R信号と比較するために、秋月遺跡の分析できたE S R信号を図3に示し、その結果を表3に示した。表2の中で、単6、複6形など理想化したスペクトルを推測し、同じ鉱物とか結晶が含有されていると推測してのことで、実際の測定スペクトルを重ね合わせてぴったり一致すると言う意味ではない。実際のE S R信号には、鉄イオンの信号が大きすぎて、Mnイオンの信号が隠れいる可能性もあり、また、鉄、Mnイオン以外の信号が重なっていると思われる場合もみられる。昼飯1遺物群は単6形が主体で、昼飯2遺物群は鉄のみ、鉄と小さな単6、複6形が中心で大きな単6は群の22個の中の2個にすぎない。亀川1遺物群は単6形で、亀川2遺物群は複6形である。滑石岩系のE S Rスペクトルは複複6形が多く、片岩系は単6形が多い。遺物の判定は蛍光X線分析法とE S R分析の両結果が一致した群の可能性があるとして総合判定を行う

結論

今回分析を行った片岩・滑石製の勾玉、小玉の蛍光X線分析法によるホテリングT2乗判定で分析番号108395、108397、108416、108420、108421は亀川2遺物群に同定され、E S R分析結果では単6と同定された遺物はE S Rの信号が一致しないために、亀川2遺物群とは言えない。分析番号108394、108398、108418はE S R分析は単6形で昼飯1遺物群に一致するが、蛍光X線分析結果では、昼飯1遺物群に非常に低い確率で同定されるために、昼飯1遺物群と同じ原材と言えない。分析番号108430、108407は高確率で亀川2遺物群に同定され、鉄イオンに隠れた信号は複6の可能性があり比重も2.8でこれら玉類を亀川2遺物群と同じ産地の原石と推測した、分析番号108404の棗玉はE S R信号も鉄イオンが大きく、比重も2.644と昼飯2遺物群に一致するが、蛍光X線分析結果の確率が低く判定を保留する。分析番号108409の紡錘車は船戸鉱山-1群に(68%)の、また沼島アミダバエ群に(4%)の確率で同定され、船戸鉱山産滑石の可能性が高いという結果を得た。また亀川2遺物群(69%)に高確率で一致し、比重も2.8であることから、E S R分析結果は不明であるが、亀川2遺物群と同じ船戸鉱山産地の原石の可能性を推測した。また、産地が推測できなかった遺物の中で相互に似た組成を示す分析番号108396、108412～108415の5個で秋月片岩A遺物群を作り同じ組成の玉類の使用圏が求められるようにした。和歌山県内の滑石、緑泥石片岩の原石、原石は良質なものから、ぼろぼろな原石まで様々であり、考古学のための原石群を作るためには、玉類製作に耐える原石を選択して分析を行う必要があると思う。

表1 秋月遺跡出土滑石・片岩製玉類の元素比と比重

管理番号	分析番号	元素比												重量 (gr)	比重	
		Mg/Si	Al/Si	K/Si	Ca/Si	Ca/Ti	Ca/Fe	Cr/Fe	Cr/Mn	Mn/Fe	Ni/Fe	Y/Fe	Zr/Fe	Ba/Zr		
1	108394	9.332	0.217	0.085	1.075	2.442	0.005	0.004	0.401	0.010	0.002	0.002	0.018	0.000	1.00606	2.655
2	108395	5.255	0.191	0.420	2.029	0.422	0.006	0.002	0.457	0.004	0.000	0.007	0.078	0.000	1.12208	2.710
3	108396	10.027	0.254	0.000	0.545	1.271	0.002	0.009	0.948	0.009	0.004	0.000	0.000	0.000	0.87961	2.719
4	108412	9.835	0.252	0.000	0.527	0.891	0.002	0.011	1.222	0.009	0.006	0.000	0.000	0.000	0.83233	2.725
5	108413	9.683	0.252	0.000	0.856	0.961	0.003	0.012	1.281	0.009	0.005	0.000	0.002	0.000	0.67525	2.728
6	108414	8.955	0.237	0.000	0.894	1.162	0.002	0.005	0.618	0.008	0.005	0.000	0.000	0.000	0.53540	2.717
7	108415	9.261	0.247	0.000	0.638	1.224	0.002	0.004	0.399	0.009	0.007	0.000	0.000	0.000	0.51520	2.724
8	108397	1.484	0.149	2.040	4.221	4.219	0.010	0.000	0.000	0.001	0.001	0.002	0.014	0.000	0.07600	2.519
15	108398	10.058	0.239	0.000	0.866	1.136	0.004	0.002	0.161	0.009	0.002	0.000	0.005	0.000	0.02477	2.655
17	108399	10.162	0.193	0.000	1.335	0.856	0.005	0.011	3.684	0.003	0.009	0.000	0.045	0.000	0.02380	2.573
9	108416	4.765	0.191	1.006	2.467	4.566	0.007	0.002	0.261	0.006	0.000	0.000	0.006	0.000	0.07163	2.551
10	108417	7.762	0.187	0.256	9.480	325.390	0.036	0.001	0.306	0.005	0.001	0.003	0.096	0.000	0.08402	2.666
11	108418	7.220	0.171	0.137	1.705	1.696	0.006	0.004	0.841	0.005	0.004	0.000	0.000	0.000	0.05322	2.635
12	108419	7.082	0.250	0.156	1.619	0.969	0.003	0.000	0.000	0.006	0.000	0.001	0.007	0.000	0.07900	2.723
13	108420	4.679	0.164	0.826	2.417	3.882	0.008	0.002	0.432	0.004	0.004	0.000	0.231	0.000	0.02958	2.581
14	108421	3.536	0.150	1.174	3.220	4.235	0.011	0.020	5.042	0.004	0.015	0.000	0.010	0.000	0.04444	2.286
16	108422	7.289	0.193	0.432	2.008	6.533	0.006	0.001	0.199	0.007	0.004	0.000	0.017	0.000	0.02809	2.608
33	108430	3.954	0.014	0.000	0.000	0.000	0.000	0.031	6.418	0.005	0.053	0.000	0.000	0.000	0.06796	2.797
32	108407	3.758	0.017	0.175	0.012	0.101	0.000	0.036	4.624	0.008	0.048	0.000	0.000	0.000	0.14209	2.844
34	108408	0.326	0.124	1.687	6.688	3.943	0.041	0.002	1.277	0.002	0.000	0.011	0.054	15.648	0.34409	2.284
25	108404	7.486	0.033	0.256	0.385	2.011	0.003	0.049	7.926	0.006	0.013	0.000	0.000	0.000	0.047300	2.644
35	108409	4.002	0.030	0.044	0.079	0.294	0.001	0.040	7.105	0.005	0.023	0.000	0.000	0.000	48.21164	2.784

表2-1 各遺跡における滑石、片岩様玉類遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

原石 群名	分析 個数	Mg/Si Xav $\pm\sigma$	Al/Si Xav $\pm\sigma$	K/Si Xav $\pm\sigma$	Ca/Si Xav $\pm\sigma$	Ca/Ti Xav $\pm\sigma$
亀川1遺物群	43	5.426 \pm 1.697	0.147 \pm 0.031	0.135 \pm 0.169	4.275 \pm 1.574	0.496 \pm 0.163
亀川2遺物群	20	2.933 \pm 0.574	—	—	—	5.310 \pm 5.929
昼飯1遺物群	60	4.596 \pm 2.000	0.103 \pm 0.073	0.080 \pm 0.088	0.568 \pm 0.482	—
昼飯2遺物群	22	5.982 \pm 1.007	0.008 \pm 0.026	0.064 \pm 0.082	0.287 \pm 0.394	—
秋月片岩A遺物群	45	9.349 \pm 0.298	0.249 \pm 0.005	—	0.701 \pm 0.130	0.919 \pm 0.181

原石 群名	分析 個数	Cr/Fe Xav $\pm\sigma$	Cr/Mn Xav $\pm\sigma$	Mn/Ti Xav $\pm\sigma$	Ti/Fe Xav $\pm\sigma$	Mn/Fe Xav $\pm\sigma$
亀川1遺物群	43	0.032 \pm 0.004	0.192 \pm 0.376	2.092 \pm 1.151	0.012 \pm 0.005	0.020 \pm 0.004
亀川2遺物群	20	0.032 \pm 0.020	5.029 \pm 3.008	9.496 \pm 5.720	—	—
昼飯1遺物群	60	0.006 \pm 0.007	—	—	0.008 \pm 0.010	0.017 \pm 0.006
昼飯2遺物群	22	0.013 \pm 0.014	—	—	0.001 \pm 0.001	0.015 \pm 0.004
秋月片岩A遺物群	45	0.009 \pm 0.004	1.024 \pm 0.423	3.034 \pm 0.742	0.003 \pm 0.001	0.009 \pm 0.001

原石 群名	分析 個数	Ni/Fe Xav $\pm\sigma$	Zr/Fe Xav $\pm\sigma$	ESR信号形 Xav $\pm\sigma$	比 重 Xav $\pm\sigma$
亀川1遺物群	43	0.005 \pm 0.007	—	単6形	2.774 \pm 0.069
亀川2遺物群	20	0.054 \pm 0.033	—	複6形(超微細構造)	2.805 \pm 0.041
昼飯1遺物群	60	0.009 \pm 0.011	0.016 \pm 0.018	単6形	2.760 \pm 0.093
昼飯2遺物群	22	0.081 \pm 0.045	0.007 \pm 0.021	鉄(と微少単6)、複6形	2.638 \pm 0.047
秋月片岩A遺物群	45	0.005 \pm 0.001	—	単6形	2.723 \pm 0.004

Xav:平均値、 σ :標準偏差値

亀川1:亀川遺跡(大阪府阪南市)の玉類、玉材で作った群。

亀川2:亀川遺跡(大阪府阪南市)の玉類、玉材および和歌山西北産

昼飯1、2:昼飯大塚古墳(大垣市)の玉類で作った群

表3 秋月遺跡出土玉類の産地分析結果

品名	管理番号	分析番号	ホテリングのT2検定結果 (%)	ESR信号波形	総合判定
片岩勾玉	1	108394	昼飯1遺物群	—	昼飯1遺物群?
片岩勾玉	2	108395	亀川2遺物群(0.7%)	鉄イオン	—
片岩勾玉	3	108396	秋月片岩A遺物群(14%)	単6形	秋月片岩遺物群
片岩勾玉	4	108412	秋月片岩A遺物群(64%)	単6形	秋月片岩遺物群
片岩勾玉	5	108413	秋月片岩A遺物群(83%)	単6形	秋月片岩遺物群
片岩勾玉	6	108414	秋月片岩A遺物群(56%)	単6形	秋月片岩遺物群
片岩勾玉	7	108415	秋月片岩A遺物群(55%)	単6形	秋月片岩遺物群
片岩小玉	8	108397	亀川2遺物群(3%)	単6形	—
片岩小玉	15	108398	昼飯1遺物群(0.3%)	単6形	—
片岩小玉	17	108399	—	単6形	—
片岩小玉	9	108416	亀川2遺物群(8%)	単6形	—
片岩小玉	10	108417	—	単6形	—
片岩小玉	11	108418	昼飯1遺物群(0.2%)	単6形	昼飯1遺物群?
片岩小玉	12	108419	—	単6形	—
片岩小玉	13	108420	亀川2遺物群(6%)	単6形	—
片岩小玉	14	108421	亀川2遺物群(79%)	単6形	—
片岩小玉	16	108422	—	単6形	—
滑石小玉	33	108430	亀川2遺物群(67%)	鉄イオン・複6	亀川2遺物群
滑石小玉	32	108407	亀川2遺物群(59%)	鉄イオン・複6	亀川2遺物群
片岩小玉	34	108408	—	不明	凝灰岩型?
滑石纏錘車	25	108404	昼飯2遺物群(0.6%)	鉄イオン	昼飯2遺物群?
滑石紡錘車	35	108409	船戸鉱山-1(68%),沼島アミダバエ(4%),亀川2遺物群(69%)	遺物過大	船戸鉱山

表2-2 各産地における滑石、片岩原石群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析個数	Mg/Si Xav \pm σ	Al/Si Xav \pm σ	K/Si Xav \pm σ	Ca/Si Xav \pm σ	Ca/Ti Xav \pm σ	Cr/Fe Xav \pm σ	Cr/Mn Xav \pm σ	Mn/Ti Xav \pm σ
筑豊・古屋敷	48	4.193 \pm 0.076	0.019 \pm 0.002	0.050 \pm 0.021			0.032 \pm 0.013	5.721 \pm 2.578	2.258 \pm 1.151
養父・満福寺境内	45	4.079 \pm 0.092	0.025 \pm 0.002	0.060 \pm 0.009			0.039 \pm 0.006	12.429 \pm 1.646	1.487 \pm 0.121
養父・聖長鉱山	42	4.133 \pm 0.128	0.022 \pm 0.003	0.067 \pm 0.016			0.041 \pm 0.017	12.361 \pm 3.694	1.435 \pm 0.188
桃山・石筆山	42	4.209 \pm 0.092	0.018 \pm 0.002	0.047 \pm 0.019			0.036 \pm 0.010	7.937 \pm 2.493	2.295 \pm 0.396
桃山・金神	42	3.935 \pm 0.082	0.019 \pm 0.003	0.068 \pm 0.012			0.028 \pm 0.013	4.118 \pm 1.600	2.756 \pm 0.625
和歌山・船戸鉱山	54	4.045 \pm 0.092	0.029 \pm 0.003	0.033 \pm 0.015			0.032 \pm 0.006	6.305 \pm 1.036	2.222 \pm 0.528
桃山・三和	45	4.086 \pm 0.224	0.031 \pm 0.013	0.043 \pm 0.023			0.025 \pm 0.005	4.237 \pm 1.057	3.469 \pm 0.420
紀の川・寺山古墳鉱床	45	4.439 \pm 0.136	0.041 \pm 0.004	0.031 \pm 0.022			0.029 \pm 0.003	4.794 \pm 0.810	2.345 \pm 0.396
和歌山・下三毛	49	3.904 \pm 0.076	0.019 \pm 0.001	0.033 \pm 0.018			0.035 \pm 0.020	7.389 \pm 2.530	2.479 \pm 0.484
中ノ宮	45	4.160 \pm 0.319	0.021 \pm 0.009	0.056 \pm 0.023			0.042 \pm 0.007	5.360 \pm 1.158	3.164 \pm 0.563
埼玉・波久礼	45	4.136 \pm 0.118	0.029 \pm 0.004	0.052 \pm 0.014			0.035 \pm 0.006	6.106 \pm 0.897	3.374 \pm 0.629
埼玉・神流川上流	49	3.227 \pm 0.708	0.275 \pm 0.006	6.700 \pm 2.494	4.884 \pm 2.452			0.377 \pm 0.124	
茨城・白羽	46	2.160 \pm 0.258	0.245 \pm 0.006	0.750 \pm 0.133	20.695 \pm 1.765	15.128 \pm 4.234		0.405 \pm 0.105	
養父・関宮	44	4.260 \pm 0.061	0.018 \pm 0.001	0.078 \pm 0.007			0.036 \pm 0.010	5.332 \pm 1.221	1.815 \pm 0.257
沼島アミダバエ	48	4.151 \pm 0.087	0.029 \pm 0.013	0.056 \pm 0.012			0.034 \pm 0.004	6.055 \pm 0.548	2.764 \pm 0.888
桃山・亀和本流	48	4.247 \pm 0.158	0.032 \pm 0.009	0.019 \pm 0.006			0.041 \pm 0.008	6.286 \pm 0.652	4.284 \pm 0.704
和歌山・上三毛	48	4.126 \pm 0.067	0.024 \pm 0.002	0.055 \pm 0.015			0.035 \pm 0.005	6.271 \pm 0.857	2.436 \pm 0.223
紀の川・最初ヶ峰	45	4.240 \pm 0.120	0.023 \pm 0.003	0.028 \pm 0.006			0.033 \pm 0.009	7.193 \pm 1.630	1.878 \pm 0.638
養父・聖長鉱山(益富)	44	1.611 \pm 0.300	0.020 \pm 0.001	0.081 \pm 0.007			0.044 \pm 0.012	9.282 \pm 1.847	3.428 \pm 1.077
養父・満福寺露頭	48	4.135 \pm 0.097	0.018 \pm 0.001	0.072 \pm 0.010			0.038 \pm 0.006	11.543 \pm 2.426	1.251 \pm 0.200
和歌山・岩橋千塚C地点	44	4.554 \pm 0.474	0.252 \pm 0.007		15.394 \pm 4.862	1.727 \pm 0.874			0.221 \pm 0.056
和歌山・岩橋千塚AB地点	101	1.085 \pm 0.174	0.111 \pm 0.009		16.465 \pm 3.047	5.545 \pm 2.311			0.235 \pm 0.067
和歌山・岡山丁	44	1.848 \pm 0.248	0.131 \pm 0.009		16.117 \pm 1.724	0.427 \pm 0.076			0.427 \pm 0.076
和歌山・雜賀崎-1	52	0.590 \pm 0.145	0.177 \pm 0.043	8.295 \pm 2.391				0.778 \pm 0.364	0.369 \pm 0.087
和歌山・雜賀崎-2	52	0.337 \pm 0.073	0.111 \pm 0.015	3.526 \pm 1.185				1.943 \pm 0.605	0.316 \pm 0.058
葛城・三谷-1	47	0.190 \pm 0.075	0.119 \pm 0.011	4.622 \pm 1.014			1.569 \pm 0.151		
葛城・三谷-2	52	0.984 \pm 0.110	0.137 \pm 0.007	7.762 \pm 0.466			3.398 \pm 0.397		
紀の川・荒見	50	0.226 \pm 0.082	0.049 \pm 0.023	1.202 \pm 0.768			0.618 \pm 0.139		
橋本・上田	48	1.086 \pm 0.199	0.133 \pm 0.013	1.573 \pm 0.766			6.434 \pm 2.515		
橋本・学文路	50	1.519 \pm 0.473	0.155 \pm 0.024	1.182 \pm 1.527			4.408 \pm 1.672		
駒渕八幡神社	50	0.652 \pm 0.329	0.075 \pm 0.019		11.635 \pm 2.680	5.710 \pm 2.254			0.299 \pm 0.080
橋本・童門山	50	1.196 \pm 0.121	0.115 \pm 0.010		15.878 \pm 2.350	3.653 \pm 0.909			0.193 \pm 0.049
徳島・眉山	54	0.945 \pm 0.194	0.104 \pm 0.017		16.940 \pm 4.061	5.054 \pm 2.475			0.269 \pm 0.194
秋月片岩A遺物群	45	9.505 \pm 0.336	0.248 \pm 0.005		0.693 \pm 0.120	1.115 \pm 0.147	0.009 \pm 0.004	0.965 \pm 0.469	

原石群名	分析個数	10*Mn/Fe Xav \pm σ	10*Ni/Fe Xav \pm σ	10*Y/Fe Xav \pm σ	10*Zr/Fe Xav \pm σ	10*Sr/Fe Xav \pm σ	ESR信号形	比 重
筑豊・古屋敷	48	0.058 \pm 0.015	0.400 \pm 0.069				複複6形	2.804
養父・満福寺境内	45	0.031 \pm 0.003	0.354 \pm 0.012				鉄、複6形	2.806
養父・聖長鉱山	42	0.032 \pm 0.008	0.391 \pm 0.029				複複6形	2.814
桃山・石筆山	42	0.046 \pm 0.008	0.327 \pm 0.028				複複6形	2.815
桃山・金神	42	0.065 \pm 0.012	0.349 \pm 0.054				複複6形	2.823
和歌山・船戸鉱山	54	0.050 \pm 0.006	0.217 \pm 0.030				複複6形	2.798
桃山・三和	45	0.058 \pm 0.007	0.176 \pm 0.029				複複6形	2.831
紀の川・寺山古墳鉱床	45	0.060 \pm 0.008	0.291 \pm 0.025				複複6形	2.767
和歌山・下三毛	49	0.045 \pm 0.012	0.152 \pm 0.025				鉄、複6形	2.816
中ノ宮	45	0.079 \pm 0.018	0.574 \pm 0.144				複複6形	2.835
埼玉・波久礼	45	0.055 \pm 0.003	0.322 \pm 0.029				複複6形	2.831
埼玉・神流川上流	49	0.058 \pm 0.004		0.180 \pm 0.072	0.058 \pm 0.027		上加世田形	2.937
茨城・白羽	46	0.045 \pm 0.003		0.110 \pm 0.017	1.696 \pm 0.313		鉄、單6形?	2.988
養父・関宮	44	0.066 \pm 0.010	0.699 \pm 0.057				複複6形	2.782
沼島アミダバエ	48	0.055 \pm 0.005	0.230 \pm 0.017				複複6形	2.796
桃山・亀和本流	48	0.062 \pm 0.006	0.250 \pm 0.017				複複6形	2.830
和歌山・上三毛	48	0.055 \pm 0.006	0.139 \pm 0.024				鉄イオン	2.777
紀の川・最初ヶ峰	45	0.045 \pm 0.008	0.224 \pm 0.024				複複6形	2.775
養父・聖長鉱山(益富)	44	0.045 \pm 0.006	0.370 \pm 0.033				單6形	2.797
養父・満福寺露頭	48	0.033 \pm 0.008	0.503 \pm 0.049				鉄、複6形	2.791
和歌山・岩橋千塚C地点	44		0.035 \pm 0.009	0.281 \pm 0.063	0.255 \pm 0.100		鉄、單6形?	2.900
和歌山・岩橋千塚AB地点	101		0.067 \pm 0.012	0.389 \pm 0.063	0.241 \pm 0.083		鉄、單6形	2.993
和歌山・岡山丁	44		0.065 \pm 0.009	0.406 \pm 0.047	0.887 \pm 0.133		複單6形	2.938
和歌山・雜賀崎-1	52		0.360 \pm 0.073	2.997 \pm 0.632	0.154 \pm 0.059		單6形	2.655
和歌山・雜賀崎-2	52		0.190 \pm 0.065	4.798 \pm 1.148	0.234 \pm 0.092		單6形	2.587
葛城・三谷-1	47	0.202 \pm 0.036	0.641 \pm 0.082	25.515 \pm 2.679	3.770 \pm 0.584		鉄イオン	2.681
葛城・三谷-2	52	0.062 \pm 0.008	0.062 \pm 0.007	1.050 \pm 0.069	2.383 \pm 0.319		鉄、單6形	2.971
紀の川・荒見	50	0.278 \pm 0.042	0.156 \pm 0.061	1.113 \pm 0.276	0.483 \pm 0.155		鉄、單6形?	2.707
橋本・上田	48	0.052 \pm 0.005	0.076 \pm 0.011	1.052 \pm 0.152	0.583 \pm 0.136		複複6形	2.922
橋本・学文路	50	0.056 \pm 0.004	0.062 \pm 0.011	0.791 \pm 0.167	0.669 \pm 0.378		複複6形	2.948
駒渕八幡神社	50		0.069 \pm 0.010	0.368 \pm 0.071	0.336 \pm 0.135		複單6形	3.000
橋本・童門山	50		0.068 \pm 0.011	0.408 \pm 0.059	0.214 \pm 0.047		鉄・單6形	3.027
徳島・眉山	54		0.069 \pm 0.025	0.470 \pm 0.272	0.184 \pm 0.063		單6形	3.169
秋月片岩A遺物群	45	0.088 \pm 0.005	0.054 \pm 0.011				單6形	2.723

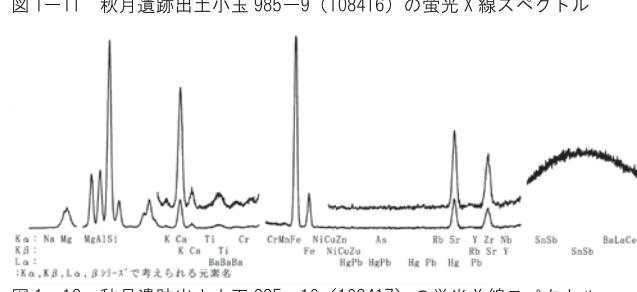
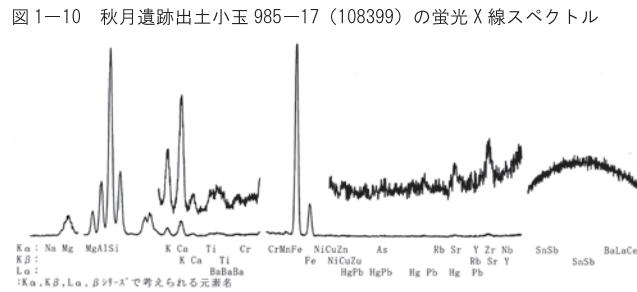
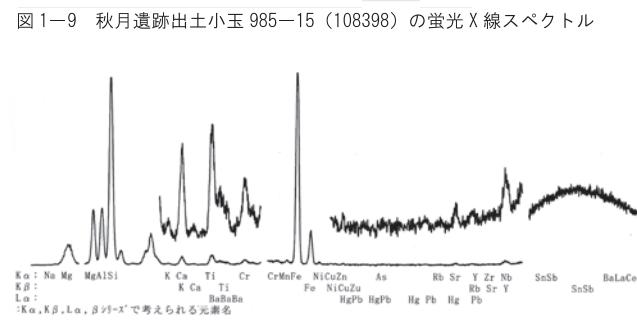
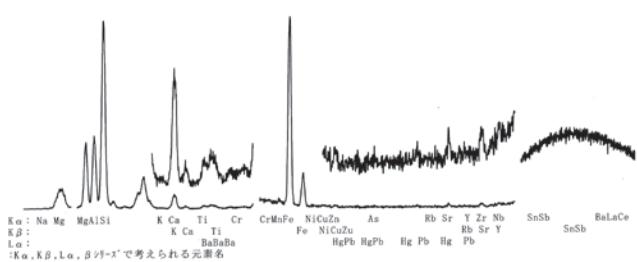
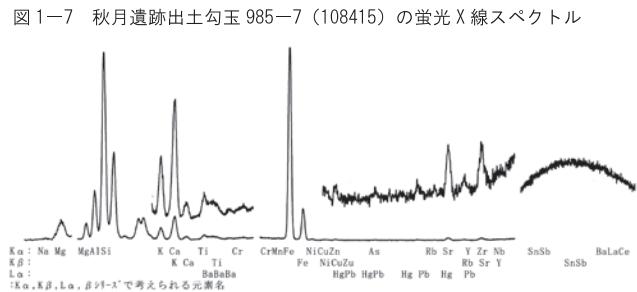
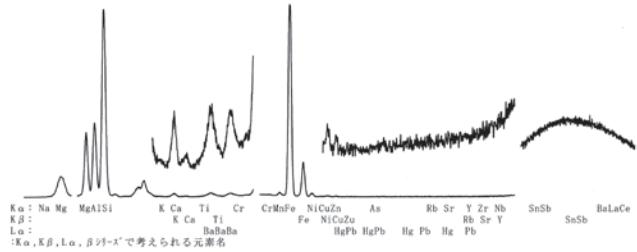
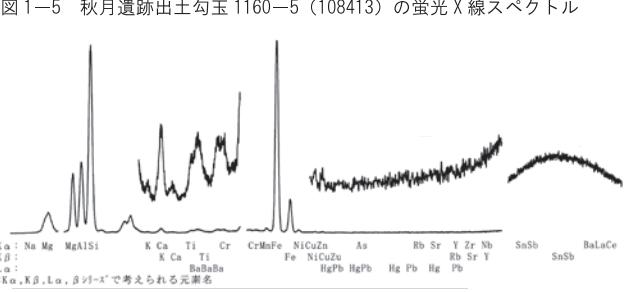
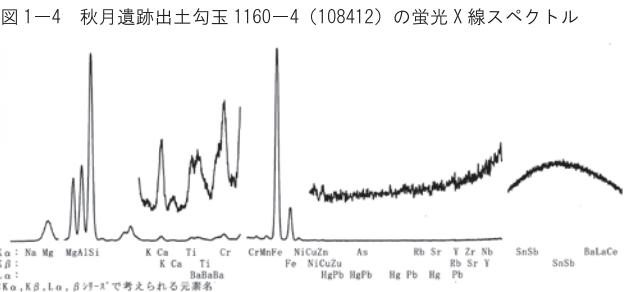
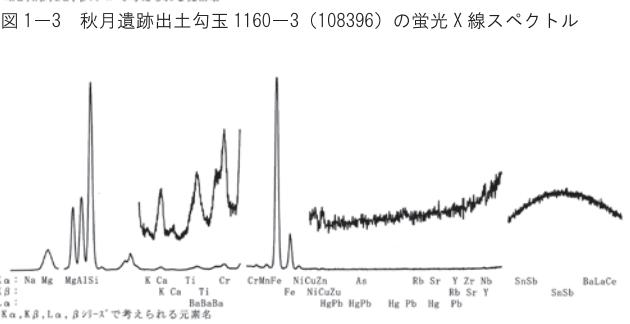
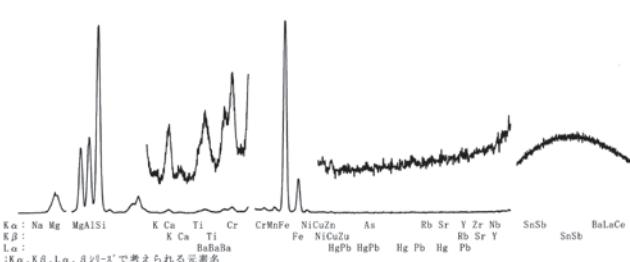
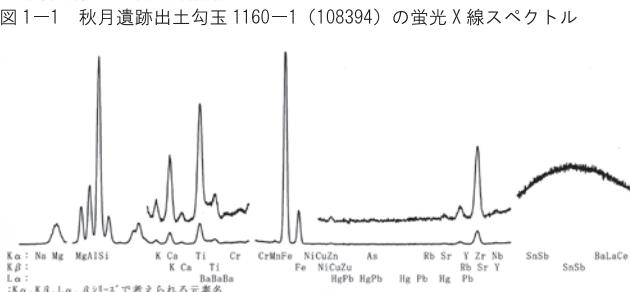
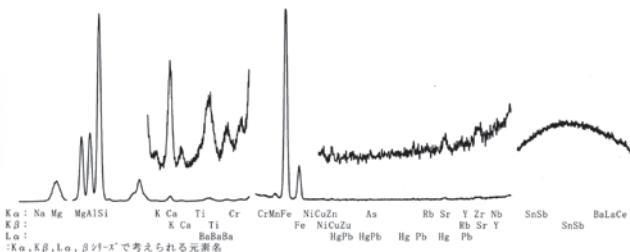
Xav: 平均値、σ: 標準偏差値、10*Mn/Fe: Mn/Fe比値を10倍(桁上げ処理)

山岡 邦章氏(岸和田市教育委員会)提供原石:古屋敷・満福寺境内・聖長鉱山・石筆山・金神・船戸鉱山・三和・寺山古墳鉱床・下三毛・中ノ宮・波久礼・神流上流、白羽、関宮、沼島アミダバエ、亀和本流、上三毛、最初ヶ峰、聖長鉱山(益富)、満福寺露頭

中原 知之氏(紀伊風土記の丘)提供:岩橋千塚A・B・C地点、岡山丁・雜賀崎-1・-2・、三谷-1・-2・、荒見、上田、学文路、駒渕八幡神社、童門山

中村 豊(徳島大学)提供:眉山

秋月片岩A遺物群:秋月遺跡(和歌山市)の玉類で作った群



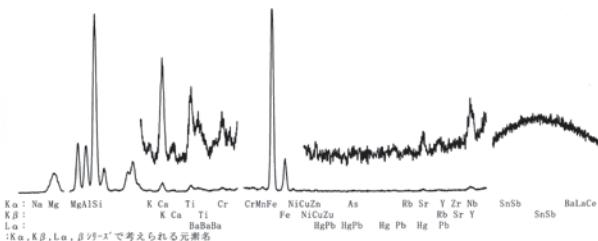


図1-13 秋月遺跡出土小玉985-11(108418)の蛍光X線スペクトル

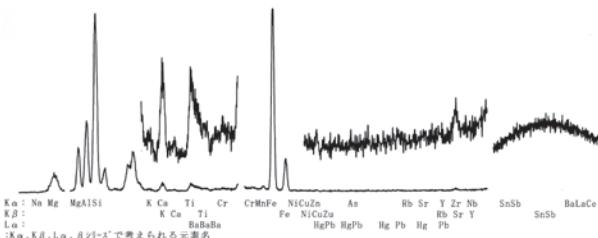


図1-14 秋月遺跡出土小玉 985-12(108419)の螢光X線スペクトル

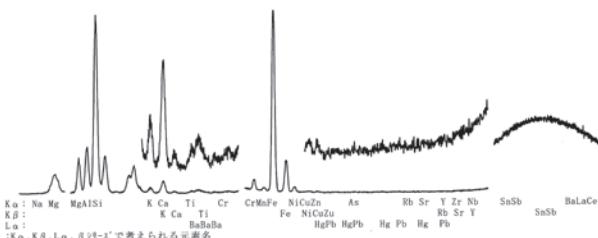


図1-15 秋目遺跡出土小玉985-13(108420)の蛍光×線スペクトル

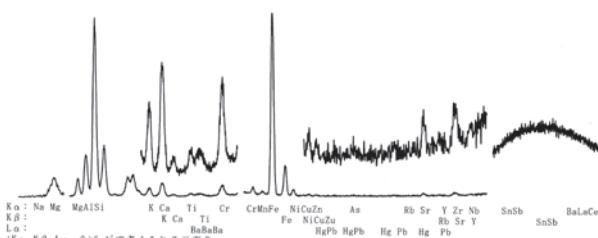


図1-16 秋月遺跡出土小玉985-14(108421)の螢光X線スペクトル

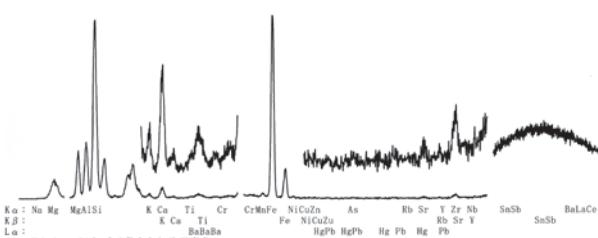


図1-17 秋田遺跡出土小玉98E-16(108422)の光学Y線スペクトル

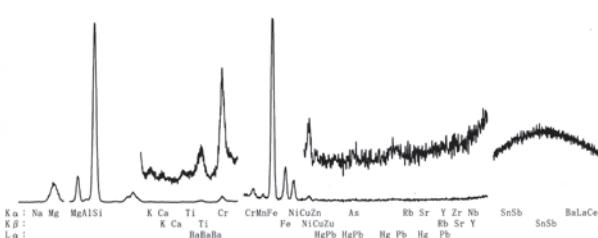


図1-19 秋田津町出土小玉1100-22(100420)の逆光ノ縞コラゲル

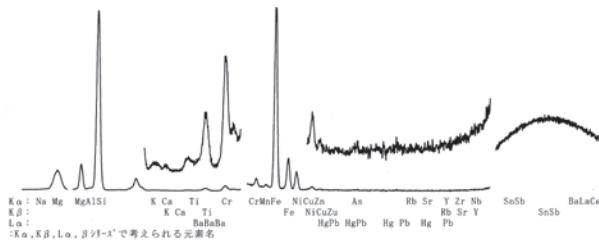


図1-19 秋月遺跡出土小玉1182-32(108407)の蛍光X線スペクトル

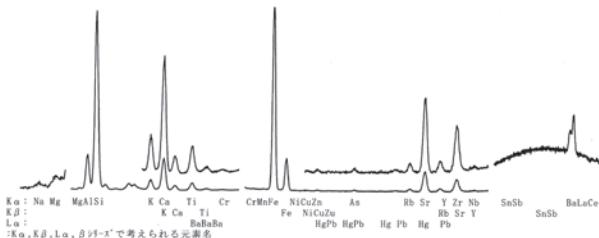


図1-20 秋月遺跡出土小玉813-34(108408)の螢光X線スペクトル

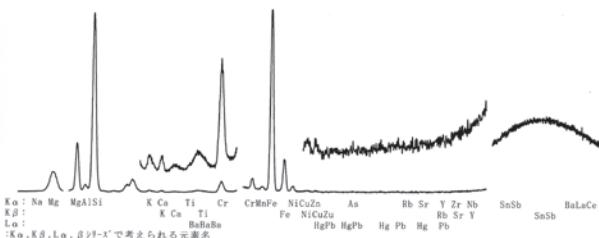


図1-21 秋目遺跡出土棗玉1160-25(108404)の螢光X線スペクトル

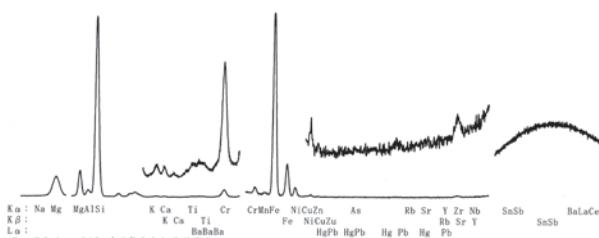


図1-22 秋目遺跡出土紡錘車-16(108409)の蛍光X線スペクトル

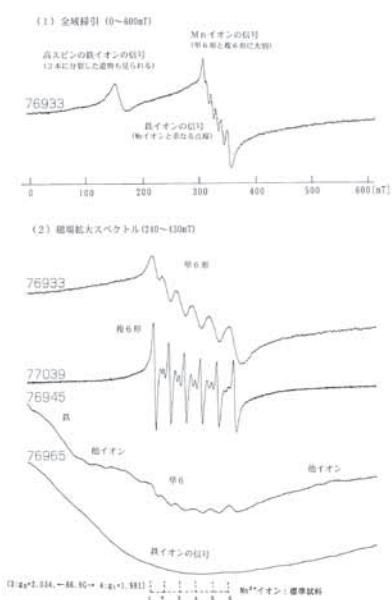


図2 屋敷大塚古墳出土滑石 緑泥石片岩様玉類の代表的なE S Rスペクトル

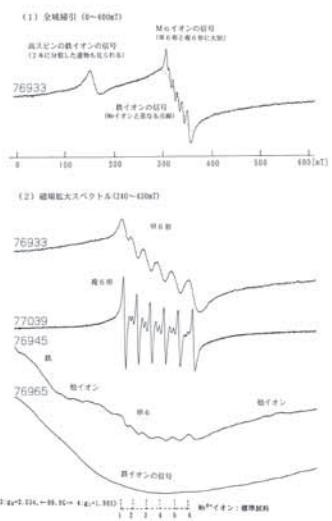


図2-1 昼飯大塚古墳出土滑石、
緑泥石片岩様玉類の代表的な
E S Rスペクトル

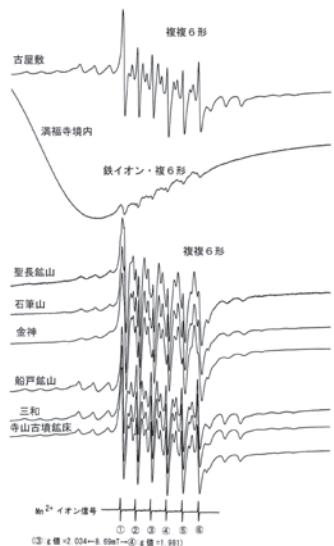


図2-2-1 産地別滑石・片岩原石の
代表的なE S Rスペクトル

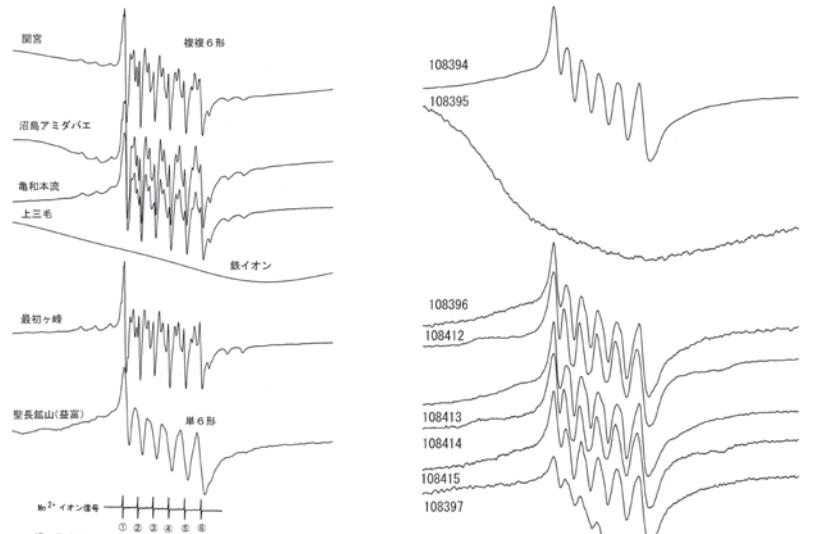


図2-2-3 産地別滑石・片岩原石の
代表的なE S Rスペクトル

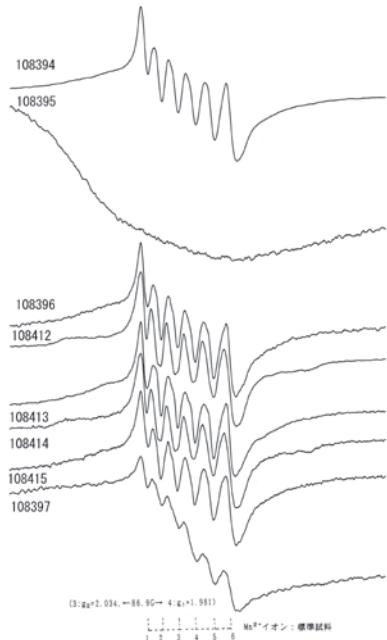


図3-1 秋月遺跡出土滑石・片岩製勾玉、
小玉のE S Rスペクトル

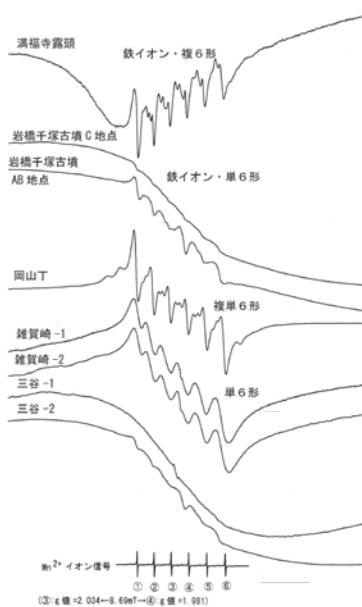


図2-2-4 産地別滑石・片岩原石の
代表的なE S Rスペクトル

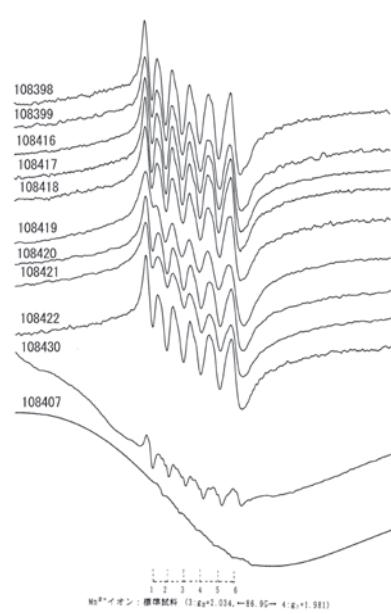


図3-2 秋月遺跡出土滑石・片岩製勾玉、
小玉のE S Rスペクトル

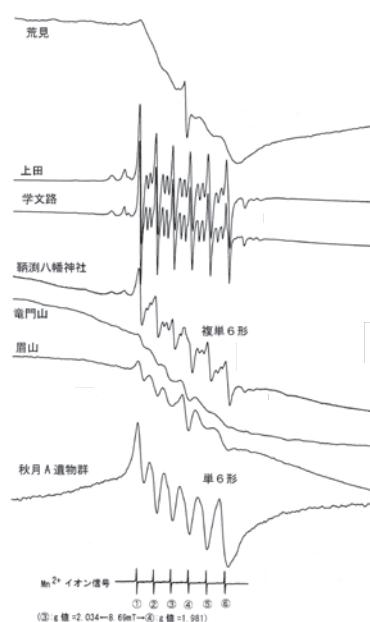


図2-2-5 産地別滑石・片岩原石の
代表的なE S Rスペクトル

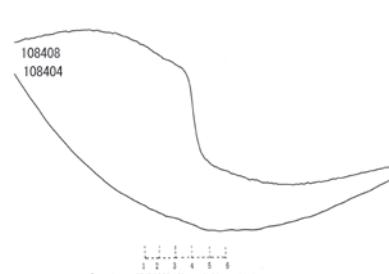


図3-3 秋月遺跡出土滑石・片岩製勾玉、
小玉のE S Rスペクトル

図2-2-2 産地別滑石・片岩原石の
代表的なE S Rスペクトル

2. 秋月遺跡出土管玉の石材産地同定分析

有限会社 遺物材料研究所 薫科哲男

はじめに

今回分析を行った玉類は勾玉、管玉などで、玉類の原材料としては滑石、軟玉（角閃石）、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のよう思われているのが実態である。これら玉材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成などを求めるぐらいであり、非破壊では命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこの産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイ（硬玉、軟玉）や碧玉の原産地うち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。

今回分析を行った遺物は、和歌山市太田に位置する秋月遺跡出土の管玉6個で、石材産地同定結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求める、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指標とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した⁵⁾。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県、花仙山産原石を図1に示す。猿八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図1で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク値とともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いている。

碧玉の原産地と原石の分析結果

（* 分析した碧玉の原石の原産地については、『太田・黒田遺跡』刊行後に遺物材料研究所で分析されたデータのみ抜粋して表1に掲載した。）

秋月遺跡出土玉類と国内産碧玉原材との比較

遺跡から出土した玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗いするだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原材産地の同定をするために、(1) 蛍光X線分析法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2) また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原材であると推

測する方法も応用した。

蛍光X線分析法による産地分析

玉類の比重をアルキメデス法により求め、また蛍光X線分析法によって元素組成比を求めて結果を表2に示し、蛍光X線スペクトルを図3-1～3-6に示す。分析した玉類は肉眼観察では緻密で、比重は分析番号108402が2.533で碧玉製と推測されるが、分析番号108401、108403、108423～108325は比重が2.4以下で緑色凝灰岩製と推測した。これら管玉の原材産地を特定するために、元素比結果を各原石・遺物群（表1）に対しておのの数理統計のマハラノビスの距離を求め、それらの結果を用いて表1に示す日本各地の原石・遺物群339個とホテリングT2乗検定6）による同定をおこなったところ、信頼限界の0.1%以上の確率で同定された原石・遺物群はなかった。同定されなかった遺物について、統計処理が可能な個数のデータを得るためにそれぞれ40回以上遺物の分析箇所を変えながら分析を行い。管玉の分析データは合計240回以上になった。各遺物毎に遺物群を作り、相互にホテリングT2検定をおこないマハラノビス距離D2が～100以下の基準で相互に一致する分析番号108403、108423、108424、108425の遺物がみられ、これらを原石産地は未発見であるが、同じ産地の原石から作られたグループと推測して秋月A遺物群を作った。グループを作らなかった分析番号（登録一図番）108401(1160-19)と108402(1160-20)はそれぞれの各45回分析データで、秋月19遺物群と秋月20遺物群をそれぞれ作った。これら遺物群が新しう発見された原石と同質の組成か、また同質の管玉・玉材が他の遺跡使用されているときに判定出来るように表1の原石遺物群に登録した。また、これら管玉の原石に含有されている鉱物組成からの信号も産地同定の判定の指標にするためにESR分析も行った。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は完全な非破壊分析であり、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大のものでも分析ができる場合がある。図4-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号（I）は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号（II）と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号（III）で構成されている。図4-(1)では、信号（II）より信号（III）の信号の高さが高く、図4-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。各原産地の原石の信号（III）の信号の形は産地ごとに違いがあり産地分析の指標となる。図5-(1)には花仙山、猿八、玉谷、土岐を示し、図5-(2)には興部、石戸、八代谷-4、女代B遺物群、八代谷を示し、そして図5-(3)には富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号（III）のスペクトルを示した。また、図5-(4)には宇木汲田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形、菜畠形、紫金山形を示した。ESR分析では碧玉のESR信号の形が、あらかじめESR分析している原石、および産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、その産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した秋月遺跡出土管玉のESR信号を図6に示し、表3にESR形の欄に型名をした。信号（III）の形が比較的明確に確認できる管玉は、分析番号108401と108402で、信号（II）が比較的大きく信号（III）の形が崩れているために、崩れ玉谷、崩れ女代南B形とした。分析番号108403～108423～108425は信号（III）はいろいろな鉱物イオンによると思われる鋸歯状形の信号に隠れている。この鋸歯状形信号も管玉の特徴的信号である。より正確な原石産地を推測する

表1 各碧玉の原石群と原石产地不明遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

原石群名	分析 個数	Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	比重
花仙山1+2	63	0.021±0.003	1.329±0.359	0.052±0.039	0.189±0.059	0.063±0.016	0.231±0.032	10.681±3.131	2.388±0.585	0.466±0.192	0.123±0.052	0.005±0.007	0.010±0.004	0.003±0.012	2.308±2.614
花仙山1	33	0.023±0.002	1.593±0.172	0.038±0.020	0.155±0.031	0.071±0.015	0.241±0.019	10.900±1.887	2.599±0.452	0.483±0.196	0.120±0.036	0.002±0.003	0.010±0.001	0.004±0.016	2.570±0.044
花仙山2	30	0.019±0.003	1.038±0.277	0.066±0.049	0.227±0.058	0.053±0.011	0.219±0.038	10.440±4.070	2.157±0.625	0.446±0.185	0.127±0.064	0.008±0.008	0.011±0.005	0.002±0.006	2.308±0.079
奥部	31	0.011±0.003	0.580±0.320	0.123±0.137	0.061±0.049	0.022±0.006	0.070±0.021	174.08±124.9	16.990±13.44	0.668±0.435	1.801±1.434	0.004±0.003	0.001±0.001	0.455±0.855	2.626±0.032
神奈川・玉川グリーンタフ	48	0.048±0.006	0.656±0.208	7.350±2.233	1.434±0.273	0.028±0.009	0.025±0.010	2.743±1.075	0.061±0.019	1.187±0.474	0.304±0.039	0.008±0.004	0.038±0.012	0.004±0.006	2.2~吸水激し
石川・日用川グリーンタフ	26	0.048±0.004	2.010±0.132	1.192±0.051	0.190±0.026	0.092±0.008	0.220±0.017	2.125±0.148	0.467±0.040	1.652±0.586	0.092±0.030	0.008±0.001	0.017±0.001	0.010±0.011	2.1~吸水激し
空知A1	42	0.039±0.006	1.026±0.281	2.728±0.907	0.547±0.119	0.042±0.011	0.124±0.058	3.309±1.295	0.353±0.101	12.485±3.306	0.032±0.045	0.028±0.009	0.020±0.005	0.007±0.010	2.495±0.039
空知A2	46	0.021±0.008	0.866±0.447	0.797±0.393	0.225±0.050	0.032±0.006	0.039±0.007	25.866±11.50	1.023±0.499	7.433±4.531	0.378±0.198	0.009±0.003	0.006±0.002	0.118±0.167	2.632±0.012
空知B	47	0.064±0.004	3.600±0.328	0.088±0.008	0.101±0.009	0.242±0.037	0.460±0.055	2.137±0.274	0.974±0.110	0.190±0.082	0.137±0.022	0.015±0.002	0.022±0.004	0.134±0.024	2.607±0.001
猿八1	46	0.042±0.005	3.779±0.549	0.049±0.052	0.074±0.013	0.202±0.070	0.285±0.085	2.520±0.374	0.654±0.131	0.177±0.154	0.128±0.051	0.003±0.002	0.013±0.003	0.011±0.007	2.395~2.597
猿八2	49	0.039±0.003	3.565±0.274	0.016±0.013	0.063±0.012	0.453±0.065	0.471±0.086	0.983±0.172	0.457±0.104	0.100±0.062	0.125±0.042	0.011±0.008	0.025±0.005	0.012±0.007	2.461~2.752
猿八3	52	0.036±0.002	3.304±0.217	0.003±0.003	0.062±0.006	0.977±0.141	0.854±0.110	0.400±0.067	0.333±0.019	0.066±0.009	0.280±0.149	0.033±0.017	0.055±0.009	0.014±0.007	2.526~2.557
佐渡-10	44	0.042±0.001	3.606±0.144	0.029±0.002	0.046±0.004	0.318±0.027	0.445±0.028	1.920±0.161	0.845±0.030	0.139±0.012	0.122±0.012	0.016±0.006	0.013±0.001	0.007±0.007	2.545±0.009
佐渡・小倉川-碧玉H15	56	0.071±0.005	3.833±0.411	0.252±0.021	0.485±0.033	0.110±0.008	0.211±0.009	4.053±0.464	0.848±0.100	0.682±0.066	0.138±0.020	0.007±0.003	0.048±0.006	0.082±0.015	2.428±0.013
佐渡・小倉川-緑凝灰岩1	50	0.049±0.004	3.638±0.422	0.030±0.006	0.115±0.010	0.208±0.052	0.298±0.082	1.726±0.568	0.468±0.052	0.146±0.017	0.100±0.008	0.014±0.005	0.021±0.005	0.011±0.004	2.363±0.038
佐渡・小倉川-緑凝灰岩2	46	0.050±0.003	3.873±0.356	0.110±0.026	0.054±0.010	0.387±0.076	0.419±0.068	0.957±0.193	0.388±0.046	0.296±0.042	0.108±0.052	0.003±0.008	0.019±0.004	0.014±0.007	2.370±0.012
佐渡・小倉川-緑凝灰岩17	46	0.048±0.000	3.889±0.043	0.058±0.002	0.060±0.002	0.304±0.007	0.324±0.009	1.476±0.037	0.474±0.009	0.233±0.007	0.051±0.004	0.001±0.002	0.016±0.001	0.013±0.005	2.21~吸水
小倉川-碧玉2	45	0.045±0.003	3.122±0.186	0.072±0.024	0.121±0.037	0.134±0.031	0.245±0.046	2.453±0.509	0.576±0.070	0.190±0.051	0.119±0.024	0.010±0.004	0.014±0.004	0.009±0.005	2.471±0.036
小倉川1・2橋2原石	37	0.052±0.006	6.115±0.812	0.028±0.007	0.075±0.005	0.126±0.036	0.247±0.028	3.780±1.093	0.900±0.204	0.100±0.010	0.058±0.008	0.008±0.004	0.008±0.002	0.004±0.005	2.418±0.038
小倉川1・2橋3原石	46	0.048±0.003	4.771±0.417	0.025±0.005	0.064±0.007	0.168±0.024	0.270±0.024	2.581±0.550	0.686±0.116	0.100±0.009	0.077±0.010	0.006±0.004	0.010±0.001	0.005±0.005	2.298~吸水
小倉川2橋上4原石	66	0.047±0.002	3.964±0.193	0.062±0.014	0.078±0.011	0.395±0.105	0.514±0.125	0.803±0.166	0.390±0.035	0.204±0.048	0.074±0.008	0.015±0.006	0.027±0.005	0.012±0.005	2.486±0.090
小倉川2橋上1原石	60	0.049±0.006	4.585±0.598	0.040±0.030	0.046±0.012	1.189±0.345	1.207±0.300	0.509±0.175	0.561±0.050	0.169±0.027	0.123±0.010	0.038±0.020	0.046±0.010	0.007±0.007	2.464±0.099
小倉川1原石	48	0.046±0.002	4.366±0.249	0.035±0.005	0.040±0.058	0.851±0.058	0.931±0.057	0.695±0.065	0.640±0.035	0.187±0.025	0.100±0.020	0.029±0.015	0.030±0.004	0.005±0.006	2.483±0.025
小倉川2橋2原石	40	0.052±0.001	4.228±0.050	0.057±0.002	0.076±0.003	0.260±0.006	0.340±0.010	1.217±0.031	0.410±0.009	0.137±0.007	0.081±0.005	0.011±0.004	0.018±0.001	0.012±0.004	2.379±0.010
小倉川1橋1原石	54	0.047±0.003	4.034±0.188	0.047±0.016	0.072±0.008	0.360±0.090	0.485±0.060	1.018±0.603	0.466±0.211	0.141±0.021	0.085±0.002	0.015±0.007	0.023±0.006	0.010±0.005	2.373±0.015
小倉川下流9原石	44	0.044±0.002	4.294±0.307	0.017±0.003	0.068±0.004	0.164±0.013	0.251±0.017	2.400±0.223	0.594±0.018	0.072±0.010	0.067±0.008	0.009±0.004	0.010±0.001	0.007±0.005	2.468±0.036
会津坂下原石	42	0.039±0.004	1.500±0.155	1.162±0.104	0.280±0.058	0.154±0.027	0.168±0.027	1.630±0.188	0.268±0.032	1.162±0.171	0.108±0.017	0.032±0.007	0.038±0.004	0.009±0.008	2.1~吸水激し
新潟・津川-6群	48	0.041±0.001	3.554±0.190	0.036±0.007	0.079±0.004	0.352±0.032	0.346±0.024	1.345±0.112	0.460±0.019	0.079±0.016	0.158±0.031	0.024±0.005	0.025±0.001	0.018±0.006	2.542±0.006
三条市・五十嵐川1原石	44	0.032±0.002	1.309±0.114	0.039±0.007	0.518±0.040	0.058±0.009	0.158±0.009	3.336±0.771	0.518±0.097	0.229±0.060	0.149±0.023	0.025±0.003	0.038±0.002	0.012±0.010	2.552
三条市・五十嵐川2原石	44	0.039±0.002	2.356±0.152	0.126±0.009	0.276±0.013	0.085±0.009	0.136±0.008	3.938±0.460	0.529±0.041	0.306±0.014	0.118±0.025	0.021±0.002	0.021±0.002	0.014±0.009	2.415
土岐	51	0.006±0.004	0.361±0.131	0.072±0.063	0.098±0.063	0.023±0.005	0.096±0.025	43.067±23.28	4.056±2.545	0.271±0.308	0.159±0.180	0.001±0.001	0.001±0.001	0.072±0.160	2.607±0.009
玉谷	48	0.025±0.006	0.765±0.287	0.096±0.046	0.481±0.114	0.043±0.010	0.158±0.030	5.746±1.394	0.895±0.248	0.199±0.148	0.190±0.134	0.027±0.009	0.018±0.004	0.007±0.013	2.619±0.014
細入	8	0.019±0.003	0.534±0.284	0.091±0.036	0.372±0.125	0.031±0.008	0.073±0.020	12.884±3.752	0.882±0.201	1.879±0.650	0.026±0.032	0.003±0.002	0.008±0.002	0.021±0.344	2.169±0.039
緑川	48	0.040±0.003	0.495±0.014	0.798±0.030	0.985±0.032	0.026±0.001	0.044±0.004	3.764±0.428	0.166±0.024	0.830±0.073	0.155±0.022	0.019±0.001	0.024±0.001	0.020±0.011	2.669
二俣	45	0.040±0.003	2.520±0.148	0.384±0.015	0.174±0.004	0.301±0.036	0.377±0.040	1.068±0.103	0.399±0.018	0.699±0.059	0.086±0.016	0.008±0.001	0.046±0.005	0.020±0.007	2.440±0.091
石戸	45	0.019±0.002	0.779±0.271	0.083±0.040	0.145±0.058	0.155±0.065	0.204±0.064	6.024±1.219	1.183±0.284	0.613±0.174	0.162±0.061	0.070±0.017	0.017±0.003	0.067±0.053	2.598±0.008
茂辺地川	4	0.031±0.002	1.847±0.246	0.077±0.024	0.222±0.052	0.092±0.021	0.190±0.052	5.566±1.549	0.980±0.044	0.300±0.032	0.171±0.051	0.003±0.008	0.016±0.001	0.132±0.069	2.536±0.033
ケショウツフ	44	0.040±0.007	2.745±0.957	0.234±0.138	0.135±0.030	0.067±0.008	0.096±0.007	5.720±0.608	0.543±0.034	0.489±0.184	0.146±0.027	0.003±0.001	0.009±0.001	0.035±0.018	2.287±0.013
小松・苦提一那谷	44	0.037±0.002	3.475±0.265	0.008±0.012	0.093±0.015	0.412±0.093	0.347±0.037	1.409±0.256	0.479±0.064	0.107±0.119	0.115±0.044	0.017±0.012	0.033±0.004	0.011±0.009	2.323~2.584
小松・苦提一	62	0.039±0.003	3.150±0.298	0.035±0.029	0.129±0.022	0.323±0.147	0.327±0.091	1.781±0.686	0.523±0.091	0.239±0.147	0.135±0.047	0.013±0.011	0.036±0.013	0.010±0.009	2.536±0.021
花仙山(白化風化)	43	0.026±0.004	0.975±0.276	0.027±0.018	0.261±0.072	0.036±0.008	0.155±0.033	15.733±2.527	2.441±0.669	0.351±0.128	0.184±0.050	0.009±0.005	0.008±0.001	0.001±0.006	2.294±0.151
花仙山(横屋塙-1)	40	0.019±0.006	1.080±0.161	0.017±0.009	0.138±0.042	0.097±0.017	0.197±0.013	8.187±0.859	1.590±0.111	0.339±0.041	0.079±0.022	0.021±0.006	0.011±0.001	0.003±0.006	2.624~2.447
花仙山(淡緑色)	40	0.027±0.006	1.449±0.075	0.037±0.007	0.161±0.018	0.075±0.012	0.246±0.018	12.479±1.513	3.022±0.233	0.921±0.066	0.182±0.022	0.007±0.005	0.011±0.001	—	2.428~2.507
花仙山(くらさこ)	48	0.023±0.001	1.537±0.												

ために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合は、蛍光X線の元素分析のみで判定した原石・遺物群産地よりも正確に、そこの原石・遺物群と同じものが使用されているとして総合判定できる。

結論

分析した6個の管玉の原石産地は比較した日本各地の碧玉・緑色凝灰岩原石および日本各地の遺跡から出土した碧玉・緑色凝灰岩製玉類、玉材で作った遺物群など合計339個の原石・遺物群と比較したが何処の群とも一致しなかった。今回分析した管玉の原石産地および同質の原材、同じ玉作遺跡で同じ原石で作られた兄弟管玉の分配遺跡を将来明らかにすると言うことを目的に、これら管玉を統計処理ができるデータ個数をもとめ、秋月19遺物群、秋月20遺物群、秋月A遺物群を作り表1に登録した。登録したことより、将来、他の遺跡の玉類を分析したときに秋月遺跡の管玉の結果は自動的に他の遺跡玉類の結果と比較される。

参考文献

- 茅原一也 (1964)、長者が原遺跡産のヒスイ (翡翠) について (概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会 :63-73
- 藁科哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 藁科哲男・東村武信 (1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。権原考古学研究所紀要『考古学論叢』, 14:95-109
- 藁科哲男・東村武信 (1983)、石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- Tetsuo Warashina (1992)、Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90

表2 秋月遺跡出土管玉の元素分析結果

管理番号	分析番号	元素比													重量(g)	比重	
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr	Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr	Ba/Zr		
19	108401	0.054	1.834	1.499	0.288	0.092	0.092	1.370	0.125	6.836	0.090	0.003	0.024	0.019	8.437	2.28817	2.279
20	108402	0.048	2.080	0.883	0.361	0.068	0.105	2.809	0.293	5.317	0.168	0.012	0.022	0.000	4.440	1.59410	2.533
21	108403	0.046	2.372	0.783	0.403	0.082	0.128	1.901	0.241	2.178	0.185	0.009	0.030	0.008	2.707	0.34913	2.355
22	108423	0.043	2.181	0.631	0.409	0.077	0.136	1.933	0.262	1.816	0.069	0.004	0.028	0.008	2.079	0.16816	2.368
24	108424	0.044	2.058	0.870	0.400	0.078	0.128	1.856	0.235	1.952	0.061	0.001	0.028	0.026	2.005	0.06537	2.335
23	108425	0.048	2.522	0.667	0.421	0.076	0.140	1.858	0.258	1.741	0.079	0.003	0.029	0.000	1.940	0.17411	2.292
	JG-1 ^{a)}	0.081	3.205	0.736	0.198	0.111	0.277	3.479	0.956	1.261	0.187	0.017	0.020	0.086	1.567		

a)標準試料、Ando,A., Kurasawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E.(1974).1974 compilation of data on the GJS geochemical referencesamples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192.

表3 秋月遺跡出土管玉産地分析結果

管理番号	分析番号	ホテリングのT ² 乗検定結果	ESR信号形	総合判定
19	108401	秋月19遺物群(55%)	崩れ玉谷形	秋月19遺物群
20	108402	秋月20遺物群(77%)	崩れ女代南B形	秋月20遺物群
21	108403	秋月A遺物群(60%)	鋸歯状形	秋月A遺物群
22	108423	秋月A遺物群(75%)	鋸歯状形	秋月A遺物群
24	108424	秋月A遺物群(46%)	鋸歯状形	秋月A遺物群
23	108425	秋月A遺物群(71%)	鋸歯状形	秋月A遺物群

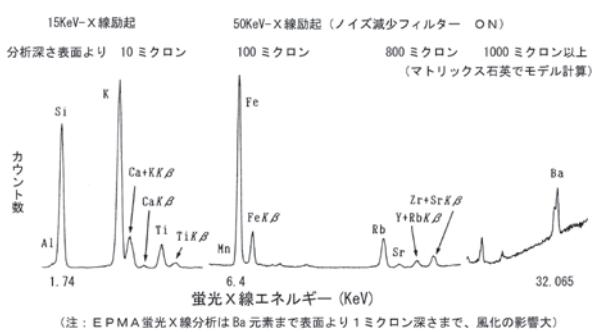


図1 花仙山産碧玉原石の蛍光X線分析スペクトル



図2 古墳(続縄文)時代の碧玉製管玉の原材使用分布圏および碧玉・碧玉様岩の原産地

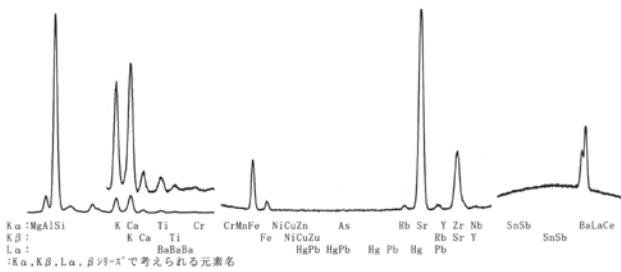


図3-1 秋月遺跡緑色凝灰岩製管玉 1160-19(108401)の蛍光X線スペクトル

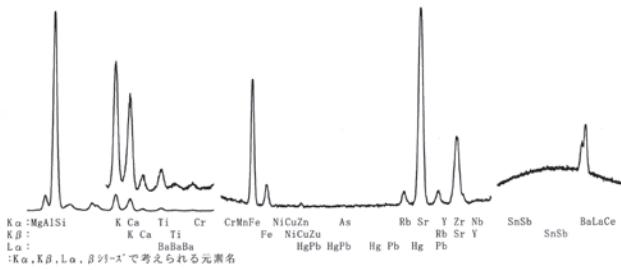


図3-2 秋月遺跡碧玉製管玉 1160-20(108402)の蛍光X線スペクトル

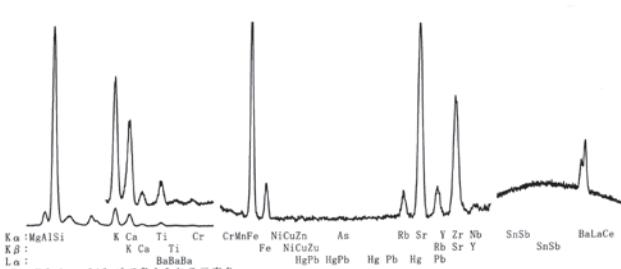


図3-3 秋月遺跡緑色凝灰岩製管玉 1160-21(108403)の蛍光X線スペクトル

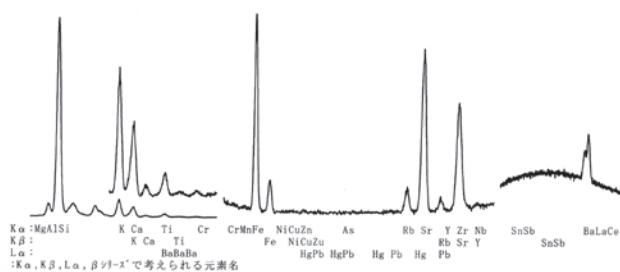


図3-4 秋月遺跡緑色凝灰岩製管玉 1160-22(108423)の蛍光X線スペクトル

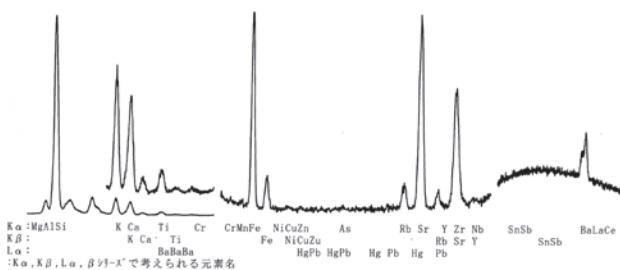


図3-5 秋月遺跡緑色凝灰岩製管玉 1160-24(108424)の蛍光X線スペクトル

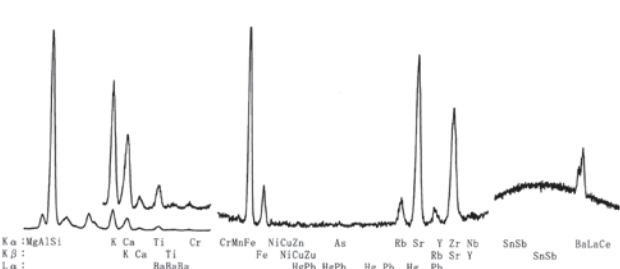


図3-6 秋月遺跡緑色凝灰岩製管玉 985-23(108425)の蛍光X線スペクトル

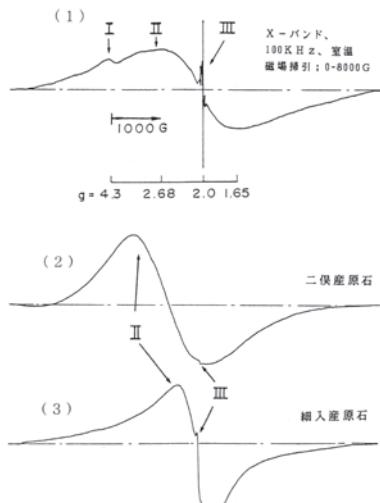


図4 碧玉原石のESRスペクトル
(花仙山、玉谷、猿八、土岐)

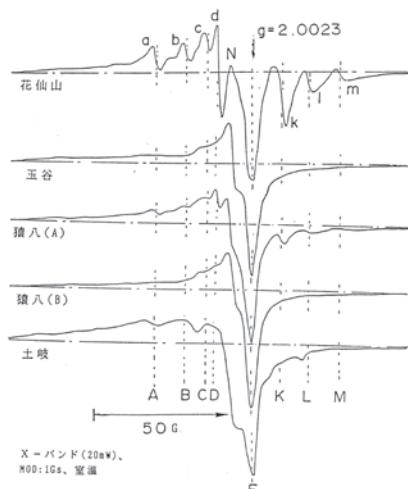


図5-1 碧玉原石の信号(III)の
ESRスペクトル

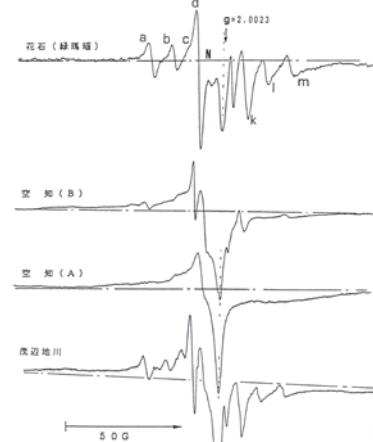


図5-3 碧玉原石の信号(III)の
ESRスペクトル

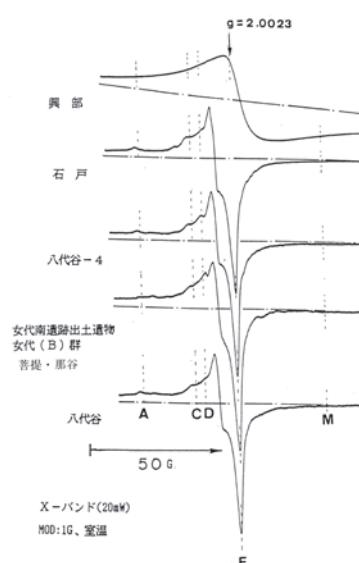


図5-2 碧玉原石の信号(III)の
ESRスペクトル

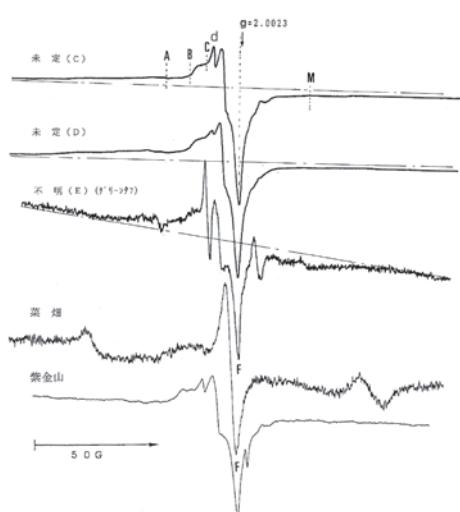


図5-4 碧玉原石の信号(III)の
ESRスペクトル

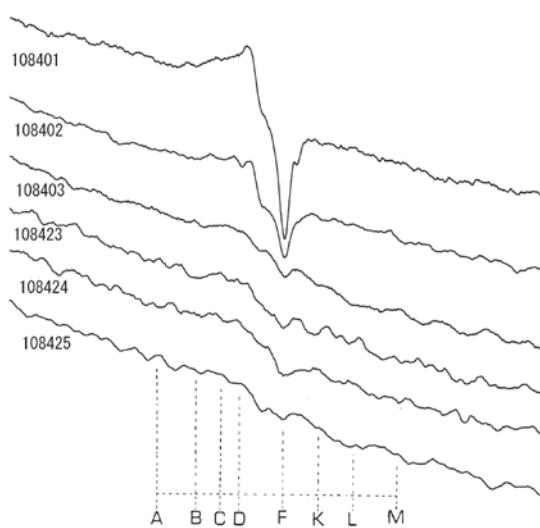


図6 秋月遺跡出土管玉のESR信号(III)のスペクトル

3. ガラス玉・琥珀玉の蛍光X線分析による元素分析

有限会社 遺物材料研究所 藤井哲男

古代ガラスは大別すると鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスに分類されている。分析を行ったガラス玉は6個で化学組成分析の結果を表1に示した。ガラス玉の蛍光X線スペクトルは図1～図6、琥珀玉を図7に示すように元素の含有量に比例した高さの元素ピークが多数観測されている。ガラス小玉で確認された元素は、ナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、アルミニウム(Al)、シリカ(Si)、カリ(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、ジルコニウム(Zr)、錫(Sn)、バリウム(Ba)、鉛(Pb)である。ガラス玉の化合物元素成値(表1)はマトリックス効果を考慮したガラス標準試料による校正を行った結果ではなく、また、試料は絶対定量分析で行う、試料成形などを行ったものではなく、出土したガラス玉を水洗し、非破壊状態で、セイコ製SEA2110L型蛍光X線分析装置付属のソフトのスタンダードレスによるFP(ファンダメンタルパラメータ)法を用い相対含有量(Wt%)を求めた結果である。銅、錫、鉛の元素が青銅器成分が含有されたガラス玉は酸化鉛の含有量が0.6%以下で少なく、また比重も2.3～2.5で鉛ガラスではない。今回分析したガラス玉の共通した特徴はアルカリ石灰ガラスで分析番号108426、108406、108429はカリ成分よりソーダ成分が多く、ソーダ石灰ガラスで、108405、108427、108428はカリの含有量が多くカリ石灰ガラスと言える。ソーダ石灰ガラスには微量のバリウム成分が観測され、鉛、バリウムを含む中国製の素材が混ぜられている可能性も推測できる。ガラスの着色の酸化第一銅は還元条件で銅赤色に、酸化条件で青緑色に着色する。また酸化鉄は還元条件で青色に酸化条件で黄褐色に着色することが知られている。Snは清澄剤としての働きがある。

琥珀の成分の一例を示すとC(炭素)75.48%、H(水素)10.3%、O(酸素)12.07%、N(窒素)0.2%、S(硫黄)0.1%、灰分(ミネラル成分)0.85%である。これら元素の化合物として琥珀が形成されている。今回分析した琥珀玉の蛍光X線スペクトルを図7に示す。検出された化合物元素組成値を表2に示す。琥珀の主成分の炭素、水素、窒素、酸素は分析出来ないが、硫黄、ミネラル成分の鉄、カルシウムなどが観測され、定性的には琥珀に一致する。また比重は1.1で琥珀の比重と矛盾しない。今回分析した玉が琥珀製と推測されていたが風化が激しく、明確なことは言えなかったが、分析成分と比重の結果から琥珀であることが証明された

表1 秋月遺跡出土ガラス玉の化合物元素濃度分析結果

色調	管理番号	分析番号	化合物元素組成(Wt%)									
			Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	Co ₂ O ₃
青ガラス玉	26	108405	3.0598	2.1306	8.4529	76.8420	6.4238	0.2867	0.1790	0.0193	0.4659	0.0000
青ガラス玉	27	108426	11.8750	2.6320	15.6810	61.2508	2.0499	2.0064	0.6107	0.0948	1.1965	0.0023
青ガラス玉	28	108427	3.0929	2.0740	8.2767	76.2572	6.6670	0.2528	0.1735	0.0216	0.5151	0.0000
青ガラス玉	29	108428	3.2237	2.1888	8.6279	75.3695	7.7558	0.2494	0.2004	0.0254	0.5135	0.0000
赤ガラス玉	30	108406	5.4151	2.9827	8.5716	73.9251	1.5805	2.3402	0.6491	0.2167	1.4854	0.0031
赤ガラス玉	31	108429	11.5986	4.7702	9.4045	63.4074	3.0867	3.1497	0.5941	0.5856	1.2921	0.0002

化合物元素組成(Wt%)								重量 gr	比重
CuO	PbO	Br	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	SnO ₂	BaO		
1.5858	0.3756	0.0012	0.0384	0.0023	0.0266	0.1083	0.0019	0.10256	2.349
1.6753	0.3966	0.0048	0.0016	0.1015	0.1079	0.1483	0.1646	0.07150	2.449
1.8407	0.5596	0.0014	0.0528	0.0031	0.0278	0.1786	0.0053	0.05345	2.353
1.3191	0.3577	0.0025	0.0336	0.0027	0.0273	0.1001	0.0027	0.04410	2.371
1.9607	0.3443	0.0031	0.0042	0.0330	0.1758	0.2592	0.0503	0.03346	2.514
1.5446	0.1584	0.0011	0.0121	0.0441	0.1078	0.1640	0.0787	0.02513	2.464

表2 秋月遺跡出土琥珀玉の化合物元素濃度分析結果

管理番号	分析番号	化合物元素組成(Wt%)										重量 gr	比重	
		Na ₂ O	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P 205	S	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃			
18	108400	1.3944	8.0566	18.5501	8.3294	28.8338	17.5203	5.5420	7.9791	1.0085	0.6907	2.0951	0.08290	1.101

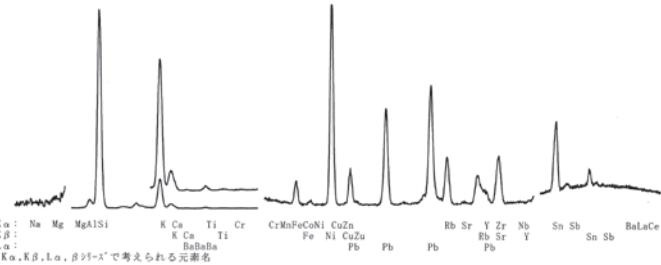


図1 秋月遺跡出土青ガラス玉 1160-26(108405)の蛍光X線スペクトル

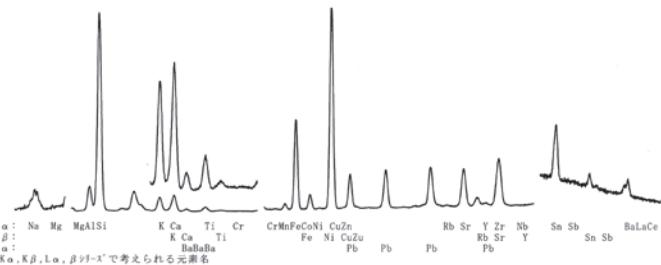


図2 秋月遺跡出土青ガラス玉 1160-27(108426)の蛍光X線スペクトル

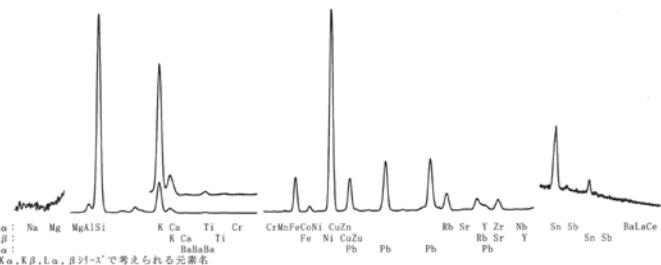


図3 秋月遺跡出土青ガラス玉 1160-28(108427)の蛍光X線スペクトル

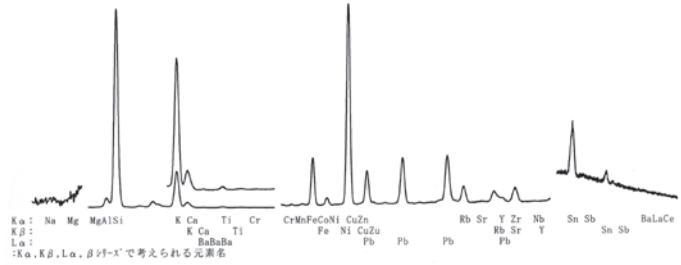


図4 秋月遺跡出土青ガラス玉 985-29(108428)の蛍光X線スペクトル

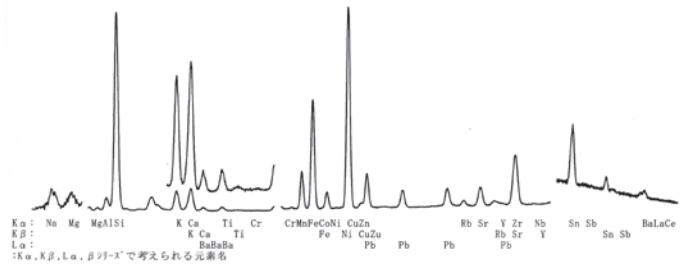


図5 秋月遺跡出土赤ガラス玉 1160-30(108406)の蛍光X線スペクトル

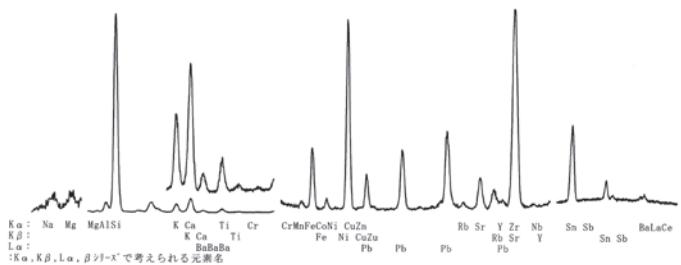


図6 秋月遺跡出土赤ガラス玉 985-31(108429)の蛍光X線スペクトル

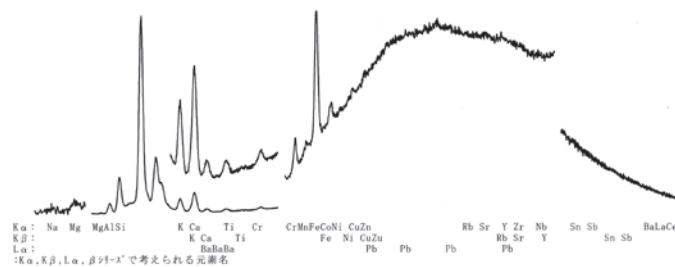


図7 秋月遺跡出土琥珀玉 1160-18(108400)の蛍光X線スペクトル

写 真 図 版

写真図版 1 調査区土色



01-1：調査区完掘状況（南東から）



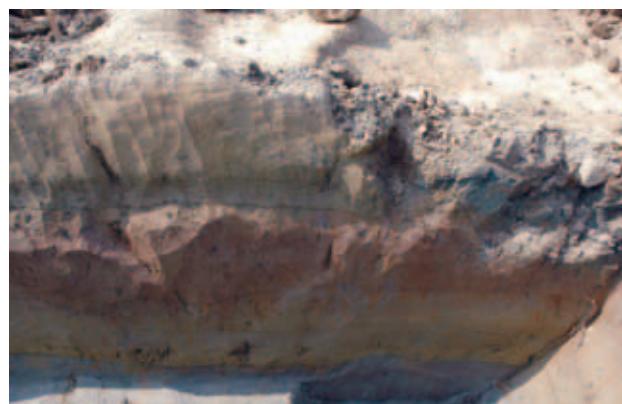
01-2：東壁土層（北西から）



01-3：北壁土層西端部



01-4：西壁土層北端部



01-5：調査区中央の下層確認状況

写真図版2 古墳周溝土色



02-1：秋月 9号墳4区出土土器と周溝南畦畔（北東から）



02-2：秋月 9号墳の周溝東畦畔（南から）



02-3：秋月 10号墳の周溝南畦畔（南東から）



02-4：秋月 11号墳の周溝南畦畔（東から）



02-5：秋月 12号墳の周溝西畦畔（北から）

写真図版3 遺構土色



03-1 : 075 瓦積み井戸（北東から）



03-2 : 001 大土坑の南北トレンチ南端（南東から）



03-3 : 002 大溝の畦畔（南西から）

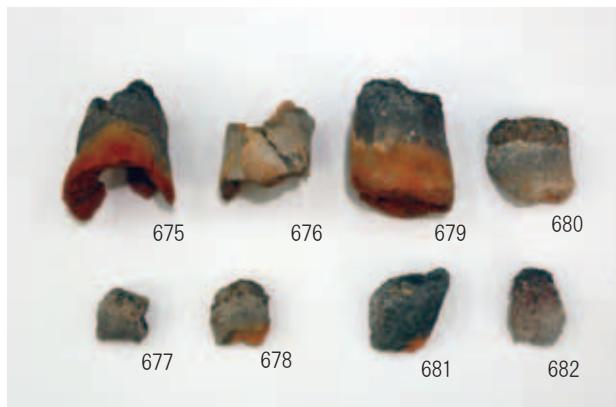


03-4 : 003 溝の畦畔（東から）



03-5 : 085 井戸（南から）

写真図版4 出土遺物色調



04-1：鞍羽口の外面



04-2：鞍羽口の先端部・内面



04-3：砥石



04-4：001 大土坑の陶磁器



04-5：近世末期の磁器

写真図版5 調査地周辺



05-1：調査地周辺（南から）



05-2：調査地周辺（東から）

写真図版6 調査風景



06-1：人力掘削状況（北東から）



06-2：調査前風景（南西から）



06-3 機械掘削状況（北東から）

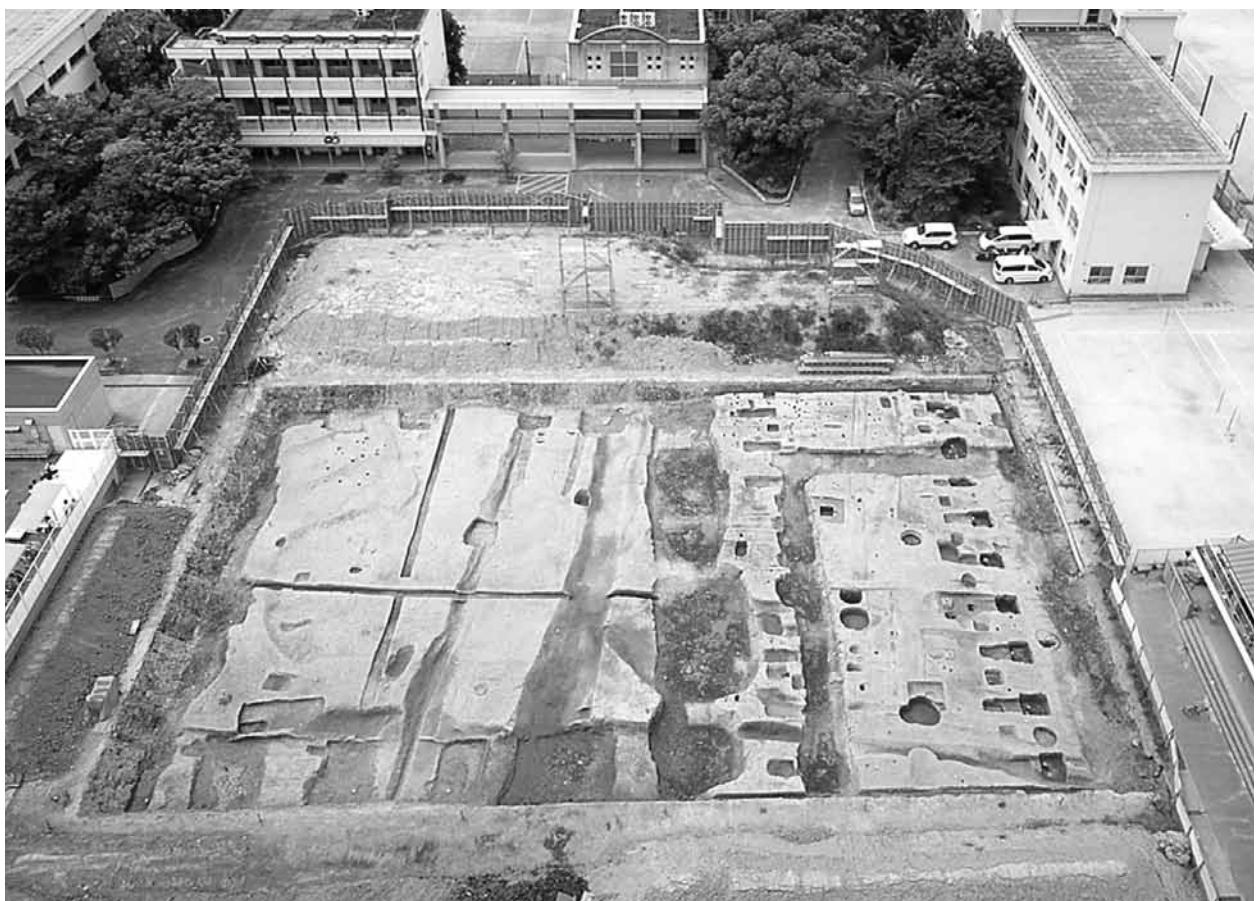


06-4：ラジコンヘリコプターによる空撮状況



06-5 調査後の埋め戻し状況（南東から）

写真図版7 第1面全景①



07-1：第1面全景（東から）



07-2：第1面全景（東から）

写真図版8 第1面全景②



08-1：第1面全景（南東から）



08-2：第1面北半（西から）

写真図版9 中世の遺構①



09-1 : 001 大土坑（西から）



09-2 : 001 大土坑（南東から）

写真図版 10 中世の遺構②



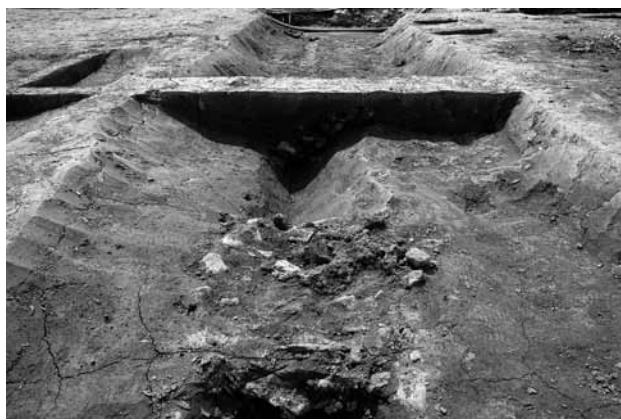
10-1 : 002 大溝と 003 溝（西から）



10-2 : 002 大溝（東から）



10-3 : 002 大溝畔（西から）



10-4 : 003 溝と鉄滓出土状況（東から）



10-5 : 024 土坑（東から）

写真図版 11 中世の遺構③



11-1 : 075 井戸（北東から）



11-2 : 075 井戸確認状況（北東から）



11-3 : 075 井戸瓦積状況（北東から）



11-4 : 075 井戸下層上端（北東から）



11-5 : 085 井戸（南から）

写真図版 12 中世の遺構④



12-1 : 090 土坑（南東から）



12-2 : 093 瓦溜り（北東から）



12-3 : 130 ピット（北西から）

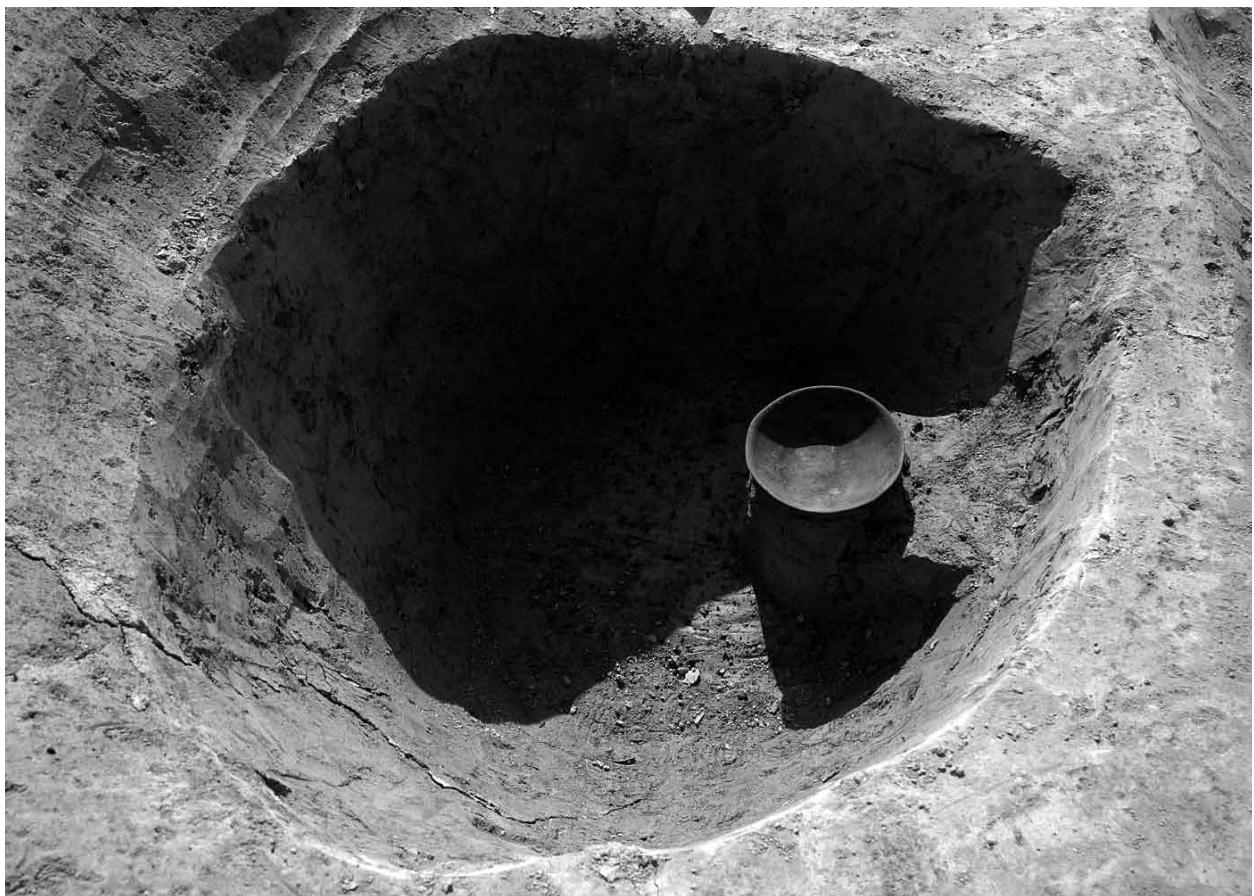


12-4 : 152 柱穴（南から）



12-5 : 165 ピット（南から）

写真図版 13 中世の遺構⑤



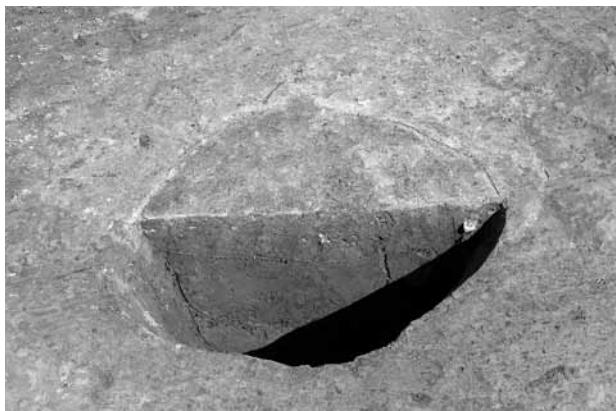
13-1 : 341 土坑（北から）



13-2 : 328 井戸（東から）



13-3 : 342 溝状遺構（北東から）



13-4 : 343 土坑（南から）



13-5 : 344 溝（南東から）

写真図版 14 古代の遺構①



14-1：掘立柱建物 1（北から）



14-2：掘立柱建物 1 の 050 柱穴（南から）



14-3：掘立柱建物 1 の 188 柱穴（西から）



14-4：034 溝（南から）



14-5：040 溝（南から）

写真図版 15 古代の遺構②



15-1 : 033 溝周辺（北東から）



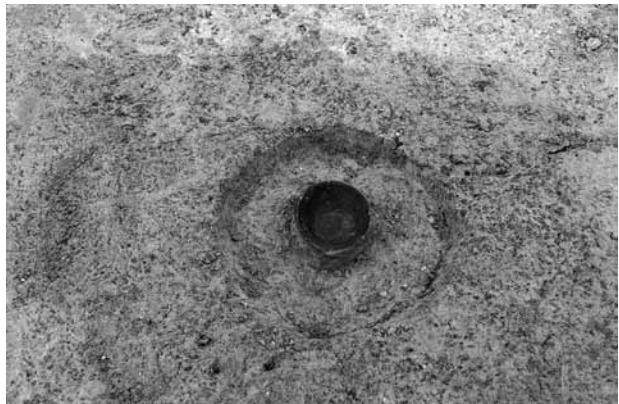
15-2 : 033 溝（南から）



15-3 : 033 溝畦畔（南から）



15-4 : 100 土坑（南から）

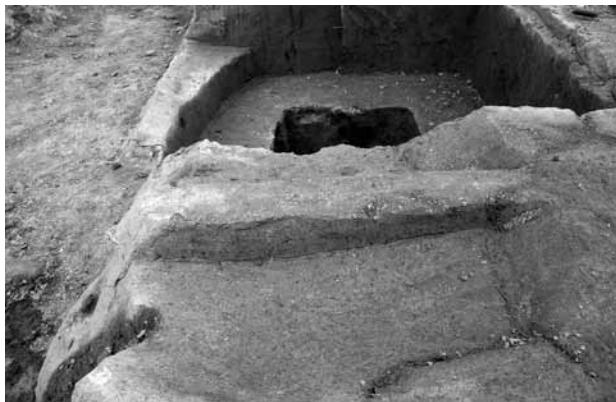


15-5 : 123 ピット（南から）

写真図版 16 古代の遺構③



16-1 : 353 土坑（東から）



16-2 : 194 土坑（手前）（東から）



16-3 : 209 土坑（南西から）



16-4 : 257 土坑（南から）



16-5 : 329 土坑（南から）

写真図版 17 第2面全景



17-1：第2面全景（東から）



17-2：第2面全景（西から）

写真図版 18 古墳群全景①



18-1：第2面全景（南東から）



18-2：古墳群全景（西から）

写真図版 19 古墳群全景②



19-1：古墳群全景（西から）



19-2：古墳群全景（北東から）

写真図版 20 秋月 9号墳①



20-1：秋月 9号墳（西から）



20-2：秋月 9号墳（南から）

写真図版 21 秋月 9号墳②



21-1：秋月 9号墳周溝 1区（北西から）



21-2：秋月 9号墳周溝 2区（南東から）



21-3：秋月 9号墳周溝 4区（南東から）



21-4：秋月 9号墳周溝 7区（南西から）



21-5：秋月 9号墳周溝 8区（南から）

写真図版 22 秋月 10 号墳



22-1：秋月 10 号墳（西から）



22-2：秋月 10 号墳周溝南東部（東から）



22-3: 秋月 10 号墳周溝底一括出土土器(南から)



22-4：秋月 10 号墳周溝東部（南西から）



22-5：秋月 10 号墳周溝西部（南東から）

写真図版 23 秋月 11 号墳



23-1：秋月 11 号墳（西から）



23-2：秋月 11 号墳（南東から）



23-3：秋月 11 号墳周溝北畦畔（南東から）



23-4：秋月 11 号墳周溝東畦畔（南から）



23-5：秋月 11 号墳周溝南畦畔（東から）

写真図版 24 秋月 12 号墳



24-1：秋月 12 号墳周溝一括出土土器（北西から）



24-2：秋月 12 号墳周辺（北西から）



24-3：秋月 12 号墳周溝南辺（西から）



24-4: 秋月 12 号墳周溝（右）と 205 溝（左）（東から）



24-5: 秋月 12 号墳周溝一括出土土器（南西から）

写真図版 25 古墳時代の遺構



25-1 : 307 土壙墓（南西から）



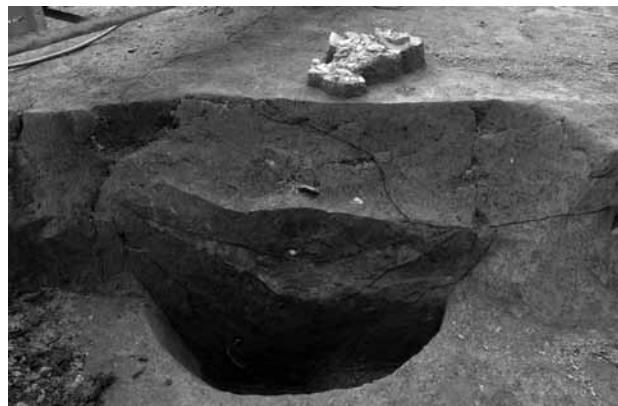
25-2 : 210 溝南畦畔（南から）



25-3 : 232 土坑（南から）



25-4 : 354 井戸（東から）



25-5 : 355 井戸（西から）

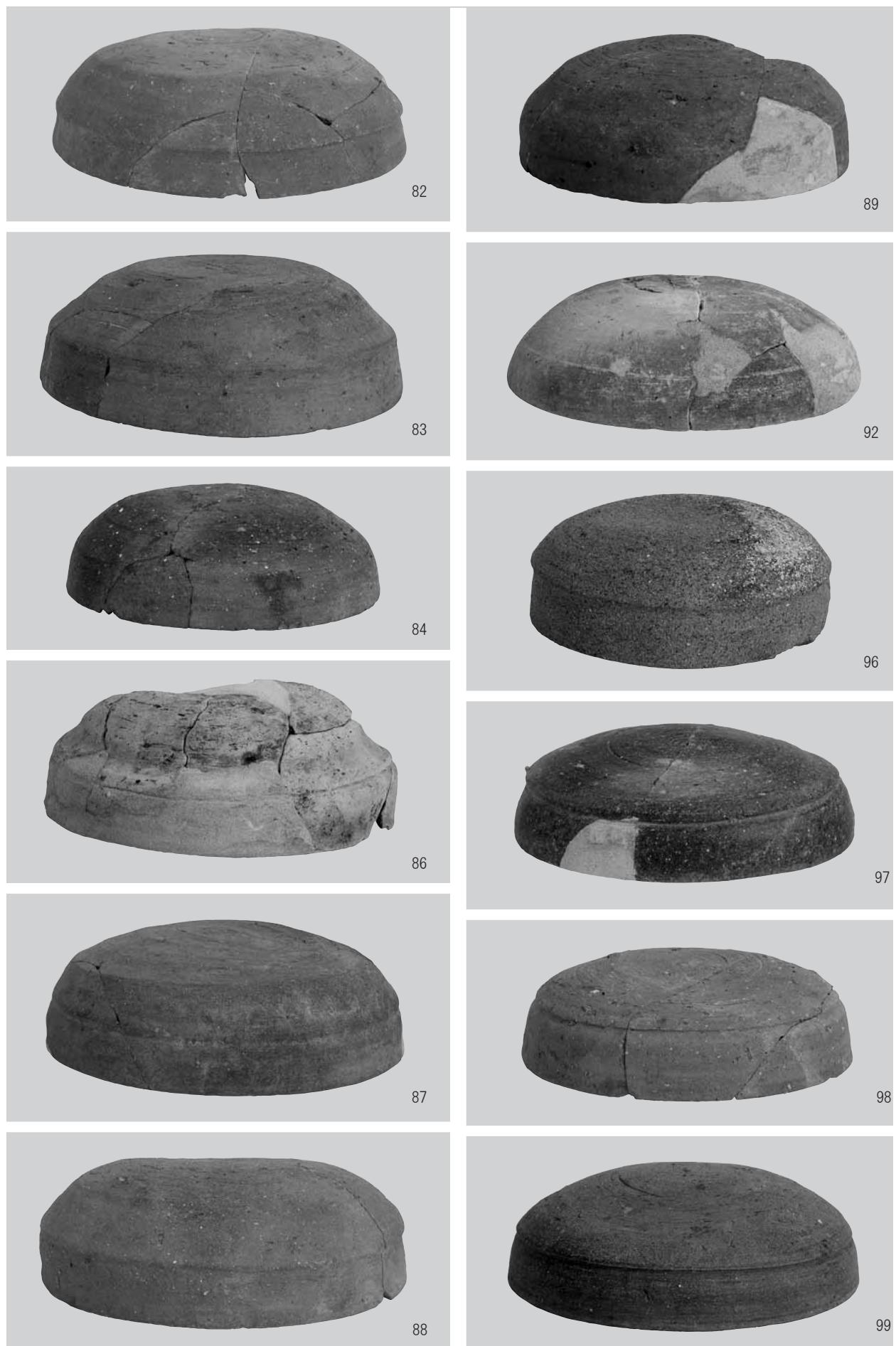
写真図版 26 土器（秋月 12・10 号墳ほか）



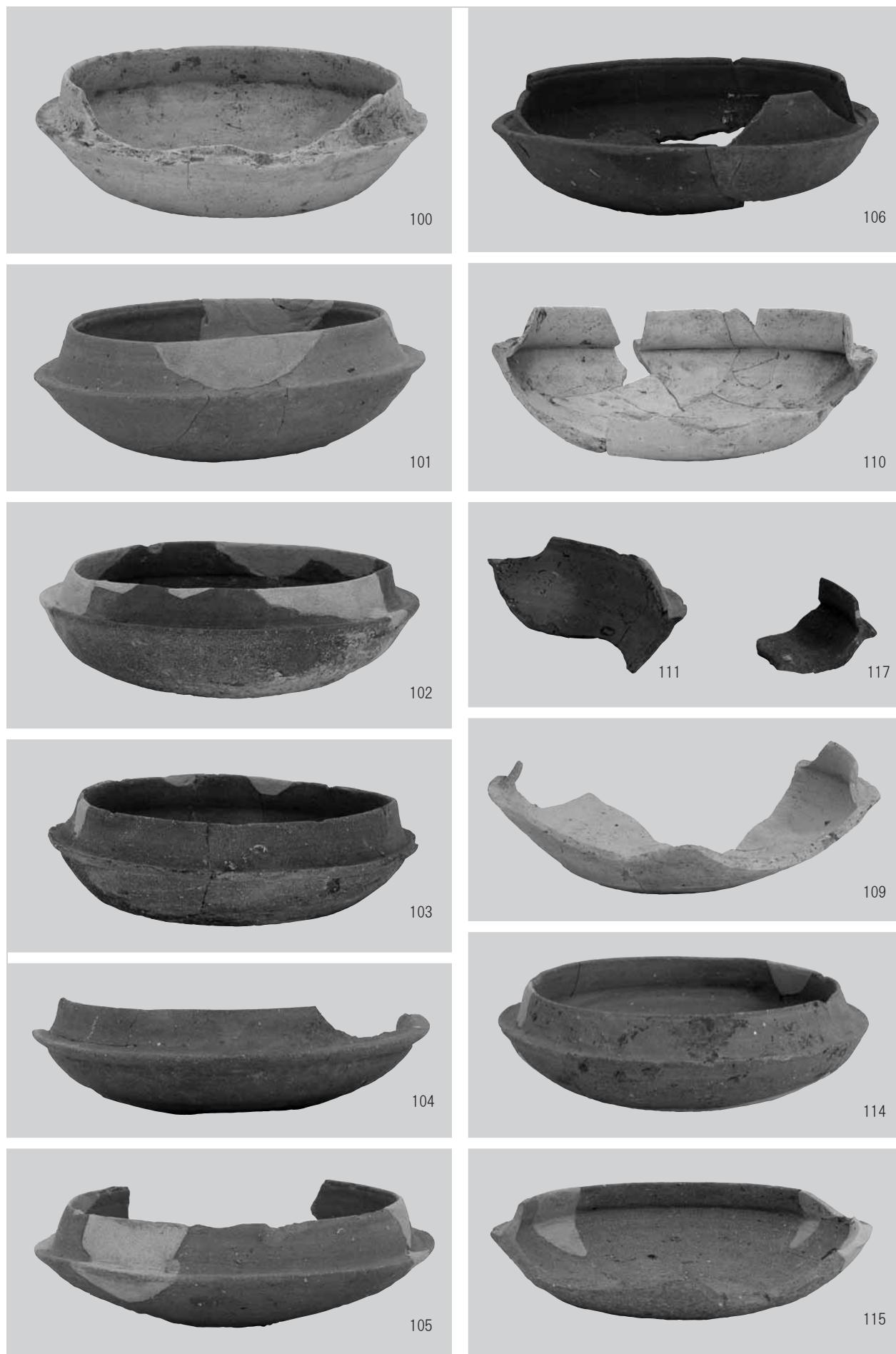
写真図版 27 土器（秋月 10・9号墳①）



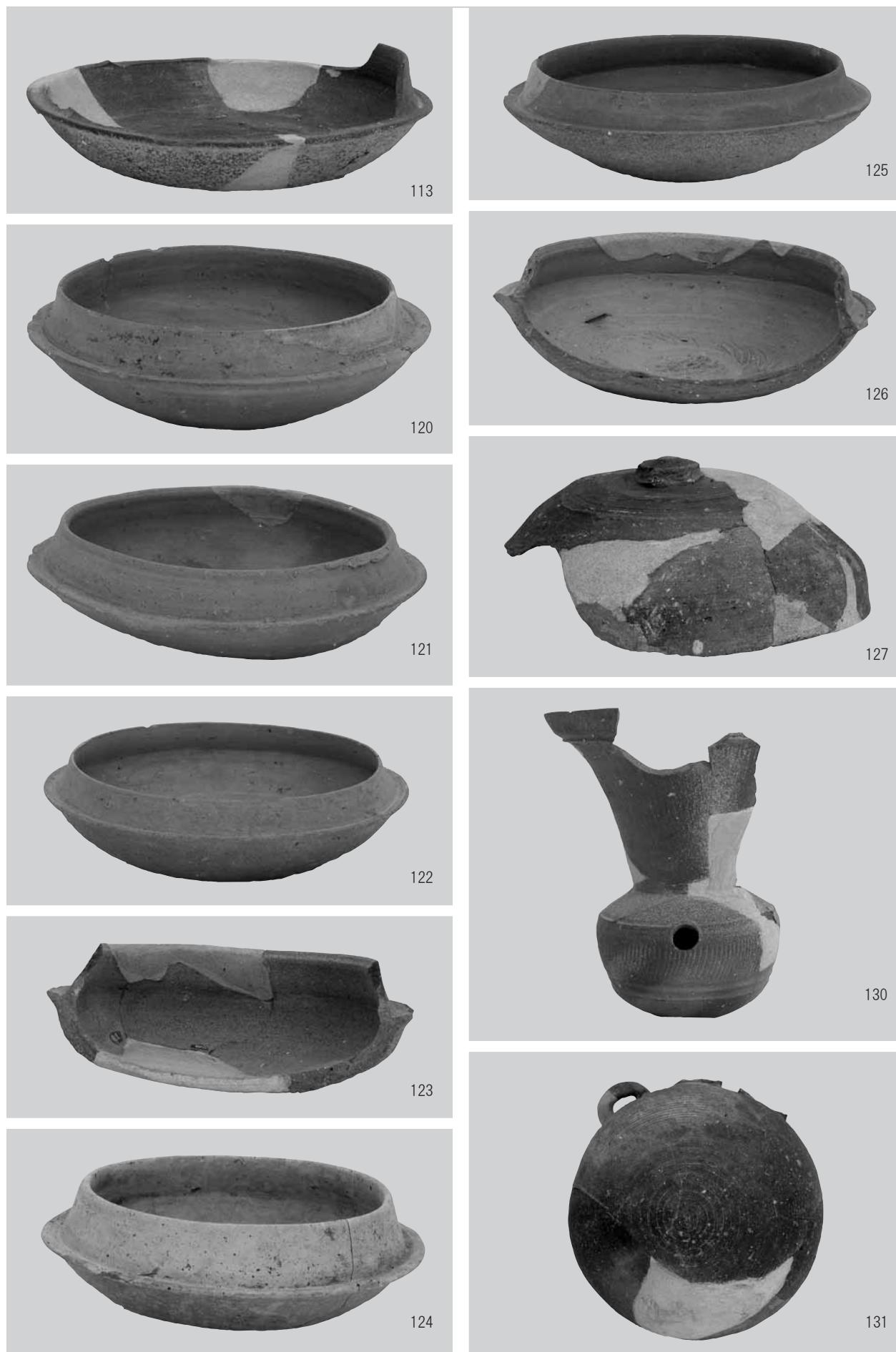
写真図版 28 土器（秋月 9 号墳②）



写真図版 29 土器（秋月 9 号墳③）



写真図版 30 土器（秋月 9 号墳④）



写真図版 31 土器（秋月 9 号墳⑤）



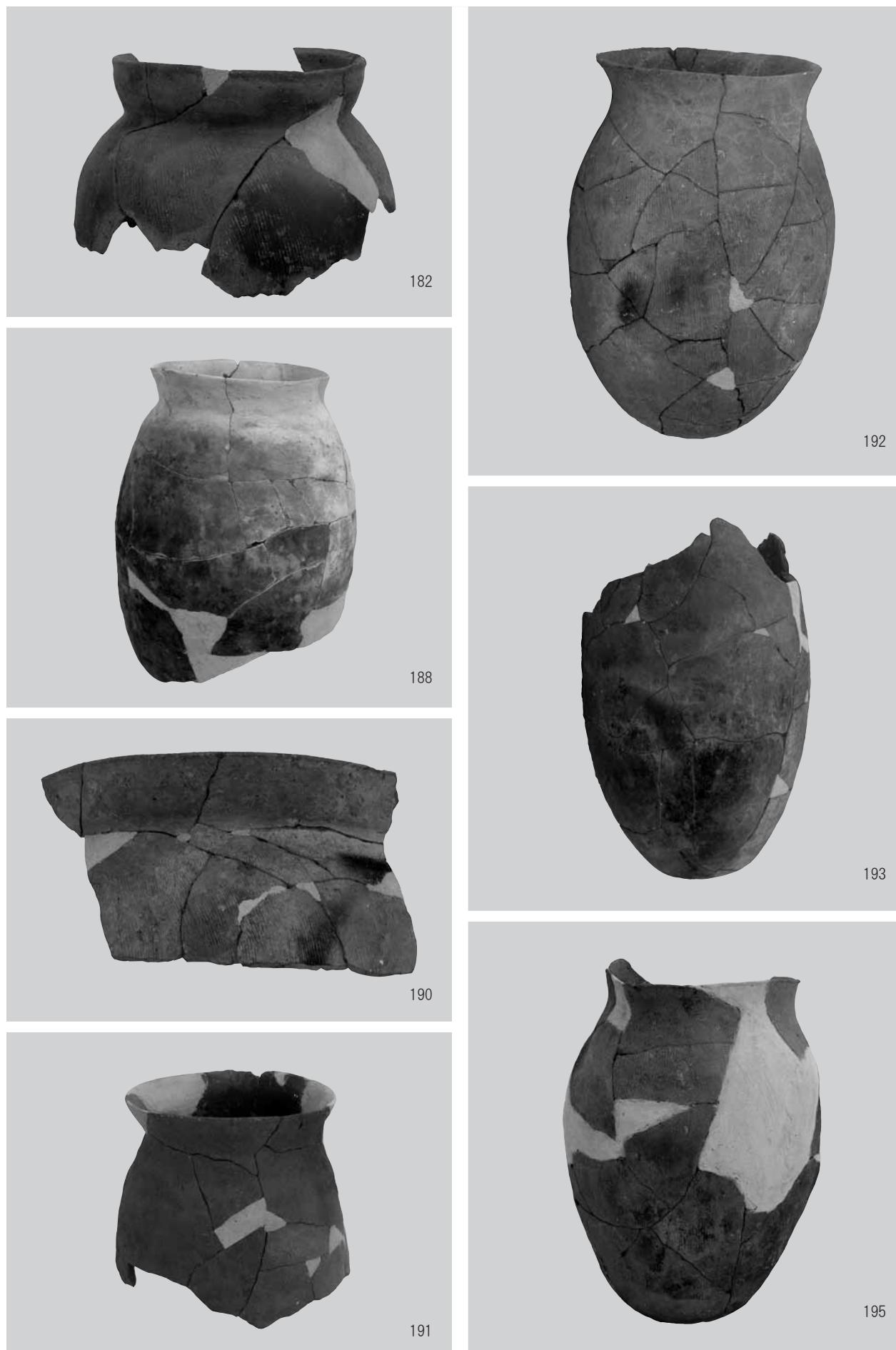
写真図版 32 土器（秋月 9 号墳⑥）



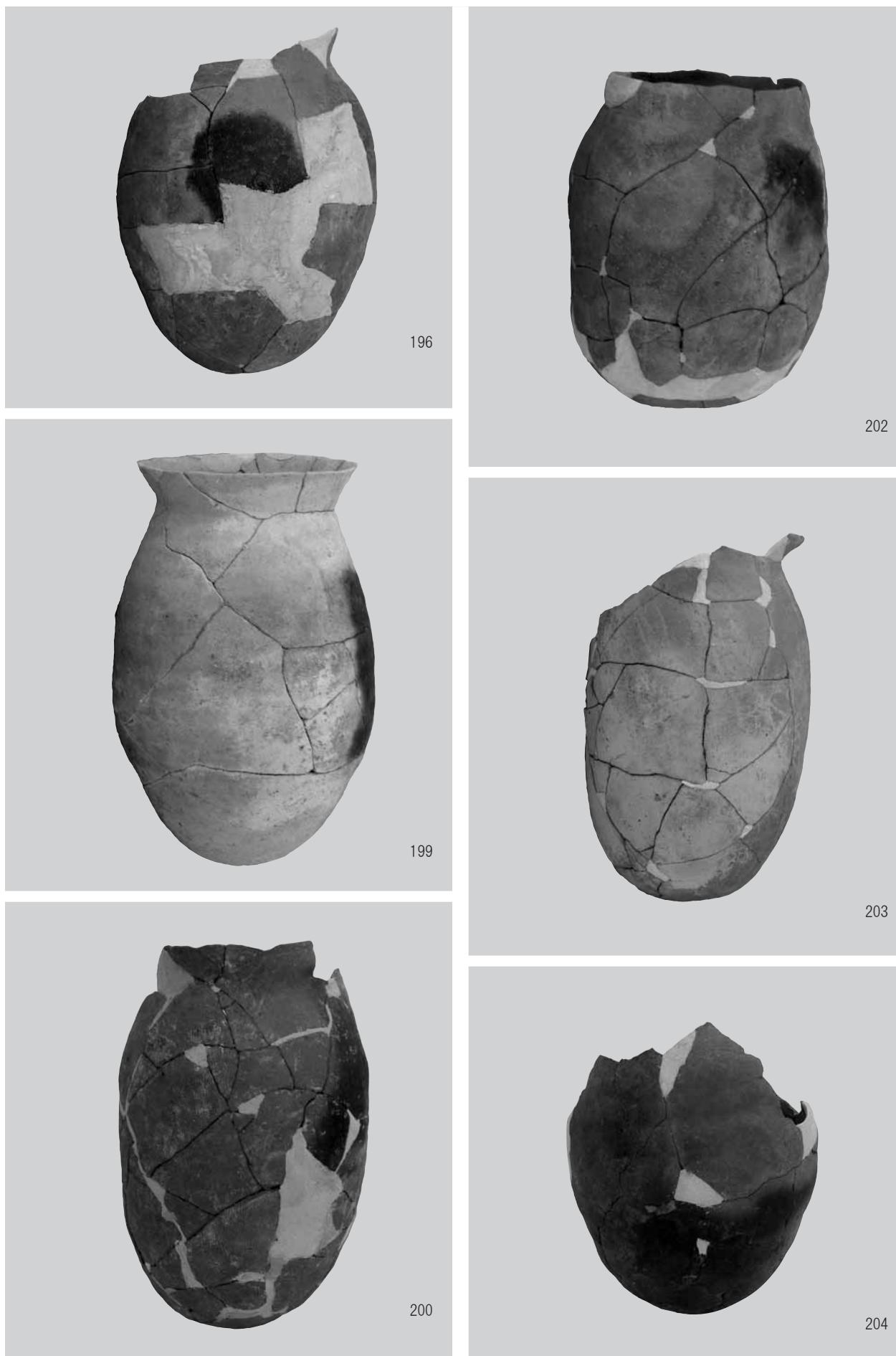
写真図版 33 土器（秋月 9 号墳⑦）



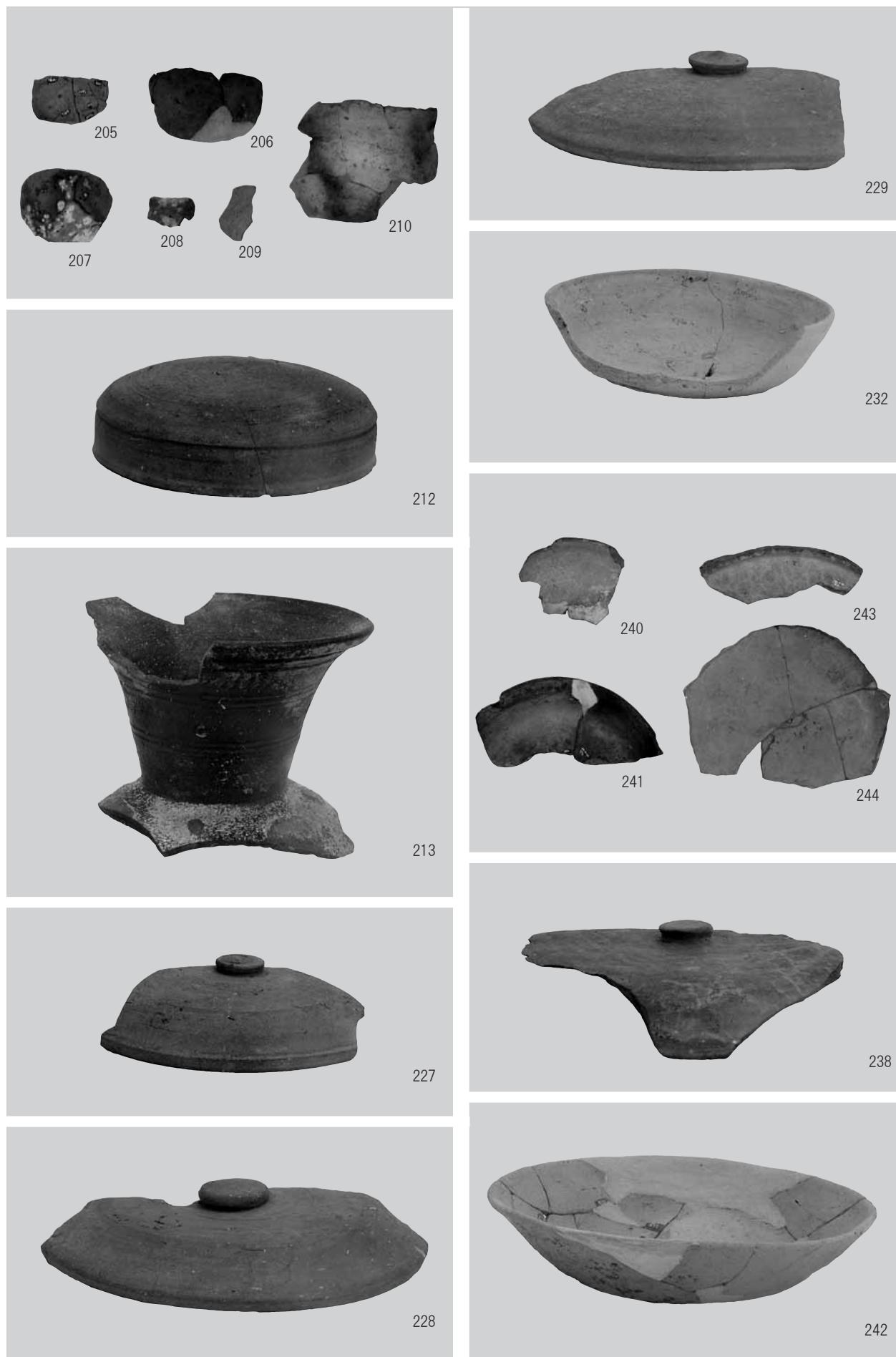
写真図版 34 土器（秋月 9 号墳⑧）



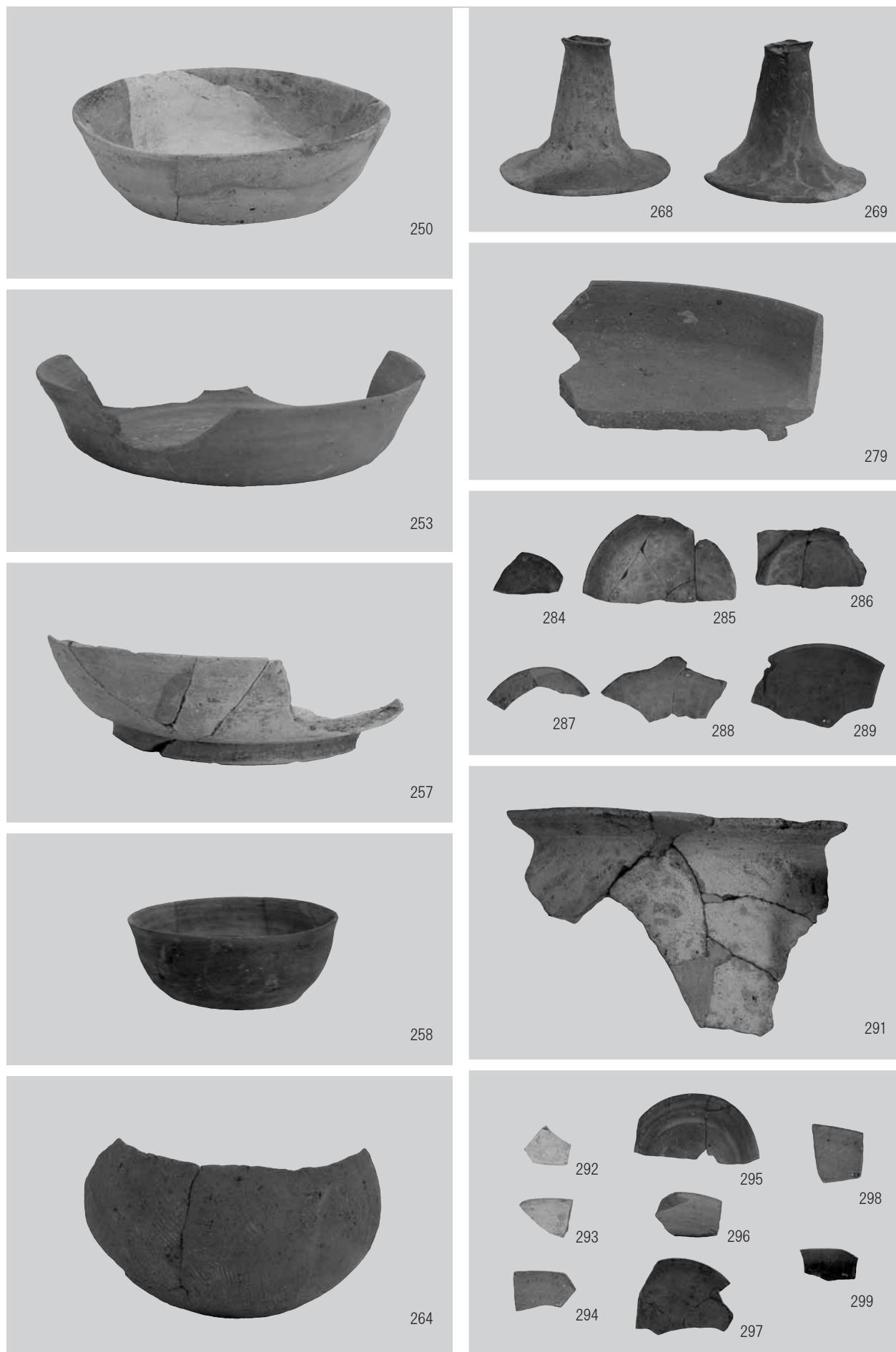
写真図版 35 土器（秋月9号墳⑨）



写真図版 36 土器（古墳時代・古代①）



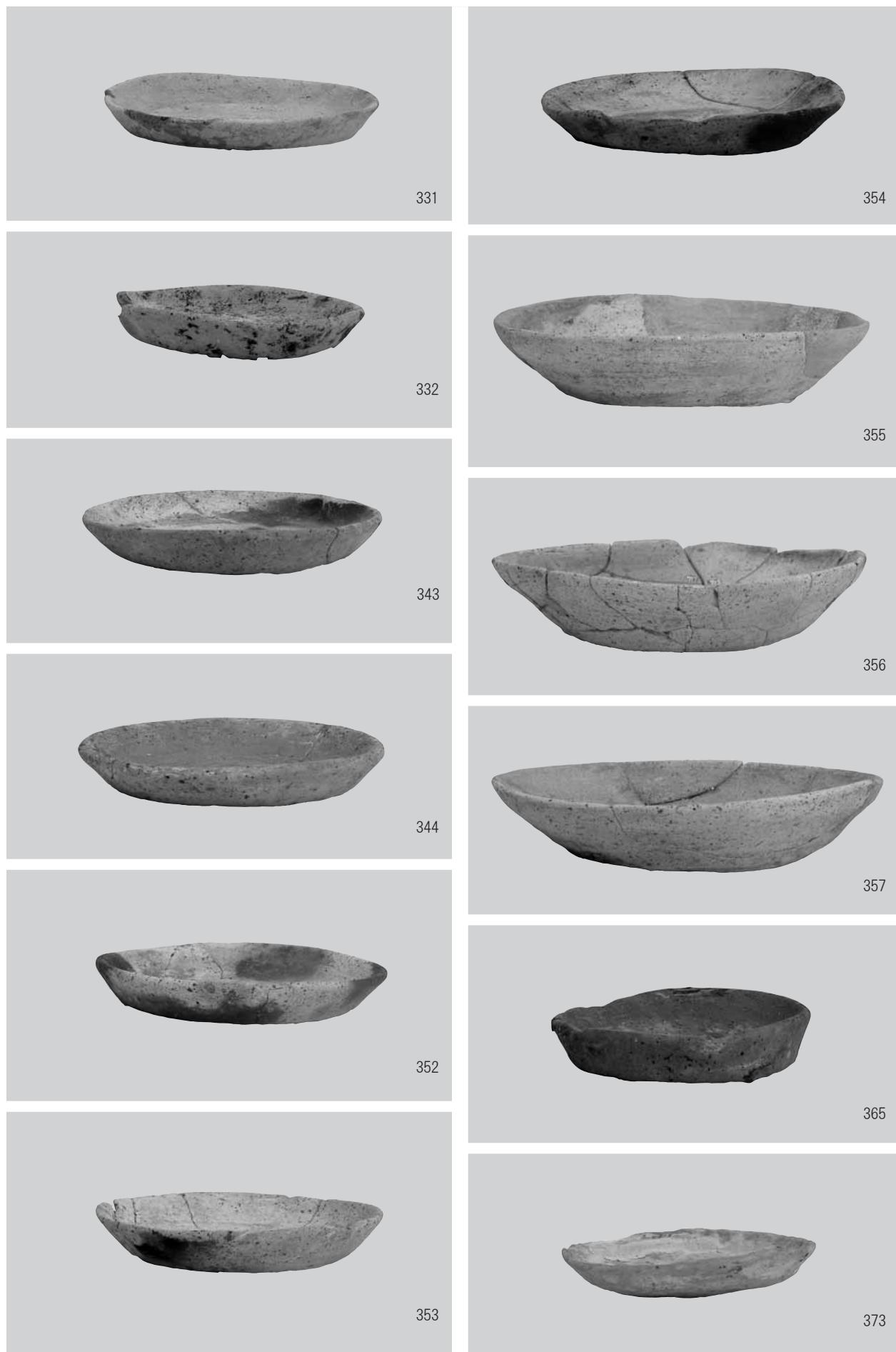
写真図版 37 土器（古代②）



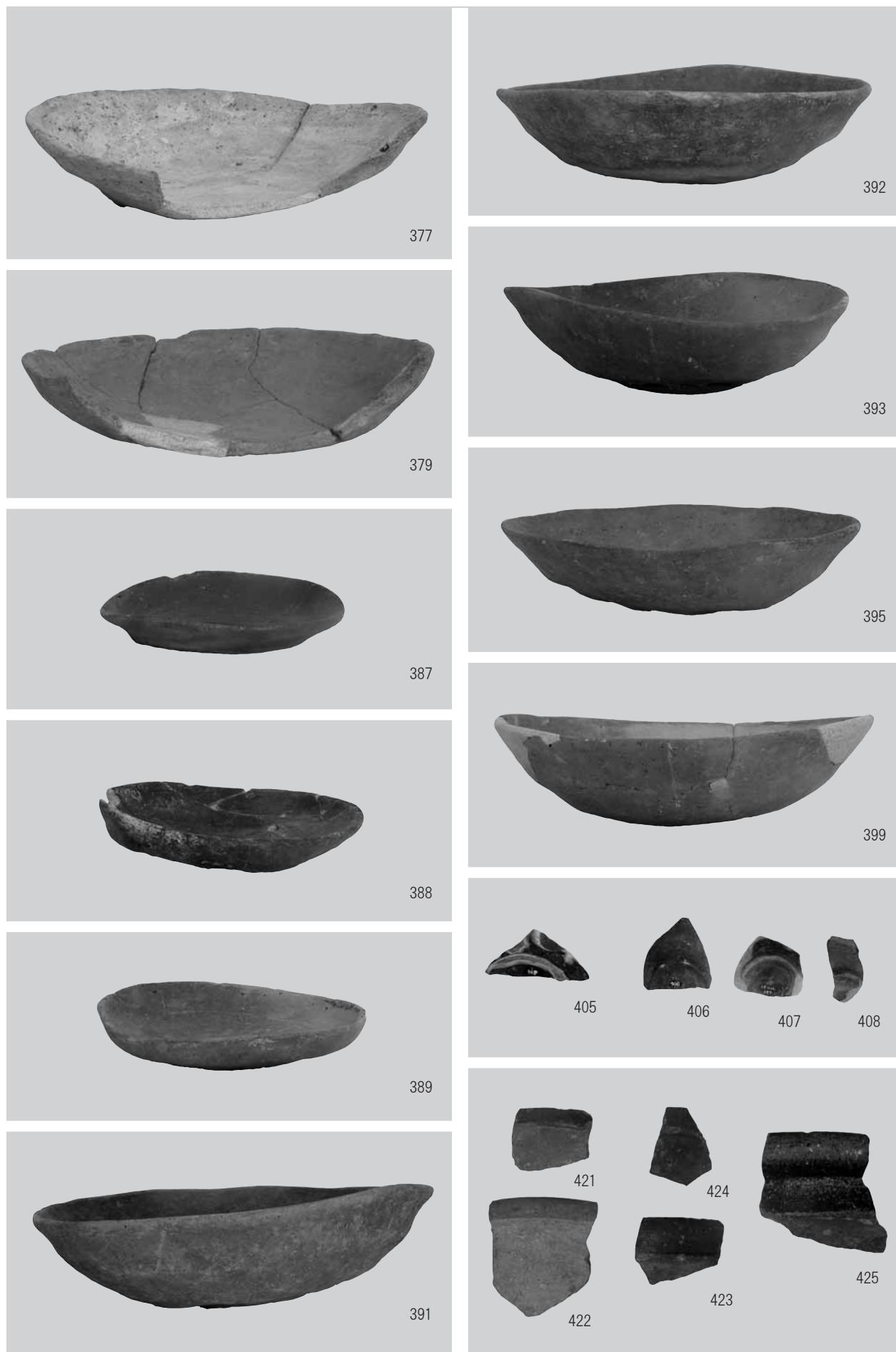
写真図版 38 土器（古代③）



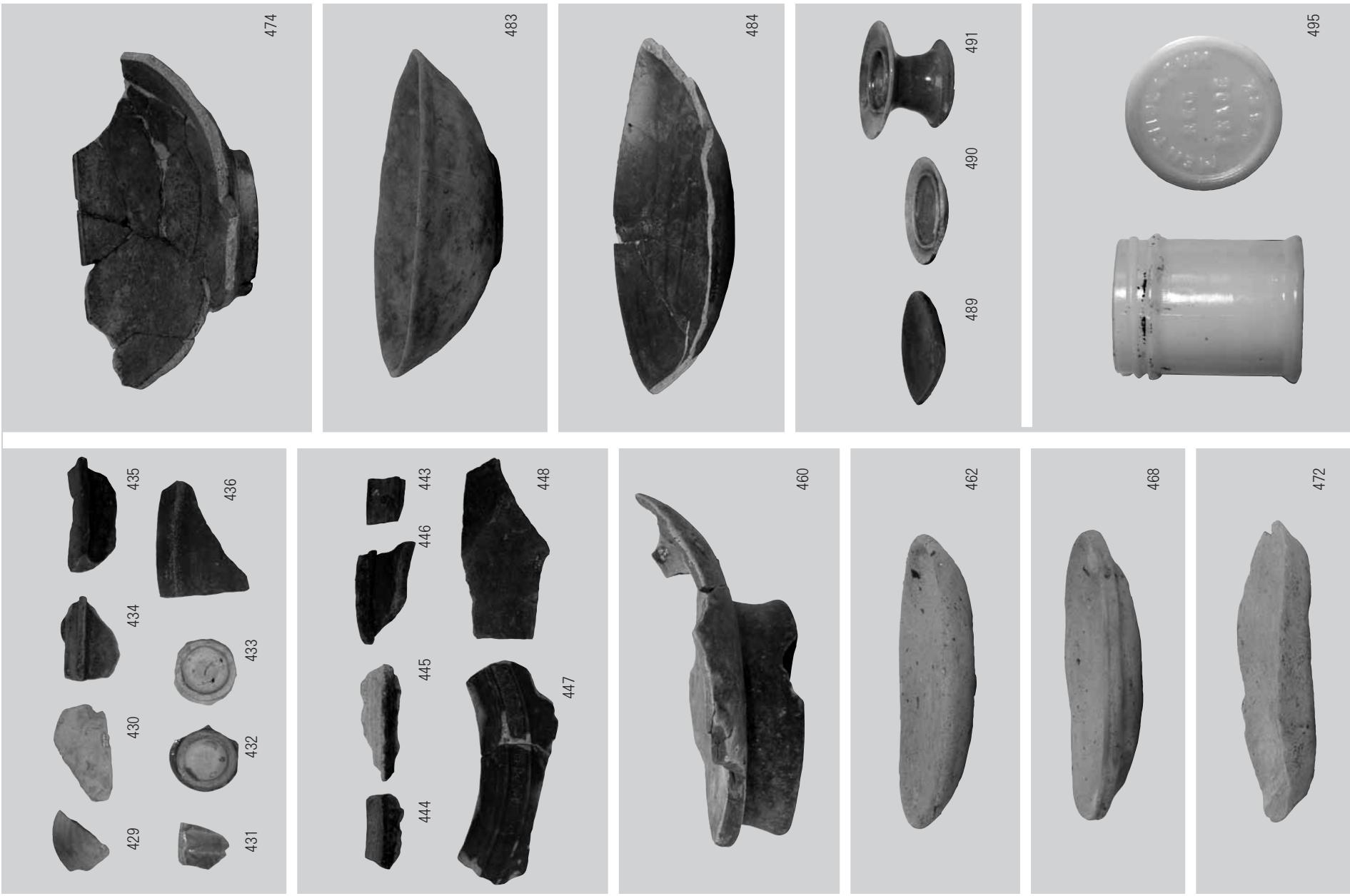
写真図版 39 土器（中世①）



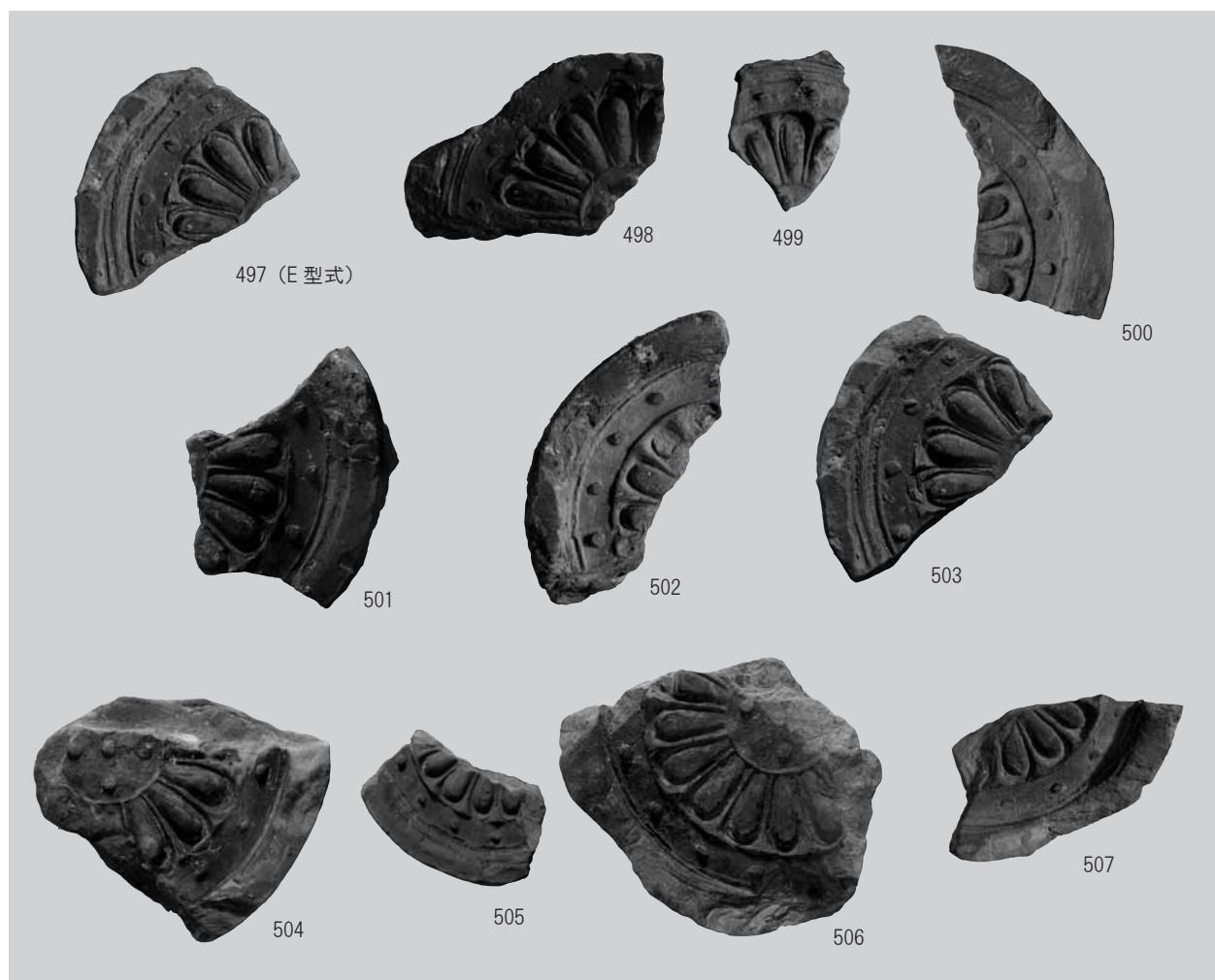
写真図版 40 土器（中世②）



写真図版 41 土器（中世③・近世以降）



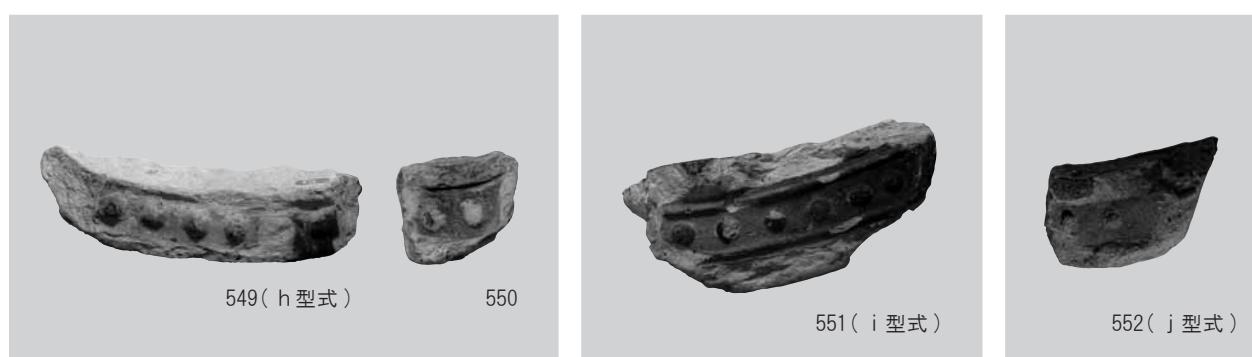
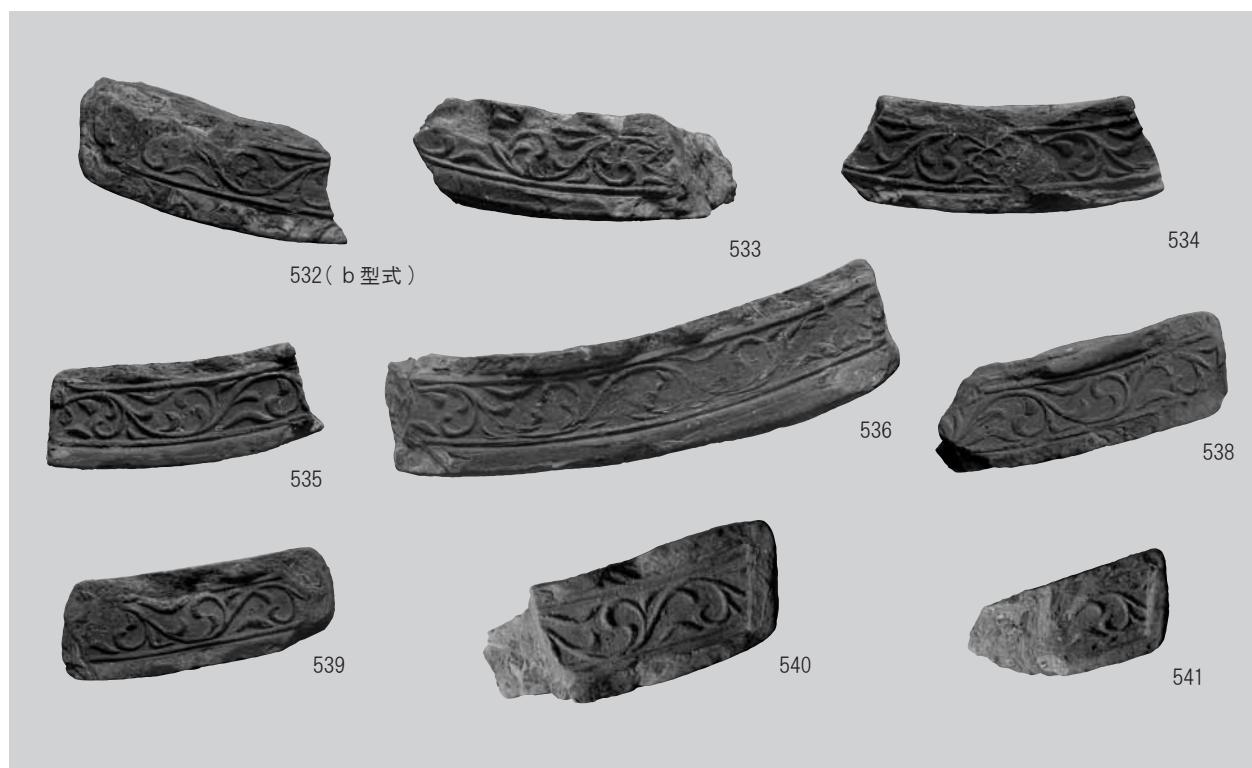
写真図版 42 軒丸瓦①



写真図版 43 軒丸瓦②



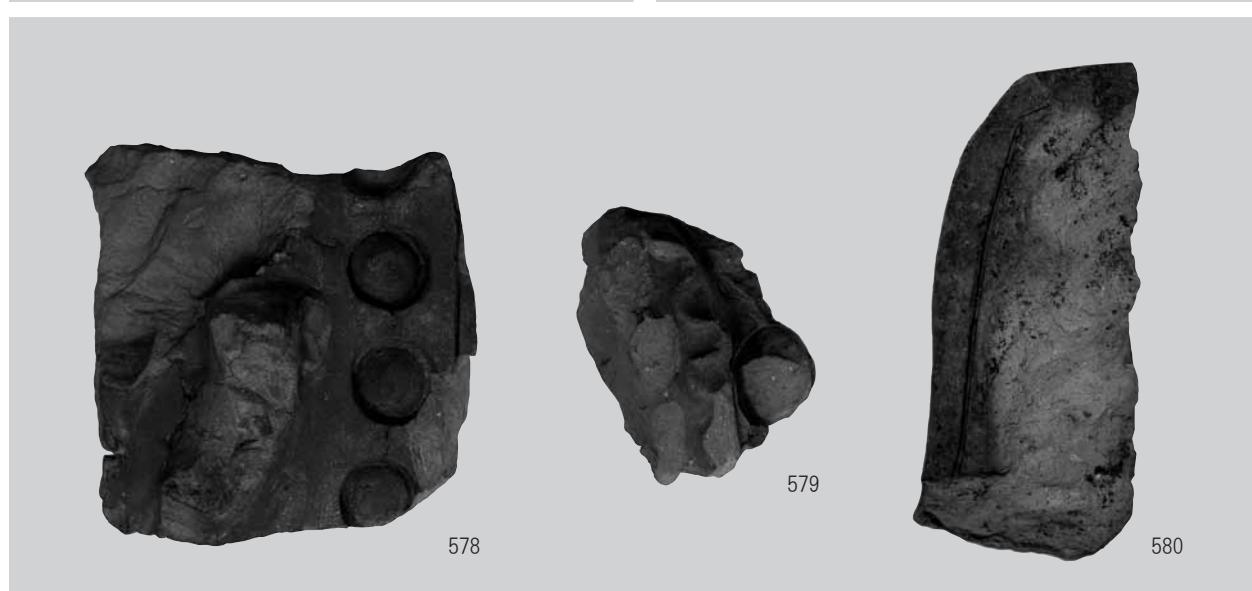
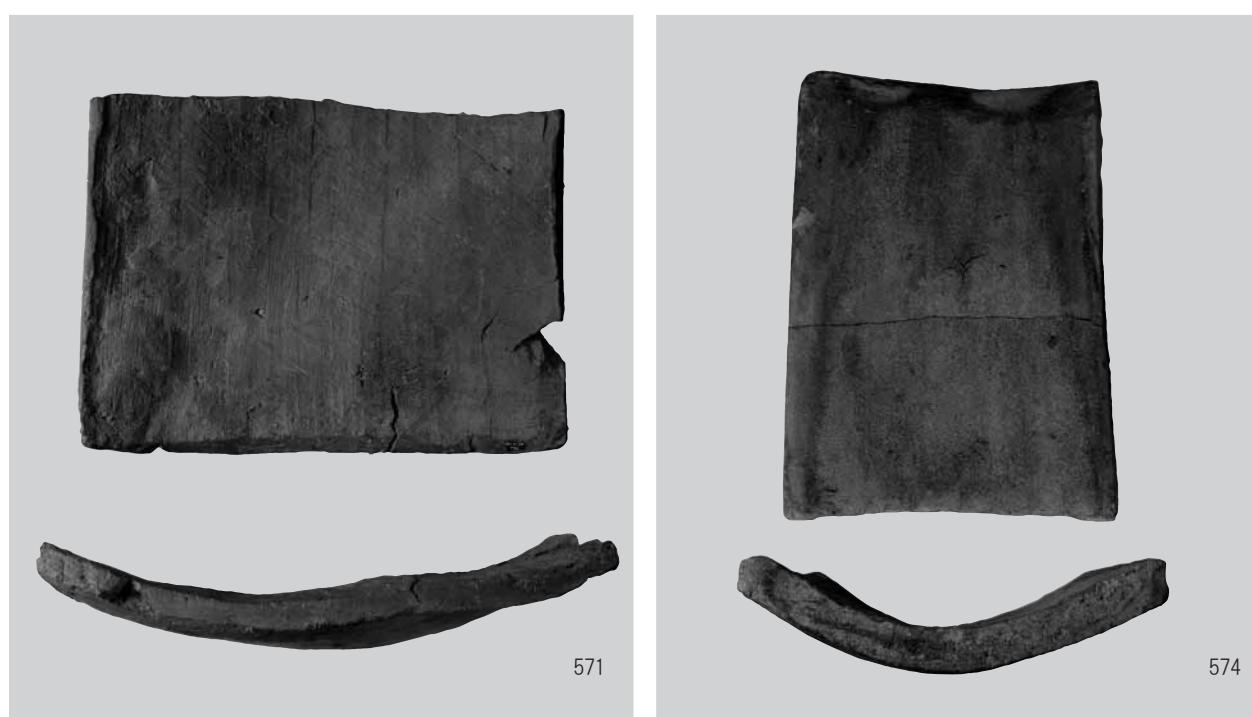
写真図版 44 軒平瓦①



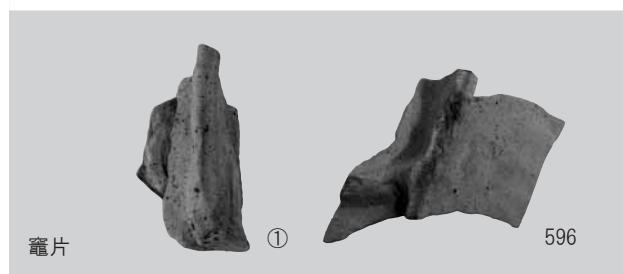
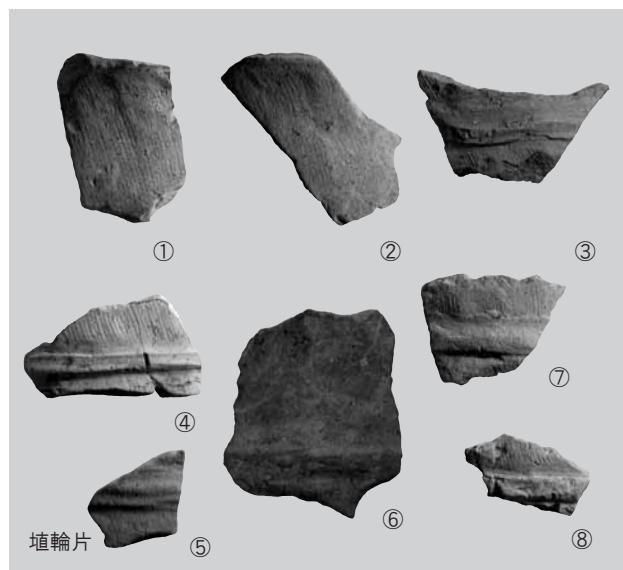
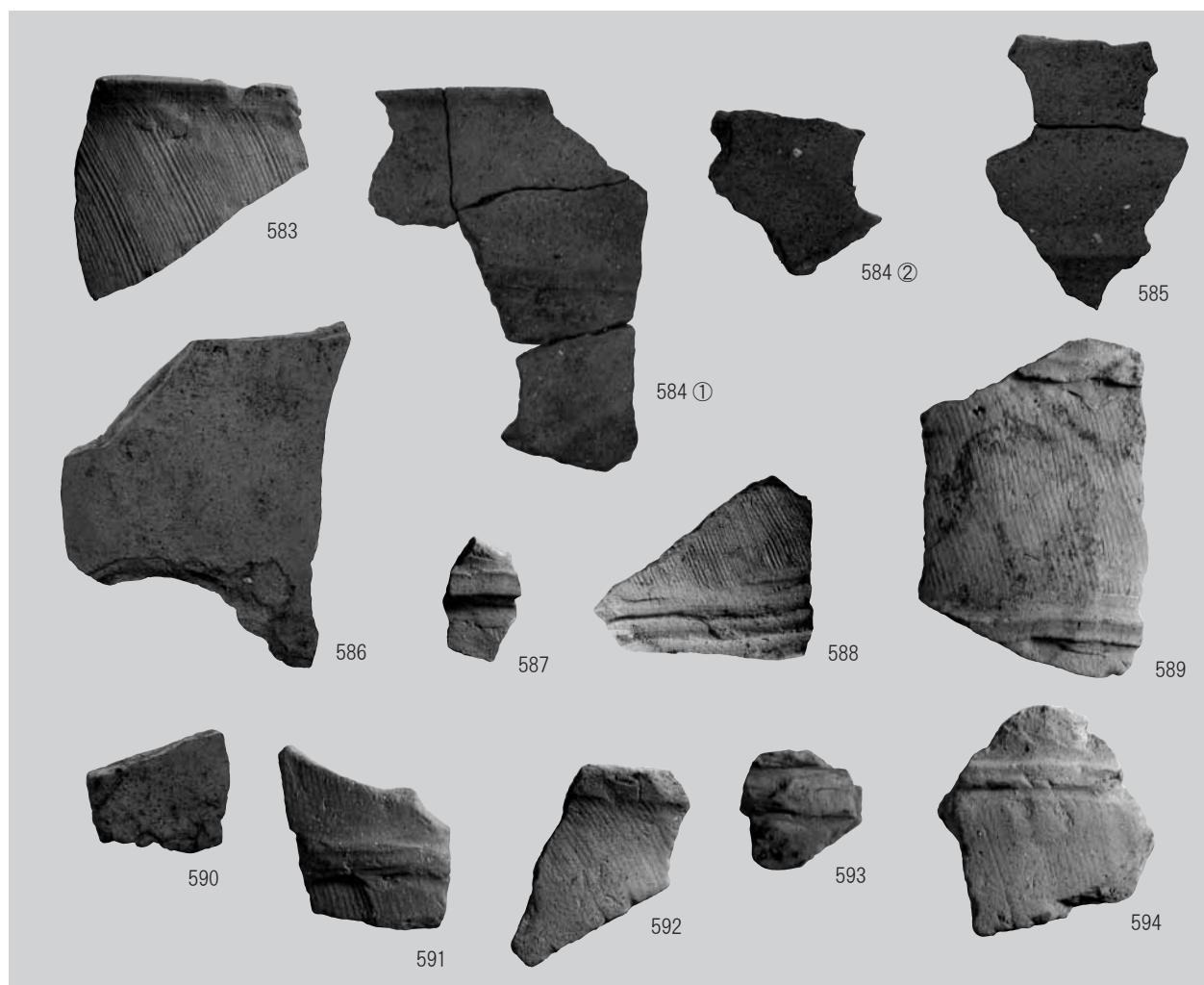
写真図版 45 軒平瓦②



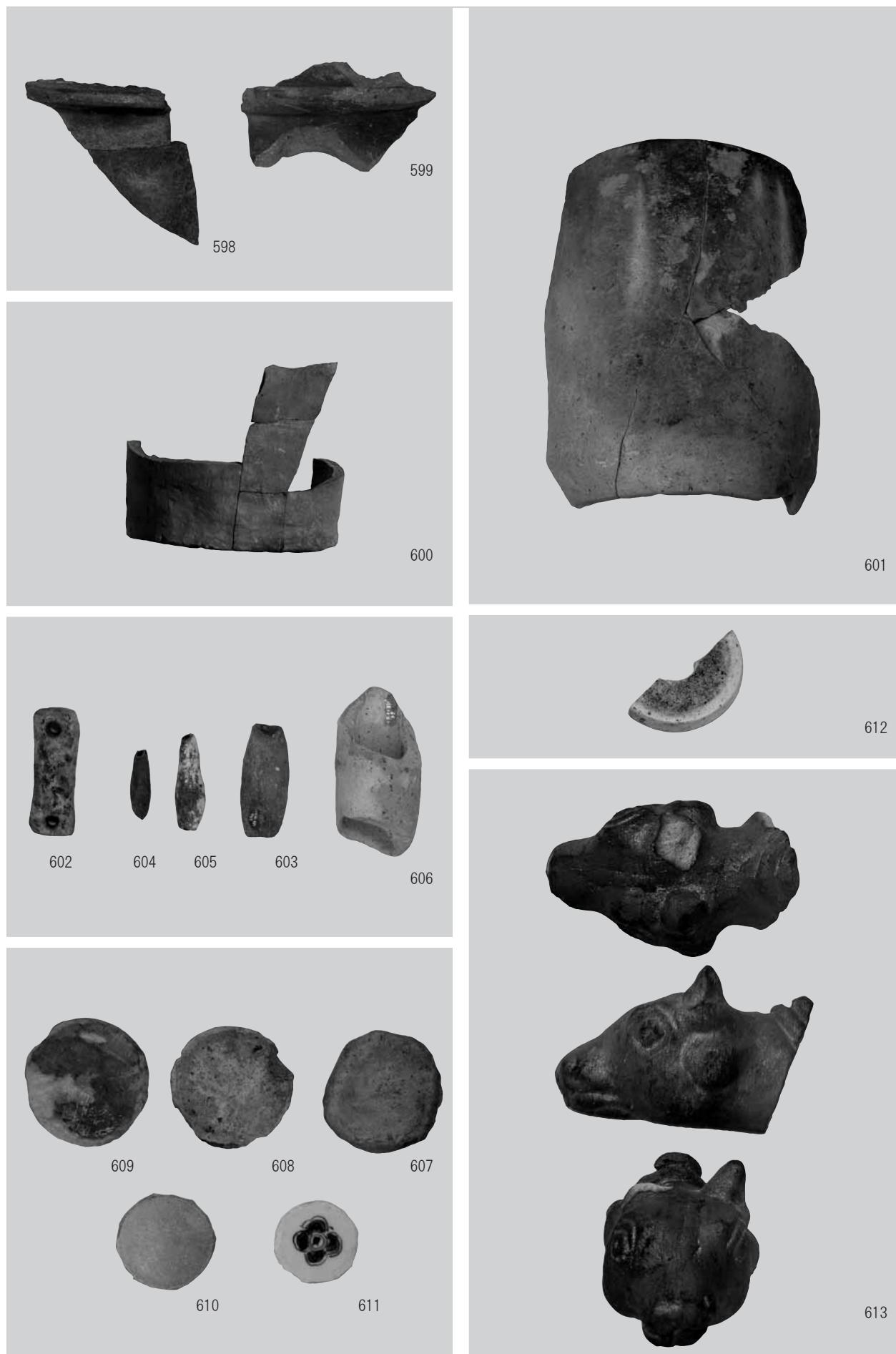
写真図版 46 丸瓦・平瓦・道具瓦



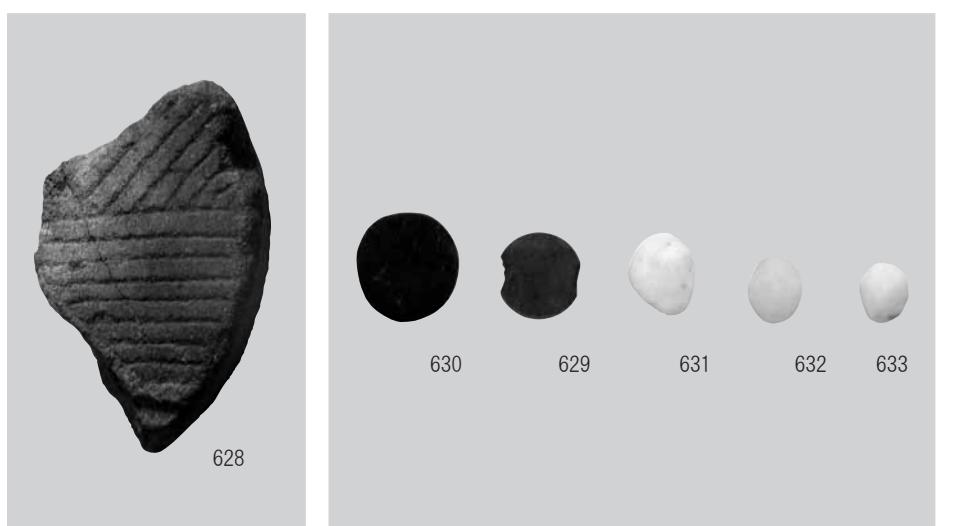
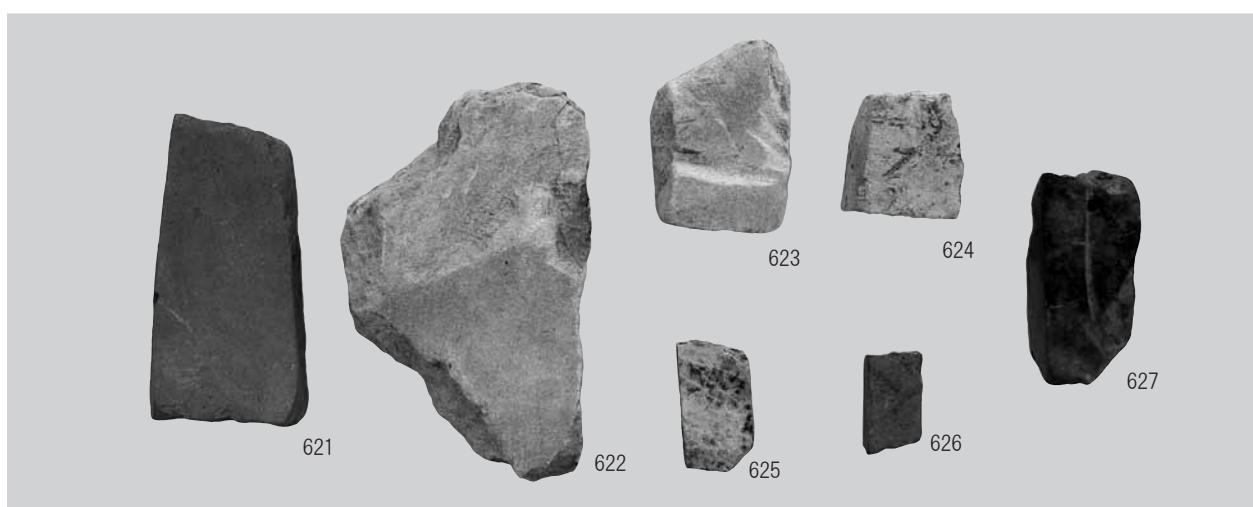
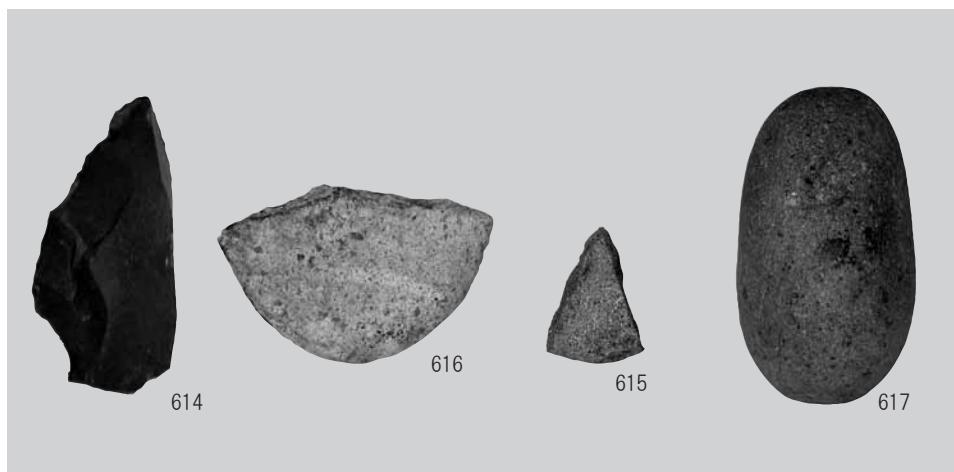
写真図版 47 塗輪・竈



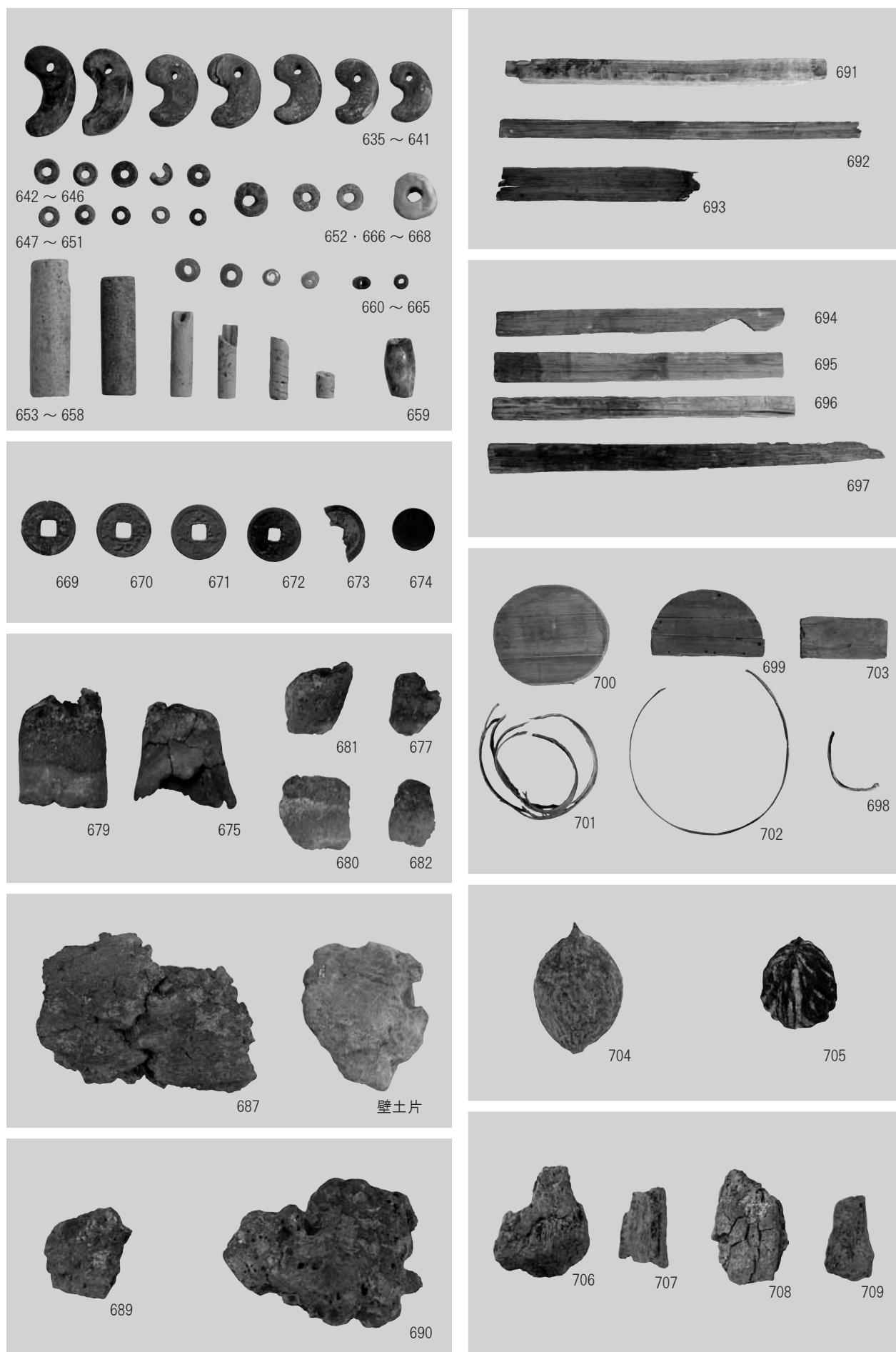
写真図版 48 土管・土製品



写真図版 49 石器・石製品



写真図版 50 玉類・金属製品・木製品ほか



秋月遺跡（県第9次調査）

—県立向陽中・高等学校体育館建替事業に伴う発掘調査報告書—

2011年3月23日

編集・発行 財団法人和歌山県文化財センター

印刷・製本 白光印刷株式会社